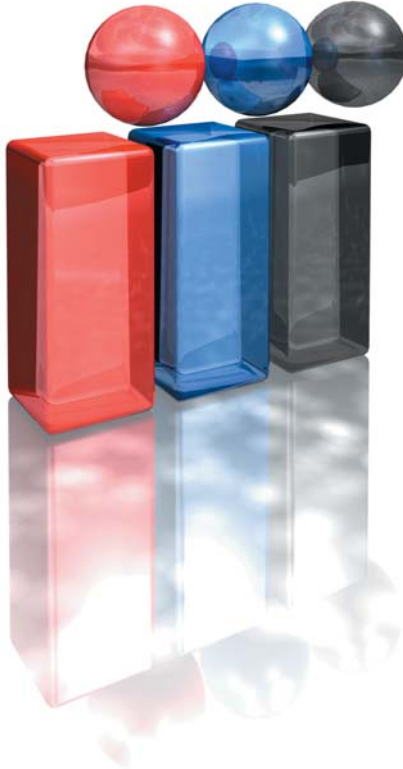


# 東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

## Annual Report

第7号  
(通巻39号)

Interfaculty Initiative in Information Studies  
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies  
The University of Tokyo



2011



東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

二〇一一年度 第七号(通巻三十九号)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

第 7 号 (通卷 39 号)

2011 年度

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

I. 現状と課題	1
1 組織説明	1
1.1 概要	1
1.2 理念と沿革	3
1.3 行動シナリオ	6
1.4 教職員数	7
1.5 財務	8
1.6 運営	11
1.6.1 情報学環教授会	11
1.6.2 学府委員会	12
1.6.2.1 社会情報学コース	12
1.6.2.2 文化・人間情報学コース	12
1.6.2.3 先端表現情報学コース	13
1.6.2.4 総合分析情報学コース	13
1.6.2.5 アジア情報社会コース	13
1.6.3 教務委員会	15
1.6.4 情報学環戦略企画室	15
1.6.5 入試・カリキュラム制度検討委員会	16
1.6.6 施設整備委員会	17
1.6.7 福武ホール管理運営委員会	18
1.6.8 情報セキュリティ委員会	19
1.6.9 情報ネットワーク委員会	19
1.6.10 情報倫理審査会	20
1.6.11 業績評価委員会	20
1.6.12 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会	20
1.6.13 企画広報委員会	20
1.6.14 図書・出版委員会	20
1.6.15 国際活動委員会	21
1.6.16 産学連携委員会	21
1.6.17 知的財産室	22
1.6.18 利益相反アドバイザー	22
1.6.19 ハラスメント予防担当者	22
1.6.20 社会情報研究資料センター	22
1.6.20.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構	23
1.6.21 総合防災情報研究センター運営委員会	23
1.6.22 ユビキタス情報社会基盤研究センター	24

1.6.23	現代韓国研究センター	24
1.6.24	駒場カリキュラム連携運営委員会	24
1.6.25	学生・留学生委員会	24
1.6.26	教育部委員会	25
1.7	事務組織	26
2	教育活動	27
2.1	概況	27
2.2	教育カリキュラム	27
2.3	カリキュラム支援体制	28
2.3.1	主指導教員・副指導教員の配置	28
2.3.2	修士・博士 研究計画書の作成	28
2.3.3	修士課程研究構想発表会	29
2.3.4	修士論文中間発表会	29
2.3.5	博士課程コロキウム	29
2.3.6	E-learning 授業 (iii online)	29
2.3.6.1	iii online の目標	29
2.3.6.2	iii online の概要	30
2.3.6.3	iii online の評価	32
2.4	学際情報学府への進学	33
2.5	修士論文及び博士論文の執筆	34
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向	37
2.7	学際情報学府以外の教育活動	38
2.7.1	教育部	38
2.7.2	ベネッセ先端教育技術学講座 (寄付講座)	39
2.7.3	電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座	40
2.7.4	OKI ユビキタスサービス学寄付講座	40
2.7.5	ユビキタス情報社会基盤学寄付講座	41
2.7.6	「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座	41
3	研究活動	42
3.1	概況	42
3.1.1	文理の相互作用と連携	42
3.1.2	流動教員制度	42
3.2	大型研究プロジェクト (1,000 万円以上規模)	43
3.3	附属センターの役割	46
3.3.1	社会情報研究資料センター	46
3.3.2	総合防災情報研究センター	46
3.3.2.1	災害情報の生産—伝達—受容過程の解明	46
3.3.2.2	首都直下地震災害の全体像の把握	47

3.3.2.3	大学SCMモデルの開発	47
3.3.2.4	防災制度の設計と運用に関する研究	48
3.3.2.5	災害情報教育の実施とプログラム開発	48
3.3.2.6	東日本大震災への対応	48
3.3.3	ユビキタス情報社会基盤研究センター	48
3.3.4	現代韓国研究センター	49
4	社会との交流	49
4.1	国際的委員会	49
4.2	政府・自治体委員会	51
4.3	学協会活動	54
4.4	セミナー・研究会・公開講座	58
4.5	出版活動	63
4.5.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』	64
4.5.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』	65
4.5.3	『英文紀要』	65
4.6	定期刊行物・ホームページ	65
4.6.1	定期刊行物	65
4.6.2	ホームページ	66
4.7	国際交流	66
II	資料	69
1	沿革	69
2	学環の教員（定員）	70
3	学府の学生数	71
4	教育部	72
5	予算	73
6	土地・建物面積	74
7	入試定数と受入数	74
8	年度別入試データ詳細	75
9	修了者数の推移	80
10	学生支援機構（旧育英会）奨学生数	81
11	日本学術振興会特別研究員数	81
12	リサーチアシスタント数	81
13	就職状況	82
14	研究員（客員）等	85
15	学会賞など受賞者リスト	85
16	論文数	86
17	特許出願・公開数	87
18	国際団体役員・委員数	87

19	政府関係委員会委員数	88
20	地方公共団体関係委員会委員数	88
21	ジャーナル編集・会議運営	88
22	定期刊行物一覧	88
23	留学生数の推移	89
24	留学生国籍別一覧	90
Ⅲ.	個人業績編	91
Ⅳ.	外部資金獲得状況	223

# I. 現状と課題

---

## 1 組織説明

### 1.1 概要

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、研究組織（教員が所属）である情報学環と教育組織（学生が所属）である学際情報学府という2つの対をなす機構によって構成されている。大学院の組織モデルとして、研究科が研究と教育の統合モデルであるのに対して、学環・学府は分離モデルだといえる。従来の研究科が専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、この大学院組織は、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した形態として考え出された。

その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にある。すなわち、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に教員枠及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合を目指している。教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、授業科目の担当は、これらの教員以外に他研究科・研究所等に所属する教員にも委嘱する。また、副指導教員制や副専攻制度の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際的教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

#### 大学院 情報学環

##### ■学際情報学圏

情報生命・思想学域

情報システム・言語学域

情報表現・造形学域

情報環境・認知学域

情報社会・制度学域

##### ■社会情報学圏

ジャーナリズム・メディア学域

情報行動・機能学域

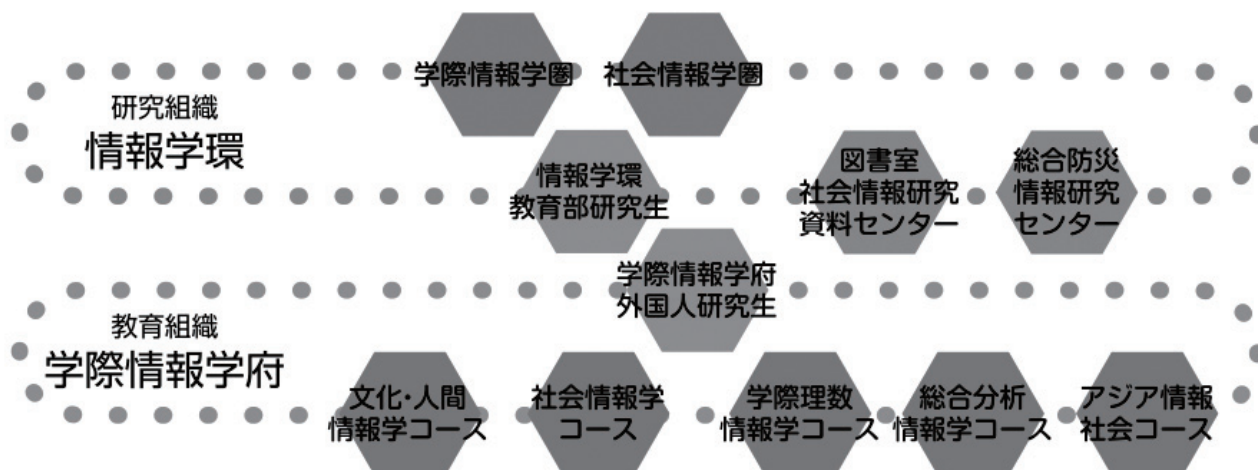
情報法・政策学域

情報経済・産業学域

情報文化・歴史学域

# 東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies & Graduate School of Interdisciplinary Information Studies



教育組織である大学院学際情報学府では、一方では情報現象についての文理を越境する幅広い視野を、他方では社会情報学からコンピュータ科学までの高度な専門的能力を、同時に身につけた人材を持続的に社会に提供していくために、それぞれの自律性と相互の連携をあわせもったカリキュラムを編成し、それを運営する以下のような5つのコースを設置している。このコース制は、教育効果を上げるために学生をコースに振り分けるものであって、教員がコースに帰属するものではない。教員は学環に帰属している。

また、学際情報学府は学際情報学の1専攻という形式をとってはいるが、この「専攻」は従来の研究科における専攻とは異なるものであり、そこに教員が帰属しているわけではない。

## 社会情報学コース

このコースでは、メディア、コミュニケーション、社会情報に関わる社会現象・文化現象を分析するための学識を養い、専攻分野における研究および応用の能力を培うことを目的とし、社会情報学の発展に貢献できる研究者を養成するとともに、社会人を受け入れて研究手法を身につけさせ、知識の高度化をはかる教育を行っている。

## 文化・人間情報学コース

このコースでは、情報学の視座から文化・人間科学の諸領域を体系的に再編し、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの21世紀的な諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいくことのできる深い学識と精緻な方法的能力をそなえた研究者や実践者を養成する教育を行っている。



## 先端表現情報学コース

このコースでは、21世紀の社会・産業・個人の情報環境の基盤となる専門的な理数情報学の知を深めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

## 総合分析情報学コース

このコースでは、センサーから大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、保存・解析したうえで、有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している

## アジア情報社会コース

このコースでは、情報通信技術の影響をますます受けつつある現代アジアの諸社会や国際関係に対する分析力や洞察力を養成する為の大学院教育を行っている。講義や指導はすべて英語で行われ、学年は10月から始まる。

これらの5つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

## 情報学環教育部

また、学部生を対象とした教育カリキュラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、大学2年次以上の在学者及び大学卒業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年50名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限2年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

## 1.2 理念と沿革

### \* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた。技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクトによって、根本的な変革を促されつつある。21世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、今日、きわめて多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領域に

固有な対象や方法とも深く結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられた。また、情報学は、急速な発展途上にある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導体制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、平成 12 年 4 月から、学校教育法第 66 条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有のもつ教育枠で採用される教員であり、流動教員とは既存の研究科・研究所等から 3 年ないし 7 年の期間をもって情報学環に定員及び人が移され、それによって情報学環教員となる教員のことである。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する教員にも兼担当教員として委嘱する。

## **\* 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯**

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004 年 4 月 1 日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一步を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約 75 年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929 年 10 月 1 日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ 1 名の指導教授が横断的に参加し、1 名の指導補助、および 3 名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方で東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合栄治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、経済学をまさしく代表する教授 3 名が参

画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の 1949 年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49 年 5 月 31 日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は 20 世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957 年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門 1：コミュニケーション過程、特殊部門 2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門 3：世論及び宣伝という 5 研究部門の構成となり、63 年度からはこれに放送部門が、さらに 74 年度からは情報社会部門が、80 年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中枢的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992 年 4 月 1 日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報行動、情報・社会という 3 大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992 年から 95 年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996 年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK 会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的に関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係を持ち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

## 1.3 行動シナリオ

部局別行動シナリオ「情報学環・学際情報学府」

濱田純一総長のもとで策定された「行動シナリオ FOREST 2015」の部局別行動シナリオ(改訂版)において、情報学環・学際情報学府は次のような行動シナリオを掲げた。

\*\*\*

2010年度に設立十年を迎えた大学院情報学環・学際情報学府は、「新たな十年」に向けて次のような課題に積極的に取り組みます。

### 1. 学術研究の深化と卓越性の追求

文理を越えた学際情報学研究の大学院として、世界最先端の総合的な情報学研究を推進し、世界の先端的研究機関と国際的な連携体制を構築する（「ユビキタス情報社会基盤研究拠点」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」、「アジア情報社会国際研究拠点」の推進）。

### 2. 教育の新たな取り組み

1) プログラム 学部前期から博士後期まで学際情報学授業科目群を展開する。能動的人材の育成のための「情報学環人材育成プログラム」を設置する（「教養学部後期課程新学科」への参画、「学部・大学院横断プログラム」の充実、「高等教育情報化研究機構」の設立）。

2) 国際化の推進 海外派遣プログラム・国際インターンシップを推進する。国際連携校との間に授業交換・単位互換および博士共同指導制度を導入する。英語での授業を充実させ外国人教員を積極的に登用する（「国際教育研究拠点ネットワーク」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」の設置、「留学生オフィス」の拡充、「現代韓国研究センター」の展開）。

3) 院生・ポスドク支援 RA・TA 制度を充実させ、院生・ポスドク支援のための「博士学位取得研究支援プログラム」、「学際情報学府インターンシップ」の導入をはかる。

### 3. 社会との連携

1) 組織 大学の社会連携コミュニケーションのための実践的研究機関を設立し「知の共創」イニシアティブを推進する。情報社会基盤の研究開発の産官学の連携と学内ベンチャーの育成のための教育研究プログラムを推進する（「知の共創センター」の設立、「情報社会基盤教育研究プログラム」の設置）。

2) 人 社会連携・産学連携のための「学環フェロー」、「学環フォーラム」の制度を発足させる。日常的な交流の場として、学術カフェ「U-Talk」などの社会活動を拡充する。

3) 社会貢献 震災からの復興・再生など、社会の重要課題の解決に学際情報学の立場から積極的に貢献する（「総合防災情報研究センター(CIDIR)」ほかの社会貢献活動の強化）。

#### 4. ガバナンス・コンプライアンスの向上

情報学環の「流動システム」をさらに発展させて組織の流動性を確保し人材の絶えざる活性化を実現する。情報倫理・研究倫理教育を学府カリキュラムのなかに位置づける。教員の自己統治能力の向上、透明性とコンプライアンス推進のための「賢いFDプログラム」を導入する。

#### 5. 研究基盤・教育施設の整備

新たな教育研究棟の建設、研究・教育施設の整備に全力をあげる。情報学環の先進的な情報基盤技術のノウハウを活かして、21世紀の持続可能社会のモデルとなる「スマート・キャンパス」の実証実験を実現する（「スマート・キャンパス」型研究棟の建設と「情報社会基盤研究拠点」および「次世代アーカイブ研究拠点」の設置を追求）。

### 1.4 教職員数

給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員）の採用枠は75人となっている。内訳は図1-4-1のとおり、教授等の常勤教員61人、常勤職員14人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図1-4-2のとおりとなっている。基幹教員の定員数は38名、流動教員の定員数は23名とおおむね同数であり、両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

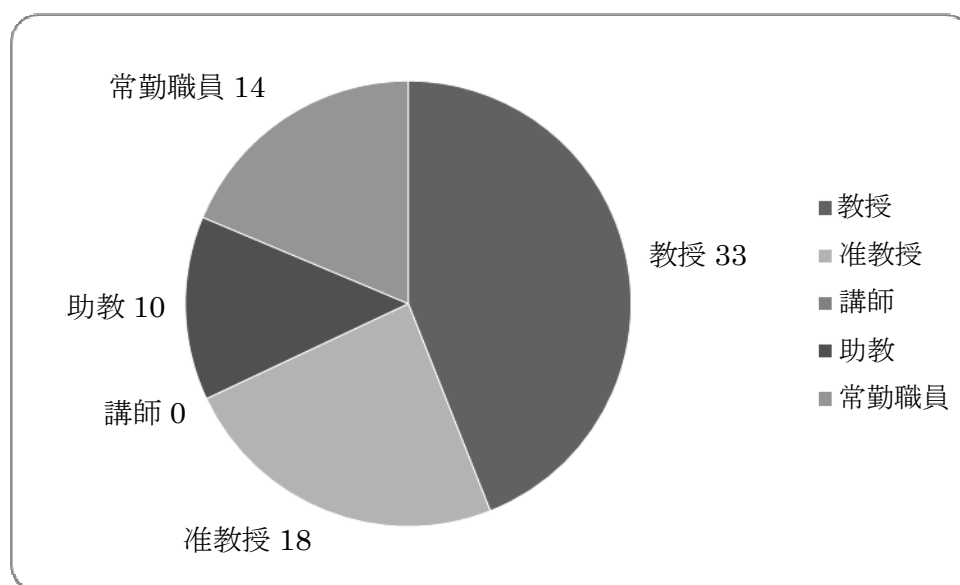


図1-4-1 教職員採用枠（全75人）の内訳  
（平成22（2010）年4月1日現在）

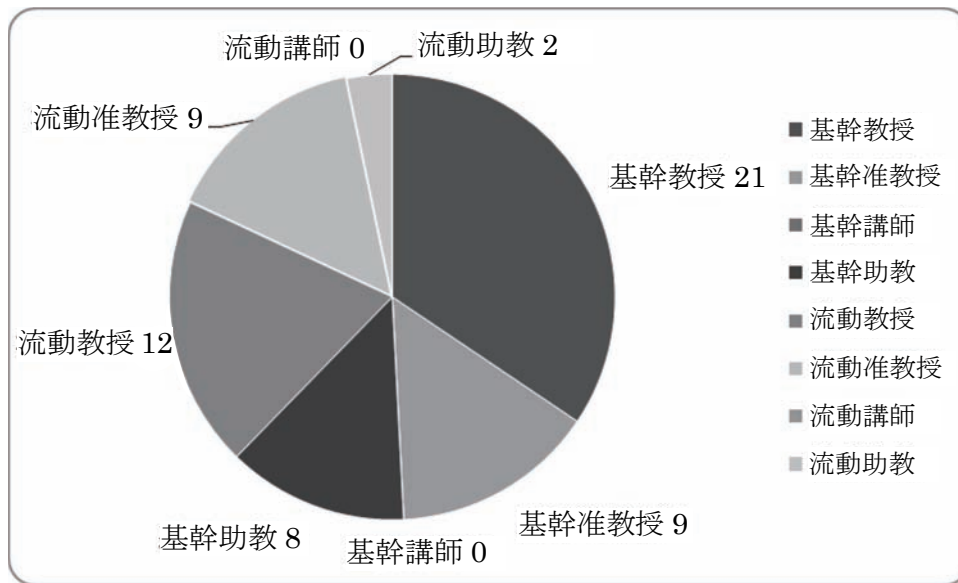


図 1-4-2 常勤教員採用枠 (61 人) の内訳

## 1.5 財務

平成 22 年度予算および決算に基づき、大学院情報学環の財務構造を説明する。対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管理が直接に及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

具体的な数字を見る前に、学環財務の特徴である流動教員に関する資金の取り扱いについて説明しておく。

運営費交付金の配賦にあたっては、流動教員分も大学院情報学環の予算として計上されるが、執行は原則として流動元の部局で行うこととなっている（支出委任）。

流動教員に係る外部資金についても、受け入れは大学院情報学環で行っているが、その全額を流動元部局に振り替えてから執行している。これは直接経費についても間接経費についても原則として同じである。

すなわち、運営費交付金の配賦額、あるいは外部資金の受入額のうち、ある程度の割合については流動元部局において執行されている。この仕組みを前提とした上で、以下では具体的な数字を見ていくこととする。

平成 22 年度の収入総額は 775 百万円だった。比率としては、運営費交付金<sup>1</sup>が 3 割強に対して外部資金が 7 割弱となっており、前年度とほぼ同じ比率である。

運営費交付金の使途内訳を見ると<sup>2</sup>表 1-5-1 のとおりとなる。前述した流動教員分の資金 64,821 千

<sup>1</sup> 本項では、運営費交付金のうち特別経費（大学防災情報システム：13,150 千円）および新規教育研究事業（社会情報研究センター高度アーカイブ化：36,450 千円）については外数として扱っており、収入総額等には含んでいない。

<sup>2</sup> 本段落では、部局長裁量経費（約 14 百万円）については、外数として扱い、割合の算出の際には分母及び分子のいずれにも含まれない。

円が全体の4分の1強を占めている。したがって、運営費交付金のうち大学院情報学環の裁量が及ぶのは残りおよそ4分の3の178,535千円となる。

その1億8千万円弱のうち、5割強（全体の約39%）のおよそ96,000千円が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費といった事務管理経費となる。残りの5割弱（全体の約34%、約83,000千円）が直接の教育研究活動に充てられることになる。ここでの金額・比率ともやはり前年度と同程度の数字になっている。

教育研究経費のうち、約12,500千円の社会情報資料センター経費と約8,900千円の図書費は、同センター及び図書室を維持するために必要な資料等の購入に充てられ、固定的経費の性格を帯びている。

表 1-5-1 平成 22 年度実績（運営費交付金）

経費区分	執行額 (単位:千円)	備考
光熱水料	5,707	*執行実績(21,073千円)のうち 15,366千円は間接経費より支出
通信運搬費	2,366	
建物保守料	2,736	
業務委託料	9,509	
非常勤職員人件費(事務)	20,174	*執行実績(24,436千円)のうち 4,262千円は間接経費より支出
非常勤職員人件費(教育研究)	21,609	
旅費交通費	2,973	
事務／教育研究一般用経費	30,531	*執行実績(30,658千円)のうち 127千円は間接経費より支出
教員研究費	28,044	
各種委員会等経費	54,886	*内訳は別表(表 1-5-2)に掲載
小計	178,535	
流動教員分	64,821	
総計	243,356	
部局長裁量経費	14,354	

表 1-5-2 平成 22 年度各種委員会等経費執行実績内訳

委員会名	執行額 (単位:千円)	備考
施設整備委員会	5,292	
情報ネットワーク委員会	1,243	
情報セキュリティ委員会		
業績評価委員会	0	
企画広報委員会	7,152	*10 周年記念事業を含む
図書・出版委員会	8,936	
国際活動委員会	1,896	
社会情報研究資料センター運営委員会	12,499	
教務委員会	3,482	
学生・留学生委員会	1,349	
入試実施委員会	4,405	
教育部委員会	1,842	
総合防災情報センター	3,827	
福武ホール管理運営委員会	2,963	
合計	54,886	

外部資金の収入内訳は表 1-5-3 のとおりである。ここに計上しているのは、外部資金関係間接経費（学環分）を除いて、直接教育研究に充当される資金である。外部資金のうち、大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。

表 1-5-3 外部資金の収入内訳 (単位:千円)

区分	総額	うち流動元 部局執行分	学環収入分
寄付講座	27,000	0	27,000



寄附金	82,902	17,133	65,769
科学研究費補助金	227,874	148,901	78,973
厚生労働科学研究費補助金	72,400	72,400	0
受託研究費	417,707	176,639	241,068
共同研究費	122,371	40,088	82,283
間接経費(学環分)	37,121	—	37,121
外部資金合計	987,375	455,161	532,214

大学運営費交付金は毎年度削減されており、大学院情報学環への配賦額においても例外ではない。表1-5-1にあるように、光熱水料や非常勤職員人件費といった事務部門の経常経費にも外部資金の間接経費が充てられているのが現状である。

かような状況においては、外部資金獲得の重要性は高まりこそすれ下がることはない。しかしながら、現在の社会情勢を鑑みるに、企業等がこれからも現在と同等の水準の研究資金を大学に投入し続けると考えることは難しい。外部資金への依存度が高まっている一方で、それをあてにできない現状もある。

厳しい財務状況の下、教育研究資金への情報学環内の配分額の見直し、外部資金の流れの再検討など、財務構造の改革が必要とされる時期が迫っている。

## 1.6 運営

### 1.6.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会が研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が帰属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に1度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙権は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は2年、その後の、つまり2006年4月からの学環長は3年となっている。再任はない。

学環長が副学環長を指名する。学環長が主宰する総務委員会が、教授会と教授会の間で諸案件や方針について協議し、教授会にかかる案件の準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、両学圏長、重要委員会の委員長、5コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ月に1度開催される。これが実質的な執行部である。

## 1.6.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか兼担教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、先端表現情報学コース、総合分析情報学コース、アジア情報社会コースに分かれて入試を行い、合格した学生はそれぞれのコースの所属となるが、それぞれのコースの運営に責任を持つ、コース会議および運営委員会が置かれている。各コース長が責任者を務め、適宜開催される。

### 1.6.2.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会は、学生がより深く社会情報学を学習し、質の高い論文を執筆できる環境を整備することを目的とする。具体的には、教務委員会、入試実施委員会、他のコースと協力をしながら、主に以下の(1)～(12)の業務を担当した。2010年度は、特に、(a)外国人研究生の審査方法、(b)修士・博士課程の適切な人材の選抜方法、(c)博士論文審査のあり方について検討・改善を行うとともに、コース運営委員会業務の整理・明確化を図った。

(1)ガイダンス、研究構想発表会、社会情報学コース新入生歓迎会(4月)／(2)外国人研究生審査(5・11月)／(3)入試説明会(6月)／(4)修士中間発表会(7月)／(5)修士入学試験(8月)／(6)博士コロキウム(11月)／(7)次年度の開講科目、非常勤講師、RA・TA、共通入門科目(学際情報学概論)の計画・決定(1月)／(8)修士論文審査(2月)／(9)博士入学試験(2月)／(10)優秀学生論文の決定(3月)／(11)博士論文に関する審査委員会、審査結果の審議(随時)／(12)学生の休学、退学、復学の審議(随時)

### 1.6.2.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の先端表現情報学コース、総合分析情報学コースとをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合を進めながら、新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいる。このコースを担当している教員には、基礎情報学、進化学、生態心理学、科学技術コミュニケーション、知覚情報論、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、フェミニズムなどの諸領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導、いくつかの教育上のプロジェクトの実施に当たっている。このコースの教育は、①生命・身体・環境、②文化・表象・映像、③メディア表現・学習・リテラシー、④アーカイブ・歴史情報という、理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしつつ、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいる。教員の専門分野、また学生の研究テーマも多岐に渡るため、基礎的な研究方法や学術リテラシーを涵養するために、コースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎(4単位)と文化・人

間情報学研究法（2単位）にはさまざまな工夫を凝らしており、上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習、量的・質的研究法の訓練、社会情報学コースとの合同科目などが用意されている。

### 1.6.2.3 先端表現情報学コース

先端表現情報学コースは、教員23名（学環基幹2名、流動8名、兼担・課程担当13名、兼担・授業担当2名）が担当しており、毎年修士（定員19名）と博士（定員8名）の学生を受け入れて教育している。

コースは、先端表現情報学コース運営委員会（コース会議）のもとに、コース長、教務担当、入試担当がおかれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局（情報理工学系研究科、工学系研究科、総合文化研究科、生産技術研究所、情報基盤センターなど）からの多くの流動教員、兼任教員、さらには授業担当・併任・客員教員の協力によって運営されていることである。これによって、多様な背景と目的を持つ学生の教育が可能になっている。一方で関係教員の負担が課題となっている。

今後の課題としては、(1)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、(2)多様な背景を持つ学生を、「学際的に協調できる理数系情報学の専門家」として育成するための、入学試験選抜方法の検討、教育カリキュラムの検討、などが挙げられよう。

### 1.6.2.4 総合分析情報学コース

総合分析情報学コースは、平成18年4月に設立されたコースである。本コースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの基礎知識を基に、センサーや観測衛星から大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、それを保存・解析したうえで、更に実社会において有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している。分析情報学が有効に適用できる分野は多岐にわたり、医学、薬学、農学、水産学、環境学、資源学、社会学、考古学といった学問分野をはじめ、災害支援や遭難救助、社会安全保障、国土や社会基盤の管理保全といった国レベルの施策、更には情報セキュリティポリシーの策定やインターネット等のサイバー空間の管理といった分野へも及ぶ。こうした現実社会に深く関わる技術課題とともにそれを支える社会制度までにも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学及び計算機科学の研究者を育成することを目標としている。

### 1.6.2.5 アジア情報社会コース

アジア情報社会コース International Master's/Doctoral Degree Program: Information, Technology, and Society in Asia (ITASIA) は、大学院情報学環と東洋文化研究所の協力を基づき、2008年4月に発足した、大学院学際情報学府の5番目のコースである。留学生、日本人を問わず、アジアや世界の舞台上で専門的職業人として活躍することを志す学生を対象に、情報通信技術の発達に大きな影響を受けている現代アジアの社会と国際関係に対する分析力と洞察力を養う大学院教育を目指し、2007年度から準備が進められてきた。

本コースの特徴は、すべての教育を英語で行い、学生に日本語能力を求めないことである。入学時期は10月に一本化し、入学者の選抜も他コースのように筆記試験ではなく、TOEFL・GREのスコア、推薦書、研究計画書やこれまでの業績などを含む書類選考に基づいて行い、さらに学内外の支援により上位合格者に与える奨学金枠を用意することで、これまで英語圏に進学していたアジアの優秀な学生に対して、日本の東大で学ぶことを現実的な選択肢として提示した。

修士課程は、グローバル化するアジアにおける変容する政治的、経済的、社会的現実を把握できるよう、アジアの歴史と国際関係、メディア研究、社会調査方法論、情報技術という文理にまたがる4分野の必修基礎科目を軸に関連科目を提供するとともに、修士論文完成に向けた段階的の行事と個別指導を通じて学生を訓練し、それぞれの専門分野で適切な判断や提言を行える修了生を送り出すことを目指している。

博士課程は、アジア研究および情報学の研究における高水準の研究者・専門家の養成を目的としており、文理にわたる広範な知識とともに、政治学、経済学、メディア研究その他の社会科学における先端的な研究に必要な調査研究法と理論的分析能力を修得する機会を提供する。

発足して3年目に当たる2010年度は、修士課程の第一期生6名が9月27日（月）に修了し、初めての卒業生を送り出すこととなった。そのうち1名は博士後期課程に進学したものの、残りは帰国し就職するなどした。

10月5日（火）には修士課程10名、博士課程5名が入学し、翌6日にコースガイダンスを実施した。これで修士課程には18名、博士課程には9名の学生が、それぞれ在籍していることになる。修士課程学生については、もう少し多くの合格者を出していたものの、奨学金を供与できなかった学生の中から、昨年同様、他大学への進学を選択する者が出た。もっとも応募者は着実に増加しており、そのクオリティーも高くなってきている。2010年度から北京大学国際関係学院からの受入れ事業を開始したが、北京大学からの応募学生はいなかった。

2010年度入学時での全学生27名の国籍別構成は、以下の通り。

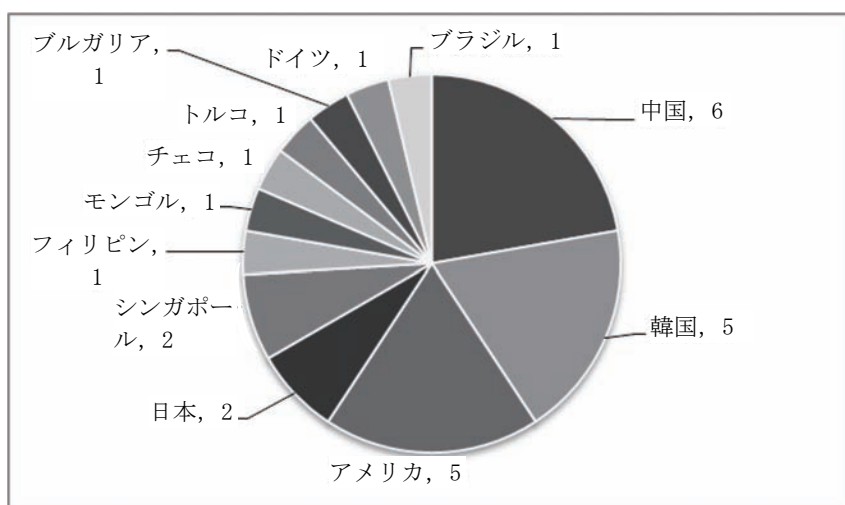


図 1-6-2-5-1 在籍学生の国籍別構成：2010年10月（修士課程、博士後期課程含む）

2010年10月4日(月)には修士1年生7名が修士構想発表会を実施、同時に博士コロキウムとして博士課程学生4名が研究報告を行った。翌日の入学式を控えた三期生や一部他コースの学生も傍聴した。こうした作業を通じて、学生たちの論文執筆への取り組みを促進しようとしたことである。

また、2011年2月14日(月)と2月17日(木)に、修士論文中間発表を実施した。

なお本年度、懸案だった学生による自治組織(Student Body Government)が成立し、第一期の役職を決めるとともにホームページを立ち上げ、各種活動を開始するようになった(<http://www.wix.com/gsiisbg/gsiitiasbg#!>)。今後は、この自治組織との商議によって、授業の改善やイベントの提案などについて検討していくことになる。

学務関係のカレンダーも徐々にルーティン化しつつあり、予測可能性も高くなりつつある。また、いくつか学務上の制度化を試みたが、今年度まとまったのが「1年での修了要件の確定」がある。具体的には、(1)1学期目の必修科目8単位で全てAを取得し、残りの必修科目6単位の中では2単位はA、4単位までB以上であること、(2)修士論文の審査結果がAであり、審査結果がAでない場合は早期修了見込みを取り消すこと、といった2つの条件を満たす限りで1年での修士学位を与えることとなった。

2009年に学際情報学府が申請した「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム(俗称・大航海プログラム)」が2010年1月末に採択され(プログラム名称「アジア・グローバルゼーション・スタディーズ」)、2010年度から本格的に始動した。同プログラムを利用して海外渡航をした学際情報学府の大学院生は合計24名であったが、そのうち5名がアジア情報社会コースの学生であった。2011年2月21日と22日の両日、台湾・中央研究院社会学研究所との合同ワークショップが実施された際(於東洋文化研究所)、学際情報学府の学生が6名参加したが、うち4名はアジア情報社会コースの学生であった。このように、喜ばしいことに、徐々に学生たちの動きが活発になりつつある。

### 1.6.3 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、情報学環に属している基幹・流動の教員に加え、学内兼任教員、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、平成22年度現在で、基幹教員27(教授18、准教授9)、流動教員22(教授13、准教授9)、兼任・課程担当教員32(教授22、准教授9、講師1)、兼任・授業担当教員15(教授10、准教授5)、客員教員2(教授1、准教授1)、非常勤講師15、総計113名となっており、修士課程1学年約100名、博士課程1学年約50名、学府全体で約360人の大学院生を教育するにも十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力をしていただきながら、カリキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、後述するような大学院生たちの教育研究促進のための諸々のプログラムを実施している。

### 1.6.4 情報学環戦略企画室

情報学環戦略企画室は、2004年度に設置された、大学院情報学環の長期的な戦略を検討する将来計画委員会を発展させ、2009年度から設置された。2010年度は、創立10周年事業、評価制度の検討、概算要求案の作成、部局行動シナリオの改訂、アカデミックマナーの指針の作成作業の立ち上げ、ポス

ト再配分問題の検討、スペース問題の検討などを行い、情報学環規則の見直しの可能性についても検討した。

### 1.6.5 入試・カリキュラム制度検討委員会

入試制度、カリキュラム制度にかかわる問題を、学環・学府の組織運営体制の根幹にまで立ち戻って再点検し、必要があれば改善・見直しを提案する検討委員会として 2008 年度に設置された。関連する常設委員会との協議やヒアリング、拡大検討会議をおこない、(1)組織運営上の一般的問題点、(2)教育体制上の一般的問題点、(3)研究体制上の一般的問題点について議論を重ねている。

#### 「入試・カリキュラム制度検討委員会」

委員長 暦本純一

委員 佐倉統 中野公彦 林香里 水越伸 山内祐平

事務 学務係

情報学環「入試・カリキュラム制度検討委員会」は、平成 20 年 4 月の発足以来、学際情報学府の入試およびカリキュラムの制度について、制度的な問題点を検討し、改善すべき項目を挙げ、改革の方向を提案する作業を行ってきた。

前年度に引き続き中長期的な課題の検討を行うと同時に、今年度はとくに研究倫理問題に注力した。これは学内における博士論文捏造問題を契機としているが、カリキュラムとしてどのように研究倫理の教育を行うかをこの機会に再検討し、整備することを主な目的としている。

月に一回程度の検討会を重ね、研究倫理に関して二つの方針を策定した：

#### I 研究倫理資料（Web サイト）の構築：

1. 内容をコンパクトにまとめ、重要なポイントを分かりやすく提示する。学環・学府の多様な研究分野を想定し、細かなルールを策定するのではなく、このようなアカデミックマナーが存在し、それを守ることが学生や研究者としての基本的態度であるという理解をまず確実にする。
2. 関連情報などへのリンクも整備し、研究法のポータル的人格を持たせる。
3. 研究を進める上で参考になる基礎図書を推薦する。
4. Web の特性を活かし、内容は今後も継続的に充実させていくものとする。

#### II ガイダンス教育の実施：

修士 1 年 4 月のガイダンス教育の一環として、研究倫理（アカデミックマナー）の講義を行う。資料として上の Web 資料を使用する。次年度(2011 年度)4 月より開始する。なお、ガイダンス教育では情報倫理についての講習も別途行っており、連携して教育効果をより高める。

以上 2 課題について、検討委員会内にタスクフォースを設定し、実作業を行った。

## I. 研究倫理資料の作成と公開

タスクフォース I (研究倫理資料) では、学内外の研究倫理資料などを検討し、研究倫理および学術論文執筆に際しての心得をコンパクトにまとめたホームページを作成することとした。学際情報学府サイトに「アカデミックマナーの心得」日本語版/英語版として公開した。

内容としては、

研究倫理とは / 生命倫理・安全性 / 個人情報の保護・保有個人情報の開示 / 論文執筆 / 新規性・重複投稿 / 共著者 / 事実と意見 / 再現性 / データ / 著作権 / 引用 / 図版の引用 / 参考文献 / 査読 / 論文の評価 / 知的財産・特許 / 推薦参考図書

などの項目を含み、コンパクトであるが研究の心得から論文執筆に際しての基本知識までが網羅されているものとなっている。全文は以下に掲載されている：

日本語：<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/graduate.php?id=1259>

英語：<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/en/graduate.php?id=1272>

## II. 研究倫理ガイダンスの導入教育カリキュラムへの取り組み

タスクフォース II では、I で作成した資料をベースにした実際のガイダンス教育を実施することを提言し、平成 23 年度 4 月から、サムネール講義概論 I の一環として 90 分間の「研究倫理講義」を行うこととした（対象者は学環学府新入生全員）。

今年度の担当教員は佐倉、水越、暦本の 3 名であった。講義後に、コメントシートにより受講生からのフィードバックを調査したが、「基本的なことではあるがきちんと説明されたことはなかったので有益であった、今後の研究活動に活かしていきたい」などの返答が多くあり、学生の倫理意識向上など、導入教育としての一定の効果があつたことが確認できた。

以上二点のアクティビティについては教授会にて報告するとともに、科所長会議においても情報学環における研究倫理教育の取り組みとして報告された。

### 1.6.6 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積が確保されていないという認識のもと、なんとか教育研究に必要な施設を確保することにある。これまで、護国寺にあ

る東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルーム、第二本部棟の3階のフロアの一部を確保した上に、更に、平成20年3月には、以前より建設を進めていた福武ホールが竣工し、これらのスペースを有効に使って研究教育が実施できるようになった。そして平成22年には、暫定アネックスの建て替えが決まった。施設整備委員会としては、今後も教育・研究に必要な施設を確保できるように、引き続き努力する。

### 1.6.7 福武ホール管理運営委員会

福武ホール運営委員会の最大のミッションは、2008年3月に竣工した情報学環・福武ホールを有効活用し、教育研究活動を支援することである。2010年度、当該ホール地下2Fのラーニングシアターとラーニングスタジオを利用して開催されたシンポジウムやワークショップは計136件であり、情報学環内部のみならず外部に対しても、開かれた学びの施設となっている。特にラーニングスタジオ、1F会議室、1F学環コモンズは、情報学環教員・学生に対して、授業、ミーティング、授業外学習の場として活用されている。また、当該ホール1Fに併設されているUT Cafeにおいては、様々な領域で活躍している本学の教員をゲストとして招き、毎月開催するイベントである「UTalk (ユートーク)」を継続的に実施してきた。毎回の定員は15名であるが、情報学環の教員・学生のみならず、他大学の教員や学生、企業人など多様な参加者が多数集まり、定刻を過ぎても議論が続く盛況ぶりを見せている。情報学環・福武ホールが今後も学内外に開かれた学習空間となるよう、引き続き努力する。

表 1-6-7-1 2010年度 UTalk 実施テーマ一覧

実施月	タイトル	ゲスト所属	ゲスト氏名
2010・4	化石から進化を探る	理学系研究科	遠藤秀紀
5	建築と社会学の際	情報学環	南後由和
6	建築と都市のデリバリー	生産技術研究所	太田浩史
7	コミュニティを編む情報づくり	先端科学技術研究センター	沼晃介
8	世界を分けよう、分類マンダラ	農学生命科学研究科/独立行政法人・農業環境研究所	三中信宏
9	仏教が教えてくれる技術と美意識	総合研究博物館	菊地敏正
10	「上流」にさかのぼる：建築を通じた社会とのつながり	工学系研究科	成瀬友梨
11	天文学者は高い山で何を考える？	理学部天文学教育研究センター	本原顕太郎
12	人は何を食べてきたのか：人骨の化学分析からわかること	新領域創成科学研究科	米田穰
2011・1	未来の教室はどんな教室？	教養学部 附属教養教育高度化機構	林一雅



2	ネットワークの恩恵：人と人のつながりの科学	情報理工学系研究科	増田直紀
3	学問をかつこいいものに！	本部広報室	南崎梓

### 1.6.8 情報セキュリティ委員会

2006年3月に東京大学情報セキュリティ委員会が、東京大学保有情報資産のセキュリティを確保することを目的として「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの基本方針」とともに定めた「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの対策基準」は、部局情報セキュリティ責任者（部局長もしくは部局長を補佐する役職に相当する職務の者）を委員長とする部局情報セキュリティ委員会の設置を求めている。これらの全学方針に基づいて2006年9月に各部局に依頼のあった情報セキュリティ調査への対応を機に、学環長を部局情報セキュリティ責任者・委員長として情報学環情報セキュリティ委員会が組織され、10月から事実上活動を開始して部局調査のとりまとめを行うとともに、11月の教授会で承認され正式に発足した。

2007年12月20日の部局への説明会とその後の意見聴取を経て、2008年4月9日、全学の最高情報セキュリティ責任者（CISO）名で、「東京大学情報セキュリティ・ポリシー実施手順の作成について（依頼）」が発出され、情報学環情報セキュリティ委員会は、情報学環情報ネットワーク委員長でもある原田委員を実務担当として、要請された部局規則等を整備する作業に当たることとなった。

その後、情報ネットワーク管理、情報セキュリティ管理、倫理審査を管轄する諸委員会の再編の可能性が課題として浮上してきており、山本隆一教授のもとで検討が開始された。

### 1.6.9 情報ネットワーク委員会

2000年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内LAN、学内LANであるUTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWWサーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002年6月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が設置された。さらに、2004年4月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに本委員会が設置された。本委員会は、2002年11月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査等や、学生・留学生委員会その他が管理する個別端末、さらに2006年に設置された情報セキュリティ委員会の担当範囲等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を、関係委員会等と協力しつつ、全般的に担当してきた。

具体的には、2005年度以降、情報ネットワーク基盤の維持やセキュリティ事案への対応などの日常的管理実務を着実に行うとともに、情報ネットワーク運営管理体制の明確化・強化、基幹ネットワークの更新・整備、サーバ室の環境改善、基幹サーバの更新、諸規則の整備、iii-PKI(Public Key

Infrastructure)に基づく安全な通信・情報共有のための基盤形成および VPN・会議資料オンライン閲覧システムの構築・運用などを順次進めてきた。

内規に従い、基幹的情報ネットワーク管理の実務は、基幹実務担当者（2010年度時点で准教授1名、助教2名）が担ってきたが、2009年度に情報セキュリティ委員会主導で全学の情報セキュリティ・ポリシーの実施手順に相当する諸内規等が成立したことなどを受け、日常業務の諸局面で情報セキュリティをより一層考慮した運用を進める必要が生じた。ただ、この点について委員会内部で十分意思統一ができない事態が生じ、日常業務にも支障が出たことから、構成や他の情報関係委員会との役割分担の見直しも視野に入れた委員会のあり方の再検討が始まるとともに、その間も基幹実務担当者が必要な作業を正に行えるような仕組みが設けられることになった。

### 1.6.10 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学の情報倫理委員会が定める情報倫理規則にもとづき、主査と委員3名において、情報倫理の遵守のための審査をおこなっている。2003年度の新情報学環の発足以来、構成員への連絡通知のための ML をつうじてネットワーク利用者への注意喚起などをおこなってきた。2010年度は幸い情報倫理案件はなく、通常通り情報学環・学祭情報学府構成員への ML をつうじた注意喚起をおこなうにとどまった。

### 1.6.11 業績評価委員会

業績評価委員会は、情報学環・学府の研究・教育活動に対して行われる、学内外の様々な評価に関連する業務を遂行することが任務である。

### 1.6.12 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会

ヒトを対象とした実験および調査研究に関する倫理審査委員会では、情報学環の教員や学生がこれらの実験・調査をおこなう際に、事前に倫理審査をおこなうものであり、平成21年度に設置された。情報学環は教員・学生とも研究領域が多様であるため、どのような倫理審査が適しているのか、まだ手探りの段階であるが、学祭組織での研究倫理のあり方を確立することを目標に活動している。

### 1.6.13 企画広報委員会

本委員会は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（大学院入試説明会、シンポジウム、ワークショップ、教員研修会など）を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うために設置されている。2010年度は学環・学府設立10周年記念式典・シンポジウムを開催した。その他、学環・学府内の多くのメーリングリストへの配信管理や、福武ホールや工学部2号館9階などの施設の利用管理なども行う。

### 1.6.14 図書・出版委員会

2007年度から図書委員会と出版編集委員会が統合されて、図書・出版委員会となった。

#### 1. 図書室関係

情報学環図書室は、新聞研究所、社会情報研究所以来のマス・メディア、ジャーナリズム研究の資料

に加えて、2004年度の情報学環との統合以降は、文系・理系を問わず、情報の学際的な研究に関する資料を幅広く収集し、利用に供している。

2010年度は「図書購入方針」（2007年6月 図書出版委員会承認）にもとづいて、①見計らいによる推薦、②基幹教員による推薦、③授業用図書の推薦、の3方式で図書を購入した。見計らい図書選定については、選定リストの改善によって選定参加教員が文系・理系双方で大幅に増えて、各分野の基本図書が選定されるなど機能し始めている。新たな予算措置に基づく大型資料費については、基幹教員の推薦によって主に復刻版の資料集等の高額資料を購入した。

そのほか、ITアジアコースの教科書・参考書類の整備を行った。

表 1-6-14-1 2010年度図書受入冊数

	購入	寄贈	計
和書	420	155	575
洋書	348	80	428
計	768	235	1,003

表 1-6-14-2 貸出冊数の年度推移

年度	2008	2009	2010
図書	5,601	5,765	5,290
雑誌	712	747	730
計	6,313	6,512	6,020

## 2. 出版関係

### (4. 5 出版活動を参照されたい)

### 1. 6. 15 国際活動委員会

国際活動委員会は、情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可してきた。最近の受け入れ総数を見ると、平成17年度13名、平成18年度15名、平成19年度15名、平成20年度14名、平成21年度27名、平成22年度36名と増加傾向を辿っている。情報学環の多様な研究背景を生かし、今後ともさまざまな教員を受け入れていくことがこれからの課題であろう。

委員会としては、5月21日に「情報学環・学際情報学府国際活動説明会」を開催し、学府の学生たちに部局でのさまざまな国際活動について説明し、国際的な研究活動に積極的に参加するように呼びかけた。11月19日には“Careers in Research and Academia” Panel for Graduate Studentsを主催し、日本での大学や企業での就職活動で留意すべきことについて、主として英語プログラムに参加している留学生を対象に説明した。また昨年度末に日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」が採択されたため、この『「アジア・グローバル化・スタディーズ」若手研究者育成プログラム』のファンドを原資とした活動と呼びかけ、短期派遣として大学院生25名（国際協働プロジェクト18名、個人プロジェクト7名）、長期派遣者（若手3名）を国際的研究シーンに送り出した。要件を満たした派遣学生には単位も認定している。

### 1. 6. 16 産学連携委員会

産学連携委員会は、情報学環・学際情報学府における研究・教育活動を、産業界との連携を通して社会還元をすることを目的として設置されている。2010年度の産学連携委員会の活動は、職務発明特許やそれに類する著作権等の知財に関する規定の策定に関して、東京大学産学連携委員会を通して参加を

している。また、東京大学産学連携協議会に参加し産業界との交流も行っている。学環・学府において、寄付講座・社会連携講座・受託研究などを通じて産業界と連携するケースが増加している。連携する上で生じた様々な課題に対応する。

### 1.6.17 知的財産室

知的財産室では、情報学環・学際情報学府の教職員が発明したり、著作物を作成した際に、届け出てもらおうところである。ここで、それらの発明や著作物が、職務上のものであるか、そうでないかを、届け出の内容から判断する。

### 1.6.18 利益相反アドバイザー

現在、東京大学の教職員は、東京大学が定める規定の範囲内で、様々な立場を学外において持つことが可能である。例えば、学会の役員や政府委員、他大学の非常勤講師、産学連携のための民間企業の兼職などがある。こうした立場に立って、様々な活動を行うと、東京大学の構成員としての利害と、学外の立場における利害がぶつかる場合がある。そのようなケースを利益相反と呼ぶが、利益相反アドバイザーは、情報学環内において、利益相反が心配されるときに相談を受け、本部事務とも連絡を取りながら、利益相反に関する対応をアドバイスする役割を担っている。今後、産学連携が進む上で、起こることが予想される利益相反の問題に対して適切に対応していきたい。

### 1.6.19 ハラスメント予防担当者

ハラスメント予防担当者は、アカデミック・ハラスメントあるいはセクシャル・ハラスメントなどの問題に対応するために設置され、引き続き活動を行っている。ハラスメントに関するパンフレット等を配布し、ハラスメント予防について教員および学生への周知を行っている。また、ハラスメントに関する相談に対して、ハラスメント相談所や男女共同参画室と連携を取り合いながら、具体的な相談を受けた場合に対応し、相談体制を整えている。

### 1.6.20 社会情報研究資料センター

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整理し、それらの資料を学内外の研究者に提供することを目的としている。現在、本センターの所蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。

本センターの沿革は、1964年に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が1967年、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称された。その後、2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合にともなって、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあたっており、2007年度からは新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」を推進している。

なお、本センターの現在の年間利用者数は2,000人を越えており、2010度における月別利用者数は、下記の通りである。

表 1-6-20-1 社会情報研究資料センター月別利用者数 (2010 年度)

開室日数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学内	179	226	215	132	91	113	143	173	135	194	129	74	1,804
学外	63	53	108	77	104	78	69	93	72	70	66	63	916
不明	0	0	1	0	1	0	0	1	1	1	0	0	5
合計	242	279	324	209	196	191	212	267	208	265	195	137	2,725

### 1.6.20.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構

情報学環メディア・コンテンツ研究機構は、2009年9月、情報学環におけるメディア・コンテンツ分野の研究開発や教育推進、産・官・学の連携の発展、国際的な人材養成の展開のために設置されたネットワーク型の機構である。組織としては、情報学環附属研究施設の社会情報研究資料センターの下に置かれている。

情報学環は、「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」(2004年度～2008年度)や「コンテンツ創造教育研究コア」(2005年度～2009年度)をはじめとして、メディア・コンテンツ分野での研究教育に取り組んできた。本機構は、それらのメディア・コンテンツ研究をアカデミックに発展・深化させ、教育を根付かせ、国際的な研究協働と人材育成を支援するための体制の確立を目指している。産・官・学を結ぶ「知のトライアングル」の構造化、研究・教育・国際連携のための戦略的組織である。

本機構は、研究教育の軸として、デジタル・テクノロジーを共通の基盤に、1) クリエーション、2) プロデュース、3) アーカイブ、4) アナリシス、5) リテラシーの5つの柱を立て、それを円環的プロセスで連結し組織化することをめざしている。

2011年度からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」(2011年度～2015年度)の概算要求が認められ、「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」プログラムが開始されることとなった。

### 1.6.21 総合防災情報研究センター運営委員会

総合防災情報研究センターは、2008年4月1日に、情報を核に災害の被害軽減を目指す文理融合型の研究センターとして設立された。分野を超えた社会情報学、地震火山学、防災工学の協働により、防災情報研究における新しい地平を切り開くとともに、東京大学の理学、工学、社会学、法学、経済学、医学など様々な分野の防災関係研究者をネットワークし、行政、マスコミ、企業、NPOとも連携することにより、防災に関する知の結節点として機能する新しいタイプの研究機関を目指している。

情報学環附属のセンターであるが、地震研究所、生産技術研究所と連携して運営されており、本センター運営委員会も3部局長および各部局から選出された委員各1名の合計6名から構成される。2010年度は2回の運営委員会を開催し、そのうち第1回運営委員会は、特別研究経費が認められたことに伴う特任助教の採用について、第2回はCIDIR中間評価委員会について、持ち回りで行った。第1回運営委員会においては、特任助教を置くことおよびその候補者の推薦を審議、了承した。第2回運営委員

会においては、中間評価委員会配付資料の確認を行うとともに、運営について意見を頂いた。なお、2010年度は、運営委員に加えて前運営委員に拡大した「総合防災情報研究センターの今後に関する懇談会」を10月5日（火）に開催し、3部局の連携の確認を頂いたとともに4年目、5年目における研究計画の立案とその方向性について意見交換を行った。

なお、中間評価委員会は東日本大震災の発生により、延期せざるを得なくなり、2011年6月に開催することとなった。

### 1.6.22 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」（平成16～20年度）の研究成果を引き継ぎ、総合分析情報学コースの教育と連携して、ユビキタスコンピューティング、ネットワーキングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うことを目的として、平成21年4月1日に設立された。現在7名の東京大学情報学環の教員がユビキタス情報社会基盤研究センターの教員を兼務している。

### 1.6.23 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、グローバル化する東アジア地域のなかでダイナミックに変化している朝鮮半島及び現代韓国の諸相を学際的に研究し、その成果を世界に向けて発信する国際的拠点を目指して2010年設立された。本センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、初年度の研究テーマを「東アジア共同体と日韓パートナーシップ」と設定し、情報学環内で現代韓国の政治や情報、文化を中心とする学術交流と共同研究のプログラムを策定・実施するとともに、東京大学内の現代韓半島研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化し、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指している。

### 1.6.24 駒場カリキュラム連携運営委員会

駒場カリキュラム連携運営委員会は、総合文化研究科・教養学部における、大学学部前期、学部後期の教育と情報学環・学際情報学府の教育に関する連携を協議し、連携に関わる授業科目を円滑に運営する目的で平成20年度から設置された。平成22年度は、教養学部前期課程で情報学環教員が担当する科目に関する調整のために定例委員会が開催された。

### 1.6.25 学生・留学生委員会

学生・留学生委員会では、大学院生全般を対象としたサービスに関して、学際情報学府に在籍する大学院生（留学生を含む）の福利厚生に関する以下の業務を担当してきた。

- (1) 大学院生の勉強・研究用スペースの整備、維持
- (2) 大学院生用備品の購入、管理
- (3) 大学院生と教職員スタッフとのコミュニケーションの維持

(4) 大学院生向け情報の提供

(5) 大学院生奨学金および研究支援経費関係

これらのうち、(1)については、本郷キャンパス情報学環本部棟4階に加えて、工学部2号館9階に大学院生室を設け、共用の机を配置して提供している。また福武ホール学環コモンズにおいて勉強する環境を用意している。

(2)については適宜学生の希望を募り、必要と認められた場合には、共通予算で備品購入をおこなっている。特に今年度は、工学部2号館9階の備品を整備した。

(3)については、年に2~3回、院生向けの連絡会を開催し、情報の相互流通をはかるとともに、年度はじめの新入生歓迎会、留学生懇親会、留学生旅行、年度末の謝恩会を開催している（新入生歓迎会は在校生が、謝恩会は当該年度の修了生が企画実施）。

(4)については、教務関係の情報は上記(3)のルートのほか、適宜掲示板、学務係メールニュースでの情報配信をおこなっている。また、大学院生向けの奨学金・就職・住宅などの情報を、学務係横のスペースで閲覧できるようにしている。

(5)については、各種奨学金の付与に関して希望者を募り、適宜順位付けをして申請している。

留学生を対象としたサービスの現状に関しては、留学生専用の窓口となる留学生支援室を通じて積極的な留学生支援を行っている。IT-ASIAコースも充実し、留学生が増加しており、今後も支援の強化を行う予定としている。

次に課題についてであるが、大学院生全般を対象としたサービスに関しては、学際情報学府全体としてスペースはかなり充足したものの、そのスペースが全学に点在しており、大学院生と教員・スタッフおよび大学院生間のコミュニケーションのさらなる充実が望まれる。

留学生を対象としたサービスも留学生支援室の稼働によりかなり改善はされたが、留学生が飛躍的に増加しており、きめ細やかな留学生の要望の把握と必要な対策を迅速に実施することが求められている。このためには学生・留学生委員会自体の強化も検討されるべきであろう。

## 1.6.26 教育部委員会

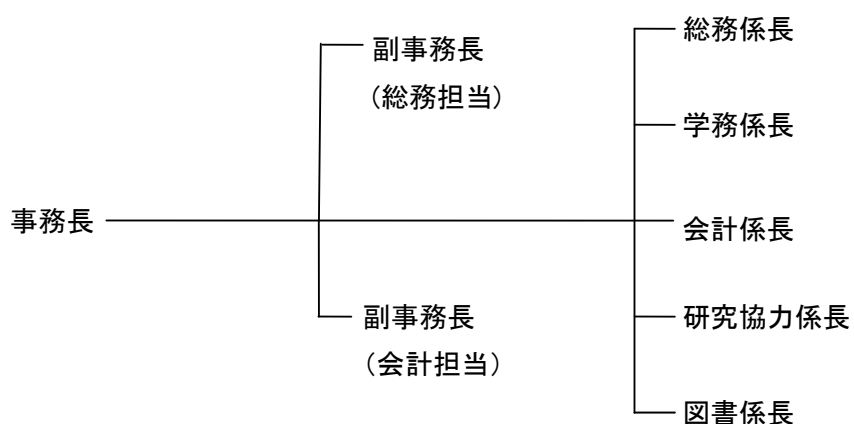
情報学環教育部は、情報やメディアやコミュニケーションについて学びたい人々のために、あるいは新聞や放送や出版などのジャーナリズムの諸分野で活動することを志す人々のために、情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。修業年限2年。大学2年生以上であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験することができる。1949年（昭和24年）に新聞研究所教育部として設置され、2004年度（平成16年度）には社会情報研究所（元新聞研究所）との組織統合によって情報学環に引き継がれ、60年を越える歴史を有している。

2006年度（平成18年度）には組織統合に対応した大幅なカリキュラムの拡充・改訂を実施した。その後、2007年度から08年度にかけて、研究生へのアンケート調査、年に数回の教育部懇談会でのディスカッションなどで得られた知見をもとにして、基本的な理念からカリキュラム（時間割の変更、大学院との合併授業の導入など）、メディア編集室の設置、入学試験改革など、本格的な改革プランの策定に取り組んだ。

その成果もあり、研究生たちは「ジャーナリズム、マスメディアをめぐる実践知」「情報コミュニケーション（ICT）技術、産業をめぐる実践知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる文系知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる理系知」をめぐる、きわめてユニークな教育を受けつつ、大変活発に、自主的な学習活動を展開している。

## 1.7 事務組織

図 1-7-1 事務部組織図(平成 22(2010)年 4 月 1 日現在)



事務長	副事務長	係長	主任	係員	計
1	2	5	5	1	14



## 2 教育活動

### 2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生というところに目標を据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたって、3コース制が導入された。これは、修士課程学生定員70名という規模に適合するためと、ディシプリン基礎をもった学際性への教育効果のためと、2つの理由から導入された構成であった。現在は、2006年4月に総合分析情報学コース、2008年4月（学生受入れは同年10月）にアジア情報社会コースが設立され、5コース（修士課程学生定員100名）となっている。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学力の品質管理をするためにコースごとの修了試験を行う。しかし、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられているし、また入学後の学生はミニマムな選択必修科目のほかは全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組み上げることが可能となっている。

コースはあくまで学府学生が帰属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに決して教員が帰属しているわけではない。教員はあくまで学環に帰属しているのであって、コースとの関わりはどのコースの学生を主として指導するかという点である。コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを構築しつつ、同時に学際性へと越境していくための、バランスのよい舞台を提供しようとしているのである。

### 2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1) コース共通必修科目、(2) コース別選択必修科目、(3) コース共通選択科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学の様々なアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、情報学環のほぼすべての基幹・流動教員が関与し、学生はe-learningシステムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年ではWeb発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では修士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、

「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野の基礎的方法論についてのトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示されるカリキュラム編成になっている。

第3の共通選択科目群は、学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院のゼミ科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、数理言語、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、ネットワーク経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報造形、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラム編成においては、①情報・言語・行動系科目、②社会・制度系科目、③メディア・文化系科目、④表現・リテラシー系科目、⑤数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。

## 2.3 カリキュラム支援体制

大学院学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

### 2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、これまでもそれぞれの院生の視野を広くし、より柔軟な学問的展開を可能にする点で、有益な効果を挙げてきた。

### 2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、自分の研究計画書を作成して学府に提出する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、おおよその研究視角を示す概要的なものであり、提出された計画書は、修士1年生全員がお互いの研究テーマについての認識を共有するための冊子にまとめられる。博士2年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一歩となる。

### 2.3.3 修士課程研究構想発表会

研究構想発表は、学際情報学府修士2年生が新年度の最初におこなう教育行事である。修士1年生の間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約1年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表する。この発表は、学際情報学府に所属する教員と学生に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をポスター発表（バザール）形式で行う。1日を数セッションに分けて行われ、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り1年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新入生もオンライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスについて具体的なイメージをつかむことができる。

### 2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士2年の学生が修士論文執筆に本格的に取り組む7月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出するすべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができるので、修士1年の院生たちにとっては、先輩たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

### 2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年11月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程3年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての研究の進捗状況を発表しなければならない。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織する。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

### 2.3.6 E-learning 授業 (iii online)

#### 2.3.6.1 iii online の目標

iii online は2002年4月に始まった学際情報学府のeラーニングサイトである。iii online は、学部・研究科レベルでは東京大学初のeラーニングサービスである。

eラーニングを開始した最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003年度までは、実践情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の2割程度が社会人という状況であった。

学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマースの撮影などで1ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2回、3回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持つことは、非現実的であった。

### 2.3.6.2 iii online の概要

iii online はこのような問題を解決するために、ビデオのストリーミングと掲示板を組み合わせたサービスを提供している。ビデオのアイコンを押すと、およそ15分×6つにカットされた授業の映像を見ることができる。ストリーミングはFlashVideo形式500kbpsエンコーディングで行っている。FlashVideo形式を選んだのは、利用者としてWindowsユーザー、Macユーザー、Linuxユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15分にカットしたのは、90分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝30分、会社の休憩時間に30分、夜帰ってから30分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHPを使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、eラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的にeラーニングを展開する場合には、「eラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることができる。資料はすべてPDFファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、このPDFファイルを印刷し、それをノートとして使いながら授業を聞いている。



図 2-3-6-2-1 : iii online の画面

表 2-3-6-2-1 : iii online で閲覧可能な授業の一覧

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井潤一
	コミュニケーション・システム	原島博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
	学際情報学概論	オムニバス
2003	情報リテラシー論	山内祐平
	情報記号論	石田英敬
	情報進化論	佐倉統
	シミュレーション・システム	荒川忠一
2004	学際情報学概論	オムニバス
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平
	医療福祉情報学	山本隆一
	社会情報システム	松浦幹太
2005	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 II	田中秀幸
	学際理数情報学概論 VI	鈴木高宏
2006	学際情報学概論	オムニバス

	身体行動情報論	深代千之
	能動情報論	奈良高明
2007	学際情報学概論	オムニバス
	学習環境デザイン論	山内祐平
	歴史情報論	本郷和人
2008	学際情報学概論	オムニバス
	学際理数情報学特論 IX	大島まり
	文化・人間情報学特論 V	前田幸男
2009	学際情報学概論	オムニバス
	組織学習システム論 II	中原淳
	科学技術コミュニケーション論	鈴木高宏・大島まり 佐倉統 ・丹羽美之
2010	学際情報学概論	オムニバス
	総合分析情報学特論 XI	堀 里子
	ネットワーク経済論	田中 秀幸

### 2.3.6.3 iii online の評価

利用動向を確認するために、2002 年夏学期授業終了後に、iii online に利用者登録した全学生（大学院生） 130 名に対してアンケート調査を実施した。有効回答数は 62（有効回答率 47.7%）であった。このうち社会人学生の回答者は 16 名（有効回答数に占める割合 25.8%）である。

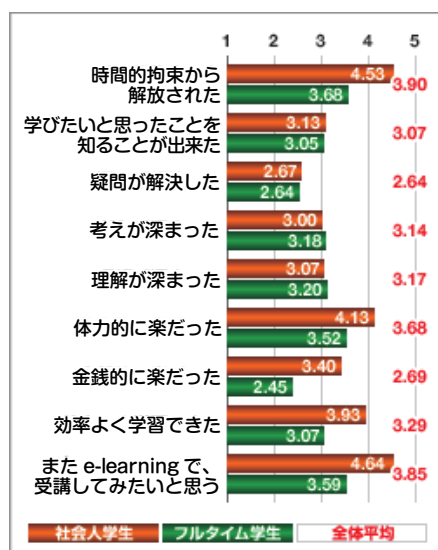


図 2-3-6-3-1 : iii online のメリット

iii online のメリットは「時間的拘束からの解放」、「体力的に楽であること」、そして「効率のよい学

習」である。社会人学生にとくにこの傾向が強くみられたことが特徴的である。特に e-learning で受講してみたいという総合評価項目では、5段階スケールで4.64という好成績をマークしている。

この調査から、iii online が当所の目的としていた「社会人大学院生の学習機会」という目標はほぼ達成できているものと考えられる。

## 2.4 学際情報学府への進学

2000年度に設立されて以来、2003年度まで、大学院学際情報学府は毎年、修士課程約50人、博士課程約20人の大学院生を受け入れてきた。2004年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程14人、博士課程7人が統合され、2006年度からは総合分析情報学コース、2008年度からはアジア情報社会コースが新設されたため、学際情報学府の入学定員はさらに拡大し、現在では修士課程定員が100人、博士課程定員が44人となっている（詳しくは巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000年度の修士52人（修士）から出発して、01年度が102人（修士）、02年度が139人（修士113人、博士26人）、03年度が169人（修士128人、博士41人）、04年度が205人（修士136人、博士69人）、05年度が234人（修士151人、博士83人）、06年度が279人（修士166人、博士113人）、07年度が307人（修士177人、博士130人）、08年度が335人（修士191人、博士144人）、09年度が354人（修士202人、博士152人）、10年度が362人（修士201人、博士161人）と増加し続けてきた。現在、東京大学のなかで大学院情報学環・学際情報学府は、大学院生数においては教育学研究科、経済学研究科、薬学系研究科などと同規模の組織となっている。

また、本学際情報学府の大学院生の構成についてみると、(1) 東京大学以外の他大学出身者の割合が高いこと、(2) 実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会人の割合が高いこと、(3) 外国人学生の割合が相対的に高いこと、(4) 入学者の男女比も、全体の30～50%程度が女性とほぼ均衡がとれていることなど、きわめてハイブリッドな特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても東京大学のなかできわめて新しい可能性をもった大学院組織であることを示している。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の最近5年間では、修士課程の受入予定人員70人（～2005年度）、90人（2006年度～2007年度）、105人（2008年度～2009年度）、100人（2010年度～）に対し、2005年度入学試験が志願者178人（2.54倍）、06年度入学試験が225人（2.5倍）、07年度入学試験が148人（1.64倍）、08年度入学試験が230人（2.19倍）、09年度入学試験が238人（2.27倍）、10年度入学試験が259人（2.59倍）の志願者が応募している。しかも合併後では、本大学院への志願者が増加傾向にあり、今日、大学院重点化のなかで大学院生数の枠が急速に広がったために大学院入試への競争倍率が低下してきている全般的な傾向からすれば、顕著に異なる人気の高さを保っている。

## 2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001年度が38人、02年度が40人、03年度が51人、04年度が57人、05年度が62人、06年度が59人、07年度が61人、08年度が71人、09年度82人と徐々に増え、10年度は84人の修士修了者を輩出している。

また、博士課程の修了者についてみるならば、学際情報学府では、設立されたのが2000年度なので、最初の入学者が博士3年に達する2004年度に初めて4人の博士号取得者を輩出することになった。05年度は1名だったが、06年度は7人、07年度は3人（他に論文博士1人）、08年度は13人（他に論文博士1人）、09年度は8人、10年度は3人の博士号取得者を輩出するに至っている。

大学院学際情報学府では、新しい学生が修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでの丁寧な指導、M2の先輩たちによるWeb発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業、Web発表会の実施、修士論文中間発表会というように、修士論文完成に至る個々の段階で学生の研究をサポートしていく体制が完備している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの毎年の実施、主指導・副指導による指導というように日本の大学院教育としては珍しいほどに修士論文、博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてきており、その一例は、別表のようなリストに示される。

(別表)

2010年度修士論文タイトル

- The Cooperation in Environment Security in East Asia
- Emerging Shangzai Onilne Video in China: An Analysis of Its Characteristics and Functions
- Interaction between Media and Foreign Policy in China: The Case of Japan's Pursuit of Permanent Member's Status in the United Nations Security Council in 2005
- Constitutional Rights and Internet Regulations in the United States, Japan, and Thailand
- Wire through time: Tracing the Camp from Japan in Shanghai to Australia in Nauru
- The Social Costs of Labor Migration and Global Recession on Brazilian Schools in Japan: Rethinking New Media in Minority School Education
- Policing on the Ferry: Moving Society and State Surveillance on Kanpu Ferry during Interwar Period of Imperial Japan (1918-1937)
- 住民運動の社会学
- 戦略的 CSR の研究－社会課題の解決を目指す、マーケティングとイノベーションの一考察－
- 「社会としての学校」におけるメンバーシップ～インタビューと参与観察に見るカテゴリーの使用を題材に～
- デジタルシフトが生む映像コンテンツの新しい消費態様と評価指標～バリューチェーンのデジタル化がアニメにもたらす影響から～
- 戦後日本における「青年」「若者」像の変容－朝日新聞のメッセージ分析を事例として－



- ・若者世代における情報行動の分析ーデジタルデバイドの新たな様相についてー
- ・中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画の伝播ー北京市と雲南省における調査を中心にー
- ・ファッション誌における痩身モデルの規範的身体像ー装いとしての記号的身体の獲得ー
- ・戦後日本のテレビ・ドキュメンタリーにおける<他者>イメージーポスト植民地時代の韓国・朝鮮の表象を中心にー
- ・メディアの「不法」滞在者報道における「日本人らしさ」言説ー「フィリピン人一家強制退去事件」のテレビ報道を事例に
- ・"When News Goes Mobile: Changes in the Gatekeeping Function Seen Through the Cell Phone Content of Japanese Newspapers  
(和訳) 携帯するニュースー全国紙のケータイコンテンツに見るゲートキーピング機能の変容"
- ・美術館のマーケティング
- ・学術俯瞰による研究の変化の分析と可視化の可能性ー研究のケーススタディ
- ・当事者中心の紛争解決に向けたメディアエーション教育に関する研究ー法科大学院生と弁護士を対象としてー
- ・韓国におけるインターネット規制ーインターネット実名制の実施背景と効果を中心にー
- ・中国のアメリカドラマファンの社会学ー80 後世代を中心とするエスノグラフィーー
- ・『記録映画アーカイブ構築についての実践的研究』ー戦後を記録するフィルム、その学術資源としての可能性
- ・脚本アーカイブの課題と未来ー動画連動型脚本検索エンジンの開発を通じてー
- ・戦後日本における美術展覧会カタログのメディア史
- ・選挙メディアと社会参加ー2010 年参議院選挙における新しい<メディア>と<草の根>活動の実態ー
- ・蜘蛛の巣のメタファーは知識体系を構築できるか
- ・アマチュア小型映画のメディア文化論 9.5 ミリ映画・16 ミリ映画・8 ミリ映画のテクノロジーと文化、1923-1982 年
- ・社会的ジレンマを学習するためのカード型ゲーム教材の開発と評価ー環境問題を題材としてー
- ・学習を目的としたワークショップにおける創発的コラボレーションに関する研究
- ・映像の記号的意味作用に関するシステム論的検討ー基礎情報学の視角からー
- ・"デザインされる「地域」、経験される「地域」ー『大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ』をめぐる衝突・交渉・協働ー  
(Designing "'Community'", Experiencing "'Community'": Conflict, Negotiation, and Cooperation in the Echigo-Tsumari Art Triennial)"
- ・「装置産業」としての新聞形成ー1920~30 年代の高速度輪転機導入によるニュース生産の変化ー
- ・<ネタ科学>という科学的言説のあり方ー脳トレブームをめぐる新聞記事を手掛かりにー
- ・飲酒における男女差異化の歴史的変遷に関する研究ー女性の飲酒のシャドウ化に着目してー
- ・歴史的共感の向上を支援するデジタルストーリーテリングに関する研究

- ・戦後成長のエネルギー—原子カムラの歴史社会学
- ・日本の高等教育におけるサービス・ラーニングが学生の学習成果の獲得に及ぼす効果に関する実証的研究
- ・宋銭越境の歴史
- ・〈ハーフ〉とその名称の変遷をめぐる戦後史—なぜ〈ハーフ〉はマイノリティとして語られなくなったのか？戦後の記憶と「人種」「民族」—
- ・哈日族女性コミュニティにおける親密性という価値の上昇：台湾の二〇代～三〇代ジャニーズファン・コミュニティへの参与観察から
- ・ランゲージエクステンション活動における学習者満足度に関する研究
- ・コンテンポラリーダンスにおける即興プロセスの解明
- ・演奏する身体と意識の在り方—ネオサイバネティックなパフォーマンス論として
- ・学部ゼミナールにおける学習者要因・学習環境・学習成果の関係についての研究
- ・テレビと都市空間—テレビ・ドキュメンタリーにみる東京イメージの変遷
- ・大学生の学習観変容に影響を及ぼす協調学習経験のプロセス
- ・色盲者支援のための混同色線理論に基づく認識困難領域の検出
- ・複数台手持ちカメラによる密なる次元構造復元：背景構造を用いたカメラキャリブレーション法と信頼度に基づく多視点ワイドベースラインステレオ法
- ・感覚毛型流体センサを用いたロボットの適応行動獲得
- ・ロボットの群認識主導型直感行動の生成
- ・3次元計測データを利用したMRにおける実物体と仮想物体のシームレスな合成
- ・乳児のためのヒューマンインタフェースのデザイン
- ・頭部姿勢とマルチタッチによる3次元インタラクションの実現
- ・対数空間を用いた光源と反射率推定のロバスト化の検証
- ・リズムパターン認知を用いたアンサンブル共創の構成論
- ・ライフログ共有を利用した会食コーディネートシステムの提案とその有効性に関する研究
- ・近傍画素サンプリングを用いた非連続系の高速度な描画手法
- ・マイクロ交通シミュレーションの開発と錯綜区間におけるドライバモデルの構築に関する研究
- ・前景領域及び動き情報抽出による人物映像のMRコンテンツ化支援
- ・時空間的なCO2濃度計測による人々の活動の分析と応用
- ・オーロラのシミュレーションとその高速化に関する研究
- ・映像処理によるモノの擬人化の研究とコミュニケーション支援への応用
- ・パーソナルモビリティ・ビークルと運転者のインタフェースに関する研究
- ・食事ログにおける個人傾向に適応した食事画像解析
- ・膝・足首関節および平面足を有する受動歩行ロボットの開発と解析
- ・ハードウェア性能に適応した大規模ボリュームデータの実時間表示法
- ・"Interpersonal Interaction in Game Design Process: Based on the Interviews with Professional

## Game Designers

(和訳) ゲーム企画プロセスにおける対人インタラクション：ゲームデザイナーへのインタビューに基づいて"

- ゲームリテラシーの育成におけるデジタルゲーム制作体験の有効性について
- 自然言語処理による中国語の多肢選択問題の自動生成技術に関する研究
- 歩行者移動支援システムにおける情報セキュリティと身体的セーフティの両面を考慮したガイドライン
- "Scroll Interface based on single trial EEG"  
(和訳) 単一試行 EEG 波形を用いたスクロールインタフェース"
  - 戦略的な余剰帯域共有による高速な仮想ネットワークの構築
  - 位置情報を利用したアクセス制御フレームワーク
- "Analysis of Anomalies in the Internet Traffic Observed at the Campus Network Gateway"  
(和訳) キャンパスネットワークゲートウェイにおける異常インターネットトラフィックの分析"
  - セルフメディケーションサポートシステムに関する研究
  - マルチタッチコンピューティングにおける 3 次元指先姿勢を用いたインタラクションに関する研究
- "Discovering Tourist Preference from Online Social Network Site"  
(和訳) オンラインソーシャルネットワークサイトからの旅行者の傾向の発見"
- "A Distributed Index Poisoning System for Effective Control of Peer-to-Peer Network Applications"  
(和訳) P2P ネットワークアプリケーションの効率的制御を実現する分散インデックスポイズニングシステム"
  - 途上国での情報技術の利用の調査と認証技術の活用
- "Interpretation of resident's hidden preferences for improving energy-efficiency of a building"  
(和訳) 建物のエネルギー効率を改善するための居住者の隠れた嗜好の抽出"
- "Content Analysis of guidebook and board about Japanese location for foreign tourist"  
(和訳) 海外旅行ガイドブックと海外旅行者用掲示板における日本の観光地の取り上げられ方に関するテキスト分析"
- 汎用識別子を用いた対象絞り込みによる多目的 AR システム

## 2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の 35~40%程度である。したがって、修士課程を修了した者の 6 割以上が就職することになる。一般に、理系では修士修了後に就職をするケースが多く、文系では博士課程に進学するケースが多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（別表 修士修了者の進路状況）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

## 2.7 学際情報学府以外の教育活動

大学院情報学環では、大学院教育組織である学際情報学府と密接に連携しながら、教育部、ベネッセ先端教育技術学講座、電通コミュニケーション・ダイナミクス寄付講座、OKI ユビキタスサービス学寄付講座、ユビキタス情報社会基盤学寄付講座、「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座でも教育活動を行っている。

### 2.7.1 教育部

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、2年間にわたって情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。講義は、各自が所属する学部や大学院の授業などと両立できるように、おおむね夕刻（14：45分以降）から夜間にかけて開講されている。学部、研究科という「タテ糸」で成り立つ東京大学のなかに、情報というキーワードをめぐる教育研究を「ヨコ糸」で縫い合わせてできた情報学環。教育部は、その情報学環という斬新な組織の特性を活かした、魅力的な教育研究活動の場となっている。

情報学環教育部では、毎年、前年度後期に入学試験をおこない、一学年約 50 名の教育部研究生を選抜している。大学 2 年生以上（4 月以降大学 2 年生になる見込みの人を含む）であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験をすることができる。

情報学環教育部の歴史は古く、その起源は、1929 年（昭和 4 年）の文学部新聞研究室にまでさかのぼる。小さな組織だった新聞研究室は、戦後まもない 1949 年（昭和 24 年）に、文系の学際的研究組織である新聞研究所へと発展した。新聞研究所は、その名のとおり、新聞をはじめとするマスメディアが巻き起こす社会情報現象やコミュニケーション変容を体系的に研究することを目的として設立されたが、同時に、マスメディアで働く記者などの実務家を育成することも目的としていた。

1992 年（平成 4 年）、新聞研究所は社会情報研究所として改組され、マスメディアに限定しない、情報に関わるあらゆる社会現象の研究を総合的に進めていくことになった。2004 年（平成 16 年）には、大学院情報学環と合併し、今日まで情報学の伝統を脈々と引き継ぎながら、文理融合の最先端の研究を推進し、また教育活動にも力を注いでいる。

参考として平成 22 年度開講科目を以下に示す。

（夏学期）

	4 限 14：45～16：15	5 限 16：30～18:00	6 限 18:15～19：45
月	社会情報学基礎 V（映像制作実習）		総合分析情報学基礎 D （安心・安全な社会の実現に向けて）
火			
水		文化・人間情報学基礎 V （世論調査と選挙予測）	実践情報社会論 I （デジタル時代の著作権とオープン化）

木		実践情報学環社会論 III (日本における合作映画 または国際共同コンテンツの 将来性)	実践メディア産業論 VI (出版)
			先端表現情報学基礎 A (先進モビリティ都市設計演 習～安全・安心・快適な 先進社会基盤構築のため に～)
金			

(冬学期)

	4限 14:45～16:15	5限 16:30～18:00	6限 18:15～19:45
月	実践メディア産業論 III (新聞)		先端表現情報学基礎 D (先進モビリティ論・ 移動はこれから何を 変えるのか?)
	文化・人間情報学基礎 IV (科学技術とメディア)		
火	社会情報学基礎 VI (社会学の知・入門)		
水	実践メディア産業論 VII (広告)	実践メディア産業論 V (放送)	特別講義 II (アートの作り方)
木		文化・人間情報学基礎 III	社会情報学基礎 IV (広くコンテンツ産業を 考える)
金			

なお、2006年から2010年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数についてはⅡ．資料を参照していただきたい。

## 2.7.2 ベネッセ先端教育技術学講座（寄付講座）

ベネッセ先端教育技術学講座では、教育活動として以下の2点に力を入れている。

### ・学際情報学府の教育活動との有機的連携

ベネッセ先端教育技術学講座（BEAT）で行われている研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動（公開講座、メールマガジン発行、Web サイト運用）に対する学際情報学府の大学院生の参加を奨励し、研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動がそのままプロジェクト学習の基盤になるような工夫を

している。その中で特に研究プロジェクトに関心を持った学生については、研究プロジェクトの中で修士研究を行うなどの配慮をすることにより、先端教育技術に関する教育活動の拠点になっている。

・公開講座による社会還元的教育活動

一般社会に対して、先端教育技術に関する知見やノウハウの教育活動を行うため、3ヶ月に1回のペースで公開研究会 BEAT セミナーを開催している。昨年度開催された公開研究会は、以下の通りである。

第1回：電子書籍時代の教材—誰が作りどんな形になるのか（2010年5月29日）

第2回：外国語学習のソーシャルイノベーション（2010年9月4日）

第3回：書く力を育てる大学教育（2010年12月4日）

2010年度はのべ500名を超える参加者が公開研究会に参加している。この中には、学生・大学教員に加え、教材開発を行っている社会人も数多く含まれており、デジタル時代の学習コンテンツ・システムに関する最新の知見を伝える機能を果たしている。

### 2.7.3 電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座

株式会社電通からの寄付を受け、2007年度から2009年度まで、電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座を設置し、研究をすすめた。寄付金額は3年間で5千万円である。研究目的は、急速に大きな構造変化を遂げつつあるメディア環境・コミュニケーション環境を背景に、メディア・コミュニケーションと社会の関係について総合的な視野にたつて研究することにある。2010年度は、研究成果の一部として、以下の本を企画し、出版を確定した。

- ・『地域づくりのコミュニケーション研究—まちの価値を創造するために』
- ・『高齢者介護のコミュニケーション研究—専門家・非専門家の協働のために』
- ・『メディア産業のコミュニケーション研究—つながりの創発のために』

### 2.7.4 OKI ユビキタスサービス学寄付講座

「OKI ユビキタスサービス学」寄付講座は、沖電気工業株式会社（以下 OKI）の寄付により平成19年4月に情報学環に開設された。情報学環では、ユビキタス情報社会基盤研究センターを設置して、ユビキタス情報分野の世界的な研究教育拠点となっている。一方、OKIは企業ビジョンとして「ユビキタスサービスにあふれるe社会」を掲げており、東京大学大学院情報学環における取り組みにご賛同いただき、相互に協力して本寄付講座を開設している。

本講座の目的は、体系的な調査・分析および実践を通して、ユビキタスサービスに関する知見を深め、その実現に向けた研究開発を行うことで社会貢献を果たすことにある。そして、本講座で追求するユビキタスサービスに関する学問体系をユビキタスサービス学と呼び、本講座名に冠した。

本講座は、坂村健教授と数名の若手教員が中核となり、ユビキタス情報社会基盤研究センターや大学

院学際情報学府総合分析情報学コースと連携して、研究教育活動を推進している。

### 2.7.5 ユビキタス情報社会基盤学寄付講座

「ユビキタス情報社会基盤学」寄付講座は、凸版印刷株式会社の寄付により、東京大学大学院情報学環に平成19年10月1日に開設した。本寄付講座は、ユビキタスコンピューティングの基盤技術と、それを核とした社会イノベーションに関する研究教育の実施することを目的とし、ユビキタスコンピューティングシステムの基盤技術や、それが社会に与えるインパクトや影響の分析に取り組む。それによって、ユビキタス情報社会の基盤となる基礎学問分野を確立したいと考えている。その研究活動は、ユビキタス情報社会基盤研究センターと、更に教育活動においては、大学院学際情報学府総合分析情報学コースと密な連携をして進めている。

### 2.7.6 「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座

「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座は、首都高速道路株式会社、東京電力株式会社、東京地下鉄株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、株式会社日立製作所と東京大学大学院学際情報学府総合分析情報学コースにより、平成21年4月1日に開設された。また、ユビキタス情報社会基盤研究センターも協力している。本講座は、情報技術を活用した施設管理等に関するマネジメントを高度化するとともに、新たな情報基盤を活用した新たなビジネスを創出し、インフラ・イノベーションの実現を目指す。また、こうした目的を達成するため、シーズとニーズ、技術と運用、理論と実践といった様々な知識や経験を結合し、新しい価値を生み出す実践的な研究プラットフォームの確立を目指す。平成21年度は、本講座のキックオフを記念する設立シンポジウムを平成21年4月に開催した。

## 3. 研究活動

### 3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。同じ学問領域の研究者が集まり、その集積性によってその学問領域の体系化を図り、またそれまで解決できなかった問題に突破口を開こうとする目標の立て方とやり方が存在する。しかし、情報学環は違う目標をもっており、違うアプローチを採っている。情報学環は学際情報学という新しい学問を創出するという目標をもっており、異なった学問領域の研究者に出会いの場を提供し、異種交配と相互越境というやり方によって、それを達成しようとしている。そのような研究組織は規模においてそれほど大きいものである必要はないが、しかし特有の研究組織論が必要とされる。

#### 3.1.1 文理の相互作用と連携

伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたし、現在もそれが生きている。新しい分野、とりわけ学際情報学にとっては、その区分けを乗り越えて、文理連携、文理越境、文理相互浸透が必要であり、それなくして発展の展望はない。情報学環は最初からそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されたものである。しかも、その文理の比重がどちらかに大きく偏ることなく、バランスを取っているのが大きな特色である。

現在、情報学環では大小合わせてさまざまな文理連携型の研究プロジェクトが実施されている。政府予算に基づく大型の研究プロジェクトとして、これまでのコンテンツ関連のプロジェクトに続いて、平成23年からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」（2011年度～2015年度）プログラムが発足することが決まっている。情報学環のスタッフ体勢は、文理連携の大型研究プロジェクトを自前でカバーしていくことができる。

文理連携は、組織の財政上、情報学環ならではの効用とメリットを発揮することに結びつく。国立大学に対する現在の財政政策の仕組みでは、文系の資金獲得には限界があり、困難が伴う。理系が必要とするような大きな額ではないにも関わらず、文系が運営費交付金や競争的資金を新たに得るのは容易なことではない。しかし、文理連携の研究計画のもとに競争的資金が獲得できることによって、結果的に文系の研究分野へ資金が流れ、これまで経済的な理由からできなかった研究活動を展開できるようになるのである。これは、文理連携で情報学を構築していくという組織論が、財務上も有益な影響を生み出していることを物語っている。こうした研究資金状況の改善によって、文系は文系の側から文理連携の企てを積極的に展開していくことが可能になるのである。

#### 3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みとして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出されたものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の2種類が存在する。

基幹教員は、情報学環に固有のポスト、すなわち基幹教員枠（部局の「採用可能数」として割り当てられているポスト）で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされて



いる。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動教員枠を使って、流動元の部局よりやはり時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。その教員スペースは現状では情報学環として手当てすることができず、流動元部局のスペースをそのまま使用している。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来の枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

### 3.2 大型研究プロジェクト（1,000万円以上規模）

各教員が中心となって行う研究プロジェクトでも、以下の例（事業規模1千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展開している。（すべての外部資金による研究の状況は、IV. 外部資金獲得状況を参照のこと）

#### <科学研究費補助金(金額は直接経費分)、学環教員が研究代表者となっているもの>

須藤 修 2006-2010 特定領域研究「知識社会経済システムの共創的發展とそのガバナンスに関する研究」（須藤修、田中秀幸、後藤玲子、中島直樹） 92,100 千円

辻井 潤一 2006-2010 特別推進研究「高度言語理解のための意味・知識処理の基礎技術に関する研究」（辻井潤一） 689,390 千円

河口洋一郎 2008-2010 基盤研究(A)「デジタル茶室の花鳥風月的な時空間創出技術」（河口洋一郎、堀聖司、米倉将吾） 39,910 千円

岡田 猛 2008-2010 基盤研究(A)「美術創作プロセスの解明に基づく創造性教育支援」（岡田猛） 39,000 千円

相澤 清晴 2009-2011 基盤研究(A)「ライフログ情報処理基盤の構築：取得、処理、共有へ向けて」（相澤清晴） 47,970 千円

馬場 章 2009-2011 基盤研究(A)「歴史情報学に基づく明治期社会モデルの研究－写真資料を用いた華族社会構造の解析－」（馬場章、吉見俊哉、佐藤健二、五百旗頭 薫、添野 勉、研谷紀夫） 62,530 千円

田中 明彦 2009-2011 基盤研究(A) 「東アジアにおける地域協力枠組み発展の政治過程」(田中明彦) 39,000 千円

石田 英敬 2008-2010 基盤研究(B) 「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究と批評プラットフォームの制作」(石田英敬、吉見俊哉) 22,880 千円

中尾 彰宏 2009-2012 基盤研究(B) 「大規模分散環境を用いた P2P ネットワーク流通ファイル制御システムの研究」(中尾彰宏、宮川浩子、川島幸之助、大坐畠 智) 12,740 千円

山内 祐平 2009-2011 基盤研究(B) 「自己調整学習を支援する協調フィルタリングを用いた英語学習環境の構築と評価」(山内祐平、山田雅寛、松河秀哉、北村 智) 24,440 千円

佐倉 統 2009-2012 基盤研究(B) 「脳神経科学と社会の相互作用——事例研究と枠組み構築——」(佐倉統、入来篤史、後藤弘子、高木美也子) 18,460 千円

林 香里 2009-2011 基盤研究(B) 「メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について：8カ国国際比較研究」(林香里、丹羽美之、カーリン) 24,570 千円

園田 茂人 2009-2012 基盤研究(B) 「「中国」と向き合って：日韓台対中進出企業の現地化プロセスに関する比較社会学的研究」(園田 茂人) 20,540 千円

#### <その他外部資金関係>

馬場 章 2007-2010 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」 65,442 千円

河口 洋一郎 2007-2011 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術」 681,135 千円

古村 孝志 2007-2010 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「地震波動伝播と津波発生伝播のシミュレーション」 50,440 千円

水越 伸 2007-2010 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「メディアを活用した市民芸術に関する俯瞰的理論と実践プログラムの研究・開発」 80,890 千円

相澤 清晴 2009-2011 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「食、健康に関わ

るライフログ取得とコミュニティ創成」 41,335 千円

田中 淳 2010 国土交通省 「首都圏大規模水害における住民行動と情報戦略に関する調査研究」 25,641 千円

石川 雅章 2009 国土技術政策総合研究所 「IT を活用した合理的な事業マネジメントシステムに関する研究開発」 187,000 千円

大島 まり 2008-2010 文部科学省 科学技術試験研究費 「次世代生命体統合シミュレーションソフトウェアの研究開発」 52,725 千円

古村 孝志 2008-2010 文部科学省 科学技術試験研究費 「連動性を考慮した強震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究」 150,151 千円

横井 浩史 2008-2011 文部科学省 科学技術試験研究費 「日本の特長を活かした BMI の統合的研究開発」 203,997 千円

池内 克史 2008-2011 (独) 新エネルギー・産業技術総合開発機構 エネルギーITS 推進事業 「全方位センサによる車両位置認識技術の開発」 68,128 千円

相澤 清晴 2009-2011 (独) 情報通信研究機構 「革新的三次元映像技術による超臨場感コミュニケーション技術の研究開発」 35,295 千円

中尾 彰宏 2009-2010 (独) 情報通信研究機構 「新サービス創造のためのネットワーク基盤を実現するためのルータモジュールの研究開発」 22,998 千円

中尾 彰宏 2010 総務省 「セキュアクラウドネットワーキング技術の研究開発」 93,251 千円

辻井 潤一 2006-2010 文部科学省 科学技術振興調整費 「日中・中日言語処理技術の開発研究」 255,010 千円

池内 克史 2010 近畿地方整備局 国営飛鳥歴史公園事務所 「甘檜丘地区における歴史的体験施設整備に関する研究開発」 15,000 千円

### 3.3 付属センターの役割

#### 3.3.1 社会情報研究資料センター

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964年1月、当時の新聞研究所内に開室された「プレスセンター」が1967年6月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称されたものである。2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。

本センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、学内外の研究者の利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、本センターの収蔵資料は製本済原紙約20,000冊、縮刷版約8,000冊、マイクロフィルム約45,000リールに達している。これらの新聞資料は情報学環書庫のほかに、駒場キャンパス内の旧宇宙航空研究所跡地などに別置されている。

センターの閲覧室には、利用者のために各種データベース閲覧用PC3台とマイクロフィルムのデジタルデータ変換機能をもつマイクロリーダーを本年度新規に設置して利用者の便宜を図ると共に、従来のマイクロリーダーも継続利用して需要に答えている。また、本センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

#### 3.3.2 総合防災情報研究センター

総合防災情報研究センターは、2008年4月1日に、東京大学の大学院情報学環、地震研究所、生産技術研究所の連携により、情報の概念を核とした文理融合型の総合的な防災研究機関として設立された。分野を超えた社会情報学、地震火山学、防災工学の協働により、防災情報研究における新しい地平を切り開くとともに、東京大学の理学、工学、社会学、法学、経済学、医学など様々な分野の防災関係研究者をネットワークし、行政、マスコミ、企業、NPOとも連携することにより、防災に関する知の結節点として機能する新しいタイプの研究機関を目指している。

日本は、地理的特徴からこれからも地震、風水害、火山などあらゆる災害に襲われることは避けられない。「情報」を核に「減災」をめざす、これが総合防災情報研究センターの目的であり、具体的には以下のミッションを果たす。

1. 災害情報の生産－伝達－受容過程の解明
2. 首都直下地震災害の全体像の把握
3. 大学SCM (Service Continuity Management)モデルの開発
4. 防災制度の設計と運用に関する研究
5. 災害情報教育の実施とプログラムの開発

設立3年目を迎えた2010年度の主な活動をミッション毎に示す。

##### 3.3.2.1 災害情報の生産－伝達－受容過程の解明

「水害時の状況に応じた避難及び避難情報提供に関する研究」（国土交通省国土技術政策総合研究所受託研究）では、グループインタビューを繰り返し、現在一般に配布されているハザードマップに盛り

込まれている情報をA4で1枚両面まで絞り込み、その中で重要な判断基準となる予測水位情報のあり方を分析した。リアルタイムデータだけの提供に比べ、過去の実績データや今後の予測水位などの情報をあわせて提供すれことで避難開始に結び付けることができる可能性が見いだされた。さらに、緊急時の情報を適正に理解、評価するための事前教育についても、22市区を対象に、避難時の注意や心得、説明等から203件の推奨行動を収集し、類型化・構造化したとともに、科学的評価や過去の水害被災時の意見をもとに、暫定版「水害時の心得」をとりまとめた。さらに、より臨場感を持った体験が可能になると予想される3次元空間内のウォークスルーや視点の切り替え、表示の切り替えを行うことができるシステム開発を行った。

このほか、環境保護行動の意志決定モデルを援用した避難行動モデルを構築し、チリ地震津波時の実際の避難行動からその妥当性を解析した。また、2年目を迎える「JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力 インドネシアにおける地震火山の総合防災策」で、ジャワ島東部の東ジャワ州に位置するクルー（Kelud）火山 2007 年噴火を事例に火山周辺の住民がどのような行動をとったのかを調べるために、グループインタビュー調査及びアンケート調査を行った。さらに、CIDIR 定期調査の第 2 回目を実施した。

2009 年 4 月から一般公開を始めた「廣井アーカイブス」に加えて、東京大学生産技術研究所 都市基盤安全工学国際研究センターが所有している、阪神・淡路大震災関連の蔵書コレクションである「Kobe-net」収蔵の 1967 点についてアーカイブス化し、両アーカイブを横断的に検索する環境を整えた。

### 3.3.2.2 首都直下地震災害の全体像の把握

首都直下地震発生に伴う人的・物的被害、及び経済的影響を明確化するための前提条件として、首都直下地震を対象とした現代社会における地震災害の特徴に関する基礎的調査と、東京大学の防災関連分野の研究者の組織化を図った。また、東京大学公開講座等を通じた知識の普及と防災への啓発を行った。

### 3.3.2.3 大学 SCM モデルの開発

今年度は、概算要求「災害緊急情報を活用した大学防災情報システムの開発」の初年度であり、緊急地震速報等の学内配信のための基盤ネットワークの開発、緊急地震速報端末の試験設置、駒場や柏キャンパスにおける建物強震観測の開始などを行った。また、基礎資料を得るために、学内のヒアリング調査、学部生および理系院生を対象としたグループインタビューならびに全学学生実態調査の協力を得て、全学部生を対象に平日の帰宅時間および休日の登校実態を調査した。

また、昨年度に引き続き、大学本部の防災訓練の企画・運営に当たった。2010 年度の訓練では、本部職員 100 名程度が実地に情報収集を行い、情報収集や動線等の確認ならびに課題の抽出を行った。CIDIR は情報収集様式やチェックシートのモデルを提案するとともに、総長以下全役員が参加した災害対策本部意思決定訓練の判断項目を設定し、本部員が収集すべき情報の洗い出しに協力した。さらに、CIDIR メンバーは訓練の評価を担当し、次年度の訓練および防災計画への反映に貢献している。

なお、これらの成果を一大学にとどめず広く社会還元するために、私学連盟関東ブロックで大学の防災対策について講演を行ったほか、第 3 回関東・甲信越地区安全衛生研究会の環境安全関連会議で報告を行った。

### 3.3.2.4 防災制度の設計と運用に関する研究

ミッション2と関連づけて、東京大学の防災研究者の連携強化を目的とする「東京大学防災研究者ネットワーク」を構築している。2010年度は、CIDIR、地震研究所、生産技術研究所、工学系研究科、新領域創成科学研究科、農学生命科学研究科等から、防災や災害を研究テーマとする20名ほどの研究者をメンバーとする「東京大学防災研究者ネットワーク検討会(仮称)」を設立するとともに、東京大学防災研究者データベース(UT-DiResDB)の基本設計と初期データベースの構築を開始した。

### 3.3.2.5 災害情報教育の実施とプログラム開発

昨年に引き続き、情報学環各コース横断型の教育プログラムである「災害情報論」を開講した。前期には「情報で災害を軽減するには」と題し、大規模災害と予知予測の現状、および予知予測と情報受容行動の課題を、後期には「首都直下地震の災害像と都市災害軽減の課題」と題し、首都直下地震の災害と課題および防災対策・防災訓練に講義した。

また、2010年度は「トップが語る防災」と題して、災害対応の第一線にいる、ライフライン、マスコミならびに行政を対象としたライフライン・マスコミ連携講座を10回開催した。

### 3.3.2.6 東日本大震災への対応

2010年度は、東日本大震災を抜きには語ることはできない。防災研究組織であるCIDIRは、(1)東京大学本部運営の支援、(2)生産技術研究所との連携による3.11復興netへの参画、(3)地震研究所との連携による突発科研への参画、(4)東北大学の支援ならびに(5)学会への協力など幅広い活動を行った。

## 3.3.3 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、ユビキタスコンピューティング、ネットワークングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うという目的を達成するため、以下のような研究を実施している。

#### (1) ユビキタス情報基盤技術の研究

これまでのCOEプログラムで確立した、ユビキタスコンピューティング分野の基盤技術である、ユビキタスID技術やT-Engine/T-Kernel、eTRONを用いた、インターネットの次の新世代の情報インフラを確立する。具体的には、「国際ユビキタスIDセンター」を世界各地に立ち上げ、本研究センターがこれらの連携の中核となる。

#### (2) ユビキタス情報社会研究

ユビキタス情報インフラの普及とともに、社会がどのように変化するかということ、実証的に研究し、かつそのために必要な新しい社会システムや制度、法律、ビジネスモデルを考案し、積極的に提案していく。

ユビキタスコンピューティング技術は、ICT分野において、我が国がリーダーシップをとって普及を進めている技術である。本センターにおける研究を推進することによって、情報科学、情報社会学等の、学術的な分野の成果を輩出することはもちろん、更にそれを社会基盤として実社会に普及させ、顕在化している様々な社会問題を解決することが期待される。

### 3.3.4 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、2010年度の研究テーマを「東アジア共同体と日韓パートナーシップ」と設定し、情報学環内で現代韓国の政治や情報、文化を中心とする学術交流と共同研究のプログラムを策定・実施するとともに、東京大学内の現代韓半島研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化し、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指した。2010年度開催された学術行事は、以下の通りである。

(1) 2010年6月5日(土)、開所記念シンポジウム：「東アジア共同体に向けた日韓パートナーシップ—過去をみつめ未来をつくる—」

(2) 2010年7月10日(土)、第一回研究会：「東アジア共同体と日韓関係：東アジア共同体形成に向けた日韓間の阻害要因に関する検討及び分析」

(3) 2010年9月24日(金)、第二回研究会：「東アジア共同体に向けた日韓のアプローチ：比較と協力の可能性」

(4) 2010年10月2日(土)、国際会議：「東アジア共同体と日韓の知的交流」

(5) 2010年10月27日(水)、研究報告会：和田春樹「2年ぶりに平壤を訪れて」

(6) 2010年12月1日(水)、合同ワークショップ：「地殻変動下にある東アジア情勢と日韓の役割」

## 4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

### 4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

相澤 清晴	ACM Transactions on Multimedia Computing Communications and Applications, Associate Editor
相澤 清晴	IEEE Trans. Image Processing, Associate Editor
相澤 清晴	Journal of Visual Communication and Image Representation, Editorial Board
相澤 清晴	PCS2010, Program Vice Chair
相澤 清晴	IWPCIP2010, Conference Chair
相澤 清晴	ACM CIVR2010, Special Session Co-Chair
相澤 清晴	IEEE ICME2010, Demo Session Co-Chair
相澤 清晴	VSMM2010, Program Co-Chair
相澤 清晴	ACM Multimedia 2010, Program Committee Member
石崎 雅人	InterSpeech 2010, Reviewer

- 石崎 雅人      The 11th SIGdial Conference on Discourse and Dialogue, Local committee
- 大石 岳史      ACCV Workshop on e-Heritage 2010, Program Co-Chair
- 大石 岳史      The 10th Asian Conference on Computer Vision (ACCV 2010), International  
Program Committee
- 大島 まり      Horiba International Conference, International Symposium on Micro/Nano Flow  
Measurement Techniques, Vice Chairman
- 大島 まり      International Journal for Numerical Methods in Biomedical Engineering,  
Editorial Board
- 大島 まり      The Journal of Visualization, Editorial Advisory Board
- 大島 まり      2nd International Conference on Computational & Mathematical Biomedical  
Engineering, International Advisory Committee
- 大島 まり      ACTA of Bioengineering and Biomechanics Vol.12 No.3 2010, Editorial Board
- 上條 俊介      2010 IEEE Intelligent Vehicles Symposium(IV2010), Program 委員
- 上條 俊介      ITST2010(The 10th International Conference on Intelligent Transport Systems  
Telecommunications, TPC
- 上條 俊介      ITS 世界会議, 国際プログラム委員
- 上條 俊介      ITS Japan, International Journal on ITS Research 編集委員
- 上條 俊介      Springer Publisher, Journal on Multimedia Tools and Applications 編集委員
- 越塚 登      Internet of things 2010 Conference, Workshop Session Organizer and Chair
- 越塚 登      Internet of things 2010 Conference, Program Committee
- 越塚 登      ISO/IEC JTC1/SC31 WG6, ITU-T SG16 Liason Officer
- 越塚 登      ITU-T SG16 Q21, 22, “H.IDscheme: ID schemes for multimedia information  
access triggered by tag-based identification” , Co-Editor
- 越塚 登      ITU-T SG16 Q21, 22, “H.IRP: ID resolution protocols for multimedia information  
access triggered by tag-based identification” , Co-Editor
- 越塚 登      日中韓会合, Networked-ID WG,Vice Chair
- 佐藤 洋一      IEEE Transactions on Pattern Analysis and Machine Intelligence, Editor
- 佐藤 洋一      International Journal of Computer Vision, Editor
- 佐藤 洋一      IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications, Editor
- 佐藤 洋一      European Conference on Computer Vision (ECCV2010), Asia Chair
- 佐藤 洋一      Asian Conference on Computer Vision (ACCV2010), Asia Chair
- 佐藤 洋一      ACM Multimedia 2010, Program Committee Member
- 佐藤 洋一      IEEE International Workshop on Projector-Camera Systems (PROCAMS2010),  
Program Committee Member
- 佐藤 洋一      3DPVT2010, Program Committee Member
- 佐藤 洋一      IAPR International Conference on Pattern Recognition (ICPR2010), Program



#### Committee Member

- 佐藤 洋一 International Workshop on Gaze Sensing and Interactions (IWGSI2010), Program Chair
- 佐藤 洋一 IEEE International Symposium on Mixed and Augmented Reality (ISMAR2010), Program Committee Member
- 佐藤 洋一 International Conference on Multimodal Interfaces and Workshop on Machine Learning for Multimodal Interaction (ICMI-MLMI 2010), Program Committee Member
- 佐藤 洋一 IEEE International Workshop on Mobile Vision 2010, Program Committee Member
- 佐藤 洋一 International Congress on Imaging Science (ICIS2010), Program Committee Member
- 佐藤 洋一 International Symposium on Visual Computing (ISVC2010), Program Committee Member
- 須藤 修 Environmental Economics and Policy Studies (the official journal of the Society for Environmental Economics and Policy Studies), Springer-Verlag, Associate Editor
- 須藤 修 13th German-Japanese Symposium Program Committee (IECE Communications Society and Munchner Kreis Org.), Member
- 須藤 修 Heidelberg Club International (HCI) organized by the Mayor of Heidelberg City (Germany), Member
- 須藤 修 Living Labs Global Award 2011(USA), The Jury Member
- 須藤 修 International CIO Academy, Vice Chair
- 田中 秀幸 Journal of Socio-Informatics, 編集委員
- 中野 公彦 10th International Conference on Motion and Vibration Control, 幹事
- 山口 いつ子 The AHRB Research Centre for Studies in Intellectual Property and Technology Law, The University of Edinburgh, Advisory Board Member of "SCRIPT-ed" Journal

## 4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している（政府委員会委員数 71 件、地方自治体委員会委員数 8 件）。

#### <政府>

- 相澤 清晴 内閣府, 内閣府総合科学技術会議 情報通信 PT 委員 及び ヒューマンインターフェース・コンテンツ WG 主査
- 相澤 清晴 総務省, ICT 標準化・知財センター 標準化戦略評議会 委員
- 池内 克史 総務省独立法人評価委員会 情報通信・宇宙開発分科会情報通信研究機構部会, 評価委員

石川 雄章	総務省, 新事業創出戦略委員会 ICT 利活用戦略ワーキンググループ 委員
石川 雄章	国土交通省, 「場所情報コード」に関する勉強会委員
大島 まり	独立行政法人科学技術振興機構, 科学技術振興調整費審査作業部会 委員
大島 まり	文部科学省, 中央教育審議会臨時委員
大島 まり	独立行政法人日本原子力研究開発機構, 核融合研究開発・評価委員会 委員
大島 まり	独立行政法人科学技術振興機構, 国際科学技術コンテスト支援事業推進委員会 委員
大島 まり	文部科学省研究開発局, 科学技術・学術審議会(研究計画・評価分科会)核融合研究作業部会 委員
大島 まり	独立行政法人科学技術振興機構, サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト推進評価委員会 委員
大島 まり	独立行政法人科学技術振興機構, 戦略的創造研究推進事業 領域アドバイザー
大島 まり	文部科学省初等中等教育局, 学習指導要領の改善協力者
大島 まり	内閣府, 原子力安全委員会原子炉安全専門審査会 審査委員
大島 まり	国土交通省総合政策局, 交通政策審議会 委員
大島 まり	文部科学省, 科学技術・学術審議会 臨時委員
大島 まり	国土交通省総合政策局, 交通政策審議会技術分科会 委員
大島 まり	独立行政法人国立環境研究所, スーパーコンピュータ研究利用専門委員会 委員
大島 まり	独立行政法人国立科学博物館, 重要科学技術史資料登録委員会 委員
大島 まり	経済産業省, 産業構造審議会 臨時委員
大島 まり	人事院, 第 23 回人事院総裁賞 選考委員会 委員
大島 まり	経済産業省, 総合資源エネルギー調査会 臨時委員
大島 まり	文部科学省, 新学術領域研究専門委員会 委員
大島 まり	国土交通省, 社会資本整備審議会 臨時委員
大島 まり	独立行政法人国立科学博物館, サイエンスコミュニケーションに関する有識者会議委員
大島 まり	独立行政法人科学技術振興機構, 「科学の甲子園推進事業委員会」委員長
上條 俊介	警察庁, 安全運転支援システム (DSSS) 有識者懇談会 委員
越塚 登	総務省, 「コンテンツ将来像検討会議」, コンテンツ振興検討チーム委員
越塚 登	国土交通省, 「モビリティサポート有識者委員会」・委員
越塚 登	国土交通省・国土地理院, 「場所情報コードの利用技術に関する共同研究・推進委員会」委員
越塚 登	総務省, 「デジタルコンテンツ創富力の強化に向けた懇談会」委員
越塚 登	独立行政法人情報処理推進機構 (IPA), 「文字情報基盤構築に関する研究開発事業コード化小委員会」委員
坂村 健	総務省, 「日印 ICT 成長戦略委員会」委員
坂村 健	国土交通省, 成長戦略会議委員

坂村 健	文部科学省, 科学技術政策研究所 客員研究官
坂村 健	国土交通省, 交通政策審議会 臨時委員
坂村 健	国土交通省, ICT を活用した歩行者の移動支援に関する勉強会委員
坂村 健	文部科学省, 平成 23 年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰審査委員 科学技術省審査委員会委員
佐倉 統	総務省, 「脳と ICT に関する懇談会」 委員
須藤 修	政府内閣官房, 「次世代電子行政サービス基盤等検討プロジェクトチーム」 座長
須藤 修	政府内閣官房, 「IT 戦略本部評価専門委員会」 座長代理
須藤 修	政府内閣官房, 「電子政府ガイドライン作成検討会」 座長
須藤 修	政府内閣官房, 「情報セキュリティ政策会議技術戦略専門委員会」 委員
須藤 修	内閣府消費者委員会, 「個人情報保護専門調査会」 委員
須藤 修	内閣府, 「総合科学技術会議」 基本政策推進専門調査会情報通信分野プロジェクトチーム委員
須藤 修	総務省情報通信審議会, 委員
須藤 修	総務省情報通信審議会, 「情報通信政策部会」 部長
須藤 修	総務省情報通信審議会, 「情報通信技術分科会」 委員
須藤 修	総務省, ICT 政策タスクフォース, 委員
須藤 修	総務省, ICT 政策タスクフォース「地球的課題検討部会」 委員
須藤 修	総務省, ICT 政策タスクフォース「電子政府対応推進ワーキンググループ」 座長代理
須藤 修	総務省, 「予算執行監視チーム」 外部有識者
須藤 修	総務省, 「自治体クラウド推進本部」 有識者懇談会座長
須藤 修	総務省, 「緑の分権改革推進会議」 構成員
須藤 修	総務省, 「緑の分権改革推進会議」 ICT 分科会座長
須藤 修	総務省, 「地域 ICT 利活用モデル構築事業評価会」 委員
須藤 修	総務省, 「地域情報化評価会」 構成員
須藤 修	総務省, 「ふるさとケイタイ創出推進事業評価会」 委員
須藤 修	総務省, 「ユビキタスタウン構想推進事業評価会」 委員
須藤 修	総務省, 「地球温暖化対応 ICT イノベーション推進事業」 専門評価委員
須藤 修	厚生労働省, 「最適化計画策定評価委員会」 委員
須藤 修	経済産業省, 「文字情報基盤委員会」 委員
鷹野 澄	気象庁, 気象庁緊急地震速報評価・改善検討会 検討部会委員
竹内 文乃 員	環境省, 子どもの環境と健康に関する全国調査 基本設計分野・データシステム分野委員
中野 公彦	警察庁, 委員
橋元 良明	総務省, 情報通信白書編集委員
目黒 公郎	気象庁, 緊急地震速報評価・改善検討会委員

目黒 公郎 内閣府, 社会還元プロジェクト「きめ細かい災害情報を国民一人ひとりに届けるとともに災害対応に役立つ情報通信システムの構築」タスクフォース  
 目黒 公郎 総務省, 地域情報化アドバイザー  
 山口 いつ子 総務省情報通信政策研究所, 情報通信法学研究会構成員  
 山本 隆一 厚生労働省, 厚生労働省レセプトデータ等の提供に関する有識者会議副座長

#### <自治体>

大島 まり 横浜市教育委員会, 横浜市立サイエンスフロンティア高校 科学技術顧問  
 大島 まり 群馬県教育委員会, 運営指導委員  
 須藤 修 福島県, IT 推進アドバイザー  
 須藤 修 高知県, 「電子自治体推進協議会」顧問  
 須藤 修 甲府市, 「甲府 PMO 委員会」副委員長  
 須藤 修 文京区, 専門委員  
 水越 伸 文京区, 文京区アカデミー推進計画策定協議会委員  
 坂村 健 高知県高岡郡梶原町, 「梶原町環境モデル都市推進協議会」アドバイザー

### 4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長など、学会の要職等を通じて学協会活動に貢献している。

石井 健太郎 2011 年度人工知能学会全国大会(第 25 回) プログラム委員  
 石川 雄章 特定非営利活動法人ピーアイ・フォーラム 理事  
 石川 雄章 ジャパンクラウドコンソーシアム 幹事  
 石崎 雅人 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 主査  
 石崎 雅人 日本認知科学会 論文賞選考委員  
 石崎 雅人 社会言語科学会 発表賞選考委員  
 石崎 雅人 言語資源協会 委員  
 石崎 雅人 国際標準化規格委員会 (TC37/SC4) 国内対策委員  
 石田 英敬 日本記号学会 理事  
 植田 一博 日本認知科学会 常任運営委員  
 植田 一博 HAI2010 シンポジウム プログラム委員  
 大石 岳史 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究会運営委員  
 大島 まり 日本放送協会 NHK 「サイエンス ZERO」コメンテーター  
 大島 まり 社団法人発明協会 全日本学生児童発明くふう展 審査委員  
 大島 まり 財団法人日本宇宙フォーラム 顧問  
 大島 まり 第 33 回日本バイオレオロジー学会年会「脳動脈瘤の研究最前線 I」座長

大島 まり	第 21 回バイオフィロントニア講演会「プログラム A1-2 生体流体工学 2」座長
大島 まり	第 24 回数値流体力学シンポジウム「プログラム OS12 流体・構造連成(1)：計算手法 関連」座長
大島 まり	日本応用数学会 評議委員
大島 まり	日本計算工学会 評議委員
大島 まり	社団法人可視化情報学会 第 22 期・23 期社員
大島 まり	社団法人日本機械学会 関東支部第 17 期 商議員
大島 まり	日本機械学会 フェロー
大島 まり	日本バイオレオロジー学会 理事
大島 まり	日本生体医工学会 代議員
大原 美保	日本地震工学シンポジウム 運営委員会委員
加藤 綾子	日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 選挙管理委員
加藤 綾子	日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 研究活動委員 (関東地区) (2011 年 1 月～)
上條 俊介	社団法人土木学会 技術推進機構 実践的 ITS 研究委員
上條 俊介	社団法人交通工学研究会 首都高速道路における交通安全対策検討会 委員
上條 俊介	電子通信情報学会 ITS 研究専門委員会 専門委員
上條 俊介	電子情報通信学会 パターン認識・メディア理解研究専門委員会 専門委員
上條 俊介	電子情報通信学会-和文論文誌 A 編集委員
上條 俊介	電子通信情報学会 ソサイエティ論文誌編集委員会 査読委員
越塚 登	就労履歴管理制度推進協議会 実証実験 WG 主査
越塚 登	公益法人サトー国際奨学財団 選考委員
越塚 登	独立行政法人情報処理推進機構 (IPA)「オープンソフトウェア利用推進事業」審議委員
越塚 登	一般社団法人 住宅履歴情報蓄積・活用推進協議会「住宅履歴情報蓄積・活用推進会議」委員
越塚 登	T-Engine Forum 学術・教育 WG 主査
越塚 登	T-Engine Forum uID システム WG 主査
小林 真輔	情報処理学会 論文誌編集委員 (TSLDM)
坂村 健	財団法人九州先端科学技術研究所「『科学ヘジャンプ』視覚障害者全国ネットワークの構築」事業 外部評価委員
坂村 健	財団法人情報科学国際交流財団 評議員
坂村 健	財団法人本田財団 評議員
坂村 健	財団法人セコム科学技術振興財団 評議員
坂村 健	財団法人国土技術研究センター 研究顧問
坂村 健	財団法人河川情報センター 非常勤理事
坂村 健	財団法人地域総合整備財団 平成 22 年度「e-地域資源活用事業」推進委員会委員

坂村 健 社団法人日本プロジェクト産業協議会(JAPIC) アドバイザー

坂村 健 社団法人日本プロジェクト産業協議会(JAPIC) 日本創生委員会委員

坂村 健 財団法人ひょうご情報教育機構-ダブルディグリー・プログラムアドバイザー

坂村 健 NPO 法人インドセンター「日印グローバルパートナーシップサミット 2011」実行委員

佐倉 統 科学基礎論学会 評議委員

佐倉 統 日本生命倫理学会 編集委員会委員

佐倉 統 日本子ども学会 理事

佐藤 洋一 電子情報通信学会論文誌 ED「マシンビジョンとその応用」特集号 編集委員

佐藤 洋一 電子情報通信学会 和文論文誌 D「画像の認識・理解」特集号 編集委員

佐藤 洋一 日本バーチャルリアリティ学会論文委員 編集委員

佐藤 洋一 日本バーチャルリアリティ学会複合現実感研究委員会 専門委員

佐藤 洋一 電子情報通信学会パターン認識とメディア理解研究会 副委員長

須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」推進委員

須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」幹事

須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」アセスメントワーキンググループ主査

須藤 修 独立行政法人科学技術振興機構「科学技術連携施策群研究者ワーキンググループ」委員

須藤 修 独立行政法人科学技術振興機構「科学技術振興調整費ワーキンググループ」委員

須藤 修 独立行政法人科学技術振興機構「社会技術研究開発センター評価分科会」専門委員

須藤 修 独立行政法人産業総合研究所社会知能技術研究ラボ 評価委員

須藤 修 独立行政法人情報処理推進機構「文字情報基盤構築に関する研究開発事業・導入シナリオ小委員会」委員長

須藤 修 財団法人国際 IT 財団 評議員

須藤 修 NPO「高度 IT 人材育成アカデミー」副理事長

須藤 修 NPO「セキュア社会を推進する会」代表理事

須藤 修 NPO「市民が主役の地域情報化推進協議会」理事長

須藤 修 東京電力株式会社 顧問

須藤 修 セコム科学技術振興財団 評議員

須藤 修 全国地域情報化推進協議会「技術専門委員会」アドバイザー

須藤 修 Open ID ファウンデーション・ジャパン アドバイザー

須藤 修 タイムビジネス協議会 顧問

須藤 修 社団法人日本情報システム・ユーザー協会 (JUAS)「イノベーション経営カレッジ委員会」委員

須藤 修	IDG Magazine “CIO Award” Best of CIO 選考委員会 選考委員
須藤 修	日本 IC カード利用促進協議会 代表理事
須藤 修	Open Government Cloud Consortium 代表幹事
須藤 修	財団法人自治体衛星通信機構 評議員
須藤 修	情報文化学会 会長
須藤 修	情報文化学会 第 18 回全国大会実行委員長
須藤 修	第 16 回情報文化学会賞選考委員会 選考委員
須藤 修	日本社会情報学会 (JASI) 副会長
須藤 修	日本社会情報学会 (JASI) 学術委員会 委員
須藤 修	2010 年日本社会情報学会 (JASI&JSIS) 合同研究発表大会 企画委員会委員
須藤 修	情報社会学会 理事
須藤 修	第 17 回社会情報システム学シンポジウム プログラム委員
須藤 修	情報処理学会 編集委員
園田 茂人	アジア政経学会 総務担当理事
園田 茂人	中国社会文化学会 理事
園田 茂人	日本現代中国学会 理事
園田 茂人	日本学術会議社会学部会 連携会員
鷹野 澄	日本地震学会 代議員
鷹野 澄	日本災害情報学会 広報委員会副委員長
鷹野 澄	日本災害情報学会 デジタル放送研究会 委員
田中 明彦	日本国際政治学会 理事長
田中 秀幸	独立行政法人情報処理推進機構 情報セキュリティ産業の構造と活性化検討委員会委員
田中 秀幸	日本社会情報学会(JASI) 理事
田中 秀幸	日本社会情報学会(JASI)学術委員会 委員長
田中 秀幸	社会・経済システム学会 理事
田中 秀幸	日本経済政策学会 評議員
田中 秀幸	日本社会情報学会(JASI)編集専門委員会 編集専門委員会委員
田中 秀幸	社会・経済システム学会全国大会企画委員会 委員
辻本 篤	情報文化学会 大会実行委員会・委員
研谷 紀夫	アート・ドキュメンテーション学会 役員
研谷 紀夫	情報知識学会 理事
研谷 紀夫	日本アーカイブズ学会 役員
研谷 紀夫	アート・ドキュメンテーション学会 幹事
研谷 紀夫	財団法人日本規格協会 ISO/TC46/SC11 国内委員会 委員
橋元 良明	日本マス・コミュニケーション 理事

橋元 良明	日本社会情報学会 理事
橋元 良明	日本子ども学会 理事
橋元 良明	社会言語科学会 監事
中野 公彦	日本機械学会・高安全度交通システム専門委員会 幹事
中野 公彦	日本学術会議・総合工学委員会・機械工学委員会合工学システムに関する安全・安心・リスク検討分科会・事故調査のありかた検討小委員会 幹事
中村 仁	コンテンツ文化史学会 大会実行委員会委員
中村 仁	デジタルゲーム学会 大会実行委員会委員
西垣 通	朝日文化財団 評議員
西垣 通	本田財団 評議員
西垣 通	パリ日本文化会館 運営審議会委員
西垣 通	情報メディア学会 会長
西垣 通	情報文化学会 理事
丹羽 美之	財団法人放送文化基金 放送文化基金賞専門委員
丹羽 美之	特定非営利活動法人放送批評懇談会 理事
丹羽 美之	社団法人日本民間放送連盟 日本民間放送連盟賞番組部門中央審査委員
丹羽 美之	財団法人民間放送教育協会 評議委員
丹羽 美之	財団法人日本科学技術振興財団 科学技術映像祭企画委員会委員
丹羽 美之	財団法人日本科学技術振興財団 科学技術映像祭審査委員
藤原 正仁	コンテンツ文化史学会 監査
水越 伸	日本民間放送連盟「メディアリテラシー実践プロジェクト」有識者委員（副主査）
目黒 公郎	独立行政法人防災科学技術研究所 地震瞬時速報利用検討会 委員
目黒 公郎	財団法人震災予防協会 評議委員
目黒 公郎	独立行政法人科学技術振興機構 科学技術振興調整費評価メールレビューワー
目黒 公郎	公益財団法人阪神・淡路大震災記念協会 人と防災未来センター 「減災」企画編集委員会委員
目黒 公郎	株式会社先端力学シミュレーション研究所 「地震ハザードリスク情報の総合的な利活用の促進に関する研究会」委員
目黒 公郎	独立行政法人日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員
目黒 公郎	社団法人日本港湾協会 「第8回港湾BCPによる協働体制構築に関する委員会」委員
目黒 公郎	日本学術会議 連携会員

#### 4.4 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の研究・教育活動の成果を公表するとともに、その環を広げるために、下記に示すようなさまざまな公開の催しを実施した。入試説明会はたんなる入試事項の説明にとどまらないかたちで、過去の学環・学府シンポジウムの成果を引き継ぎつつ、学環・学府の全体像を示す機会とな



っている。概要説明から、院生紹介、主要プロジェクト紹介、鼎談などとともに、本年度も研究室や研究プロジェクトを紹介する熱帯雨林的な知識交換、共有の場「学環・学府めぐり」なども開催された。

2010年度は学環・学府の10周年にあたり、設立記念式典とシンポジウムを開催した。学環の特徴でもあるさまざまなプロジェクトは、公開研究会、シンポジウムなどを通して学際情報学・社会情報学の研究情報を発信している。下記がその一覧（現在稼働しているもの）である。いずれも学際的なチャレンジをしている営みだといえる（学環ホームページ上に公開されたプロジェクトのみで、全てを網羅していないことを申し添えておく）。

【シンポジウム】	
2010. 5. 13 福武ホール ラーニングシアター	<p>清華大学・東京大学シンポジウム</p> <p>石田 英敬 教授 東京大学情報学環長</p> <p>崔 保国 教授 清華大学新聞与伝播学院副院長 訪日団代表</p> <p>吉見 俊哉 東京大学教授</p> <p>王 慶柱 清華大学副研究員</p> <p>キ ハンチ 清華大学大学院博士課程</p> <p>柴野 京子 東京大学大学院博士課程</p> <p>大久保 遼 東京大学大学院博士課程</p> <p>崔 保国 清華大学教授</p> <p>園田 茂人 東京大学教授</p> <p>何 丹梅 清華一日経メディア研究所副研究員</p> <p>田中 秀幸 東京大学教授</p> <p>ゾウ ジン 清華大学大学院博士前期課程</p> <p>三浦 伸也 東京大学大学院博士課程</p> <p>高木 聡一郎 東京大学大学院修士課程</p> <p>周 倩 東京大学大学院博士課程</p> <p>王 健華 教授 清華大学訪日団副代表</p> <p>林 香里 教授 東京大学情報学環国際活動委員長</p>
2010. 5. 30 福武ホール ラーニングシアター	<p>先端表現情報学シンポジウム</p> <p>—先端技術×伝える表現×情報科学—</p> <p>相澤清晴、有川正俊、池内克史、池上高志、大島まり、河口洋一郎、國吉康夫、佐藤洋一、須田義大、田中伸治、辻井潤一、苗村健、中川裕志、中野公彦、馬場章、廣瀬通孝、目黒公郎、山口泰</p>

2010. 7. 17 福武ホール ラーニングシアター	メディア・コンテンツ総合研究機構連続シンポジウム vol. 1 石田英敬（情報学環長・学際情報学府長） 東京大学大学院情報学環・学際情報学府主催（共催：日立システムアンドサービス／放送人の会）
2010. 7. 24 福武ホール ラーニングシアター	メディア・コンテンツ総合研究機構連続シンポジウム vol. 2 角川歴彦×立花隆×石田英敬 —電子書籍の“衝撃”「コレがアレを殺す？」 角川歴彦（角川グループホールディングス取締役会長、情報学環特任教授） 立花隆（ジャーナリスト、作家、情報学環特任教授） 石田英敬（情報学環長・学際情報学府長）
2010. 10. 2 福武ホール ラーニングシアター	第7回「映像の際」建築系連続トークイベント「建築の際」 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 主催
2010. 11. 03 先端科学技術 研究センター A棟2階	第7回 アジアがんフォーラム アジアがんフォーラム 主催 現代韓国研究センター 共催 大韓民国大使館／東京大学先端科学技術研究センター 後援
2010. 11. 12 福武ホール ラーニングシアター	大学院情報学環・学際情報学府創立10周年記念シンポジウム 「智慧の環・学びの府——情報知の熱帯雨林の10年——」 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 主催
2011. 03. 15 福武ホール ラーニングシアター	記録映画アーカイブ・プロジェクト シンポジウム 東京大学大学院情報学環／日本学術振興会科学研究費補助金 吉見俊哉（東京大学情報学環） 丹羽美之（東京大学情報学環）

<b>【セミナー・講演会】</b>	
2010. 5. 8 工学部2号館 9階93b	MELL Platz 第19回公開研究会 メディア・エキスポリモ 主催
2010. 5. 26 工学部2号館 9階92B教室	Nick Feamster 氏講演 Dr. Nick Feamster : Assistant Professor Georgia Tech University

2010. 6. 8 工学部 2 号館 9 階 93B 教室	メディア学フロンティア・芽の会 第 4 回公開研究会 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環教授） 東京大学大学院情報学環・学際情報学府「メディア学のフロンティア・芽の会」主催
2010. 6. 25 大学院情報学環 本館建物 2F 教室	セミナー「地域医療における協働の可能性－医療と介護の連携へ向けて－」 三浦 純一 先生 福島県須賀川市公立岩瀬病院 副病院長 東京大学大学院情報学環 石崎研究室 主催
2010. 7. 24 総合教育研究棟 D 棟 3 階	MELL Platz 第 20 回公開研究会 丹羽美之（東京大学情報学環） メル・プラッツ事務局 主催
2010. 7. 28 工学部 2 号館 9F 92B	Deep Medhi 教授（UMKC）講演会 Prof Deep Medhi : The University of Missouri-Kansas City (UMKC)
2010. 9. 11 工学部 2 号館 9F 93B	MELL Platz 第 21 回公開研究会 メル・プラッツ事務局 主催
2010. 9. 24 天神クリスタルビル	メディアリテラシーフォーラム@福岡 東京大学大学院情報学環 水越伸研究室「マス&コミュニケーションプロジェクト」／民放連 放送基準審議会 主催
2010. 10. 11 福武ホール ラーニングシアター	記録映画アーカイブ・プロジェクト 第 4 回ワークショップ「高度経済成長と地域イメージ-岩波映画『日本発見』を見る-」 丹羽美之（東京大学情報学環） 東京大学大学院情報学環 主催
2010. 11. 17 工学部 2 号館 9F 92B	「メディア研究のつどい」ドイツのメディア倫理をめぐる最近の議論 状況-G. コッパー教授講演 林香里（東京大学情報学環） 日本マス・コミュニケーション学会倫理・法制部会と東京大学大学院情報学環林研究室「メディア研究のつどい」の共催

2010. 11. 22-23 東京大学 駒場キャンパス	駒場祭連続講義「日本の未来、メディアの未来」 石田英敬（情報学環長）×金平茂紀（TBS 執行役員） 前田邦宏（関心空間ファウンダー/株式会社クォンタムアイディ代表取締役） 越塚登（東京大学大学院情報学環教授）×鈴木高宏（長崎県庁産業労働部政策監） 丹羽美之（東京大学情報学環准教授） 小林弘人（株式会社インフォバーン代表取締役 CEO） 井上昇（井上昇制作室/jazz up! 代表） 山内祐平（東京大学情報学環准教授） 天野祐吉（元・「広告批評」編集長/コラムニスト） 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環教授） 李鳳宇（映画プロデューサー）
2010. 11. 26 関西大学千里山 キャンパス	メディアと市民の新しい結びつき方をさぐる：民放連メディアリテラシー・フォーラム@大阪 水越伸（東京大学情報学環）
2010. 11. 27 国立民族学博物館	MELL Platz 第 23 回公開研究会 メル・プラッツ事務局 主催
2010. 11. 29 東洋文化研究所 3 階大会議室	第三回アジア社会学コンソーシアムによるスピーチ 園田茂人（東京大学情報学環）
2010. 12. 07 東洋文化研究所 3 階大会議室	中国の有名ブロガー・安替氏によるスピーチ 園田茂人（東京大学情報学環）
2010. 12. 16 工学部 2 号館 9F 93B	Patricia Churchland 講演会 東京大学 脳神経倫理研究連携ユニット 主催
2011. 1. 22 愛知淑徳大学	MELL Platz 第 24 回公開研究会 メル・プラッツ事務局 主催
2011. 2. 21 東洋文化研究所 3 階大会議室	東洋文化研究所／中央研究院社会学研究所の若手社会学者共同ワークショップ 東洋文化研究所／中央研究院社会学研究所 主催

2011. 3. 14 東洋文化研究所 3階大会議室	ワークショップ「台頭する中産階級とその政治変動へのインパクト： 中露比較」 責任者 園田茂人教授／後援 社団法人アジア調査会
----------------------------------	--

【プロジェクト関連】	
「制作展」	
2010. 6. 10-15 工学部 2号館	東京大学制作展エクストラ 2010 「[ ]ing」 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 主催
2010. 12. 02-07 工学部 2号館 福武ホール	東京大学第 12 回制作展“BRIDGE” 【iii Exhibition 12 “BRIDGE”】 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 主催
「BEAT」ベネッセ先端教育技術学講座〔公開研究会〕	
2010. 5. 29 福武ホール ラーニングシアター	第 1 回： 電子書籍時代の教材：誰が作りどんな形になるのか
2010. 9. 4 福武ホール ラーニングシアター	第 2 回： 外国語学習のソーシャルイノベーション
2010. 12. 4 福武ホール ラーニングシアター	第 3 回： 書く力を育てる大学教育

## 4.5 出版活動

2004 年の社会情報研究所との統合後は、社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな出版体制を整備しつつある。その中心となるのは、以下の 5 つの刊行物である。

- (1)研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』（年 2 回刊）
- (2)調査実験紀要『同情報学研究・調査研究編』（年 1 回刊）
- (3)英文紀要（オンライン論文サイト"iii Online Research Journal"への移行を検討中）
- (4)年報『東京大学大学院情報学環年報』（年 1 回刊）
- (5)ニューズレター『学環学府』

これらはいずれも、情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

表 4-5-1 情報学研究/同調査研究編の発行状況

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	
72号	2007年5月
73号	2008年1月
74号	2008年3月
75号	2008年8月
76号	2009年3月
77号	2009年8月
78号	2010年3月
79号	2010年11月
80号	2011年3月
情報学研究・調査研究編	
24号	2007年3月
25号	2009年3月
26号	2010年3月
27号	2011年3月

#### 4.5.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

『情報学環紀要 情報学研究』は、2004年の情報学環と社会情報研究所との統合により、旧社会情報研究所の『社会情報研究所紀要』を改称したものである。

同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、新聞学、世論研究、マス・コミュニケーション論、ジャーナリズム、メディア史、マス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載し、半世紀以上にわたって国内外の専門研究者や学生に多くの影響を及ぼしてきた。

社会情報研究所と情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、情報学環での教育研究基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。このような視点から、『情報学環紀要 情報学研究』を、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公刊されていく場として位置づけた。

そのために、本紀要は、巻頭エッセイの「思考の環」、巻末の「フィールド・レビュー」をはじめ、情報学環教員の研究論文や学際情報学府博士課程院生の査読論文（博士課程在籍者の投稿論文は、外部査読者を含む複数の審査員による審査の上、掲載を許可している）などさまざまなセクションから複層的に構成されている。大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要は内外から高い評価を得ている。

## 4.5.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』

『情報学環紀要情報学研究・調査研究編』は、1992年から刊行されてきた『社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。

『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所におけるさまざまな社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。これらの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環と社会情報研究所との統合後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害行動の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果、文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育分野での実験、デジタル・アーカイブに関する諸実践、デザイン表現論などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表される媒体となっている。

2011年3月に刊行されたNo.27には、「インターネット利用の不安をめぐる10カ国比較調査」「2009年8月9日豪雨災害（兵庫県佐用水害）における住民の対応に関する調査研究」「ネット依存の若者たち、21人インタビュー調査」の3本の論文が掲載された。

## 4.5.3 『英文紀要』

『情報学環英文紀要』は、前記の『社会情報研究所紀要』が発展していく中で研究の国際化、グローバル化に対応して独立したものであった。『英文紀要』は、基本的には研究者の個人研究論文とともに、社会情報研究所で開催された国際的なシンポジウムなどの記録を収録していた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環・社会情報研究所の統合後は、情報、メディア、コミュニケーションをめぐるより広い学問分野の知見が掲載できるように体裁をあらため、和文紀要の一部に英語論文を掲載するとともに、英語のウェブサイトにも英語論文および和文論文の英訳を掲載している。

## 4.6 定期刊行物・ホームページ

### 4.6.1 定期刊行物

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に広く知ってもらうため、ニューズレター『学環学府』を年4回発行している。『学環学府』は、情報学環教職員や学生だけでなく、学内他部局や本部役員をはじめ、学環にゆかりのある学外教員、そのほか広報用として入試説明会、ホームカミングデー、学環来訪者などに随時配布している。内容は、教員へのインタビュー、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、各教員の書籍刊行情報など。2002年冬号から始まり、2010年度末までに通算33回発行した。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現しており、各方面から好評を得ている。ちなみに2010年度の表紙は、情報学環・福武ホールの「考える壁」をイメージしたシルバー一色のシンプルかつ大胆なデザインを採用。10月に発行した31号では学環創立10周年記念号を組み、表紙には学環・学府10周年キャラクター「キメラ」が登場、中面で

は創刊以来初のオールカラー印刷が実現した。

## 4.6.2 ホームページ

情報学環・学際情報学府は、これまでも教育・研究活動を広く国内外に周知すべく、ホームページを開設し情報発信を行ってきたが、平成 22 年、情報学環設立 10 周年を迎えるにあたって、このホームページの全面リニューアルを行った (<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>)。

このリニューアルには、学環・学府の教員全員、全授業の紹介ページを新たに作成するなど、コンテンツを大幅に拡充するとともに、ページ構成やデザインも抜本的に改善するものであった。これによって、「学環」「学府」という有機的で複雑な組織の活動の全貌や相互の関係が、学環・学府の活動に関心をもつ一般の人や将来の学府受験生など、学環・学府の外部の人にも明快に把握できるようになった。また、「学環・学府公式パンフレット」と統一的なデザインを採用することで、学環・学府のビジュアル・アイデンティティの確立を担っているものでもある。

とくに、新ホームページのトップページは、最近のイベントの様態を記録した動画を配信すると同時に、教員の写真がフロー表示されるなど、ビジュアル的に学環・学府をアピールできるようデザインされている。

サイト全体は、教員情報を軸にして構築されており、教員のプロフィールページから、担当する授業、参加しているプロジェクト、登壇したイベント、講演の動画など、関係するすべてのページに相互リンクされている。こうしたカテゴリ横断的な情報の関連付けによって、閲覧者がみずからの関心に応じて、回遊的にページを読み進めていけることを大きな特徴としている。さらに、マルチエントランス型のホームページとして、検索エンジンを通して訪れた閲覧者には、「すべてのページがトップページ」として機能するよう設計されている。

また、グローバルナビゲーションは、研究組織としての学環と、教育組織としての学府を明確に区別しながら、修士課程・博士課程や教育部研究生制度の入試に関する「受験情報」や、『紀要』や『ニューズレター』、『年報』など学環が発行する「紀要・出版物」といった基本情報をはじめとした各情報に、容易にアクセスできるようになっている。「イベント」ページでは、イベントの概要やプログラムといった基本的な情報はもちろんのこと、関連するイベントや教員も表示されるようになっており、サイト内での回遊を促すようデザインされている。また、「コース」ページでは、各コースの基本的な理念を掲げると同時に、受講できる授業や担当教員、関連する施設・研究センターやイベントも表示されるようになっている。

このように、新ホームページは、それぞれの教員がそれぞれの分野の代表者として、異分野との結びつきの「環（リング）」となり、さらに、学問と社会の連携の「環（リング）」たろうとする情報学環・学際情報学府の理念を具現化すべくデザインされている。

## 4.7 国際交流

情報学環は、平成 22 年度は、10 月に韓国 KISTI と国際交流覚書を締結した。

また、これまで情報学環で実施されてきたコンテンツ関連プロジェクトを継続し統合的に発展させる



ために「メディア・コンテンツ総合研究機構」を2009年度に発足させ、2010年度にはフランス・ポンピドゥーセンターIRIとの間にコンソーシアム設立協定に調印。同研究所との間でインターン研修生の交換を開始した。

さらに、10月21日、22日には、毎年恒例のソウル大・東大交流シンポジウムがソウル大言論情報研究所において開催された。今年度のテーマは“New Directions in Journalism and Media Studies”で、情報学環からは、石田情報学環長、吉見俊哉教授、園田茂人教授、林香里教授が参加し、それぞれ研究発表を行った。また、今年度は「アジア・グローバリゼーション・スタディズ」若手研究者育成プログラムの一環としてソウル大シンポへの参加希望学生を公募し、6名を選抜して参加させた。研究発表はレベルの高いものとなり、2日間、旧交を温め合い、たいへん充実した研究発表会となった。

なお、本年度からは現代韓国研究センターがスタートし、韓国をはじめ内外の研究者を招聘して東アジア地域の政治・文化に関するセミナーを定期的で開催している。今後は交換教授制度なども視野に入れて、東アジア地域の研究者、および東アジア地域研究の世界の研究者の活発な交流拠点となることを目標にしている。

また、アジア情報学コース（ITASIA）では、アジアの重要な拠点であるインドから研究者を招聘し、「ITASIA179」を開講している。2010年は Rakesh BATBYAL 特任准教授 が担当（2010年4月～9月滞在）した。

以上のような国際交流協定に基づく研究交流活動や教育行事に加えて、学環の教員それぞれは、積極的に海外で研究調査活動を行ったり、学会やシンポジウムを企画したり参加したりしている。また、海外からの研究者を招聘して共同研究に取り組み、多彩なシンポジウムを主催している。今後とも、組織としても、また教員個人としても、多様な国々の多様な研究機関やその他の社会における交流を深めることが課題である。



## II. 資料

---

### 1 沿革

(旧社会情報研究所)

1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室

1949年 東京大学新聞研究所

1992年 東京大学社会情報研究所に改組

東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

(大学院情報学環)

2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合

文化・人間情報学コース、社会情報学コース、学際理数情報学コース設置

社会情報研究資料センター設置

2006年 総合分析情報学コース設置

2008年 アジア情報社会コース設置

総合防災情報研究センター設置

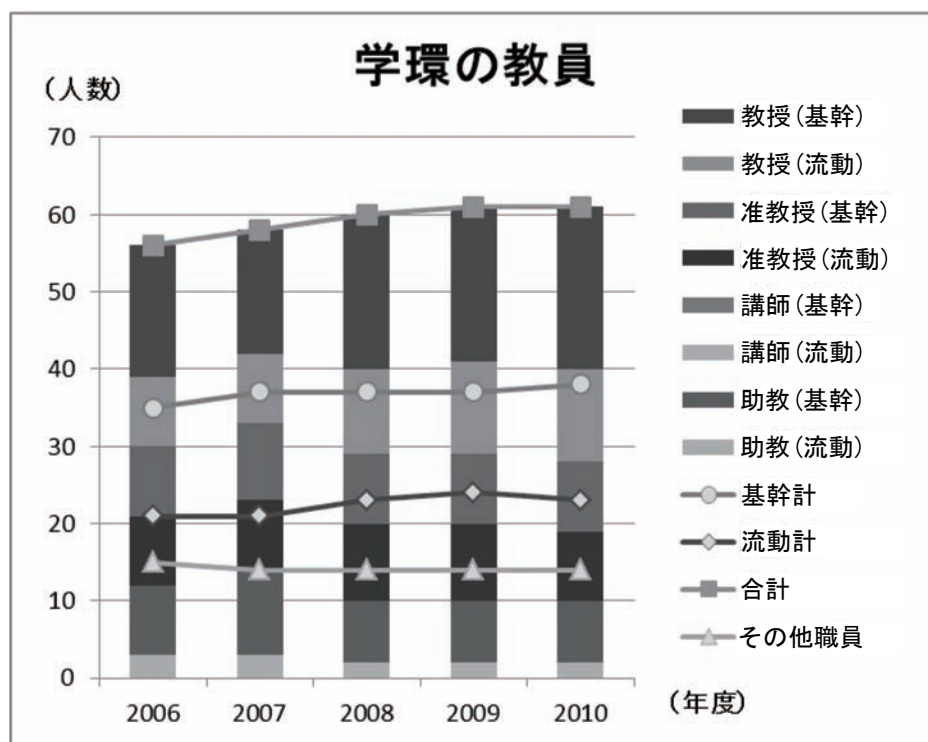
2009年 学際理数情報学コースが先端表現情報学コースへ変更

ユビキタス情報社会基盤研究センター設置

## 2 学環の教員（定員）

・情報学環(平成16年4月 社会情報研究所と合併)

年度	教授		准教授 (助教授)		講師		助教 (助手)		計			その他 の職員
	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動		
2006	17	9	9	9	0	0	9	3	35	21	56	15
2007	16	9	10	9	0	0	11	3	37	21	58	14
2008	20	11	9	10	0	0	8	2	37	23	60	14
2009	20	12	9	10	0	0	8	2	37	24	61	14
2010	21	12	9	9	0	0	8	2	38	23	61	14



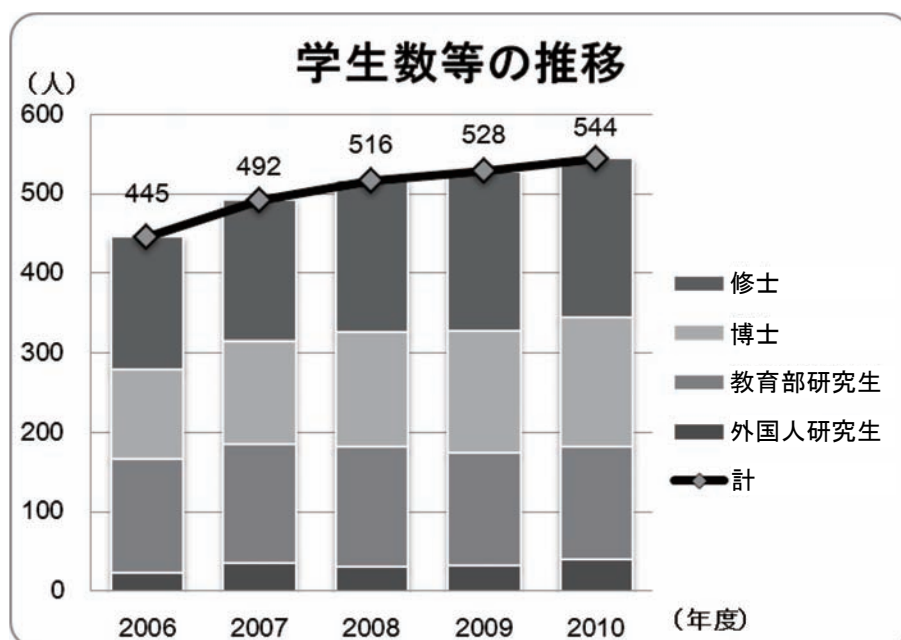
### 客員教員の状況

年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成 18	客員教授	佐藤 哲	文化・人間情報学特論Ⅷ	長野大学産業社会学部
	客員助教授	魏 晶玄	文化・人間情報学特論Ⅸ	ソウル(社)コンテンツ経営研究所
平成 19	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	奈良 高明		電気通信大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	大場 光太郎		産業技術総合研究所
	客員准教授	下畑 光夫	総合分析情報学特論Ⅸ	沖電気
	客員准教授	荒牧 浩二		(株)日立製作所中央研究所

平成 20	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論IV	凸版印刷総合研究所
平成 21	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論IV	凸版印刷総合研究所
平成 22	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法 I	東海大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論IV	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学

### 3 学府の学生数

	2006	2007	2008	2009	2010
修士	166	177	191	202	201
博士	113	130	144	152	161
教育部研究生	144	150	151	142	142
外国人研究生	22	35	30	32	40
計	445	492	516	528	544



## 4 教育部

教育部入学試験

平成 18(2006)年度から平成 22(2010)年度入学志願者数・受験者数・合格者数

年度	受入 予定 人員	日本人/ 外国人	志願者			受験者			合格者		
			本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計
平成 18(2006) 年度	約 50	日本人	81	32	113	79	30	109	47	8	55
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	81	33	114	79	31	110	47	8	55
平成 19(2007) 年度	約 50	日本人	74	36	110	72	35	107	34	16	50
		外国人	1	1	2	1	1	2	1	1	2
		計	75	37	112	73	36	109	35	17	52
平成 20(2008) 年度	約 50	日本人	55	45	100	54	44	98	40	17	57
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	55	46	101	54	45	99	40	17	57
平成 21(2009) 年度	約 50	日本人	69	50	119	67	49	116	42	9	51
		外国人	0	2	2	0	2	2	0	0	0
		計	69	52	121	67	51	118	42	9	51
平成 22(2010) 年度	約 50	日本人	99	47	146	95	45	140	37	10	47
		外国人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		計	99	47	146	95	45	140	37	10	47

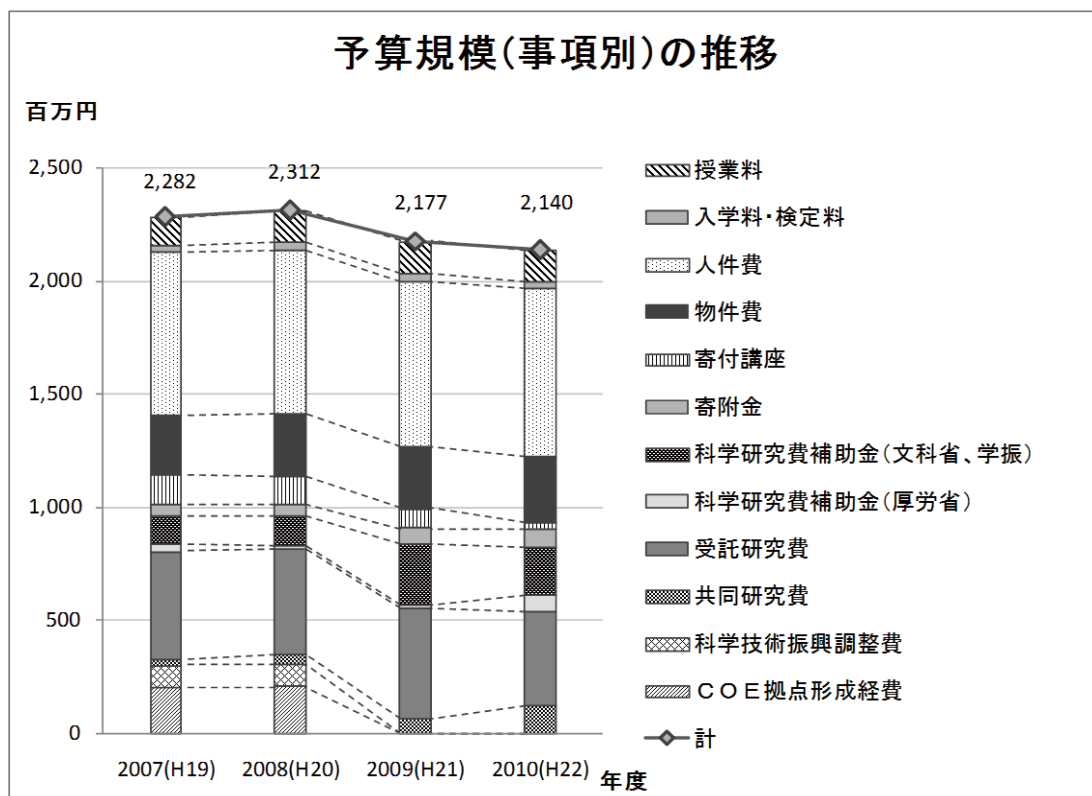
## 5 予算

・情報学環

	2007(H19)		2008(H20)		2009(H21)		2010(H22)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料	-	121,873,050	-	133,786,450	-	138,515,946	-	138,116,530
入学料・検定料	-	31,936,600	-	37,380,400	-	36,296,200	-	33,850,600
人件費	-	716,814,000	-	722,395,394	-	729,703,012	-	744,968,962
物件費*	-	266,379,000	-	282,180,320	-	277,805,902	-	290,523,101
寄付講座	4	129,000,000	4	118,600,000	3	84,000,000	1	27,000,000
寄附金	43	51,906,345	48	53,304,328	30	70,204,659	39	82,902,448
科学研究費補助金 (文科省、学振)**	30	122,820,000	29	132,484,000	40	271,080,000	69	211,625,326
科学研究費補助金 (厚生労働省)	4	33,800,000	5	17,700,000	5	17,200,000	6	72,400,000
受託研究費	17	477,480,000	20	461,522,898	27	486,887,690	34	417,707,413
共同研究費	13	26,671,000	23	44,918,683	41	64,951,858	40	122,371,987
科学技術振興調整費	1	97,999,605	1	99,499,548	-	-	-	-
COE拠点形成経費	1	204,600,000	1	208,890,000	-	-	-	-

\*追加配分及び前年度からの目的積立金分を含む

\*\* 特別研究員奨励費は除く



## 6 土地・建物面積

・建物

建物名	建築年度	面積（延面積・㎡）
情報学環本館	S27	472
	S29	26
	S33	360
	S58	4,171
	計	5,029
暫定アネックス	H13	1,013
工学部2号館	*H18	*500
目白台西1号館	*H18	*492
目白台西1号館	*H18	*545
第2本部棟	*H18	*548
福武ホール	H19	**3,241

\*使用年度・使用㎡数

\*\*福武ホール面積については全学共用スペース分を除く

## 7 入試定数と受入数

	修士		博士	
	入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員
平成 18 (2006)	85	90	36	38
平成 19 (2007)	85	90	36	38
平成 20 (2008)	100	105	44	46
平成 21 (2009)	100	105	44	46
平成 22 (2010)	100	100	44	44



## 8 年度別入試データ詳細

### 修士

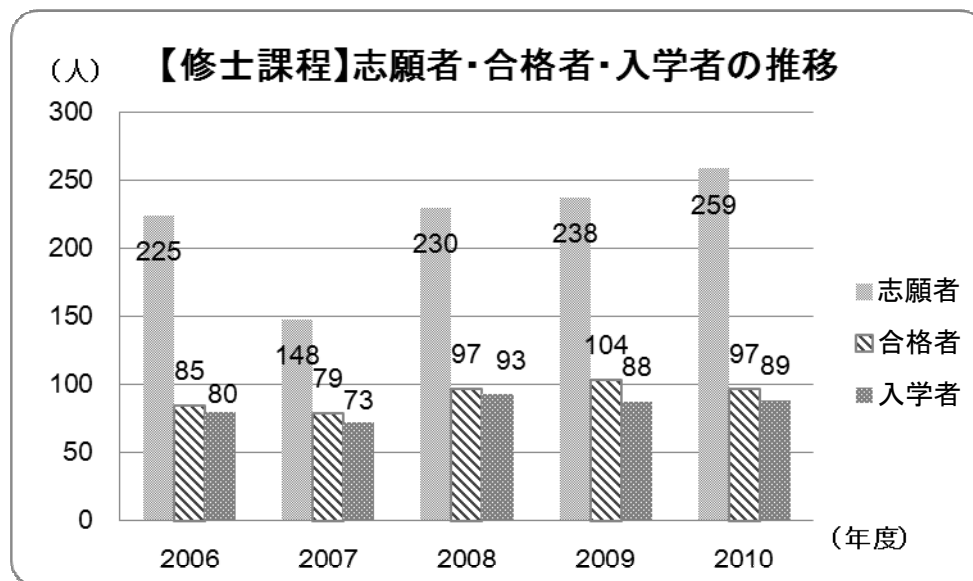
	2006	2007	2008	2009	2010
志願者	225	148	230	238	259
合格者	85	79	97	104	97
入学者	80	73	93	88	89

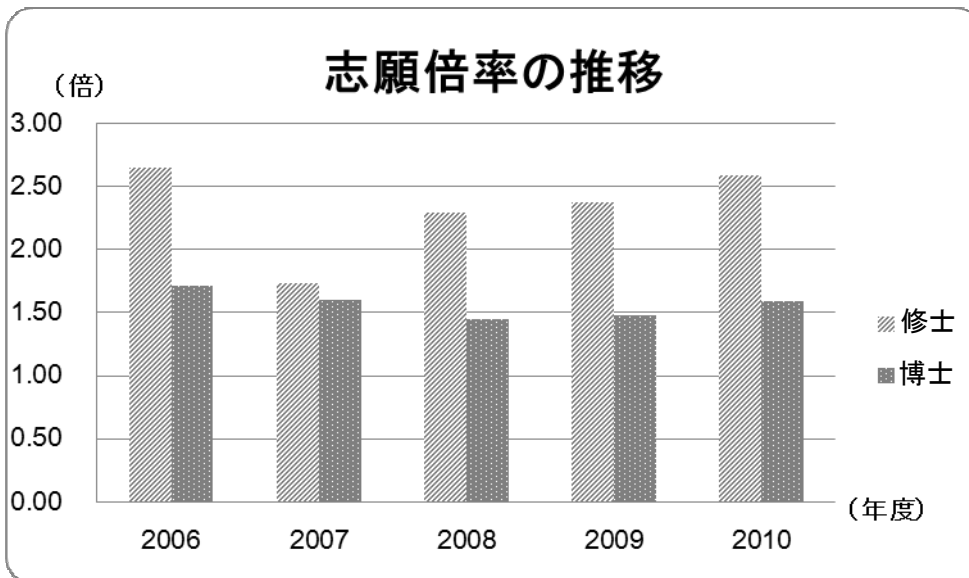
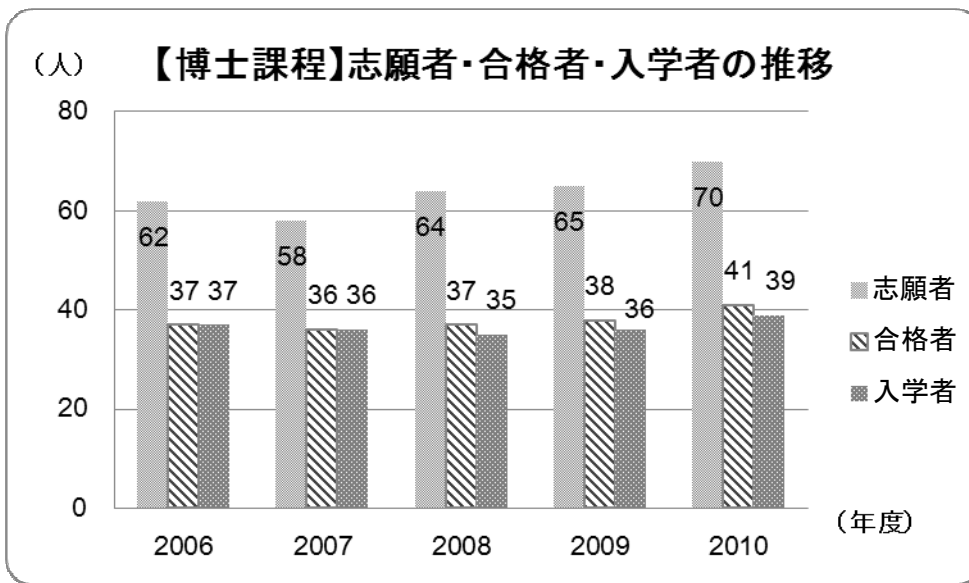
### 博士

	2006	2007	2008	2009	2010
志願者	62	58	64	65	70
合格者	37	36	37	38	41
入学者	37	36	35	36	39

### 志願倍率（志願者／入学定員）

	2006	2007	2008	2009	2010
修士	2.65	1.74	2.30	2.38	2.59
博士	1.72	1.61	1.45	1.48	1.59





### 2010年度修士入学試験詳細

志願者		合格者		入学者	
本学	51	本学	28	本学	24
他大学	208	他大学	69	他大学	65
259		97		89	
志願者		合格者		入学者	
日本人	211	日本人	74	日本人	68
外国人	48	外国人	23	外国人	21
259		97		89	

志願者

男	173
女	86
259	

合格者

男	61
女	36
97	

入学者

男	55
女	34
89	

志願者

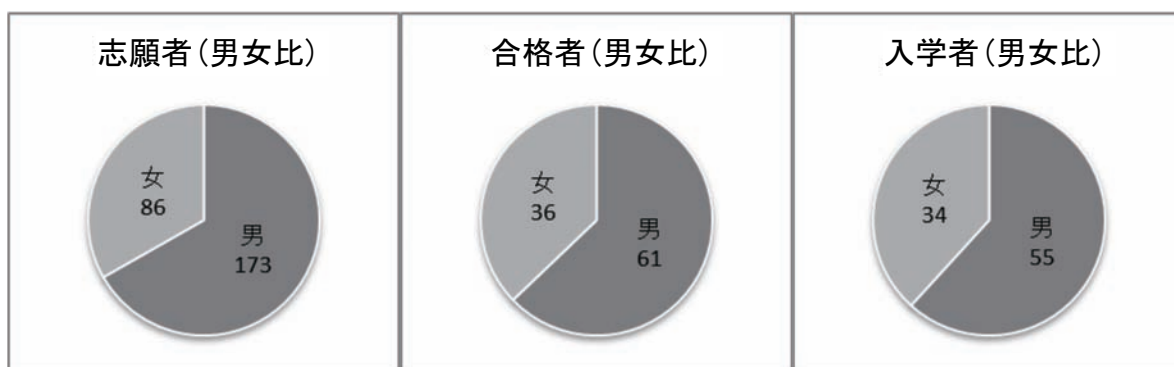
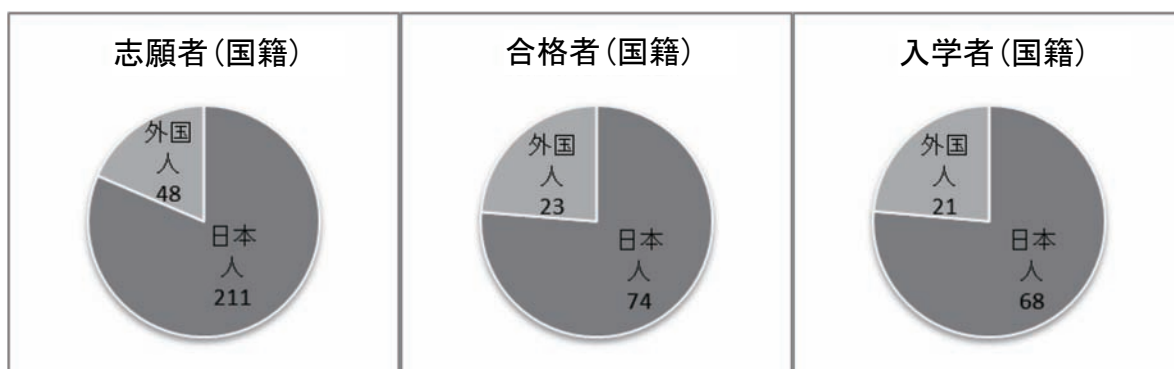
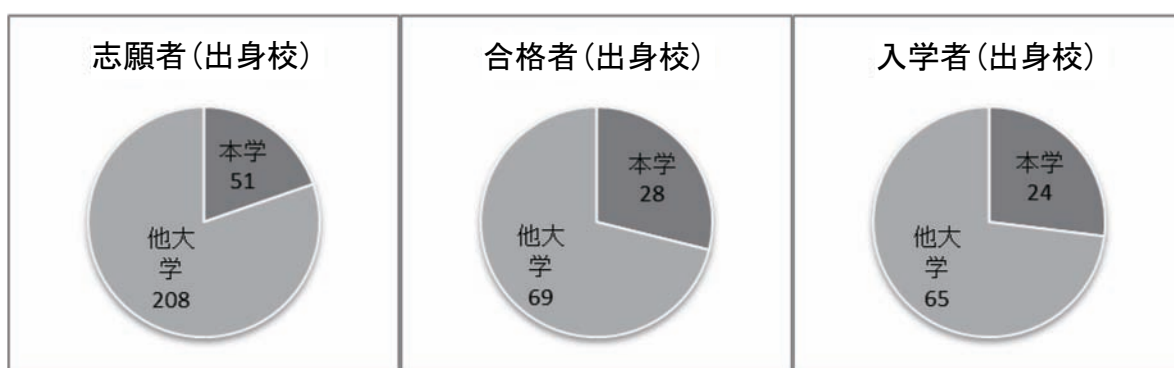
一般学生	227
社会人	32
259	

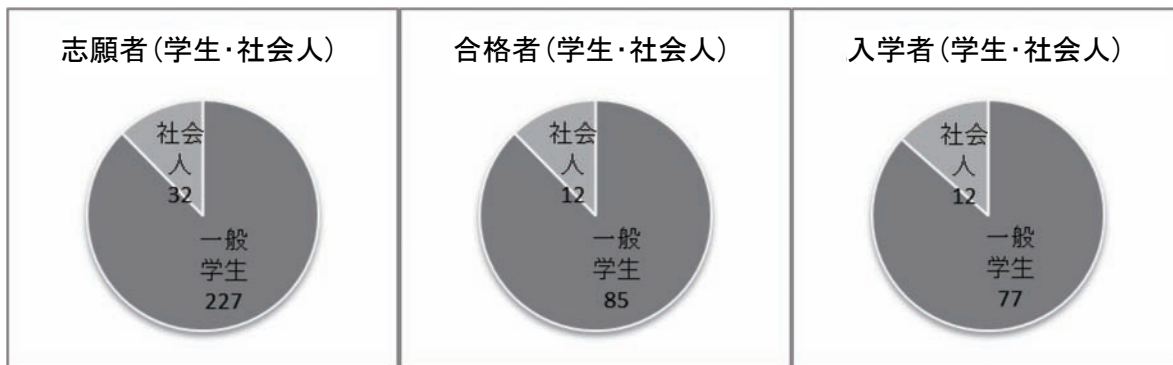
合格者

一般学生	85
社会人	12
97	

入学者

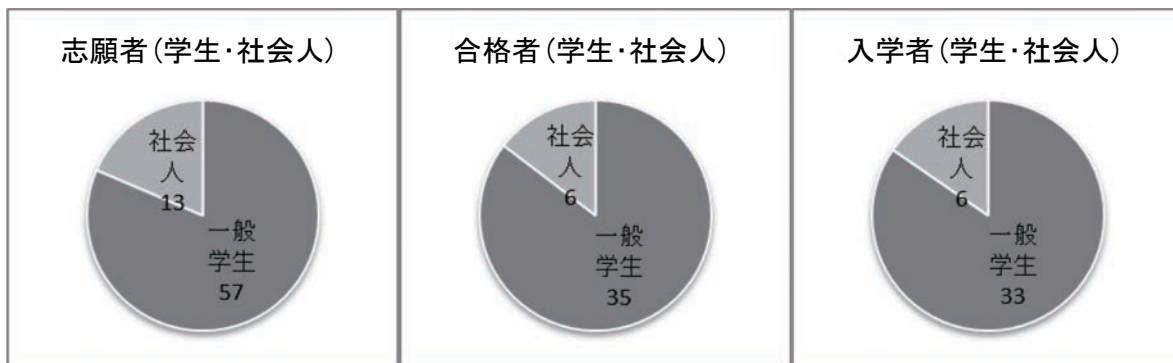
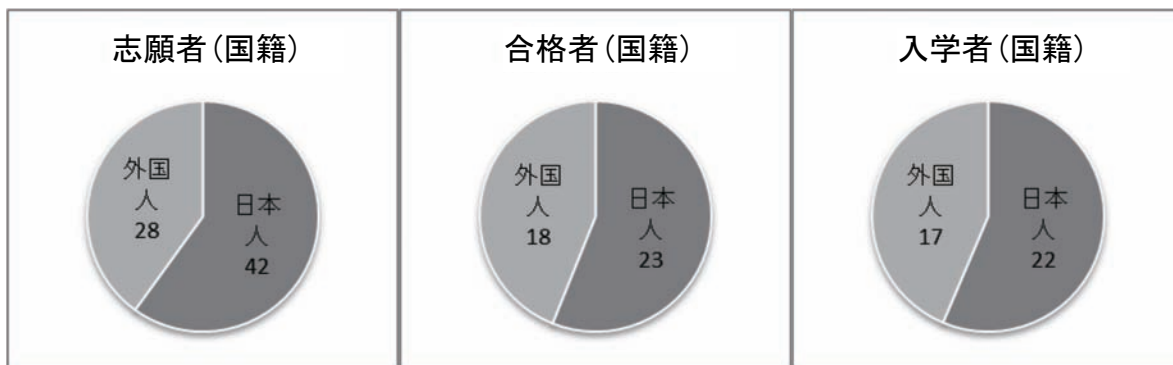
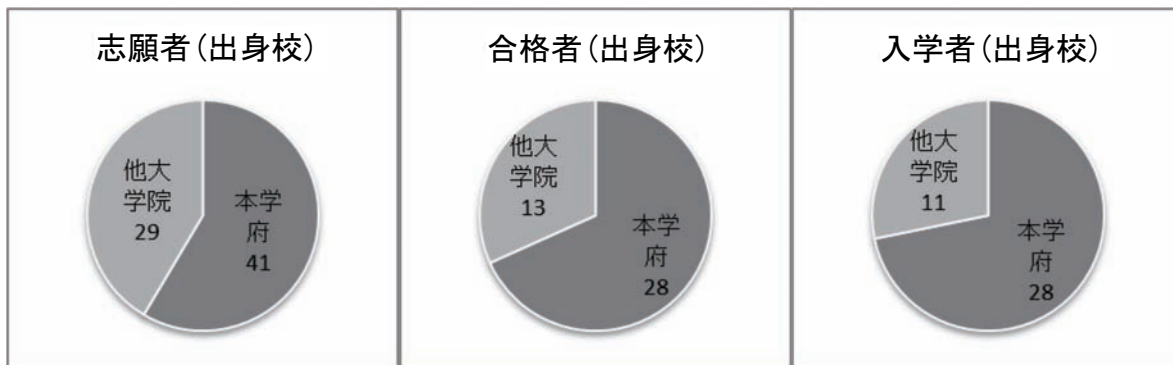
一般学生	77
社会人	12
89	





## 2010 年度博士入学試験詳細

志願者		合格者		入学者	
本学府	41	本学府	28	本学府	28
他大学院	29	他大学院	13	他大学院	11
70		41		39	
志願者		合格者		入学者	
日本人	42	日本人	23	日本人	22
外国人	28	外国人	18	外国人	17
70		41		39	
志願者		合格者		入学者	
男	39	男	22	男	21
女	31	女	19	女	18
70		41		39	
志願者		合格者		入学者	
一般学生	57	一般学生	35	一般学生	33
社会人	13	社会人	6	社会人	6
70		41		39	

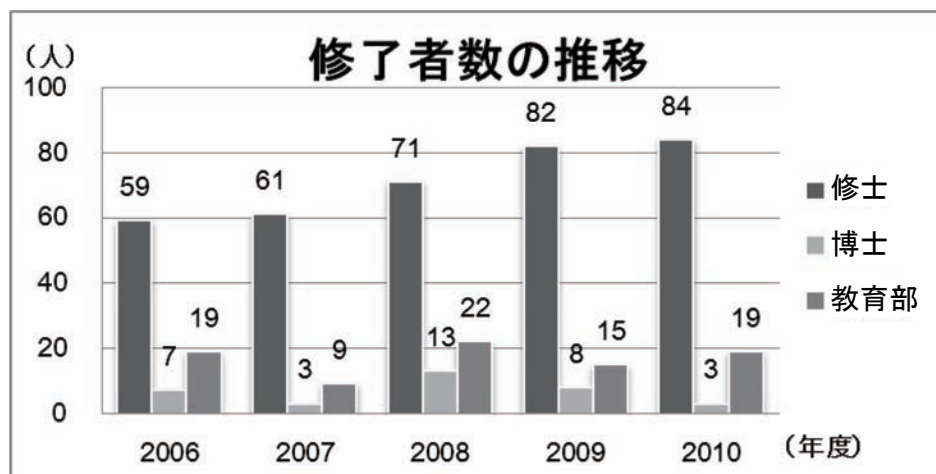


## 9 修了者数の推移

平成 18(2006)年度から平成 22(2010)年度修了者数(教育部研究生)

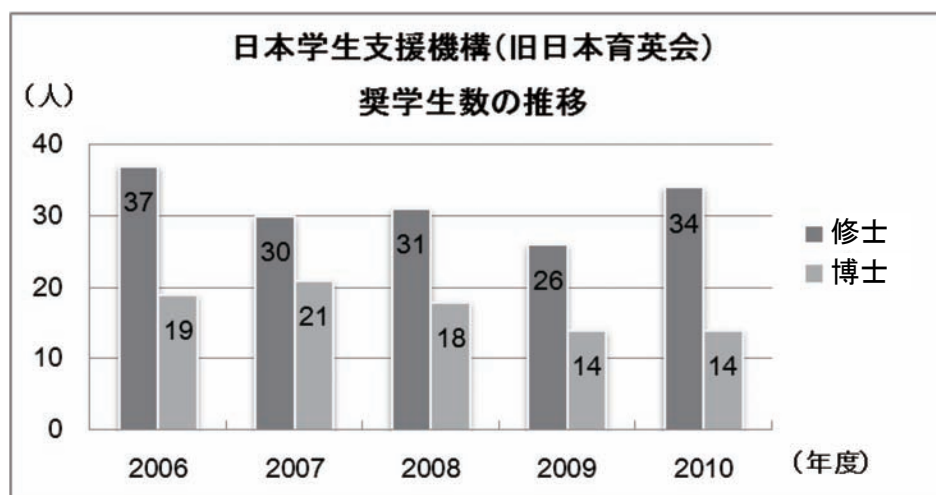
年度		修了者		
		本学	他大学	計
平成 18(2006)年度	日本人	8	10	18
	外国人	0	1	1
	計	8	11	19
平成 19(2007)年度	日本人	3	6	9
	外国人	0	0	0
	計	3	6	9
平成 20(2008)年度	日本人	17	5	22
	外国人	0	0	0
	計	17	5	22
平成 21(2009)年度	日本人	9	6	15
	外国人	0	0	0
	計	9	6	15
平成 22(2010)年度	日本人	11	8	19
	外国人	0	0	0
	計	11	8	19

	2006	2007	2008	2009	2010
修士	59	61	71	82	84
博士	7	3	13	8	3
教育部	19	9	22	15	19



## 10 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種		第二種		合計	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2006	21	18	16	1	37	19
2007	20	15	10	6	30	21
2008	21	15	10	3	31	18
2009	20	13	6	1	26	14
2010	24	11	10	3	34	14

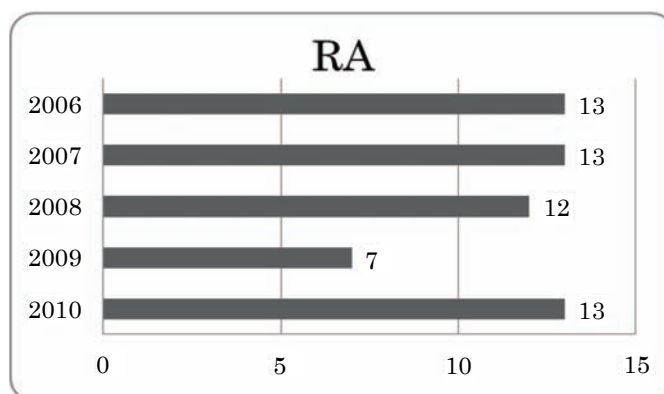


## 11 日本学術振興会特別研究員数

	DC 1	DC 2	合計
2006	4	2	6
2007	1	10	11
2008	5	8	13
2009	5	12	17
2010	6	9	15

## 12 リサーチアシスタント数

年度	RA
2006	13
2007	13
2008	12
2009	7
2010	13

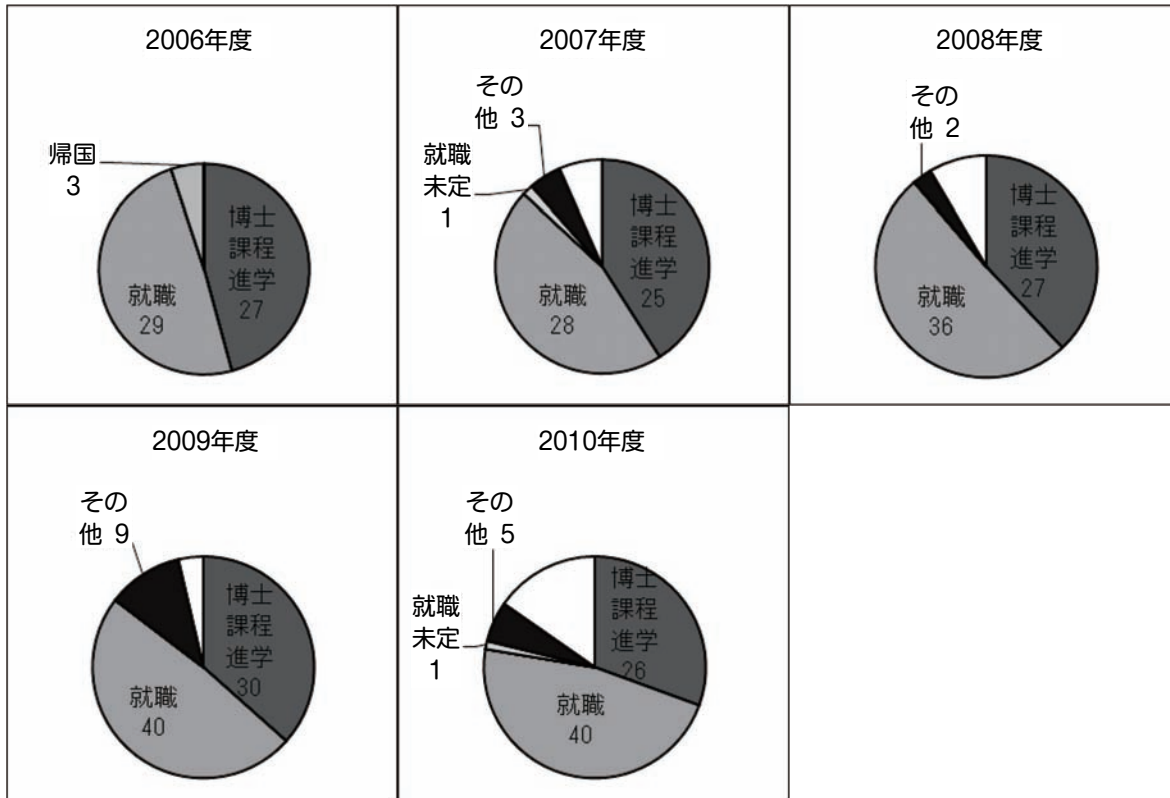


### 13 就職状況

学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料 (2006年度～2010年度)

区分		2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度
博士課程進学	学際情報学府	25	22	25	27	24
	学内他研究科		2	1	1	1
	学外	2	1	1	2	1
海外留学						
就職		29	28	36	40	40
大学院研究生	学際情報学府					
	学内他研究科					
帰国(外国人留学生)		3				
就職未定			1			1
その他			3	2	9	5
不明			4	6	3	13
合計		59	61	71	82	※ 85

※ 2010年度 「博士課程進学」と同時に「就職」した者1名を、それぞれの項目に計上(重複計上)している。





<就職先一覧>

2006 年度	2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度
(株)電通 2	(株)野村総合研 3	(株)日本アイ・ビ 3	(株)電通 4	(株)電通 3
(株)リクルート 2	(株)三菱東京 2	(株)マイクロソフ 2	(株)NTT データ 3	(株)楽天 3
倉敷市立短期 1	(株)日本電信電 1	(株)IBM ビジネ 1	(株)ソニー 2	(株)ゴールドマ 2
大学	話	スコンサルティ ングサービス	東京大学 2	(株)凸版印刷 2
(株)フロム・ソフ 1	(株)リード エグ 1	(株)NEC エンジ 1	(株)任天堂 2	Cisco Systems 1
トウェア	ジビジョン ジャ ン	ニアリング	ウェア	G.K.
(株)コスモ・スペ 1	(株)IBM ビジネ 1	(株)NTT ソフト 1	(株)Buffer 1	Deloitte Touche 1
ース	スコンサルティ ングサービス	ウェア	Renaiss	Tohatsu CPA 1
(株)日本アイ・ビ 1	(株)ツァイト・フ 1	(株)NTT 東日本 1	(株)NTT ソフト 1	Ltd. Dalian 1
ー・エム・サービ ス	オト	(株)アクセンチ ュア・テクノロジ ー・ソリューションズ	ウェア	Branch
(株)アイ・ビー・ 1	(株)JM 1	(株)ソフトバンク 1	(株)Sight 1	(株)朝日新聞社 1
エム・システムズ・エンジニアリ ング			Entertainment 1	
(株)モルガン・ス 1	(株)中日新聞社 1	(株)テレビ朝日 1	Japan 1	(株)セガ 1
タンレー証券			シリコンスタ 1	(株)ソニー・コン 1
(株)沖電気工業 1	(株)思文閣 1	(株)日本技芸 1	ジオ 1	ピュータエンタ 1
			(株)りそな銀行 1	テイメント 1
(株)凸版印刷 1	(株)いまじん 1	(株)ベネッセコ 1	(株)楽天 1	(株)テムジン 1
		ーポレーション	(株)ACCESS 1	(株)メディア・ゲ 1
(株)インフォバー 1	(株)松下電器産 1	(株)ミキハウス 1	(株)NTT ドコモ 1	ートジャパン 1
ン	業		(株)アクセント 1	(株)ソネットエン 1
(株)プラップジャ 1	(株)ソニー 1	(株)モリサワ 1	(株)アクセンチ ュア 1	タテイメント 1
パン			(株)サイバーエ 1	(株)東京センテ 1
(株)ヒューマン 1	(株)日立システ ム アンド サ ービス	(株)リサ・パート 1	ージェント 1	(株)ユリーリース 1
ルネッサンス研 究所		ナーズ	(株)シオン 1	
(株)野村総合研 1	(株)グーグル 1	(株)ソラン 1	(株)シングマクシ 1	東京大学 1
究所			ス 1	
(株)セイコーイン 1	(株)ソネットエン 1	(株)大和証券 1	(株)スクウェア・ 1	新潟県警察(行 1
スツル	タテイメント	SMBC	エニックス	政)
(株)日本総合研 1	(株)三菱総合研 1	台湾銀行 1		(株)日刊工業新 1
究所	究所	立川市役所 1		聞社
(株)日本電信電 1	(株)内田洋行 1			(株)日興コーデ 1
話				ィアル証券
(株)ゴールドマ 1	(株)任天堂 1			(株)日産自動車 1
ン・サックス証券				

(株)名古屋鉄道	1	(株)富士通	1	(株)テックファーム	1	(株)チャイナ・コンシェルジュ	1	(株)日本IBMソリューションサービス	1
(株)NTTコミュニケーションズ	1	(株)ナブテスコ	1	東京藝術大学 教育研究助手	1	(株)日本政策金融公庫	1	(株)日本無線	1
日本生命保険相互会社	1	(株)d Space Japan	1	徳島文理大学	1	(株)三菱総研DCS	1	(株)日本ロレアル	1
(株)アイ・エム・ジェイ	1	(株)TBS テレビ	1	(株)日本航空インターナショナル	1	(株)三菱電機	1	(株)パナソニック	1
(株)ACCESS	1	(株)NTTコミュニケーションズ	1	日本放送協会	1	(株)新日本製鉄	1	(株)パナソニックシステムソリューションズジャパン	1
(株)BOSCH	1	(株)トヨタ自動車	1	(株)根本特殊化学	1	(株)直島福武美術館財団	1	(株)パナソニックシステムネットワークス	1
フリープランナー・ライター	1	(株)パスコ	1	(株)ブーズ・アンド・カンパニー	1	(株)日本アイ・ビーエム	1	(株)日立製作所	1
NPO 法人日本臨床研究支援ユニット	1			(株)フォスター電機	1	(株)日本テレビ	1	(株)富士通	1
日本放送協会	1			(株)丸善	1	日本放送協会	1	(株)丸善	1
				(株)朝日新聞社	1	農林中央金庫	1	(株)三井住友銀行	1
				(株)かんぼ生命保険	1	(株)博報堂アイスタジオ	1	(株)メルリリンチ日本証券	1
				(株)新潮社	1	(株)富士通	1	(株)郵便局	1
				(株)電通レイザーフィッシュ	1	(株)豊田中央研究所	1	(株)郵便事業	1
				(株)日本経済新聞社	1	(株)野村総合研究所	1	早稲田大学	1
				(株)野村総合研究所	1	福山大学	1	警察官(台湾)	1
						(株)エリプスガイド	1	企業名不明(海外企業)	1

## 14 研究員（客員）等

情報学環

事項／年度	18	19	20	21	22
受託研究員	2	0	0	0	0
中国政府派遣研究員	1	0	1	0	1
客員研究員	3	6	7	22	35
外国人研究員	7	5	5	7	11
内地研究員	0	0	0	0	0
外国人研修員	8	10	9	4	4
交流研究員	4	2	2	3	9
私学研修員	1	1	0	0	0

## 15 学会賞など受賞者リスト

- ・辻井潤一「紫綬褒章」
- ・Yoichiro Kawaguchi 「ACM SIGGRAPH Awards, The Distinguished Artist Award for Lifetime Achievement」 SIGGRAPH 2010
- ・田中淳「平成 22 年防災功労者防災担当大臣表彰」
- ・大島まり「最先端研究を取入れた理科教育活動による科学技術の理解増進」平成 22 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞(理解増進部門), 文部科学省
- ・Shigeto Sonoda 「F.Hilary Conroy Award」 Association for Asian Studies
- ・園田茂人「科学研究費補助金審査委員の表彰」日本学術振興会
- ・佐藤洋一「デジタルコンテンツ作成のためのイメージベースドモデリング技術に関する先駆的研究」日本学術振興会賞
- ・佐藤洋一「Image Enhancement of Low-Lights Scenes with Near-Infrared Flash Images」IPSJ 50th Anniversary Paper Award
- ・山口いつ子「情報法の構造—情報の自由・規制・保護」第 26 回電気通信普及財団賞(テレコム社 科学賞), 財団法人電気通信普及財団
- ・植田一博「リスク志向性が創造的なアイデア生成に与える影響の解明」創造性研究奨励賞, NPO 法人ニューロクリアティブ研究会
- ・石川徹「人間・環境学会(MERA)2009 年度学会賞」人間・環境学会(MERA)
- ・中尾彰宏「ネットワークシステム研究会研究賞」電子情報通信学会
- ・研谷紀夫「第 4 回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞受賞」『デジタルアーカイブにおける「資料基盤」統合化モデルの研究』に対して, アート・ドキュメンテーション学会
- ・岡崎直観「高速な類似文字列検索アルゴリズム」Best Paper Award for Young Researcher, 情報処理学会創立 50 周年記念全国大会
- ・木下裕美子「Review on the Qualitative Measurement Methodology of Innovation in Service Using Panel Data」研究発表賞—2009 年度(第 24 回全国大会)の発表に対して, 日本社会情報学会(JASI)
- ・添野勉, 研谷紀夫「情報文化学会賞受賞」「21 世紀 COE : 次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」及

び「情報学環社会情報研究資料センター：高度アーカイブ化事業」におけるユビキタス・テクノロジーを活用した次世代アーカイブの構築に対して，情報文化学会

・木谷クリス真実，岡部孝弘，佐藤洋一，杉本晃宏「視覚的文脈を用いた人物動作のカテゴリー学習」電子情報通信学会 論文賞

・松林優一郎，岡崎直観，辻井潤一「自動意味役割付与における意味役割の汎化」言語処理学会論文賞

・Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura 「ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure」 Best Paper Award of 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010), IEEE Computer Society

・Y. Nakagawa, S. Yonekura, and Y. Kawaguchi 「Super Thin 3D Form Display for Multimodal User Experiences using Vertically Deformation of Leaf Spring and SMA」 Best Technical Note Award, International Symposium on VR innovation (ISVRI) 2011

・温文，石川徹，佐藤隆夫「人間・環境学会(MERA)第17回大会優秀発表賞」人間・環境学会(MERA)

・Yoshio Ishiguro, Adiyana Mujibiya, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto 「Aided Eyes: Eye Activity Sensing for Daily Life」 Pervasive2010 best video award

・Shuai Han, 佐藤いまり，岡部孝弘，佐藤洋一「Fast spectral reflectance recovery using DLP projector」 Best Student Paper Award, Asian Conference on Computer Vision (ACCV 2010)

・Andrade, D., Matsuzaki, T., Tsujii, J. 「Effective use of Dependency Structure for Bilingual Lexicon Creat

ion」 3rd Best Paper Award, the 12th International Conference on Computational Linguistics and Intelligent Text Processing

・新津保建秀，池上高志「Rugged TimeScape」文化庁メディア芸術祭 2010 審査委員推薦賞

## 16 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
1999年度以前	323	1	0
2000年度	645	48	14
2001年度	654	49	18
2002年度	916	98	53
2003年度	949	107	54
2004年度	904	122	83
2005年度	846	232	91
2006年度	982	149	24
2007年度	947	45	17
2008年度	1100	47	6
2009年度	1002	125	22
2010年度	1070	86	24
年度不明	34	0	0

注：業績 DB 入力データに基づく各年度の論文数(著書，分担著書，雑誌論文，国際会議論文，その他の論文，講演発表)

## 17 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2000年度	6	0
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
2005年度	1	3
2006年度	2	1
2007年度	3	1
2008年度	4	2
2009年度	10	5
2010年度	17	6
合計	62	31

## 18 国際団体役員・委員数

	学術的な団体の役員・委員*1	その他の団体役員・委員等*2
2008年度	13	1
2009年度	16	1
2010年度	18	1

\*1 「学会・会議等役職」のうち「国際性有」かつ「学会役員委員」であるもの

\*2 「団体役員・委員」のうち国際的なもの

## 19 政府関係委員会委員数

	2008年度	2009年度	2010年度
内閣官房	10	6	4
内閣府	9	9	5
総務省	7	19	23
経済産業省	8	8	3
文部科学省	9	7	7
厚生労働省	3	1	2
国土交通省	6	3	8
農林水産省	1	0	0
環境省	1	0	1
宮内庁	1	1	0
文化庁	2	3	0
特許庁	1	0	0
人事院	1	0	1
日本学術会議	1	0	0
その他	10	0	4
政府全体	70	57	58

## 20 地方公共団体関係委員会委員数

	2008年度	2009年度	2010年度
都道府県	7	6	3
市区町村	7	5	5
地方公共団体関係全体	14	11	8

## 21 ジャーナル編集・会議運営

	学会誌等編集査読*1	学術大会等運営*2
件数	13	28
うち国際的なもの	10	17

注：国内外の学会活動(学術誌編集委員，会議運営委員など) 注：2010年度のみ

\*1 「学会・会議等役職」のうち「ジャーナル編集査読」であるもの

\*2 「学会・会議等役職」のうち「大会組織運営」であるもの

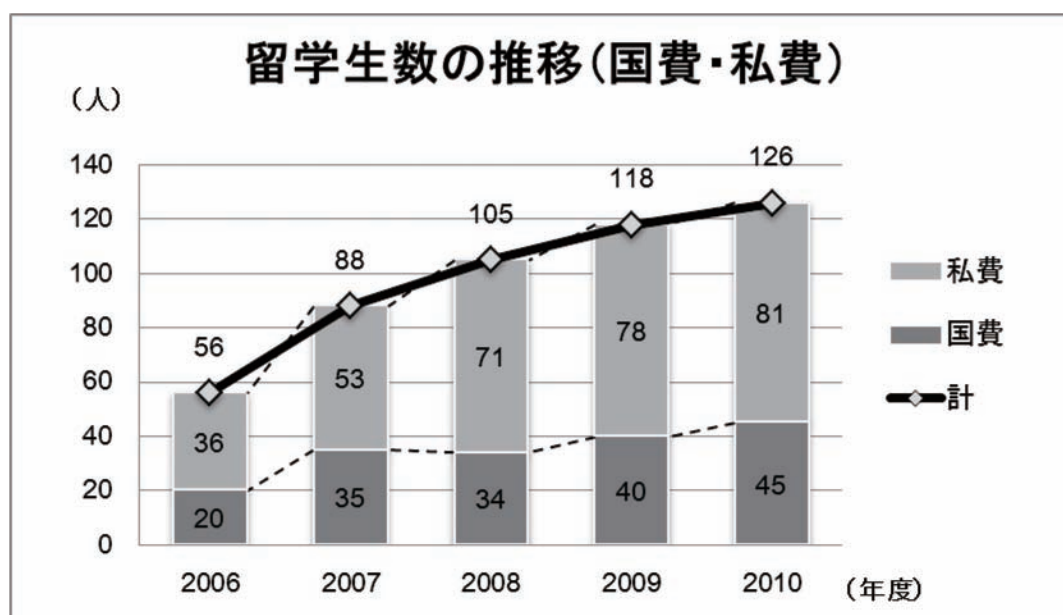
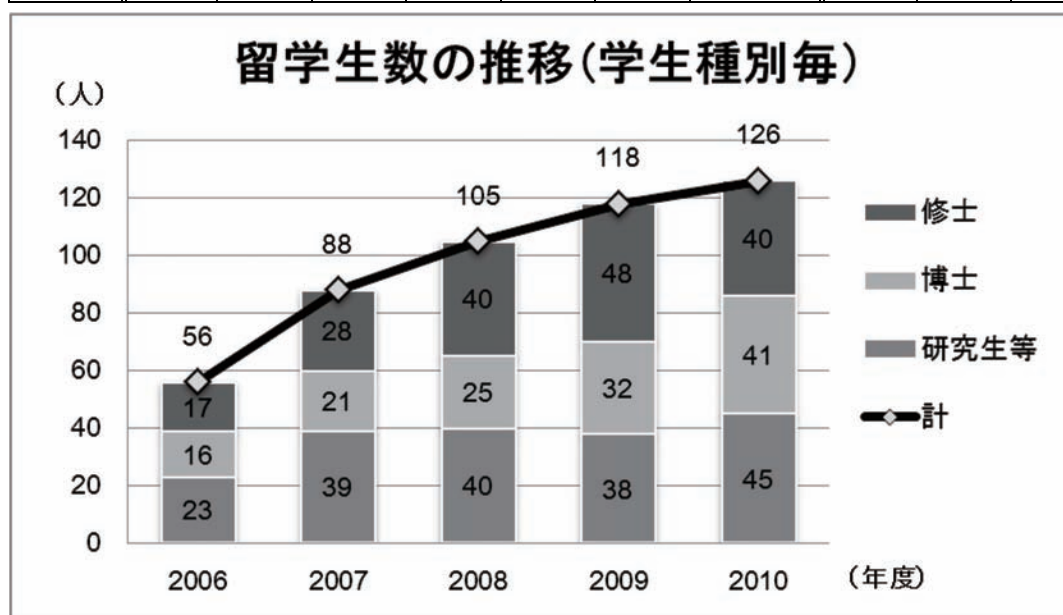
## 22 定期刊行物一覧

- ・『情報学研究 調査研究編』No.27 (2011年3月)
- ・『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 No.79 (2010年11月)，No.80 (2011年3月)
- ・ニューズレター『学環学府』No.29 (2010年5月)、No.30 (2010年7月)、No.31 (2010年10月)、No.32 (2011年2月)

## 23 留学生数の推移

各年度5月1日現在

年度	修士		博士		外国人 研究生等		教育部 研究生	合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	私費	国費	私費	
2006	5	12	7	9	8	14	1	20	36	56
2007	12	16	8	13	15	23	1	35	53	88
2008	13	27	7	18	14	24	2	34	71	105
2009	15	33	13	19	12	24	2	40	78	118
2010	15	25	17	24	13	31	1	45	81	126



## 24 留学生国籍別一覧(2010年5月1日現在)

国又は地域	国費	私費	計
<b>アジア</b>			
パキスタン	1		1
インド	1		1
バングラデシュ	1	1	2
タイ	3	2	5
マレーシア	1	2	3
インドネシア		2	2
中国(香港)		2	2
韓国	10	16	26
中国	5	37	42
台湾		13	13
小計	22	75	97
<b>中近東</b>			
トルコ	1	1	2
小計	1	1	2
<b>アフリカ</b>			
チュニジア	2		2
コンゴ民主共和国		1	1
小計	2	1	3
<b>オセアニア</b>			
オーストラリア	4		4
小計	4	0	4
<b>北米</b>			
カナダ	1		1
アメリカ合衆国	4	1	5
小計	5	1	6
<b>中南米</b>			
ブラジル	4		4
ベネズエラ	1		1
小計	5	0	5
<b>ヨーロッパ</b>			
イギリス	1		1
ドイツ		2	2
フランス		1	1
スペイン	1		1
チェコ	1		1
ロシア	2		2
クロアチア	1		1
小計	6	3	9
合計	45	81	126



## Ⅲ. 個人業績編

平成 23 (2011) 年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび 2010 年度の研究業績を、各自が入力したデータベースの内容に基づき、収録しています。教員の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の 50 音順となっています。

1. 教授
2. 准教授
3. 講師
4. 助教
5. 客員准教授
6. 特任准教授
7. 特任講師
8. 特任助教
9. 特任研究員

---

## 相澤 清晴・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### ライフログ

### 3次元映像

### 研究業績(2010年度)

#### 分担著書

Tao Mei, Kiyoharu Aizawa: "Video Recommendation, Internet Multimedia Search and Mining", Xian-Sheng Hua, Marcel Worring, and Tat-Seng Chua ed., Bentham Science Publishers, 2010年.

相澤 清晴:「超高精細映像の応用と展開」, 映像情報メディア学会 編, オーム社, 2010年.

#### 雑誌論文

相澤清晴:「メディアと人」, 映像情報メディア学会誌 学会創立60周年記念特集 映像メディアの未来ビジョン特集, Vol.64, No.1, pp.17-18, 2010年.

松崎直幸, 原澤賢充, 繁樹博昭, 森田寿哉, 伊藤崇之, 斎藤隆弘, 佐藤隆夫, 相澤清晴, 北崎充晃:「能動的観察による映像酔いの低減 (Reduction of Visually Induced Sickness by Active Viewing)」, 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, TVRSJ Vol.15, No.1, pp.41-44, 2010年. 【査読有】

相澤 清晴:「パーソナル写真コレクションと検索」, 映像情報メディア学会誌, Vol.64, No.11, pp.1571-1575, 2010年. 【査読有】

相澤清晴、荒川佳樹:「超高精細映像システム・コンテンツ」, 電子情報通信学会誌, Vol.93, No.5, pp.368-371, 2010年.

山田健太郎, 山崎俊彦, 相澤清晴:「シルエット抽出とモデル生成の相互フィードバックによる Time-Varying Mesh の高精度化 (Time-Varying Mesh Generation Based on Iterative Feedback between Silhouette Extraction and Geometry Modeling)」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J93-D, No.8, pp.1533-1543, 2010年. 【査読有】

Go Irie, Takashi Satou, Akira Kojima, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Affective Audio-Visual Words and Latent Topic Driving Model for Realizing Movie Affective Scene Classification", IEEE Trans. Multimedia, Vol.12, No.6, pp.523-535, 2010年. 【査読有】

#### 作品

相澤清晴, 山崎俊彦, デシルバ ガムヘワゲ チャミンダ:「フードログ:手軽に食事記録をとってみよう」, 科学未来館 予感研究所3, 2010.

相澤 清晴: 「FoodLog」, ASIAGRAPH 2010 in Tokyo , 2010.

## 国際会議等

Ovgu Ozturk, Tomoaki Matsunami, Yasuhiro Suzuki, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Can you SEE your "FUTURE FOOTSTEPS?, Proceedings of International Conference on Virtual Reality", VRIC2010, pp.317-320, 2010. 【査読有】

Rene M A Teixeira, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Comparative analysis of low-level visual features for affective determination of video clips", FutureTech 2010, MUST 2010, 2010. 【査読有】

Renan Utida Ferreira, S-R. Han, T.Yamasaki, K.Aizawa: "Mixed Spatial And SNR Scalability For TVM Geometry Coding", 3DTV Conference (3DTV-CON) 2010, 2010. 【査読有】

Suguru Nakagawa, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Deformation-based Compression of Time-Varying Meshes For Displaying on Mobile Terminals", 3DTV Conference (3DTV-CON) 2010, 2010. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa: "Life Log : Where are We Now, and Where Can we Go? (keynote) ", ACM Conference on Image and Video Retrieval CIVR 2010, 2010. 【査読有】

Chaminda De Silva, Kiyoharu Aizawa: "Interacting with Location-based Multimedia Using Sketches", ACM Conference on Image and Video Retrieval CIVR 2010, pp.189-196, 2010. 【査読有】

Seung-Ryong Han, Toshihiko Yamasaki, and Kiyoharu Aizawa: "Approaches to Compression of 3-D Video", SPIE Visual Communication and Image Processing (VCIP2010), 2010. 【査読有】

Keigo Kitamura, Gamhewage Chaminda De Silva, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Image Processing Based Approach to Food Balance Analysis for Personal Food Logging", IEEE International Conference on Multimedia and Expo (ICME2010), 2010. 【査読有】

K.Aizawa: "Panel :on Image and Retireval", ACM Conference on Image and Video Retrieval CIVR 2010, 2010.

Ovgu Ozturk, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Detecting Dominant Motion Flows In Unstructured/structured Crowd Scenes", International Conference on Pattern Recognition, ICPR2010, 2010. 【査読有】

Seung-Ryong Han, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Automatic Preview Video Generation For Mesh Sequences", IEEE Int. Conf. Image Processing (ICIP2010), pp.2945-2948, 2010. 【査読有】

Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Patch-Based Compression For Time-Varying Meshes", IEEE Int. Conf. Image Processing (ICIP2010), pp.2945-2948, 2010. 【査読有】

Chen Fu, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Video2Manga -- A Video Summary using Non-Photorealistic Rendering", ASIAGRAPH in Tokyo, 2010. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa, Gamhewage C. de Silva, Makoto Ogawa, Yohei Sato: " Food Log by Snapping and Processing Images", Int Conf. Virtual Systems and Multimedia (VSMM2010), pp.71-74, 2010. 【査読有】

Yuto Maruyama, Gamhewage C. de Silva, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Personalization of Food Image Analysis", Int Conf. Virtual Systems and Multimedia (VSMM2010), pp.75-78, 2010. 【査読有】

Hisato Kawaji, Koki Hatada, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "An image-based indoor positioning for digital museum applications", Int Conf. Virtual Systems and Multimedia (VSMM2010), pp.105-111, 2010. 【査読有】

Toshihiko Yamasaki, Tomoaki Matsunami, and Kiyoharu Aizawa: "Detecting Resized JPEG Images by Analyzing High Frequency Elements in DCT Coefficients", The Sixth International Conference on Intelligent Information Hiding and Multimedia Signal Processing (IIH-MSP2010), 2010. 【査読有】

Go Irie, Takashi Satou, Akira Kojima, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Automatic Trailer Generation", ACM Multimedia, pp.839-842, 2010. 【査読有】

Hisato Kawaji, Kohki Hatada, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Image-based Indoor Positioning System: Fast Image Matching using Omnidirectional Panoramic Image", ACM Multimedia Multimodal Pervasive Video Analysis Workshop (MPVA), pp.1-4, 2010. 【査読有】

Gamhewage C. de Silva, Kiyoharu Aizawa: "Image-based Dietary Information Mining for Community Creation in a Social Network", ACM Multimedia Workshop on Social Media (WSM2010), pp.53-58, 2010. 【査読有】

Ovgu OZTURK Toshihiko YAMASAKI Kiyoharu AIZAWA: "Estimating Human Body and Head Orientation Change To Detect Visual Attention Direction", International Workshop on Gaze Sensing and Interactions (in conjunction with ACCV2010), 2010. 【査読有】

Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Bit Allocation of Vertices and Colors for Patch-Based Coding in Time-Varying Meshes", Picture Coding Symposium 2010, pp.162-165, 2010. 【査読有】

Weilan Luo, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "3D Pose Estimation in High Dimensional Search Spaces with Local Memorization", Picture Coding Symposium 2010, pp.354-357, 2010. 【査読有】

Mikiya Tanizawa, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Estimation of Facility Category from Photos and Location Data", Workshop on Picture Coding and Image Processing, pp.147, 2010. 【査読有】

Wei Bi, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Recovering Local Geometry for Time-Varying Mesh from Motion", Workshop on Picture Coding and Image Processing, pp.148, 2010. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa, Toshihiko Yamasaki, Hisato Kawaji, Souchiro Kawamura: "Location Identification for Visitor Behavior Log in Museum", VRCAI 2010 Virtual Reality Continuum and its Application to Industry, pp.369-372, 2010. 【査読有】

Weilan Luo, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Articulated Human Motion Capture from Segmented Visual Hulls and Surface Reconstruction", APSIPA Annual Summit and Conference 2010 Asia-Pacific Signal and Information Processing Association, pp.109-116, 2010. 【査読有】

K.Aizawa: "Foodlog: Image Retrieval for Specific Needs", APSIPA Annual Summit and Conference 2010 Asia-Pacific Signal and Information Processing Association, 2010.

## 講演・口頭発表

池畑諭, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「手持ちカメラによる3次元動的モデル復元のための多数の背景画像を利用したカメラキャリブレーション法の提案」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), 2010.

Weilan LUO, Toshihiko YAMASAKI, Kiyoharu AIZAWA: 「Marker-less Human Motion Tracking Using Visual Hulls and

Time-Varying Surfaces Reconstruction」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2010), 2010.

河治寿都, 畑田晃希, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「全方位カメラの参照画像群を用いた博物館内の位置推定システムーデジタル・ミュージアムでの観覧者の行動記録に向けてー」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2010), 2010.

富樫 政徳, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「手書き入力による時系列標本点の逐次補間とその応用」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2010), 2010.

Chaminda DE SILVA, Kiyoharu AIZAWA: 「Mining Image-based Dietary Information for Automatic Community Formation in a Social Network」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2010), 2010.

Ren'e M A TEIXEIRA, Toshihiko YAMASAKI, Kiyoharu AIZAWA: "Affective Content Analysis of Video Clips Through the Fusion of Audiovisual Features", 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2010), 2010.

谷澤 幹也, カムヘワゲ チャミンダ デシルヴァ, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「写真による対人ログデータからの親密度推定」, 情報科学技術フォーラム、FIT2010, 2010.

丸山 悠斗, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「食事ログシステムの解析の個人への適応と検討」, 情報科学技術フォーラム、FIT2010, 2010.

Chen Fu, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: 「Video2Manga: A Comic-like Video Summary」, 情報科学技術フォーラム、FIT2010, 2010.

松濤智明, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「公共空間における多人数追跡と属性解析」, 情報科学技術フォーラム、FIT2010, 2010.

畢 微, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「写実的レンダリングに向けた Time-Varying Mesh の表面属性推定」, 情報科学技術フォーラム、FIT2010, 2010.

Ganhewage de Silva, Kiyoharu Aizawa: 「Attention-based Clustering for Grouping Photo Collections by Quality of Composition」, 情報科学技術フォーラム、FIT2010, 2010.

Kiyoharu Aizawa, Ganhewage C. de Silva, Toshihiko Yamasaki, Yuto Maruyama, Tatsuya Miyazaki: "Food Logging by Snapping and Processing Pictures", Proceedings of Global COE Symposium on Secure-Life Electronics, 2010.

Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Patch-based Compression for Time-Varying Meshes", Proceedings of Global COE Symposium on Secure-Life Electronics, 2010.

相澤 清晴: 「"食"に関わるライフログ共有技術基盤」, CREST[共生社会へ向けた人間調和型情報技術の構築]研究領域 第一回公開シンポジウム 「調和と共生」 一人と情報環境が創る新しい価値を目指してー, 2010.

宮崎 達也, デシルヴァ ガムヘワゲ チャミンダ, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「食事画像の類似性判定に基づくカロリー推定」, HCGシンポジウム, 2010.

杉山 春樹, デシルヴァ ガムヘワゲ チャミンダ, 山崎 俊彦, 相澤 清晴, 小川 誠, 佐藤 陽平, 太田 龍督: 「TwitterBOT のための食事画像の特定メニュー判定」, HCGシンポジウム, 2010.

丸山 悠斗, デシルヴァ ガムヘワゲ チャミンダ, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「食事ログシステムの解析の個人適応による食事バランス推定」, HCGシンポジウム, 2010.

青木秀一, 青木勝典, 浜田浩行, 金次保明, 山本真, 相澤清晴:「放送・通信のハイブリッド配信のためのトランスポート方式の一検討」, 映像情報メディア学会年冬季大会, 2010.

## 新聞・報道

相澤 清晴:「食事日記を簡単に生成 & 共有できる Web サイト」, インターネットニュースで107件掲載, 2010.

相澤 清晴:「自動食事日記サービス フードログ」, FM東京 シナプス, ナレッジ アンド モア, 2010.

相澤 清晴:「携帯から写真送信で食事日記自動で」, 日経産業新聞, 2010.

相澤 清晴:「映像資産を将来に」, 電波新聞, 2010.

相澤 清晴:「サイト上で食事日記」, 日刊工業新聞, 2010.

相澤 清晴:「入力の手間を最小限に抑えた食事記録」, Health Biz Watch, 2010.

相澤 清晴:「東京大学発の画像認識技術「FoodLog」を活用した Twitter『ろっぷん bot』を開始」, ソネットエンタテインメント株式会社, 2010.

相澤 清晴:「So-net とバンプレストの新キャラ「ろっぷん」東京大学発の画像認識技術「FoodLog」を活用した Twitter『ろっぷん bot』を開始」, ソネットエンタテインメント株式会社, 2010.

相澤 清晴:「東大発の画像認識技術でオムライス写真に反応してツイート…So-net、Twitter ボットを公開」, RBBTODAY, 2010.

相澤 清晴:「生活を変えるライフログ」, NHK ニュース おはよう日本, 2010.

相澤 清晴:「料理撮影 画像でカロリー計算」, NHK ニュース おはよう日本, 2010.

相澤 清晴:「健康増進アシストサービス」, NHK「おはよう日本」, 2010.

相澤 清晴:「健康増進アシストサービス」, 日経産業新聞, 2010.

相澤 清晴:「健康増進アシストサービス」, 日本テレビ「スッキリ!」, 2010.

相澤 清晴:「健康増進アシストサービス」, 日本経済新聞, 2010.

相澤 清晴:「健康増進アシストサービス」, 「DIME」誌 2011 年 1 号, 2010.

相澤 清晴:「健康増進アシストサービス」, ロシア国営テレビ, 2010.

相澤 清晴:「健康増進アシストサービス」, TBS「ひるおび」, 2010.

相澤 清晴:「健康増進アシストサービス」, TBS「はなまるマーケット」, 2010.

相澤 清晴:「健康増進アシストサービス」, 読売新聞, 2010.

## 受賞

中川卓: 映像情報メディア学会鈴木記念奨励賞「携帯端末表示のための Time-Varying Mesh の圧縮」, 映像情報メディア学会, 2010 年.

杉山春樹: HCGシンポジウムインタラクティブセッション優秀プレゼンテーション賞「TwitterBOT のための食事画像の特定メニュー判定」, 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ, 2010 年.

## 特許

相澤清晴, 山崎俊彦, 北村圭吾:「情報処理装置 (カロリー推定)」, 特願 2010-124361, 2010 年 05 月.

入江豪, 佐藤隆, 小島明, 相澤清晴, 山崎俊彦:「映像変換装置, 文書変換装置, 映像変換方法, 文書変換方法, 映像変換プログラムおよび文書変換プログラム」, 特願 2010-117288, 2010 年 05 月.

入江豪, 佐藤隆, 小島明, 相澤清晴, 山崎俊彦:「映像編集方法, 映像編集装置および映像編集プログラム」, 特願 2010-127416, 2010 年 06 月.

山崎俊彦, 相澤清晴:「3次元動画像の圧縮に用いる基本単位及び当該基本単位の生成方法、当該基本単位を用いた3次元動画像の圧縮方法」, 特願 2010-122837, 2010 年 09 月.

---

## 池内 克史・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 文化遺産のデジタル化

世界各地の貴重な文化遺産をレーザ測定システムによって数ミリ精度で計測し、デジタルデータの形で保存するプロジェクトを進めています。これまでに鎌倉高德院の国宝阿弥陀仏像(鎌倉大仏)、奈良東大寺の国宝廬舎那仏坐像(奈良大仏)、タイ・スコタイのアチャナ仏、カンボジア・アンコールトムのパイヨン寺院などをデジタル化してきました。これらのデータは、VR(バーチャルリアリティ)のコンテンツ作成、文化遺産の破損、欠損時には修復のために、また製作当時の状態への仮想的復元といった応用など、幅広い分野での利用が期待されています。

#### 人間行動観察学習ロボット

幼児の学習の大部分は、親の行動を見て真似ることから始まります。我々の研究室では、人間の行動を主に視覚によって観察し、これを理解して同じ行動を再現するロボットプログラムの自動生成を研究テーマとしており、主に「全身運動の獲得」と「手作業の獲得」の2つの課題について研究を進めています。

#### 4次元仮想化都市

都市などの広域にわたる実空間の三次元モデル化を効率的に行うため、実験車両に搭載したカメラやレンジセンサおよび電子地図を利用して、要素技術となる画像・距離画像の処理手法を研究しています。また、実空間の動きを仮想空間に重畳する研究や、車両や車種を自動的に認識・判別する研究を行っています。

## 研究業績(2010 年度)

---

### 池上 高志・教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

#### 研究業績(2010 年度)

##### 著書

T. Ikegami: "Sustainability and Systems NOW, in WE CAN CHANGE THE WEATHER-100 cases of changeability", VUB PRESS, 2010 年.

T. Ikegami: "Living Technology", Automatic Press Publishing, 2010 年.

##### 雑誌論文

T. Ikegami: "Sustainable Autonomy and Designing Mind Time", ACM Digital Library, 2010 年. 【査読有】

K. Nakajima and T. Ikegami: "Dynamical Systems Interpretation of Reversal of Subjective Temporal Order Due to Arm Crossing", Adaptive Behavior, Vol.18, pp.189-210, 2010 年. 【査読有】

K. Suzuki and T. Ikegami: "Allometry and Catastrophic regime shifts in food chains", J.theor. Biol., No.267, pp.121-128, 2010 年. 【査読有】

M. M. Hanczyc and T. Ikegami: "Chemical Basis for Minimal Cognition", Artificial Life , Vol.16, No.3, pp.233-243, 2010 年. 【査読有】

##### 国際会議等

T. Ikegami and Y. Ogai: "Self-organization of Subjective Time and Sustainable Autonomy in Mind Time Machine", Artificial Life XII , Vol.Proceedings of the Twelfth International Conference on the Synthesis and Simulation of Living Systems, pp.624-625, 2010. 【査読有】

##### 講演・口頭発表

T. Ikegami: "Consciousness, Unconsciousness and Mind Time", A workshop at the International Conference on Unconventional Computation: with Spatio-temporal Dynamics, 2010. 【招待講演】

T. Ikegami: "Designing Mind Time Machine", The Second International Symposium on Computational Neuroscience, 2010. 【招待講演】

T. Ikegami: "Architecture as Space Time Landscape", International Workshop on Architecture at Artificial Life, 2010. 【招待講演】



T. Ikegami: "Sustainable Autonomy and Designing Mind Time", International Workshop on Self-Sustaining Systems, 2010. 【招待講演】

## 受賞

新津保建秀、池上高志: 文化庁メディア芸術祭 2010 審査委員推薦賞「Rugged TimeScape」, , 2010 年.

---

## 石崎 雅人・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

医療コミュニケーション教育

地域医療における医療と介護の連携

司法コミュニケーション

### 研究業績(2010 年度)

#### 雑誌論文

片桐, 高梨, 石崎, 榎本他: 「会話における合意形成と相互信頼感形成」, 人工知能学会研究会資料, Vol.SIG-SLUD-A807, pp.49~53, 2010 年. 【査読有】

石崎: 「医師－患者関係を構築するコミュニケーションにおけるポライトネス理論の役割」, 治療, Vol.92, pp.2630-2631, 2010 年. 【一般向け】

石崎, 野呂他: 「医療コミュニケーションシンポジウム」, 人工知能学会研究会資料, Vol.SIG-SLUD-B003, 2011 年.

#### 講演・口頭発表

石崎: 「高齢社会におけるコミュニケーションデザイン」, 高齢者介護施設におけるコミュニケーション・デザインシンポジウム, 2010. 【一般向け】

石崎: 「パネル: 在宅での看取りを考える」, 医療と介護の連携が推進する在宅での看取り, 2011. 【招待講演】【一般向け】

#### 新聞・報道

石崎: 「医療ナビ: 患者のうそ 医師らとの信頼が鍵」, 毎日新聞, 2010.

---

## 石田 英敬・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 記号論・情報記号論の研究

記号論を情報学研究に活用する研究

#### 言語態の研究

社会や文化の単位としての言語活動の研究

#### 現代文学、現代思想の研究

近代ヨーロッパ文学および現代思想の研究

### 研究業績(2010 年度)

#### 著書

石田英敬:「現代思想の教科書:世界を考える知の地平15章」, 筑摩書房, 2010 年.

石田英敬:「自分と未来のつくり方 ~ 情報産業社会を生きる ~」, 岩波書店, 2010 年.

#### 分担著書

ベルナール・スティグレール:「技術と時間 2 方向喪失」, 石田英敬監修 西兼志訳 編, 法政大学出版局, 2010 年.

#### 雑誌論文

石田英敬:「インターネットと人権:グーグルストリート・ビュー問題を中心に」, 『部落解放』, No.624 号, pp.58-71, 2010 年. 【一般向け】

石田英敬:「『言論による政治』は復権するか - ネットの時代と民主主義」, 『民主主義教育 21』, 別冊「政権交代とシティズンシップ」, 2010 年. 【一般向け】

石田英敬・西兼志・中路武士・谷島貫太:「批評プラットフォーム<クリティカル・プラトー>」, 情報学研究:東京大学大学院情報学環紀要, No.79, pp.1-46, 2010 年. 【査読有】

石田英敬:「テレビ番組アーカイブ研究の現在」, 日本脚本アーカイブズ 調査・研究報告書 VI, 平成 22 年度, pp.17-19, 2011 年.

Hidetaka Ishida: "Vent d' Ouest", L' Herne « Foucault », pp.232-236, 2011 年.

## その他論文

石田英敬:「時の隕石体としての絵画」, カタログ『松谷武判展』, 椿近代画廊, 2010年. 【査読有】

Hidetaka Ishida: " L' espoir d' un nouveau souffle", Le Monde diplomatique, 新聞 web 記事, 2010年. 【一般向け】

石田英敬:「象徴の貧困:衰弱した想像力再生を」, 『北海道新聞』コラム「各自核論」2010年7月24日夕刊, 新聞コラム, 2010年.

石田英敬:「長期的な見方」失う世界」, 北海道新聞, 新聞コラム, 2010年.

石田英敬、金泳徳、今野勉:「テレビ文化とweb文化:文化リサイクルの観点から、その可能性を探る」, 文化はめぐる:文化アーカイブズ活性化シンポジウム, 社団法人 日本放送作家協会 日本脚本アーカイブズ特別委員会, 2011年.

石田英敬:「スウィングする政治:世界秩序の変容背景に」, 北海道新聞, 新聞コラム, 2011年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

石田英敬:「文化はめぐる—脚本アーカイブズとデジタル化」, 文化アーカイブズ活性化シンポジウム, 2010. 【招待講演】【一般向け】

## 新聞・報道

石田英敬:「選挙特番」, 朝日ニュースター—2010年7月11日, 2010.

石田英敬:「自分と未来のつくり方 情報産業社会を生きる」, 「今週の本棚」『毎日新聞』2010年8月1日朝刊, 2010.

石田英敬:「選挙特番」, 朝日ニュースター, 2010.

石田英敬:「IT社会を生きるためにパソコン消して街に出よう」, 「書評 著者インタビュー」『週刊エコノミスト』2010年8/17・24合併号, 2010.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター, 2010.

---

## 植田 一博・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 需要側イノベーションの分析(Demand-side Innovation)

既存のイノベーション研究では供給側に焦点があたりがちであるが、実際には、新しい製品・技術やその新しい使い方が消費者により発見され、普及伝播する過程で、消費者自身によってその意味や価値が再解釈・再定義されて、

結果的には予想を超えた大ヒットに至る場合がある。我々はこのような現象の事例検証と、この現象を可能にする個人の認知メカニズムや社会的な構造を、実験やインタビュー等により明らかにしつつある。

## 日本の伝統芸能における身体性と表現の認知科学的分析

文楽とは、言語情報を用いずに3人の人形遣いがイキを合わせて、人工物でしかない文楽人形をあたかも人が動作しているかのように操作する日本独自の伝統芸能である。この文楽人形の動作解析とそれを演じる人形遣いの動作・生理計測を通じて、人形の動きのいかなる要素によって我々は人形に人間らしさを感じているのか、人形を複数の人間が言語情報なしで巧みに操るための協調メカニズムとは何かを科学的に分析している。文楽以外にも、能・狂言の動きの意味を運動力学的、認知科学的に探っている。

## 生物らしさの知覚に関する研究

我々は生物と非生物を見分けられると考えられている。このような生物らしさの知覚は、生物と非生物とを見分ける能力であるにも関わらず、実物の生物を用いては検討されてきていない。そこで当研究室では、生物らしさの知覚に関する脳内過程を明らかにするために、実際の生物とロボットを用いて脳波による事象関連電位を計測した。その結果、生物らしさの知覚には、対象を主観的に生物と見なす過程と対象の生物的特徴を知覚する過程の二つの独立な過程が含まれていることが示唆されている。

## 研究業績(2010年度)

### 雑誌論文

Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "Interaction with a Moving Object Affects One's Perception of Its Animacy", International Journal of Social Robotics, Vol.2, No.2, pp.187-193, 2010年。【査読有】

大本 義正, 植田 一博, 大野 健彦: 「複数の非言語情報による自由なコミュニケーション中の嘘の自動判別の可能性の検討」, 電子情報通信学会論文誌「情報・システム:D」, Vol.J93-D, No.6, pp.848-856, 2010年。【査読有】

植田 一博, 鷺田 祐一, 有田 暁生, 清水 剛: 「イノベーションのためのアイデア生成における情報と認知特性の役割」, 認知科学, Vol.17, No.3, pp.611-634, 2010年。【査読有】

清河 幸子, 鷺田 祐一, 植田 一博, Eileen Peng: 「情報の多様性がアイデア生成に及ぼす影響の検討」, 認知科学, Vol.17, No.3, pp.635-649, 2010年。【査読有】

福田 玄明, 植田 一博: 「実際の生物を用いたアニメシー知覚の脳内基盤の検討」, 認知科学, Vol.18, No.1, pp.64-78, 2011年。【査読有】

小寺 礼香, 清河 幸子, 足利 純, 植田 一博: 「協同問題解決における観察の効果とその意味: 観察対象の動作主体に対する認識が洞察問題解決に及ぼす影響」, 認知科学, Vol.18, No.1, pp.114-126, 2011年。【査読有】

### 国際会議等

Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "An Even-Related Study of Animacy Perception: Turtle or Robot", Cognitive Neuroscience Society 2010 Annual Meeting, pp.73, 2010。【査読有】

Ikuya Nomura, Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "Transcranial Direct Current Stimulation Altering Risk Preferences", Cognitive Neuroscience Society 2010 Annual Meeting, pp.144, 2010。【査読有】

Yukihiro Fujita, Yuichi Washida, Fujio Toriumi, Kazuhiro Ueda, Ken-ichiro Ishii: "Reversal of Influence: Decrease of Innovator", The 9th International Conference on Autonomous Agents and Multiagent Systems, pp.1543-1544, 2010. 【査読有】

Yuri Wada, Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "Analysis of Difference in Academic Attitudes among Researchers", The 7th International Conference on Cognitive Science, pp.467, 2010. 【査読有】

Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "Illusory colour induced by rapid flicker", Asiagraph 2010, Vol.4, No.2, pp.70-73, 2010. 【査読有】

Yoshimasa Ohmoto, Yasushi Toda, Kazuhiro Ueda, Toyoaki Nishida: "Analyses of the facilitating behavior by using discussion conditions, participant stances and nonverbal behavior", Social Intelligence Design 2010, CD-ROM, 2010. 【査読有】

Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "Two neural mechanisms for animacy perception: An ERP study using motion Turing test", IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems: Workshops/Tutorials, CD-ROM, 2010. 【査読有】

## 講演・口頭発表

大本 義正, 戸田 泰史, 植田 一博, 岡田 将吾, 西田 豊明: 「議論の発散収束と非言語情報に基づくファシリテーション行動の分析」, 第 24 回人工知能学会全国大会, 2010.

和田 有理, 植田 一博: 「読解に対する読み手の認識論的信念と要約文章の質との関連」, 日本教育心理学会第 52 回総会, 2010.

野村 郁也, 植田 一博: 「tDCS が効用関数に与える影響」, The 33rd Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society, 2010.

福田 玄明, 植田 一博: 「ベンハムのコマによるコントラスト感度の歪み」, 第 38 回 Young Perceptionists, 2010.

和田 有理, 植田 一博: 「専門領域に対する印象評定を用いた領域マップ作成の試み — 個人の知識に対する態度を調べるために —」, 日本認知科学会第 27 回大会, 2010.

櫻 哲郎, 沢井 和也, 森田 寿郎, 植田 一博: 「文楽人形動作の同期性・再現性に着目した人形遣いの協調操作技術の解明」, バイオメカニズム学術講演会, 2010.

三輪 宏太郎, 植田 一博: 「Extrapolation of a past growth into the future; how it distorts long-term earnings growth forecasts?」, 行動経済学会第 4 回大会, 2010.

福田 玄明, 植田 一博: 「事象関連電位によるアニメシー知覚の脳内基盤の検討—実際の生物と非生物に対する脳活動の比較—」, HCG シンポジウム 2010, 2010.

野村 郁也・大貫 泰, 鮫島 和行, 鷺田 祐一, 植田 一博, 岡田 浩之, 大森 隆司: 「The effect of brand awareness and risk attitude on product choices」, 脳と心のメカニズム・第 11 回冬のワークショップ, 2011.

高橋 康介, 福田 玄明, 池田 華子, 土居 裕和, 渡邊 克巳, 植田 一博, 篠原 一之: 「通常歩行とハコビ歩行の方向判断方略～バイオリジカルモーション刺激を用いた検討～」, 電子情報通信学会 MVE 研究会, 2011.

福田 玄明, 植田 一博: 「生物らしさの知覚の脳内過程～モーションチューリングテストを用いた事象関連電位計測～」, 電子情報通信学会 HCS 研究会, 2011.

## 新聞・報道

植田 一博: 「ためしてガッテン(テーマ:速読)」, NHK 総合放送, 2010.

## 受賞

植田 一博: 創造性研究奨励賞「リスク志向性が創造的なアイデア生成に与える影響の解明」, NPO 法人ニューロクリアティブ研究会, 2011 年.

---

## 大島 まり・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 医用画像に基づく血管循環系のマルチスケール・マルチフィジックス解析

本研究は血管病変の発症, 進行に関わる流体力学的な要因を数値解析により解明することを目的としている. 実際の生体内を再現したモデルや境界条件を採用するために, ここでは CT や MRI などの医用画像から抽出した血管形状モデルを用い, 末梢血管網など循環系全体の影響を考慮した境界条件を導出・適用した大規模血流解析システムを構築している. さらに血流および血管壁内での物質輸送・透過モデルを取り入れ, 悪玉コレステロールなどの病変に関わる物質の血管壁内への蓄積についても予測を行っている.

#### 血流と血管壁の相互作用を考慮した連成解析と in vitro モデルを用いた可視化計測

本研究では脳動脈瘤の発生・成長のメカニズムの解明を目的とし, 血流によって変形する血管壁の力学応答メカニズムを考慮した数値解析を行うとともに, in vitro モデル実験による結果と比較することで評価を行っている. 医用画像から再構築した脳動脈瘤モデルを対象として, 数値解析では血管壁を超弾性体とした流体構造連成解析を行い, 実験では速度 3 成分のデータを得られるステレオ PIV という計測手法を用い, 内部の流動構造と血管壁の挙動, およびそれらの相互作用を評価している.

#### 共焦点 Micro PIV による微小流路内混相流の可視化計測

微小血管を流れる赤血球やマイクロ分析チップのような微小流体デバイスの内部の混相流を可視化計測するツールとして, 共焦点マイクロ PIV システムを開発している. 本手法は, 流れの中にトレーサ粒子と呼ばれる微小な蛍光ビーズを混濁させ, 共焦点スキャナ・特殊な蛍光顕微鏡・高感度高速度カメラを用いて流れを撮影し, 得られた画像を PIV 解析処理を用いて速度分布を求める. 共焦点マイクロ PIV を用いることで, マイクロサイズの微小領域における 3 次元的な流れの様子を定量的に知ることができる.

## 研究業績(2010年度)

### 雑誌論文

大島まり:「特集 見える化-パブリック・アウトリーチ」青少年の科学技術への関心向上に継続的なアウトリーチ活動を」, エネルギーレビュー, No.2010-3, pp.19-22, 2010年. 【一般向け】

武藤昌也, 坪倉誠, 大島まり, 大島伸行:「周囲に周期変動が与えられた球に負荷する流体力」, 機械学会論文集 B編, Vol.76, No.764, pp.563-569, 2010年. 【査読有】

大石正道, 大島まり, 木下晴之, 藤井輝夫, 小林敏雄:「多波長共焦点マイクロ PIV によるマイクロ液滴生成過程の計測」, 可視化情報学会論文集, Vol.30, No.9, pp.55-64, 2010年. 【査読有】

R. Torii, M. Oshima, T. Kobayashi, K. Takagi, Tayfun E. Tezduyar: "Influencing Factors in Image-Based Fluid-Structure Interaction Computation of Cerebral Aneurysms", International Journal for Numerical Methods in Fluids, Vol.65, No.1-3, pp.324-340, 2011年. 【査読有】

### 国際会議等

M. Oishi, K. Utsubo, H. Kinoshita, T. Fujii, M. Oshima: "Target Tracking Confocal Micro-PIV for Continuous Measurement of Red Blood Cells", The 14th International Symposium on Flow Visualization, pp.49, 2010. 【査読有】

Doeg Hee Doh, Gyung Rae Cho, Hyo Jae Jo, Jin Hyung Choi, M. Oishi, M. Oshima: "Stabilization Characteristics of Cylinder", The 14th International Symposium on Flow Visualization, pp.166, 2010. 【査読有】

R. Torii, Jennifer Keegan, Nigel Wood, Alun Hughes, David Firmin, M. Oshima, Tayfun Tezduyar, Simon Thom, Yun Xu: "Fluid-Structure Interaction Modeling of The Human Right Coronary Artery Based on Subject-Specific Data", 9th World Congress on Computational Mechanics and 4th Asian Pacific Congress on Computational Mechanics (WCCM/APCOM2010), 2010. 【査読有】

M. Oshima, Milan Toma, Absy Krdy, S. Takagi: "Numerical Investigation of the Effects of Arterial Wall Deformation on Hemodynamics in a Cerebral Aneurysm", 6th World Congress of Biomechanics(WBC), pp.95, 2010. 【査読有】

Y. Sato, Fuyou Liang, S. Takagi, M. Oshima: "Multi-scale Simulation of Cerebral Blood Flow taking Account of General Circulation", 6th World Congress of Biomechanics(WBC), pp.273, 2010. 【査読有】

Milan Toma, R. Torii, S. Takagi, M. Oshima: "Finite Element Modeling of Cardiovascular FSI Using Strong Coupling Method", 6th World Congress of Biomechanics(WBC), pp.282, 2010. 【査読有】

Deog Hee Doh, Young Ho Kim, Sung Kyun Kim, M. Oishi, M. Oshima: "Simultaneous Measurement System for Elastic Biological Wall Motions and Its Inner Flow Motions - Is the Aneurysm for a Disease or for a Self-Defense?", 6th World Congress of Biomechanics, IFMBE Proceedings, Vol.31, pp.481-484, 2010. 【査読有】

M. Oshima: "3D Velocity Field Measurements of Droplet Formation by Confocal Microscopy", Horiba International Conference, International Symposium on Micro/Nano Flow Measurement Techniques, pp.94-108, 2010. 【査読有】

M. Oishi, H. Kinoshita, T. Fujii, M. Oshima: "Measurement of Three Dimensional Flow Structure of Droplet Formation Mechanism in T-Shaped Junction Using Phase-Locked Confocal Micro-PIV", MicroTAS2010 14th International Conference on Miniaturized Systems for Chemistry and Life Sciences, pp.569-571, 2010. 【査読有】

Milan Toma, Absei Krdey, S. Takagi, M. Oshima: "A Comparative Study of the Fluid and Fluid-Structure Interaction Cardiovascular Analyses with the Effect of Peripheral Network", 16th International Conference on Finite Elements in Flow Problems, pp.196, 2011. 【査読有】

M. Oshima, Milan Toma, S. Nakamura, S. Yamamoto: "FSI Simulation for Patient-Specific Model of Lumen and Wall of Cartoid Artery", 16th International Conference on Finite Elements in Flow Problems, pp.252, 2011. 【査読有】

M. Oshima, Milan Toma, A. Krdy, S. Takagi: "Fluid-Structure Interaction Simulation of Cerebral Aneurysm with the Effects of Peripheral Network", 2nd International Conference on Mathematical and Computational Biomedical Engineering, pp.47-50, 2011. 【査読有】

## その他論文

大島まり:「バイオ・マクロ流体の研究 2001-2010」, 東京大学生産技術研究所 工学とバイオ研究会 10年成果報告 論文付, 2010年.

## 講演・口頭発表

Deog Hee Doh, Yeong Ho Kim, M. Oshima, M. Oishi: "In Vitro Measurement Technique for Aneurysm ", 2010 Annual Spring Symposium of Korean Society of Visualization(KSV), 2010. 【招待講演】

大島まり:「マイクロ流体デバイス内の可視化計測と数値シミュレーション」, 日本精工株式会社工場訪問時における講演, 2010. 【招待講演】

大島まり:「PIVの基礎Ⅲ「マイクロPIV」」, 可視化フロンティア講習会「流体の画像計測(PIV/LIF)の基礎から最先端まで」, 2010. 【招待講演】

柴崎健一, 谷口雅人, 大島まり:「枯渇EHLとマクロ流れのマルチスケール連成解析手法の開発」, トライボロジー会議, pp.245-246, 2010.

大島まり, 坂東佳憲, 大石正道, 澤田義哉, 山本創太:「ステレオPIVとの比較による脳動脈瘤血流解析の精度と格子依存性の検証」, 第33回日本バイオレオロジー学会年会, p.68, 2010.

大島まり:「脳血管障害のためのマルチスケール流体構造連成シミュレーション」, 京都大学数理解析研究所研究集会「偏微分方程式の逆問題解析とその周辺分野に関する研究」, 2010. 【招待講演】

大島まり:「理系学部の学び・研究について」, 滝高等学校理系進路講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

大島まり:「研究の世界を探検しよう!」, 宮城県仙台第二高等学校講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

大島まり:「マイクロ流体デバイス内の流れの可視化計測と数値解析」, 平成22年度第1回バイオ・マイクロ・ナノテク研究会, 2010. 【招待講演】

大島まり:「共焦点マイクロPIVによるマイクロ混相流れの可視化計測」, 日本機械学会講習会「実験流体力学-マイクロ流れ実験の基礎と応用-」, 2010. 【招待講演】

梁 夫友, 高木 周, 野田 重穂, 劉 浩, 大島 まり: "Multi-scale modeling of the cardiovascular system: integration of local flow patterns, arterial wave propagation and global hemodynamics", 日本機械学会 2010年度年次大会講演論文集, Vol. 6, pp. 89-90, 2010.



大島まり:「工学の新しいパラダイム - 生体医工学の拓く未来 -」, 第6回 ANGEL セミナー(東京医科歯科大学 女性研究者支援室主催), 2010. 【招待講演】【一般向け】

大島まり:「研究の魅力とは—医工連携とバイオメカニクス—」, 山梨県立甲府南高等学校サイエンスフォーラム, 2010. 【招待講演】【一般向け】

佐藤友喜, 梁夫友, 高木周, 大島まり:「全身の血液循環を考慮した血流のマルチスケールシミュレーション」, 日本機械学会第21回バイオフロンティア講演会講演論文集, No.10-72, pp.9-10, 2010.

大島まり:「『医療工学分野での新規事業の可能性を探る』—「脳血管内の血流」と「マイクロ流体チップ内のマイクロ流動」の研究から—」, 第5期 イノベーションリーダー交流フォーラム, 2010. 【招待講演】【一般向け】

大島まり:「拡がるエンジニアリングと研究の魅力」, 名古屋大学若手研究者サイエンスフォーラム/女子中高生理系進学推進セミナー, 2010. 【招待講演】【一般向け】

大島まり:「血液の流れを探る」, 駒場祭 公開講座, 2010. 【招待講演】【一般向け】

大島まり:「血液の流れを探る—拡がる医学と工学の接点—」, 高松第一高等学校スーパーサイエンスハイスクール研究開発自然科学講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

大島まり:「循環器系のマルチスケール・シミュレーションと可視化計測」, 大阪大学機械工学専攻熱流体系研究室向け講演会, 2010. 【招待講演】

大島まり:「女性研究者とその卵たちの集い」講演会」, 第4回女性研究者とその卵たちの集い(大阪大学工学部・工学研究科総務室主催), 2010. 【招待講演】【一般向け】

佐藤友喜, 梁夫友, 高木周, 大島まり:「患者個別モデルに対するマルチスケール血流解析」, 第24回数値流体力学シンポジウム, No.B4-5, 2010.

大島まり, Absy Krady, Milan Toma:「血流-血管壁の連成解析における末梢血管網を考慮した境界条件の検討」, 第24回数値流体力学シンポジウム No.F12-5, 2010.

大島まり:「大学との連携による中高教育」, 北区教育委員会公開講座「親子で考える学びと生き方! 進路選びの核心にせまるシリーズ対談第6回」, 2010. 【招待講演】【一般向け】

大島まり:「血液の流れを探る—拡がる工学分野の研究—」, 奈良市立一条高等学校数理科学科 科学講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

大島まり:「循環器系疾患における血流情報分析の果たす役割と今後の展開」, 第50回 WIN 定例講演会・第5回人間情報学会講演会(共催), 2010. 【招待講演】

梁 夫友, 高木 周, 劉 浩, 大島 まり: "Methods for 0-1D coupling and 0-1-3D coupling in hemodynamic modeling", 第23回バイオエンジニアリング講演会講演論文集, pp.527-528, 2011.

Absei Krdey, Milan Toma, Fuyou Liang, S. Takagi, M. Oshima: "Fluid Structure Interaction Simulation of Middle Cerebral Artery Using Multi-Scale Model as Outflow condition", 第23回バイオエンジニアリング講演会講演論文集, pp.533-534, 2011.

大島まり:「循環器系のマルチスケールシミュレーションと可視化計測」, 山形大学工学部 目指せ! 理系マドモワゼ

ル!! 理系女子力 up セミナー, 2011. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「血液の流れを探る — 広がる医工連携研究のすそ野—」, 鹿児島県立大島高等学校教育講演会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

Milan Toma, Absei Krdey, S. Takagi, M. Oshima: "Multi-Scale Strongly Coupled Fluid-Structure Interaction Simulation of Cardiovascular System with the Effect of Peripheral Network", 理研シンポジウム生体力学シミュレーション研究, pp.53-55, 2011.

Fuyou Liang, S. Takagi, Hao Liu, M. Oshima, R. Himeno: "Modeling of The Cardiovascular System and Its Applications to Clinical Treatment, Medeical Technique Development and Large-scale Blood Flow Simulation", 理研シンポジウム生体力学シミュレーション研究, pp.45-52, 2011.

大島まり: 「脳動脈瘤治療における血流シミュレーションの果たす役割と今後の展開」, 東北ブレインアタック 2011 講演会, 2011. 【招待講演】

## 新聞・報道

大島まり: 「中央道」, 山梨日日新聞 2010.09.29 朝刊 23 面, 2010.

大島まり: 「来たれ理系女子! 美人理系マドモワゼルが魅力教えます 山形大学工学部」, 産経新聞 2010.12.26, 2010.

## 受賞

大島まり: 平成 22 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞(理解増進部門「最先端研究を取入れた理科教育活動による科学技術の理解増進」, 文部科学省, 2010 年.

---

## 岡田 猛・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 創造性の認知科学

芸術創作や科学的発見などの創造的認知プロセスの解明

#### 研究業績(2010 年度)

#### 分担著書

横地早和子・岡田猛: 「美術の創造, 感情と思考の科学事典, 362-363」, 海保博之・北村英哉・竹村和久 編, 朝倉書店, 2010 年.

山内保典・岡田猛: 「科学コラボレーション, 感情と思考の科学事典, 360-361」, 海保博之・北村英哉・竹村和久 編,

朝倉書店, 2010 年.

岡田猛・山内保典:「科学の創造, 感情と思考の科学事典, 358-359」, 海保博之・北村英哉・竹村和久 編, 朝倉書店, 2010 年.

縣拓充・岡田猛:「創造的教養の育成, 感情と思考の科学事典, 356-357」, 海保博之・北村英哉・竹村和久 編, 朝倉書店, 2010 年.

岡田猛・横地早和子 :「科学と芸術における創造, 思考と言語 現代の認知心理学第3巻, 161-188」, 楠見孝 編, 北大路書房, 2010 年.

## 雑誌論文

石橋健太郎・岡田猛:「他者作品の模写による描画創造の促進」, 認知科学, Vol.17, No.1, pp.196-223, 2010 年.【査読有】

縣拓充・岡田猛:「「創作の過程や方法を知る」美術展示及びワークショップの効果」, 美術教育学, Vol.31, pp.13-27, 2010 年.【査読有】

縣拓充・岡田猛:「美術の創作活動に対するイメージが表現・鑑賞への動機づけに及ぼす影響」, 教育心理学研究, Vol.58, No.4, pp.438-451, 2010 年.【査読有】

## 国際会議等

Eguchi, M. & Okada, T.: "Art-ethnography to Analyze the Role of Sketches in Car Designing", Short Presentation of The First International Conference on Design Creativity, Kobe International Conference Center, Kobe, JAPAN, 2010.【査読有】

## 講演・口頭発表

Takeshi Okada: "Creative process of Japanese contemporary artists", Special colloquium talk. Department of Fine Arts, University of Nevada, Las Vegas, USA, 2010.

Takeshi Okada: "Putting creativity on display: An art exhibition from the standpoint of cognitive science.", Special Colloquium talk. Learning Research and Development Center, University of Pittsburgh, USA, 2010.

---

## 河口 洋一郎・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### CG によるメカニク造形研究

生き物のように反応するメカニクな立体造形ロボット技術ならびに新伝統芸能を演出しロボティクに凹凸する映像ディスプレイの造形研究

## 情感的なジェモーション(Gemotion)によるインタラクション研究

伝統芸能との融合によるパフォーマンスアートとして、人にインタラクティブに反応する情感的な CG 映像空間の創出、および生き物のように映像に凸凹反応するジェモーション・ディスプレイの研究

## 自己増殖する複雑系のグロースモデル(Growth Model)による超高精細 CG 映像研究

スーパーハイビジョン(8K×4K)による超高精細の CG 生物・物理シミュレーションによる映像生成研究

## 研究業績(2010 年度)

### 作品

Y. Kawaguchi: 「Gemotional Art Space」, The 3rd ACM SIGGRAPH Conference and Exhibition on Computer Graphics and Interactive Techniques in Asia (SIGGRAPH Asia 2010), COEX Convention & Exhibition Center, Seoul, Korea, 2010.

Y. Kawaguchi: 「Gemotional Art Space」, JST Exhibition, Singapore Science Centre, Singapore, 2010.

Y. Kawaguchi: 「Gemotional Bio-Machines」, ASIAGRAPH in Tokyo 2010, Miraikan, Odaiba, Tokyo, Japan, 2010.

### 国際会議等

T. Toyozumi, S. Yonekura, A. Kamimura, R. Tadakuma, and Y. Kawaguchi: "1-DOF spherical mobile robot that can generate two motions", 2010 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS), pp.2884-2889, 2010. 【査読有】

### 講演・口頭発表

河口洋一郎: 「表現と科学の宇宙」, 富山芸術環状線—ART GO ROUND—, 2010. 【招待講演】

河口洋一郎: 「表現と科学のコラボレーション」, 長崎水辺の映像祭, 2010. 【招待講演】

河口洋一郎: 「ジェモーションナルバイオマシンアート」, CG アートコンテスト「COSMOS' 10」, 2010. 【招待講演】

河口洋一郎: 「情感的生命機械体芸術」, 札幌市立大学大学院デザイン研究科開設記念講演会, 2010. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "Self-organized bio-architecture pavilion -possible future for the Expo 2010 Shanghai China", ASIAGRAPH in Shanghai 2010, 2010. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "From spiral to space; self-organized monument using Growth model for EXPO", ASIAGRAPH in Tokyo 2010, 2010. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "Pioneering the Cosmos in the Art and Science", China National Center for Developing Animation, Cartoon & Game Industry (NCACG), Shanghai, China, 2010. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "The Art inspired by evolution", International Conference on Science & Arts at GUCAS, Graduate

University of the Chinese Academy of Sciences, Beijing, China, 2010. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "Growth and Gemotion; Self-organized Creative Cosmos", ACM SIGGRAPH 2010 Award Talk, Los Angeles, US, 2010. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "Animation for Bio Machining Art", The 5th International Conference on E-learning and Game (Edutainment 2010), Northeast Normal University, Beijing, China, 2010. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "The Artistic & Scientific World in 8K Ultra High Definition TV", The 17th International Display Workshops, vol.1: 3-6, International Congress Center, Fukuoka, Japan, 2010. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "8K Ultra High Definition TV for Art", The 1st Brazil Japan Symposium on Advances in Digital Television, the Butantã Campus of the University of São Paulo, São Paulo, Brazil, 2010. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "The 9th International Conference on Virtual-Reality Continuum and Its Applications in Industry (VRCAI 2010), COEX Convention & Exhibition Center, Seoul, Korea", The 9th International Conference on Virtual-Reality Continuum and Its Applications in Industry (VRCAI 2010), COEX Convention & Exhibition Center, Seoul, Korea, 2010. 【招待講演】

K. Nagasawa and Y. Kawaguchi: "Swimming simulation of ammonite by fluid-rigid coupling", ASIAGRAPH in Shanghai 2010, 2010.

Y.Nakagawa and Y.Kawaguchi: "Light-emitting bumpy 3D form display moving dynamically", ASIAGRAPH in Shanghai 2010, 2010.

Y.Nakagawa, S.Yonekura and Y.Kawaguchi: "Super Thin 3D Form Display for Multimodal User Experiences using Vertically Deformation of Leaf Spring and SMA", International Symposium on VR innovation (ISVRI) 2011, SUNTEC Singapore International Convention and Exhibition Center, Singapore, 2010.

## 受賞

Yoichiro Kawaguchi: ACM SIGGRAPH Awards, The Distinguished Artist Award for Lifetime Achievemen「ACM SIGGRAPH Awards, The Distinguished Artist Award for Lifetime Achievemen」, SIGGRAPH 2010, 2010 年.

Y.Nakagawa, S.Yonekura and Y.Kawaguchi: Best Technical Note Award, Super Thin 3D Form Display for Multimodal User Experiences using Vertically Deformation of Leaf Spring and SMA「Best Technical Note Award, Super Thin 3D Form Display for Multimodal User Experiences using Vertically Deformation of Leaf Spring and SMA」, International Symposium on VR innovation (ISVRI) 2011, 2011 年.

---

## 姜 尚中・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 東北アジアにおけるコリアンネットワークの形成

東北アジアにはこの地域を覆った植民地支配と戦争、さらに内戦と冷戦構造のために、数百万人に及ぶコリアン系マイノリティが散在し、言語、文化、社会、経済、アイデンティティなどの違いがありながらも、コリアンネットワークとも言える越境的(トランスナショナル)な移動、連鎖、交流の歴史が続いてきた。本研究は、このようなコリアンネットワークの形成とその歴史を辿りつつ、それが分断された朝鮮半島の平和的な共存と統一にどのような影響を与えることになるのか、その展望を明らかにすることにある。

#### 東北アジア共同体形成の可能性とその展望

グローバル化の進展とともに、世界の多極化が進み、地域統合や地域主義の動きが顕著になりつつあるが、本研究では、このようなリージョナリズムの可能性と展望を、東北アジア地域に即して明らかにしようとするものである。具体的には、地政学的に東北アジア地域の中心に位置する朝鮮半島の共存と統一の問題を視野に、この地域の冷戦構造の終結と冷戦以後の地域秩序の構築がどのようにしたら可能になるのか、その条件と展望を地域主義の構想を通じて明らかにすることにある。

#### 近代日本の国民意識の形成とアジア認識

東アジアにおいて早熟的に国民国家の形成に成功し、日清戦争、日露戦争を通じて近隣アジア諸国との支配・従属関係を築いていくことになる近代日本は、その過程を通じて「日本型オリエンタリズム」ともいべき特異なアジア認識、アジア・イメージを形成していくことになった。本研究は、そのような近代日本のアジア認識の理念型的な構造とその歴史を、学問的な言説や論説、ジャーナリズムなどを素材に浮き彫りしようとするものである。

### 研究業績(2010年度)

#### 著書

姜尚中:「母一オモニー」, 集英社, 2010年.

#### 分担著書

姜尚中、玄武岩:「興亡の世界史(18)大日本・満州帝国の遺産」, 姜尚中、玄武岩 編, 講談社, 2010年.

---

## 越塚 登・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

Ubiquitous Computing

Sensor Network

Operating System

### 研究業績(2010 年度)

#### 分担著書

越塚登: 「5・8 節: 自律移動支援における位置情報の活用」, 土井美和子、柴崎亮介、西尾修一 編, オーム社, 2010 年.

越塚登: 「トピックス: MP T-Kernel」, 電子情報技術産業協会 (JEITA) マイクロプロセッサ専門委員会 編, 電子情報技術産業協会 (JEITA), 2010 年.

#### 雑誌論文

Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Ubiquitous ID: Standards for Ubiquitous Computing and the Internet of Things", IEEE Pervasive Computing, Vol.9, No.4, pp.98-101, 2010 年. 【査読有】

#### 国際会議等

Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "T-Kernel/SS: A Secure Filesystem with Access Control Protection Using Tamper-Resistant Chip", The 5th IEEE International Workshop on Security, Trust, and Privacy for Software Applications (STPSA 2010), COMPSAC 2010 Workshop, pp.134~139, 2010. 【査読有】

M. Fahim Ferdous Khan, Ken Sakamura, Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, and Noboru Koshizuka: "Developing Secure and Efficient Electronic Commerce Applications with eTRON Architecture", 3rd International Symposium on Electronic Commerce and Security (ISECS 2010), pp.247-252, 2010. 【査読有】

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure", The 34th IEEE International Computer Software and Applications Conference (COMPSAC 2010), pp.303-310, 2010. 【査読有】

Lee Fueng Yap, Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "SUCAS: An Architecture for Secure User Centric Attestation in Location-Based Service", The 2nd IEEE International Conference on Information Privacy, Security, Risk and Trust (PASSAT 2010), pp.760-767, 2010. 【査読有】

Keiichi Nakamura, Shinsuke Kobayashi, Hisanori Matsumoto, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "TOA-Based Lateral Distance Measurement System Using UWB Impulse Radio", IEEE 6th International Conference on Wireless and Mobile Computing, Networking and Communications (WiMob 2010), pp.300-307, 2010. 【査読有】

Mohamed Kharrat, Yuki Wakuda, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Adaptive Radial Artery Pulse Rate Measurement using Piezo Film Sensor Based on Ensemble Empirical Mode Decomposition", The 10th IEEE International Conference on Information Technology and Applications in Biomedicine (ITAB 2010), 2010. 【査読有】

Keiichi Nakamura, Hisanori Matsumoto, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Approaching Vehicle Alert System for Pedestrians using UWB Impulse Radio", 21st Annual Symposium on Micro-Nano Mechatronics and Human Sciences (MHS 2010), pp.471-476, 2010. 【査読有】

Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, So Ito, Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Tomonori Usaka, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "eTNet: A Smart Card Network Architecture for Flexible Electronic Commerce Services", The 4th IFIP International Conference on New Technologies, Mobility and Security (NTMS 2011), pp.85~92, 2011. 【査読有】

Lee Fueng Yap, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura: "Secure Consumer-Oriented Integrated Services Using Activity-Based Attestation for Converging Online and In-Store Shopping Experience", International Conference on Information and Computer Applications (ICICA 2011), 2011. 【査読有】

## その他論文

矢代武嗣, 別所正博, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「T-Engine プラットフォームにおけるオープンソースソフトウェアの適応化手法—WebKit の移植におけるケーススタディー」, 第 1 回トロン/ユビキタス技術研究会予稿集, 2010 年.

越塚登: 「情報技術の進展による新たな食品情報伝達の可能性」, 農村と都市をむすぶ, No. 704, 2010 年. 【一般向け】

渡邊徹志, 施可為, 石井健太郎, 湧田雄基, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「拡張現実型情報端末 uScope の提案」, 第 2 回トロン/ユビキタス技術研究会予稿集, 2010 年.

矢代武嗣, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「Qt over T-Kernel Extension 2.0」, 第 3 回トロン/ユビキタス技術研究会予稿集, 2010 年.

## 講演・口頭発表

越塚登: 「組込みリアルタイム OS 入門」, 組込み型リアルタイム OS 講習会: T-Kernel 初級編, 2010.

越塚登: 「組込みシステムの現状と展望」, 平成 22 年度電子情報基礎研修, 産業職能大学校, 2010. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイム OS 入門」, 組込み型リアルタイム OS 講習会: ITRON 初級編, 2010. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイム OS 入門」, 組込み型リアルタイム OS 講習会: ITRON 中級編, 2010. 【招待講演】

越塚登: 「ucode の利活用とその拡大 (Deployment and Applications of ucode)」, 第 2 回上伊那地域の安心安全システム導入活用協議会, 2010. 【招待講演】【一般向け】



Noboru Koshizuka: "Lecture 1: Introduction to Embedded Real-time System", uID 種子師資培育活動, 台湾科技大学, 2010. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: "Lecture 2: TRON Project, T-Engine/T-Kernel Architecture", uID 種子師資培育活動, 台湾科技大学, 2010. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: "Lecture 3: Introduction to T-Kernel", uID 種子師資培育活動, 台湾科技大学, 2010. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: "Lecture 4: Embedded Software Development Methods", uID 種子師資培育活動, 台湾科技大学, 2010. 【招待講演】

越塚登: 「スマート・レジデンスについて～実世界のスマート化技術～」, インフラ・イノベーション研究会 第3回講演会「効率的な施設運営のために」, 2010. 【招待講演】

越塚登: 「組み込みリアルタイム OS 入門」, 組み込み型リアルタイム OS 講習会: T-Kernel 初級編, 2010. 【招待講演】

越塚登: 「ucode を用いたトレーサビリティシステム」, 「食品トレーサビリティの原理と ucode を使った実践」, 食品トレーサビリティ公開講座(2010 年度東京会場), 2010. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: "International Standardization on Internet of Things", The 1st China-Japan Joint Meeting on Ubiquitous Networking Technology, 2010. 【招待講演】

越塚登: 「ユビキタスから Internet of Things へーユビキタス ID アーキテクチャの現状と今」, 第 2 回トロン/ユビキタス技術研究会, 2010. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: "Internet of Things, From the Standpoint of Views of Ubiquitous ID Center", WS 6: From the INTRANet of Things to the INTERNet of Things – Establishing a common architecture for the IoT, Internet of Things 2010 Conference, 2010. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: "New Information Infrastructure Powered by Internet of Things with ucode (An Introduction)", Organized Workshop: New Information Infrastructure Powered by Internet of Things Based on Ubiquitous ID Architecture, Internet of Things 2010 Conference, 2010. 【招待講演】

越塚登, 鈴木高宏: 「次世代交通×ユビキタス～二人の挑戦者が描く 2030 年～」, 東京大学大学院情報学環教育部・駒場祭特別連続講義「日本の未来／メディアの未来」, 2010. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「ココシル(kokosil.net) : ASP+SNS 型ユビキタス空間情報基盤」, TRONSHOW 2011, 2010. 【招待講演】

越塚登: 「コンテンツ流通プラットフォームとユビキタス」, TRONSHOW 2011, 2010. 【招待講演】

越塚登: 「環境負荷低減を目指すスマートレジデンスプロジェクトの取組み」, 第 4 回トロン/ユビキタス技術研究会, 2011.

## 受賞

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: COMPSAC 2010 Best Paper Award 「ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure」, IEEE, 2010 年.

---

## 坂村 健・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### TRON (The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOSの基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOSの開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980年から20年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRONは現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われている。基本哲学はオープンアーキテクチャで、誰でもフリーでソースコードまで含み利用できる。2010年6月に7年かけて地球に帰還した宇宙航空研究開発機構(JAXA)の小惑星探査機「はやぶさ」の制御にもTRONが使われている。

#### Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を1980年初頭に提唱し、研究を進めてきた。これは、現在ではユビキタスコンピューティングやIoT(Internet of Things)と呼ばれている分野である。研究室では、Context-aware Computingや超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行っている。最近では、uIDアーキテクチャの研究に力を入れており、すでに火災報知器等長期にわたりメンテナンスを要する製品のトレーサビリティシステムなどに、数百万のuコードが使われている。

#### Digital Museum

高度なデジタル技術を博物館や美術館に活用することで、新しいミュージアムの確立を提唱し「デジタルミュージアム」と名づけた。デジタル技術を駆使した、資料の収集、保存、修復、展示などの研究を行い、その成果をいかして構築した情報システムや展示システムは、1990年代初めに提唱され、以後多くの研究に影響を与えた。この研究では複数のユーザが同時に共有できる三次元仮想空間システム:MMUD(Multi-Media Multi-User Dungeon)の研究開発やユビキタスコンピューティング技術に基づくユビキタスミュージアム等があり、東京都の東京ユビキタス計画銀座・浜離宮や都庁の空間情報システム・東京ミッドタウンユビキタスアートツアー等で実システムとして運用されている。漢字のような大規模文字セットを使用する国において技術的な限界による文化制限を行わないですむ多言語コンピュータの研究も進め、その成果をふまえて17万字以上の文字を扱えるシステムの構築にも成功している。

### 研究業績(2010年度)

#### 雑誌論文

Noboru Koshizuka and Ken Sakamura: "Ubiquitous ID: Standards for Ubiquitous Computing and the Internet of Things", IEEE Pervasive Computing, Vol.9, No.4, pp.98-101, 2010年。【査読有】

#### 国際会議等

Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "T-Kernel/SS: A Secure Filesystem with Access Control Protection Using Tamper-Resistant Chip", The 5th IEEE International

Workshop on Security, Trust, and Privacy for Software Applications (STPSA 2010), COMPSAC 2010 Workshop, pp.134–139, 2010. 【査読有】

M. Fahim Ferdous Khan, Ken Sakamura, Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, and Noboru Koshizuka: “Developing Secure and Efficient Electronic Commerce Applications with eTRON Architecture”, The 3rd International Symposium on Electronic Commerce and Security (ISECS 2010), pp.247–252, 2010. 【査読有】

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: “ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure”, The 34th IEEE International Computer Software and Applications Conference (COMPSAC 2010), pp.303–310, 2010. 【査読有】

Lee Fueng Yap, Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: “SUCAS: An Architecture for Secure User Centric Attestation in Location-Based Service”, The 2nd IEEE International Conference on Information Privacy, Security, Risk and Trust (PASSAT 2010), pp.760–767, 2010. 【査読有】

Keiichi Nakamura, Shinsuke Kobayashi, Hisanori Matsumoto, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: “TOA-Based Lateral Distance Measurement System Using UWB Impulse Radio”, IEEE 6th International Conference on Wireless and Mobile Computing, Networking and Communications (WiMob 2010), pp.300–307, 2010. 【査読有】

Mohamed Kharrat, Yuki Wakuda, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: “Adaptive Radial Artery Pulse Rate Measurement using Piezo Film Sensor Based on Ensemble Empirical Mode Decomposition”, The 10th IEEE International Conference on Information Technology and Applications in Biomedicine (ITAB 2010), 2010. 【査読有】

Keiichi Nakamura, Hisanori Matsumoto, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: “Approaching Vehicle Alert System for Pedestrians using UWB Impulse Radio”, The 21st Annual Symposium on Micro-Nano Mechatronics and Human Sciences (MHS 2010), pp.471–476, 2010. 【査読有】

Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, So Ito, Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Tomonori Usaka, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: “eTNet: A Smart Card Network Architecture for Flexible Electronic Commerce Services”, The 4th IFIP International Conference on New Technologies, Mobility and Security (NTMS 2011), pp.85–92, 2011. 【査読有】

Lee Fueng Yap, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: “Secure Consumer-Oriented Integrated Services Using Activity-Based Attestation for Converging Online and In-Store Shopping Experience”, International Conference on Information and Computer Applications (ICICA 2011), 2011. 【査読有】

## その他論文

矢代武嗣, 別所正博, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「T-Engine プラットフォームにおけるオープンソースソフトウェアの適応化手法—WebKit の移植におけるケーススタディ—」, 第 1 回トロン/ユビキタス技術研究会予稿集, 2010 年.

渡邊徹志, 施可為, 石井健太郎, 湧田雄基, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「拡張現実型情報端末 uScope の提案」, 第 2 回トロン/ユビキタス技術研究会予稿集, 2010 年.

矢代武嗣, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「Qt over T-Kernel Extension 2.0」, 第 3 回トロン/ユビキタス技術研究会予稿集, 2010 年.

新堂克徳, 越塚登, 坂村健: 「ucRを利用した空間情報基盤」, 第4回トロン/ユビキタス技術研究会予稿集, 2011年.

## 講演・口頭発表

坂村健: 「トロンの生みの親が語る、組込みの未来」, 第15回組込みシステム開発技術展 専門セミナー, 2010年5月14日, 2010. 【特別講演】

Ken Sakamura: "Technology for Future Home and Community in the Aged Society", Pre-Conference of the 8th International Conference on Smart Homes and Health Telematics, 2010年6月21日, 2010. 【招待講演】

Ken Sakamura: "Ubiquitous Computing and Universal Design", The 8th International Conference on Smart Homes and Health Telematics, 2010年6月22日, 2010. 【招待講演】

坂村健: 「T-Kernel 2 に向けて」, 第1回トロン/ユビキタス技術研究会, 2010年6月25日, 2010. 【基調講演】

坂村健: 「さまざまな情報媒体とユビキタス」, 食品トレーサビリティ講習会, 2010年7月26日, 2010. 【招待講演】

坂村健: 「世界を変える二つの設計—技術設計と制度設計—」, 2010台日科学技術フォーラム, 2010年9月14日, 2010. 【招待講演】

坂村健: 「オープンアーキテクチャの世界へ」, 人間教育講座—社会の中でどう生きるか 第33回, 2010年10月28日, 2010. 【招待講演】

坂村健: 「特別講演」, 平成22年度 都市基盤整備事業推進大会, 2010年11月1日, 2010. 【招待講演】

坂村健: 「電子行政の課題 —技術設計と制度設計—」, 地方自治情報化推進フェア 2010, 2010年11月9日, 2010. 【招待講演】

坂村健: 「世界の組込み技術をとりまく環境変化とT-Engine/T-Kernel」, ARM Forum 2010, 2010年11月11日, 2010. 【特別講演】

坂村健: 「新しい時代の組込み技術—進化するTRON」, Embedded Technology 2010, 2010年12月3日, 2010. 【特別講演】

坂村健: 「ユビキタスとイノベーションで拓く日本の未来」, 品川区新製品・新技術クラスターフェア 2011, 2011年2月4日, 2011. 【招待講演】

坂村健: 「ネットワーク時代における住民と行政の新しい関係」, 情報化シンポジウム・イン・宮城, 2011年2月8日, 2011. 【招待講演】

坂村健: 「TRON 電脳住宅の20年」, T-Engine フォーラムシンポジウム, 2011年2月22日, 2011. 【基調講演】

坂村健: 「ビジネス・モデル・イノベーション基盤としてのユビキタス・コンピューティング」, 2011年ビジネスモデル学会春季大会, 2011年3月26日, 2011. 【招待講演】

## 新聞・報道

坂村健: 「時代の風: 端末としての電気自動車 所有意識捨てる時代に」, 毎日新聞, 2010年4月18日, 2010.

坂村健:「正論: 明暗分ける「人材流動性」の低さ」, 産経新聞, 2010年5月18日, 2010.

坂村健:「時代の風: ソーシャルログの時代へ 外部化するプライバシー」, 毎日新聞, 2010年5月23日, 2010.

坂村健:「時代の風: 「QOLT」の時代へ 人生の質 向上の技術」, 毎日新聞, 2010年6月27日, 2010.

坂村健:「時代の風: 「病は気から」 白黒付けないという智慧」, 毎日新聞, 2010年8月1日, 2010.

坂村健:「時代の風: 高齢者の詐欺被害「情報弱者」のサポートを」, 毎日新聞, 2010年9月6日, 2010.

坂村健:「正論: 難しい時代だから「正義」を語る」, 産経新聞, 2010年10月7日, 2010.

坂村健:「時代の風: ノーベル賞の季節 社会への影響力を重視」, 毎日新聞, 2010年10月10日, 2010.

坂村健:「時代の風: 「ガラパゴス」の時代 新しい日本の可能性」, 毎日新聞, 2010年11月14日, 2010.

坂村健:「正論: 「メガリーク」の時代が到来した」, 産経新聞, 2010年12月16日, 2010.

坂村健:「時代の風: 2.0の時代 変革を自ら起こす力を」, 毎日新聞, 2010年12月19日, 2010.

坂村健:「時代の風: 電子ブックの未来 作家と読者 気になる関係」, 毎日新聞, 2011年1月30日, 2011.

坂村健:「時代の風: 謝辞の言い方「言葉」に命かける米国人」, 毎日新聞, 2011年3月6日, 2011.

---

## 佐倉 統・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 科学技術コミュニケーション

科学技術の専門家と非専門家間のコミュニケーションを、円滑化、活性化するための方法論や制度策定および科学的・文明論的な理論枠組みの構築。

#### 脳神経倫理(ニューロエシックス)

脳神経科学の倫理的、社会的、哲学的諸問題を考察し、教育現場や社会とのコミュニケーションなどにおける実際の問題の解決をめざす。

#### 進化生物学史、動物行動学史

とくに日本における進化生物学、動物行動学の歴史を、諸外国の事例と比較しつつ、特徴を抽出する。

## 研究業績(2010年度)

### 著書

佐倉統(監修):「知識ゼロからのダーウィン進化論入門」, 東京: 幻冬舎, 2010年.

### 分担著書

青山剛昌(原作)太田勝・窪田一裕(まんが)馬場悠男・佐倉統(監修):「名探偵コナン推理ファイル 人類の謎」, 井手口悦久・カラビナ(構成)編, 東京: 小学館, 2010年.

### 雑誌論文

川人光男・佐倉統:「ブレイン・マシン・インタフェース BMI 倫理 4 原則の提案」, 現代化学, Vol.471, pp.21-25, 2010年.

Sakura O. and Mizushima N.: "Towards the Governance of Neuroscience: Neuroethics in Japan with Special Reference to Brain\_Machine Interface (BMI).", East Asian Science, Technology and Society: An International Journal, Vol.4, No.1, pp.137-144, 2010年. 【査読有】

山野井貴浩・佐倉統:「高校生物Ⅱの『進化』に関する教科書分析—進化の定義・自然選択・突然変異・種に注目して—」, 生物科学, Vol.62, No.1, pp.39-45, 2010年.

川人光男・佐倉統:「ブレイン・マシン・インタフェース BMI 倫理 4 原則の提案」, 現代化学, Vol.471, pp.21-25, 2010年.

Sakura O. and Mizushima N.: "Towards the Governance of Neuroscience: Neuroethics in Japan with Special Reference to Brain\_Machine Interface (BMI).", East Asian Science, Technology and Society: An International Journal, Vol.4, No.1, pp.137-144, 2010年. 【査読有】

山野井貴浩・佐倉統:「高校生物Ⅱの『進化』に関する教科書分析—進化の定義・自然選択・突然変異・種に注目して—」, 生物科学, Vol.62, No.1, pp.39-45, 2010年.

### 国際会議等

Sakura, O., Mizushima, N. and Akabayashi, A.: "Encouraging scientists to be more ELSI concerned: Benchside consultation for BMI researchers.", The Eleventh Asian Bioethics Conference (ABC11) Fifth UNESCO Asia-Pacific School of Ethics Roundtable "Mundialization, Bioethics and Policy", National University of Singapore (NUS), Singapore., 2010. 【査読有】

Isobe, T., Mizushima, N. and Sakura, O.: "How is Public Perception Different from Expert Perception about BMI (Brain-Machine Interface) ? : Toward Constructing the Relationship between BMI and Society.", Society for Social Studies of Science(4S) Annual Meeting, University of Tokyo, Japan., 2010. 【査読有】

Mizushima, N., Isobe, T. and Sakura, O.: "Ethics Consultation in the Midstream: Implications for Scientific Governance from within.", Society for Social Studies of Science(4S) Annual Meeting, University of Tokyo, Japan., 2010. 【査読有】

Kase, I., Otsu, N., Mizushima, N. and Sakura, O.: "NETA-Science: scientific knowledge without requiring the correctness --Implication from science boom in Japan. [Poster Presentation]", The 11th International Conference on Public Communication of Science & Technology (PCST-2010), NASC Complex, New Delhi, India., 2010. 【査読有】

Uchida, M., Nagami, F. and Sakura, O.: "Making the most of other cultures—Attract people's attention by "Blending science": Case Studies in "Kitchen Science". [Poster Presentation]", The 11th International Conference on Public Communication of Science & Technology (PCST-2010), NASC Complex, New Delhi, India., 2010. 【査読有】

Sakura, O., Mizushima, N. and Akabayashi, A.: "Encouraging scientists to be more ELSI concerned: Benchside consultation for BMI researchers.", The Eleventh Asian Bioethics Conference (ABC11) Fifth UNESCO Asia-Pacific School of Ethics Roundtable "Mundialization, Bioethics and Policy", National University of Singapore (NUS), Singapore., 2010. 【査読有】

Isobe, T., Mizushima, N. and Sakura, O.: "How is Public Perception Different from Expert Perception about BMI (Brain-Machine Interface) ? : Toward Constructing the Relationship between BMI and Society.", Society for Social Studies of Science(4S) Annual Meeting, University of Tokyo, Japan., 2010. 【査読有】

Mizushima, N., Isobe, T. and Sakura, O.: "Ethics Consultation in the Midstream: Implications for Scientific Governance from within.", Society for Social Studies of Science(4S) Annual Meeting, University of Tokyo, Japan., 2010. 【査読有】

Kase, I., Otsu, N., Mizushima, N. and Sakura, O.: "NETA-Science: scientific knowledge without requiring the correctness --Implication from science boom in Japan. [Poster Presentation]", The 11th International Conference on Public Communication of Science & Technology (PCST-2010), NASC Complex, New Delhi, India., 2010. 【査読有】

Uchida, M., Nagami, F. and Sakura, O.: "Making the most of other cultures—Attract people's attention by "Blending science": Case Studies in "Kitchen Science". [Poster Presentation]", The 11th International Conference on Public Communication of Science & Technology (PCST-2010), NASC Complex, New Delhi, India., 2010. 【査読有】

## その他論文

佐倉統: 「脳科学と社会の関係はいかにあるべきか?」, 岩田誠・河村満(編)『〈脳とソーシャル〉ノンバーバルコミュニケーションと脳——自己と他者をつなぐもの』, pp.191-205., 2010年.

佐倉統: 「疑似科学を謳歌する文化人たちはなぜ増殖するのか——脳科学の事例を中心に」, 南後由和・加島卓(編)『文化人とは何か?』, pp.112-131., 2010年. 【一般向け】

佐倉統: 「日本の社会にとってダーウィンとは何なのか?」, 松永俊男(編)『ダーウィンの世界——ダーウィン生誕200年 —その歴史的・現代的意義——』〈学術会議叢書 17〉, pp.195-207., 2010年.

## 講演・口頭発表

山野井貴浩・鈴木一臣・武村政春・佐倉統: 「大学生および生物教員の進化観から中等・高等教育における進化教育を考える」, 日本理科教育学会第60回全国大会, 山梨大学, 2010.

平田雅之・柳澤啄史・後藤哲・松下光次郎・鈴木隆文・横井浩史・佐倉統・藤井直敬・牛場潤一・吉田毅・佐藤文博・齋藤洋一・貴島晴彦・神谷之康・吉峰俊樹: 「ヒト皮質脳波を用いたBMI臨床応用への統合的アプローチ」, Neuro2010, 神戸コンベンションセンター, 2010.

熱川豊紘・佐倉統: 「科学技術政策から見た理化学研究所脳科学総合研究センターの設立【ポスター】」, Neuro2010, 神戸コンベンションセンター, 2010.

加瀬郁子・大津奈都子・水島希・佐倉統: 「『ネタ科学』としての脳科学ブーム: 脳神経科学コミュニケーションへの示唆【ポスター】」, Neuro2010, 神戸コンベンションセンター, 2010.

安西祐一郎・佐倉統・浅田稔・細田耕・國吉康夫・石黒浩・乾敏郎(パネリスト):「パネルディスカッション」, JST ERATO 浅田共創知能システムプロジェクト シンポジウム「ロボットで発達を科学する」, 2010. 【招待講演】

佐倉統(司会):「智慧の環・学びの府——情報知の熱帯雨林の10年——」, 東京大学大学院情報学環・学際情報学府創立10周年記念シンポジウム, 2010.

佐倉統:「脳科学の倫理」, エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所主催応用脳科学アカデミー共通コース「脳科学概論／脳と倫理」第1回, 2010. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「現代の科学技術と人間観～脳神経科学を中心に～」, 平成22年度裁判基盤研究会「生命科学」, 2010. 【招待講演】【一般向け】

Sakura, O.(主催:企画準備のみで当日は不参加): Session “Ethics, Philosophy and Governance of Neuroscience in East Asia.”, Society for Social Studies of Science(4S) Annual Meeting, 2010.

佐倉統(座長)Michael E. Goldberg(座長)片山容一・深谷親・大島秀規・Eric Racine・Ulrich Wagner・Henrik Walter・石原孝二・Sarah A. Dunlop(演者)Michael E. Goldberg・赤林朗(指定討論者): “SfN, FENS, ANS, 脳プロシンポジウム: ニューロモジュレーションの倫理—心の治療・増強・操作に関する脳神経科学と他分野の対話 Ethics of Neuromodulation: Conversations between Neuroscience and Other Fields on the Treatment, Enhancement and Manipulation of Mind.”, Neuro2010, 2010.

佐倉統:「生命と科学技術—閉塞感は打破できるのか(5)」, 朝日カルチャーセンター湘南, 2010. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「「ダーウィン」人類の知の遺産」, 東京自由大学, 2010. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「総合的な学習の時間」, 東京都立日比谷高等学校, 2010. 【招待講演】【一般向け】

## 新聞・報道

佐倉統(サイエンスコメンテーター):「サイエンスミステリー2011 見えざる禁断の世界——極限の運命と闘う人々——」, フジテレビ, 2011.

佐倉統:「ガリレオチャンネル 脳ブームの落とし穴——なぜ神経神話を信じるのか?——」, 東京 MX テレビ, 2011.

---

## 佐藤 洋一・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 視覚的顕著性を用いた視線推定

本研究では、視覚的顕著性に基づく視線推定手法を提案する。提案手法は、映像を鑑賞中に映像と同期して獲得した目画像のみを用いて注視点推定器を構成することを目的とする。鍵となるアイデアは、映像から抽出した視覚的顕著性マップを注視点座標の存在確率分布として捉えることにある。提案手法の有効性は複数の映像と人物の組み合わせで検証し、平均誤差6度の精度で注視点推定が可能になることを示した。



## DLP プロジェクタを用いた分光反射率の高速計測

DLP プロジェクタの特性を利用してシーンの分光反射率を高速に計測するシステムを提案する。DLP プロジェクタは、カラーホイールを高速に回転させることで投影光の色を切り替えるために、光源色を高速に変えながらシーンを照明することが出来る。本研究では、高速カメラと組み合わせた提案システムが、100Hz という高速でシーンの分光反射率を計測出来ることを示した。

## 色彩調和に基づく写真の審美的品質の識別

本研究では、写真の審美的な品質を決める色彩調和について議論し、品質識別の性能向上に寄与する色彩調和の評価手法を提案する。従来の色彩調和モデルは、単色パッチの組み合わせからなる配色などを刺激とする心理実験に基づいているため、様々な色が複雑に分布する写真の色彩調和を記述することが出来なかった。提案手法では、写真が単純な配色の微小パッチの集合により構成されていると仮定して、写真の色彩調和を評価した。大規模データセットを用いた実験を行い、提案手法の有効性を示した。

## 研究業績(2010 年度)

### 雑誌論文

菅野裕介, 松下康之, 佐藤洋一, 小池英樹: 「マウスを利用した逐次学習による自由頭部姿勢下での視線推定」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J93-D, No.8, pp.1512-1522, 2010 年. 【査読有】

杉村大輔, 木谷クリス真実, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 杉本晃宏: 「歩容特徴と局所的見えを考慮した特徴点軌跡のクラスタリングによる混雑環境下人物追跡」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J93-D, No.8, pp.1512-1522, 2010 年. 【査読有】

岡部孝弘, 佐藤いまり, 佐藤洋一: 「陰に基づく符号化による法線推定」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J93-D, No.8, pp.1281-1291, 2010 年. 【査読有】

西山正志, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 佐藤いまり: 「複数の注目領域を用いた写真の主観的品質の識別」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J93-D, No.8, pp.1364-1374, 2010 年. 【査読有】

Michihiro Kobayashi, Takahiro Okabe, Yoichi Sato: "Detecting Forgery from Static-Scene Video Based on Inconsistency in Noise Level Functions", IEEE Transactions on Information Forensics and Security, 2010, Vol.5, No.4, pp.883-892, 2010 年. 【査読有】

Sosuke Matsui, Takahiro Okabe, Mihoko Shimano, Yoichi Sato: "Image Enhancement of Low-Light Scenes with Near-Infrared Flash Images", IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications, 2010, Vol.2, pp.215-223, 2010 年. 【査読有】

Yuyu Liu, Yoichi Sato: "Recovery of Audio-to-Video Synchronization through Analysis of Cross-Modality Correlation", Pattern Recognition Letters, Vol.31, No.8, pp.696-701, 2010 年. 【査読有】

Takahiro Okabe, Yuhi Kondo, Kris M. Kitani, Yoichi Sato: "Recognizing Multiple Objects Based on Co-occurrence of Categories", Progress in Informatics, 2010, No.7, pp.43-52, 2010 年. 【査読有】

Chung-Lin Wen, Bing-Yu Chen, Yoichi Sato: "Video Segmentation with Motion Smoothness", IEICE Transactions on Information and Systems, Vol.E93-D, No.4, pp.873-881, 2010 年. 【査読有】

Yuyu Liu, Yoichi Sato: "Segmentation of Speaker", IEICE Transactions on Information and Systems, Vol.E 93-D, No.7, pp.1965-1975, 2010 年. 【査読有】

## 国際会議等

Takashi Ichihara, Shiro Kumano, Daisuke Yamaguchi, Yoichi Sato, Yoshihiro Suda, Li Shunguang: "Evaluation of eco-driving skill using traffic signals status information", Proc. ITS World Congress (ITSWC2010), 2010. 【査読有】

Teera Siriteerakul, Yoichi Sato: "Investigating image metric features for classifying head pose orientation", Proc. International Technical Conference on Circuits/System, Computer and Communications (ITC-CSCC 2010), pp.1243-1244, 2010. 【査読有】

Yusuke Sugano, Yasuyuki Matsushita, Yoichi Sato: "Calibration-free gaze sensing using saliency maps", Proc. IEEE CS Conf.Computer Vision and Pattern Recognition (CVPR2010), pp.2667-2674, 2010. 【査読有】

Gabriel Pablo Nava, Yosuke Yasuda, Yoichi Sato, Shinichi Sakamoto: "In Situ estimation of the surface acoustic impedance in realistic interiors by an acoustical inverse approach", Proc. 17th International Congress on Sound and Vibration, 2010. 【査読有】

Abden Hadid, Masashi Nishiyama, Yoichi Sato: "Recognition of blurred faces via facial deblurring combined with blur-tolerant descriptors", Proc. IAPR International Conference on Pattern Recognition(ICPR2010), pp.1160-1163, 2010. 【査読有】

Teera Siriteerakul, Daisuke Sugimura, Yoichi Sato: "Head Pose Classification from Low Resolution Images using Pairwise Non-Local Intensity and Color Differences", Proc.Pacific-Rim Symposium on Image and Video Technology(PSIVT 2010), pp.362-369, 2010. 【査読有】

Shuai Han, Imari Sato, Takahiro Okabe, Yoichi Sato: "Fast Spectral reflectance recovery using DLP projector", Proc. Asian Conference on Computer Vision(ACCV2010), pp.323-335, 2010. 【査読有】

Mihoko Shimano, Takahiro Okabe, Yoichi Sato: "Video temporal super-resolution based on self-similarity", Proc. Asian Conference on Computer Vision (ACCV 2010), pp.93-106, 2010. 【査読有】

## その他論文

山口大輔,市原隆司,熊野史朗,佐藤洋一,須田義大,李曙光:「自車状況と周囲状況を考慮したエコドライブレベルの評価」, ITS シンポジウム 2010, 2010 年. 【査読有】

山口大輔, 市原隆司, 熊野史朗, 佐藤洋一, 須田義大, 李曙光:「信号提示を考慮したエコドライブ評価」, 自動車技術会秋季大会, 2010 年. 【査読有】

木谷クリス真実, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 杉本晃宏:「エゴモーションを利用した自己動作カテゴリの教師無し学習」, 画像の認識・理解シンポジウム MIRU2010, 2010 年. 【査読有】

島野美保子, 岡部孝弘, 佐藤いまり, 佐藤洋一:「自己相似性に基づく高時間分解能映像の生成」, 画像の認識・理解シンポジウム MIRU2010, 2010 年. 【査読有】

菅野裕介, 松下康之, 佐藤洋一:「視覚的顕著性を用いた視線推定」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), 2010 年. 【査読有】

西山正志、岡部孝弘、佐藤いまり、佐藤洋一:「局所領域の相対的な色分布を用いた写真の色彩調和の評価」, 日本色彩学会 視覚情報基礎研究会, 2010 年. 【査読有】

小林理弘、岡部孝弘、佐藤洋一:「複数のノイズレベル関数の同時推定による映像改ざん検出」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), 2010 年. 【査読有】

西山正志、岡部孝弘、佐藤いまり、佐藤洋一:「色彩調和を用いた写真の主観的品質の識別」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), 2010 年. 【査読有】

小林理弘、松下康之、岡部孝弘、佐藤洋一:「校正誤差を考慮した照度差ステレオからの形状復元」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), 2010 年. 【査読有】

佐藤いまり、Art Subpa-Asa、Shuai Hani、岡部孝弘、佐藤洋一:「波長多重光源を利用した分光反射率の計測」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), pp.1555-1559, 2010 年. 【査読有】

杉村大輔、木谷クリス真実、岡部孝弘、佐藤洋一、杉本晃宏:「混雑環境下における人物追跡のための歩容特徴に基づく動線の対応付け」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), pp.1169-1176, 2010 年. 【査読有】

佐藤いまり、Art Subpa-Asa、Shuai Han、岡部孝弘、佐藤洋一:「分光基底光源を利用した分光反射率の計測」, 画像センシングシンポジウム(SSII2010), 2010 年. 【査読有】

Shuai Han, Imari Sato, Takahiro Okabe, Yoichi Sato: "Fast Multispectral Imaging", 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU 2010), 2010 年. 【査読有】

杉村大輔、佐藤洋一:「行動特徴に基づく人物追跡」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2010-CVIM-172-36 pp.1-16, 2010 年.

Lumei Su, Shiro Kumano, Kazuhiro Otsuka, Dan Mikami, Junji Yamato, Eisaku Maeda, Yoichi Sato: "Subtle facial expression recognition based on expression category-dependent motion magnification", FIT2010, 2010 年.

## 講演・口頭発表

佐藤洋一:「ユビキタスな注視センシングに向けて」, 動的画像処理実用化ワークショップ DIA2011, 2010. 【招待講演】

## 受賞

木谷クリス真実, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 杉本晃宏: 電子情報通信学会 論文賞「視覚的文脈を用いた人物動作のカテゴリ学習」, (社)電子情報通信学会, 2010 年.

佐藤洋一: 日本学術振興会賞「デジタルコンテンツ作成のためのイメージベースドモデリング技術に関する先駆的研究」, 日本学術振興会, 2010 年.

佐藤洋一: IPSJ 50th Anniversary Paper Award「Image Enhancement of Low-Lights Scenes with Near-Infrared Flash Images」, IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications, 2010 年.

Shuai Han, 佐藤いまり, 岡部孝弘, 佐藤洋一: Best Student Paper Award「Fast spectral reflectance recovery using DLP projector」, Asian Conference on Computer Vision(ACCV 2010), 2010 年.

## 特許

熊野史朗, 大塚和弘, 三上弾, 大和淳司, 前田英作, 佐藤洋一, Lumei Su:「表情学習装置、表情認識装置、表情学習方法、表情学習プログラムおよび表情認識プログラム」, 特願 2010-143751, 2010 年 06 月.

熊野史朗, 大塚和弘, 三上弾, 大和淳司, 前田英作, 佐藤洋一, Lumei Su:「顔表情増幅装置、表情認識装置、顔表情増幅方法、表情認識方法、およびプログラム」, 特願 2010-146531, 2010 年 06 月.

倉橋誠, 佐藤洋一:「映像処理装置および方法」, 特願 2010-169673, 2010 年 07 月.

佐藤洋一, 島野美保子, 岡部孝弘, 佐藤いまり:「佐藤洋一, 島野美保子, 岡部孝弘, 佐藤いまり」, 特願 2010-248157, 2010 年 11 月.

---

## 須藤 修・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ICTの発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、中国、日本という 21 世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム (Regional Economic System) の動向を比較検討しながら、ICTの発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係について、またICTの発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。

#### センサーネットワークを用いた予防医療システムに関する研究

産・官・学の連携を促しながら、センサーネットワーク、高度データマイニング、グリッド・コンピューティングを組み合わせた ICT 基盤を用いて、糖尿病を中心とした生活習慣病の予防に関する実証実験を推進し、その実験と連動させて、産・官・学・民の共創を活性化させるセンサーネットワーク基盤地域コミュニティの形成とそのガバナンスに関する制度構想の研究を進めたいと考えている。そして、電子行政および医療情報基盤について、社会基盤としての ICT プラットフォームに関する政策科学的研究を推進する。

#### 地球環境問題と持続可能な発展に関する研究

深刻化している地球環境破壊について検討するとともに、IT及びバイオテックの動向とネットワークを基盤にした経済活動の動向を関連させながら、環境保全型(循環型)の持続可能な地域経済発展について研究を行う。

### 研究業績(2010 年度)

#### 分担著書

Toshio Obi, Osamu Sudoh, Jiro Kokuryo, Nagaaki Ohyama: "The Innovative CIO and e-Participation in e-Government Initiatives", Toshio obi ed., IOS Press, pp.73-85, 2010 年.

Osamu Sudoh: "The Future of the Internet(pp.458-470)", European Commission DG Information and Media ed., European Commission, 2010 年.

須藤修:「ICTを活用した地域社会発展」, 財団法人地域活性化センター 編, 財団法人地域活性化センター, pp.4-15, 2011 年.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造:「多様な情報とアイデアを結び付け、新たな価値を創る」, 喜連川優・安達淳 編『info-plosion—情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究』, 国立情報学研究所, pp.88-89, 2011 年.【分担執筆】

## 雑誌論文

須藤修:「日本に電子政府をどう定着させるか」, 都市問題, No.101, pp.48-56, 2010 年.【一般向け】

服部祐一、竹森正起、井上創造、平川剛、須藤修:「携帯情報端末による大規模行動情報収集システムの運用と基礎評価」, 情報処理学会 DICOMO2010 論文集, pp.583-590, 2010 年.【査読有】

須藤修、後藤玲子、木下裕美子:「e-Science の確立に向けて—地球環境問題への新たなデータセントリックアプローチ」, 2010 年日本社会情報学会 (JASI&JSIS) 合同研究大会研究発表論文集, pp.255-258, 2010 年.

邱蘭婷、須藤修:「医療情報化についての考察—日台における電子カルテシステムに関する政策比較」, 2010 年日本社会情報学会 (JASI&JSIS) 合同研究大会研究発表論文集, pp.70-75, 2010 年.

Osamu Sudoh and Yumiko Kinoshita: "Transformative and Innovative e-Government for the Next Generation: Linkages of Back Offices for One-stop Portal, Marijn Janssen, Winfried Lamersdorf, Jan Pries-Heje and Michael Rosemann", E-Government, E-Services and Global Processes, Springer-Verlag, pp.111-124, 2010 年.【査読有】

趙章恩、須藤修:「ネットワーク高度化によるモバイル産業構造変化分析—韓国スマートフォン・プラットフォーム戦略を中心に」, 2010 年日本社会情報学会 (JASI&JSIS) 合同研究大会研究発表論文集, pp.120-123, 2010 年.

須藤修:「次世代電子行政サービスと自治体クラウド」, 月刊自治フォーラム, No.614, pp.11-17, 2010 年.【一般向け】

## 国際会議等

Yuichi Hattori, Sozo Inoue, Go Hirakawa, Osamu Sudoh.: "Gathering Large Scale Human Activity Information Using Mobile Sensor Devices", International Workshop on Network Traffic Control, Analysis and Applications, pp.708-713, 2010.【査読有】

## その他論文

須藤修:「ネットワーク社会における情報セキュリティ」, 第 112 回東京大学公開講座第企画員会編『東京大学公開講座<防ぐ>講義要項』, pp.33-36, 2010 年.【一般向け】

須藤修:「センサーネットワーク予防医療に関する研究」, 東京大学産学連携協議会運営本部編『先端医療を支える科学技術』, pp.95-102, 2010 年.

須藤修:「Economic and Social Impact of the Evolution of Computer Network」, 電子情報通信学会通信ソサイエティ 第 13 回日独シンポジウム実行委員会編『第 13 回日独シンポジウム開催報告書』, pp.14-15, 2010 年.

喜連川優、松岡聡、松山隆司、須藤修、安達淳:「ハード・ソフトの基礎技術から、コミュニケーションやインフラの構築まで」, 喜連川優・安達淳 編『info-plosion—情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究』, pp.6-12, 2011年.

## 講演・口頭発表

須藤修:「電子自治体と地域イノベーション」, 財団法人地方自治情報センター『電子自治体推進セミナー』(全国町村議員会館、2010年4月15日), 2010.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「新世代ネットワークの戦略的活用」, 新世代ネットワーク推進フォーラム主催『新世代ネットワーク推進フォーラム総会』(銀座フェニックスプラザ、2010年4月2日), 2010.【招待講演】

須藤修:「クラウドコンピューティング」, 東京電力情報通信事業部主催『東京電力情報通信事業部講演会』(東新ビル、2010年4月21日), 2010.【招待講演】

須藤修:「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『平成22年度文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」領域全体会議』(学術総合センター—橋記念講堂、2010年4月22日), 2010.

須藤修:「ポスト情報爆発—Data-Intensive Science and Social Impact」, 情報爆発文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『平成22年度文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」領域全体会議』(学術総合センター—橋記念講堂、2010年4月23日), 2010.

須藤修:「ネットワーク社会における情報セキュリティ」, 第112回東京大学公開講座第企画委員会主催『東京大学公開講座<防ぐ>』(東京大学安田講堂、2010年4月24日), 2010.【一般向け】

須藤修:「電子政府とクラウドコンピューティング」, Open Government Cloud Consortium 主催『OGC全国会議』(メルパルク東京、2010年4月26日), 2010.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「電子自治体と地域イノベーション」, 財団法人地方自治情報センター『電子自治体推進セミナー』(チサンホテル博多、2010年4月28日), 2010.【招待講演】【一般向け】

須藤修、宇治則治、岸本周平、関本和一、松崎淳、廉宗淳:「討論・これからの電子政府・電子自治体を考える」, NPO中央コリドー情報通信研究所主催『先行する韓国の行政改革・日本が目指す国民本位の電子行政』(東京大学安田講堂、2010年5月19日), 2010.【一般向け】

須藤修:「クラウドと電子自治体—e-Gov/Health-ICTとイノベーション」, 地方自治体情報システム研究会平成22年度総会(東京コンファレンスセンター品川、2010年5月20日), 2010.【招待講演】

須藤修:「電子自治体と地域イノベーション」, 財団法人地方自治情報センター『電子自治体推進セミナー』LASDEC大阪(ニューオーサカホテル、2010年5月24日), 2010.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「クラウドの動向と電子自治体」, マイクロソフト株式会社主催『電子自治体戦略会議』(東京国際フォーラム、2010年5月26日), 2010.【招待講演】【一般向け】

中島直樹、鶴田紘子、井上創造、須藤修:「糖尿病疾病管理事業の生体装着センサネットワークによる効率・安全性向上実験」, 第14回日本医療情報学会春季学術大会(高松、2010年5月28日), 2010.

須藤修:「クラウドとNWGN」, 新世代ネットワーク推進フォーラム主催『第 11 回新世代ネットワーク推進フォーラムアセスメントWG会合』(総務省、2010 年 6 月 10 日), 2010.

須藤修:「センサーネットワーク予防医療に関する研究」, 東京大学産学連携協議会運営本部主催『先端医療を支える科学技術—新たな医工連携の創出を目指して』(東京大学山上会館、2010 年 6 月 11 日), 2010.

須藤修:「我が国のICT戦略と電子政府」, 福島県高度情報化推進協議会主催『情報通信月間特別講演会』(ホテルサンルートプラザ福島、2010 年 6 月 14 日), 2010. 【招待講演】

須藤修:「世界の電子政府」, 東京都主催『平成 22 年度IT・業務改革リーダー研修』(東京都庁第 1 本庁舎、2010 年 6 月 16 日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「クラウドとデータ連携」, 日本 IC カード利用促進協議会主催『日本 IC カード利用促進協議会講演会』(プラットフォームスクエア、2010 年 6 月 23 日), 2010. 【招待講演】

鶴田紘子、中島直樹、井上創造、末永俊一郎、須藤修、小林邦久、井口登與志、高柳涼一:「生体センサネットワークを活用した疾病管理実証事業における e 糖尿病手帳と体重減少効果」, 『第 18 回西日本肥満研究会』(九州大学、2010 年 7 月 10 日), 2010.

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開—Cloud/e-Gove とイノベーション」, 総務省自治体大学校主催『自治体職員研修第 1 部課程第 114 期』(総務省自治体大学校、2010 年 7 月 7 日、15 日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

服部祐一、竹森正起、井上創造、平川剛、須藤修:「携帯情報端末による大規模行動情報収集システムの運用と基礎評価」, 情報処理学会 DICOMO2010 シンポジウム実行委員会主催『情報処理学会 DICOMO2010 シンポジウム』(下呂温泉水明館、2010 年 7 月 7 日), 2010.

須藤修:「イノベーション戦略と新ICT戦略」, 日本マーケティングサービス協会主催『日本マーケティングサービス協会講演会』(人事労務会館、2010 年 7 月 9 日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

須藤修、吉田周史、川島宏一、山戸康弘、土屋光秋:「討論・自治体クラウドの将来展望」, 日本経営協会『自治体総合フェア 2010』(東京ビッグサイト、2010 年 7 月 14 日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「クラウドコンピューティングと空間情報—ICT によるサービスの高度化新」, 株式会社インフォマティクス主催、地理情報システム学会共催『空間情報シンポジウム 2010』(ウインクあいち、2010 年 7 月 21 日), 2010. 【招待講演】

須藤修:「電子自治体とクラウドコンピューティング」, 富士通関西支社主催『自治体ソリューションセミナー』(グランビア大阪、2010 年 7 月 30 日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

須藤修、後藤玲子、木下裕美子:「e-Science の確立に向けて—地球環境問題への新たなデータセントリックアプローチ」, 2010 年日本社会情報学会(JASI&JSIS)合同研究大会(長崎県立大学シーボルト校、2010 年 9 月 5 日), 2010.

須藤修:「クラウドコンピューティングと電子政府・電子自治体のこれから」, マイクロソフト株式会社主催『電子自治体戦略会議』(東京国際フォーラム、2010 年 9 月 7 日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「クラウドコンピューティングとネットワークセキュリティの今後」, RSA Conference Japan 2010 実行委員会主催『RSA Conference Japan 2010』(グランドプリンスホテル赤坂、2010 年 9 月 9 日), 2010. 【招待講演】

Osamu Sudoh, Michael Dowling, Motoshige Itoh, Masaru Kitsuregawa, Nikolaus Mohr, Sanya Uehara, Franz

Waldenberger: "Economic and Social Impact of the Evolution of Computer Network", IECE Communications Society and Munchner Kreis Org., 13th German-Japanese Symposium, (Osaka University Nakanoshima Center, Sep.14th, 2010), 2010. 【招待講演】

須藤修: 「電子政府・電子自治体とクラウドーわが国の電子政府推進政策の検証と今後の取り組むべき課題」, 経済同友会主催『電子政府推進部会第4回会合』(経済同友会大会議室、2010年9月28日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

須藤修: 「自治体クラウドとデータ連携」, マイクロソフト主催『電子自治体戦略会議』(東京国際フォーラム、2010年10月20日), 2010. 【招待講演】

須藤修: 「電子自治体のあるべき姿」, 平成22年度全国都道府県情報管理主管課長会秋季会議(佐賀県グラデはがくれ、2010年10月21日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

鶴田紘子、中島直樹、井上創造、末永俊一郎、須藤修、小林邦久、井口登與志、高柳涼一: 「生体センサネットワークを活用した疾病管理実証事業におけるe糖尿病手帳と体重減少効果」, 『第48回日本糖尿病学会九州地方会』(別府ビーコンプラザ、2010年10月29日), 2010.

須藤修: 「電子政府の動向とクラウドコンピューティング」, 『第26回ネットワーク経済フォーラム』(KKRホテル東京、2010年11月18日), 2010. 【招待講演】

須藤修: 「クラウド導入による新たな社会システムと電子行政」, 総務省主催『自治体クラウド推進本部第3回自治体クラウド有識者懇談会』(総務省、2010年11月26日), 2010. 【一般向け】

須藤修: 「わたしたち生活者のための<共通番号>推進協議会発足趣旨」, わたしたち生活者のための「共通番号」推進協議会主催『わたしたち生活者のための「共通番号」推進協議会発足シンポジウム』(キャピトルホテル東急、2010年12月5日), 2010. 【一般向け】

玄葉光一郎、峰崎直樹、石破茂、井上義久、浅尾慶一郎、佐々木毅、大宅映子、古賀伸明、北川正恭、須藤修、曾根泰教ほか: 「討論・生活者のための共通番号制度実現に向けて」, わたしたち生活者のための「共通番号」推進協議会主催『わたしたち生活者のための「共通番号」推進協議会発足シンポジウム』(キャピトルホテル東急、2010年12月5日), 2010. 【一般向け】

須藤修: 「電子行政の動向とクラウドコンピューティング」, 中国経済連合会主催『電子行政推進に関わる講演会』(メルパルク広島、2010年12月12日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

須藤修: 「電子行政を実現する情報システムのあり方」, 電子行政研究会主催『電子行政研究会第1回セミナー』(主婦会館プラザエフ、2010年12月14日), 2010. 【一般向け】

須藤修: 「電子行政の動向とクラウドコンピューティング」, グローバル情報戦略研究会主催『グローバル情報戦略研究会講演会』(ANAインターコンチネンタルホテル、2010年12月22日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

須藤修: 「クラウド導入による新たな社会システムと電子行政」, 三菱総合研究所主催『クラウドユーザー研究会』(三菱総合研究所大会議室、2011年1月27日), 2011. 【招待講演】【一般向け】

須藤修: 「共通番号・国民IDの動向とクラウドコンピューティング」, 全国市長会主催『第2回全国市長会共通番号制度等に関する検討会』(全国都市会館、2011年1月27日), 2011. 【招待講演】【一般向け】

須藤修: 「電子行政の動向とクラウドコンピューティング」, 日本マイクロソフト主催『電子自治体戦略会議』(東京国



際フォーラム、2011年2月2日)、2011.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「電子政府・自治体の目指す社会像と自治体クラウド」, 電子自治体推進パートナーズ主催『自治体クラウド研修開講記念講演』(東京ユビキタス協創広場、2011年2月19日)、2011.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開」, 総務省自治大学校主催『自治体職員研修第1部課程第115期』(総務省自治大学校、2011年2月22日、24日)、2011.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『平成22年度文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」成果報告会』(学術総合センター、2011年3月10日)、2011.

安達淳、坂内正夫、長尾真、西尾章治郎、米澤明憲、喜連川優、須藤修、松岡聡、松山隆司:「情報爆発特定を振り返って」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『平成22年度文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」成果報告会』(学術総合センター、2011年3月10日)、2011.

## 新聞・報道

須藤修:「インタビュー・新世代ネットワークの方向性」, 『新世代ネットワーク推進フォーラム』2010年6月 (<http://www.forum.nwgn/blog/2010>), 2010.

須藤修:「社会を変えるクラウドへの期待、情報セキュリティからみた現状と課題」, ITMedia, 2010年9月9日 ([www.itmedia.co.jp](http://www.itmedia.co.jp)), 2010.

須藤修:「CIO Award Best of CIO 2010」, 『CIO Magazine 10th Anniversary』(IDG インタラクティブ、2010年10月) 59-61 ページ, 2010.

須藤修:「不可能を可能にするクラウドコンピューティングー官民連携が鍵」, 『SCOPE NET』(財団法人港湾空港建設技術サービスセンター、2010年11月)第57号、8-12 ページ, 2010.

須藤修:「インタビュー・クラウドによって実現する未来」, ハミングヘッズ ([http://www.hummingheads.co.jp/column/interview/interview50\\_01.html](http://www.hummingheads.co.jp/column/interview/interview50_01.html)), 2010.

Osamu Sudoh: 「Osamu Sudoh」, Marquis Who's Who in the World 2011 (28th edition, Nov. 2010), 2010.

須藤修:「オピニオン・あなたに番号がつく日ー改革へ情報の一元把握が必要」, 『朝日新聞』2010年12月18日朝刊, 2010.

須藤修:「電子行政の動向とクラウドコンピューティング」, 『中国経済連合会会報』第424号(2011年2月)pp.19-20, 2011.

須藤修:「共通番号:官民連携のプラットフォームに」, 『生産性新聞』(日本生産性本部)2011年3月5日付け, 2011.

須藤修:「情報環境研究会『多様なデータ資源と消費を結びつける情報共有システム構築に向けた基本的な規約 Ver1.0』を公開」, CNET Japan、2011年3月28日 (<http://japan.cnet.com>), 2011.

---

## 園田 茂人・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 変動するアジアの比較社会学

アジア、とりわけ中国系社会を対象に、アジア・バロメーターや中国四都市調査のデータを用い、その変化の諸層をひかくの視野から実証的に研究している。最近は、特に新中間層の台頭を視野に、その社会・文化的特徴や政治的な特徴から、どのようにアジアの変化をもたらすかについて考察を深めている。

#### 日系企業のアジア進出への社会学的アプローチ

1991年から、日系企業のアジア進出をテーマに、社会学的調査を積み重ねている。2006年から07年にかけて、15年前に調査した日系企業(台湾、中国、タイ、マレーシア、インドネシア)を訪問し、その時系列的変化を追いかけて、2005年にはインドの日系企業調査を実施し、現地従業員の日系企業評価の比較を試みている。2009年からは、2001年に調査した中国の日系、韓国系、台湾系企業を対象に時系列調査を実施する計画をたてている。

### 研究業績(2010年度)

#### 著書

園田茂人・新保敦子:「教育は不平等を克服できるか」, 岩波書店, 2010年.

園田茂人(編):「NIHU現代中国早稲田研究拠点研究シリーズ3 天津市定点観測調査(1997-2010):単純集計結果にみる時系列変化とその解釈」, 早稲田大学現代中国研究所, 2010年.

#### 雑誌論文

園田茂人:「階層化する中国のゆくえ」, 無限大, No.127, pp.74-80, 2010年. 【一般向け】

園田茂人:「現代中国における格差の位相」, 中国——社会と文化, No.25, pp.5-17, 2010年. 【査読有】

Shigeto Sonoda: "Emergence of Middle Classes in Today's Urban China: Will They Contribute to Democratization in China?", International Journal of China Studies Special Issue: China in Transition: Social Change in the Age of Reform, Vol.1, No.2, pp.351-369, 2010年. 【査読有】

園田茂人:「アジア・バロメーター:その意欲的な調査がめざしてきたもの」, 社会と調査, No.6, pp.96, 2010年. 【一般向け】

#### 国際会議等

Shigeto Sonoda: "Different Perceptions of Social Inequality in China, India, and Russia: A Comparative Analysis of AsiaBarometer 2008", 中国社会学会 2010年大会, 2010. 【査読有】

## 講演・口頭発表

Shigeto Sonoda: “Challenges of Globalization and Locally Different Responses in Asia: ”, International Symposium, “Media, Knowledge and Society in the 21st century Digital Asia”(University of Tokyo), 2010.

園田茂人: 「新中間層はどのような特徴をもっているか」, 新潟県立大学公開シンポジウム「アジア・バロメーター」, 2010. 【招待講演】【一般向け】

園田茂人: 「アジア日系企業における現地従業員の『まなざし』: 時系列分析による知見から」, アジア政経学会東日本大会自由応募分科会『比較の中のアジア日系企業: 社会学と経済学の対話』, 2010.

園田茂人: 「東アジアにおける結婚と幸福の比較社会学」, 国際シンポジウム『東アジアの中の日本社会』(於台湾・国立中山大学日本研究センター), 2010. 【招待講演】

Shigeto Sonoda: “Emergence of Middle Classes in Today’s Urban China: Will They Contribute to Democratization in China?”, International Symposium “China in Transition: Economic Reform and Social Change” Institute of China Studies, University of Malaya, 2010. 【招待講演】

Shigeto Sonoda: “Korean and Japanese Views on East Asian Community Building: Some Research Findings of Asia Student Survey, 2008”, SNU-UT Sociology Joint Forum 2010, 2010. 【招待講演】

Shigeto Sonoda: “Emerging Socio-cultural Approaches to Asian Regional Integration Research”, 2010 SNU-UT Symposium, “New Directions in Journalism and Media Studies”, 2010. 【招待講演】

園田茂人: 「『全球化』という中国的経験」, 日本社会学会第 83 回大会・公開シンポジウム「グローバル化する世界: 何を問うべきか」, 2010.

Shigeto Sonoda: “Development of Japanese Sociology and Its Asian Connection”, 1st Meeting on “History of Asian Sociologies: What are their Characteristics and Uniqueness?”, 2010.

Shigeto Sonoda: “From Localization to Regionalization?: New Challenges of Sociology in Asia in the Age of Globalization”, Workshop on “Asian Studies in the Age of Globalization”, 2010. 【招待講演】

## 新聞・報道

園田茂人: 「<オピニオン> 中国とどう付き合うか: 基本原則貫くべきだった」, 産経新聞 2011 年 1 月 7 日, 2010.

園田茂人: 「INTERVIEW 面子が立つか立たないか それが付き合い方の基本」, 週刊東洋経済 2 月 26 日号, 2010.

園田茂人: 「日本人学生、留学生との競争 萎縮」, 日本経済新聞 2 月 28 日, 2010.

## 受賞

園田茂人: 科学研究費補助金審査委員の表彰「平成 22 年度表彰者」, 日本学術振興会, 2010 年.

Shigeto Sonoda: F.Hilary Conroy Award「F.Hilary Conroy Award (2011)」, Association for Asian Studies, 2011 年.

---

## 鷹野 澄・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ITを活用し情報で人の命と暮らしを守るという研究

地震災害など大規模災害に対して、情報通信技術(IT)を活用して情報を適切に提供して、人々の命と暮らしを守る  
ことについて研究します。

#### 建物や大型構造物の構造物ヘルスマモニタリングの研究

建物や大型構造物の劣化などの健康診断(ヘルスマモニタリング)のために、IT 強震計などのセンサーを活用して技  
術開発や応用の研究を進めています。

#### 緊急地震速報などの即時的地震情報システムに関する研究

気象庁の緊急地震速報を活用するためには、利用者側でどのような対策をしたらいいのか、そのハード面での対策  
の研究からソフト面での取り組みなどについて研究します。

### 研究業績(2010 年度)

#### その他論文

大原美保・関谷直也・地引泰人・須見徹太郎・古村孝志・鷹野澄・田中淳:「廣井アーカイブスの開発研究」, 東京大  
学大学院情報学環情報学研究調査研究編, 26, 81-90, 2010 年.

#### 講演・口頭発表

高橋宏政・鷹野澄:「独立成分分析による地震波の解析」, 日本地球惑星科学連合2010年大会, 2010.

伊藤貴盛・鷹野澄:「高感度 IT 強震計の試作—どこでも建物健全性診断を可能にする為に—」, 日本地球惑星科学  
連合2010年大会, 2010.

栗田祐介・鷹野澄:「ボーリング地震計データのオンサイト警報への適用と課題」, 日本地球惑星科学連合2010年  
大会, 2010.

赤澤隆士・荒木正之・伊藤貴盛・澤田純男・堀家正則・鷹野 澄:「関西地震観測研究協議会の強震観測システムの  
リアルタイム化に向けた取り組み」, 日本地球惑星科学連合2010年大会, 2010.

鷹野澄・伊藤貴盛・池田泰久:「弱い地震動を利用した建物健全性調査について ~建物用 IT 強震計による長期観  
測から~」, 日本地球惑星科学連合2010年大会, 2010.

鷹野澄:「次世代全国地震データ流通基盤システムの構築」, 国立情報学研究所平成 21 年度 CSI 委託事業報告交  
流会(ネットワーク・e-Science 系), 2010.

鷹野澄:「建物内の地震観測と防災情報への活用」, 日本災害情報学会第12回学会大会, 2010.

高橋宏政・鷹野澄:「アレイ観測データの中の地震波の個別推定問題」, 日本地震学会2010秋季大会, 2010.

鷹野澄・伊藤貴盛:「高感度IT強震計を用いた常時微動観測による建物振動の可視化」, 日本地震学会2010秋季大会, 2010.

栗田祐介・鷹野澄:「ボーリング地震計データのオンサイト警報への適用ー初動部分検出方法の検討ー」, 日本地震学会2010秋季大会, 2010.

鷹野澄・伊藤貴:「大学キャンパス内建物の地震観測～建物毎の地震応答の違い～」, 第13回地震工学シンポジウム, 2010.

Takano, K. and T. Ito: "Seismic Disaster Mitigation in Urban Area by using Building Vibration Observation of Weak Earthquake Ground Motion: an Approach of the IT Kyoshin Seismometer for Buildings", 2010 AGU Fall Meeting, 2010.

## 新聞・報道

鷹野澄(取材):「振動センサー ビルの揺れ見逃さず 東大経年劣化の早期発見も」, 日経産業新聞, 2010.

## 受賞

東京大学・東北大学・京都大学・九州大学・名古屋大学・広島大学・独立行政法人防災科学技術研究所 : JGN2plus アワード(社会基盤貢献賞)「広域L2網による次世代地震データ交換・流通システムの構築」, 情報通信研究機構, 2011年.

---

## 田中 明彦・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2010年度)

### 分担著書

田中明彦:「日本外交におけるアジア太平洋」, 渡邊昭夫 編, 千倉書房, 2010年.

### 雑誌論文

Akihiko Tanaka: "Hatoyama", Japanese Spotlight, 2010.3, pp.17-19, 2010年. 【一般向け】

田中明彦:「日本の東アジア戦略」, NIRA 対談シリーズ, No.54, pp.1-10, 2010年. 【一般向け】

田中明彦:「日米同盟プラスの新たな安保戦略を」, 週刊東洋経済, No.6268, pp.124-126, 2010年. 【一般向け】

田中明彦:『『第22回アジア・太平洋賞』受賞作の講評 大賞『ハンゲルの誕生-音から文字を創る』』, アジア時報, pp.6, 2010年. 【一般向け】

田中明彦:「日韓 経済協力の新展開」, 日韓 経済協力の新展開, 2010年.

田中明彦:「二〇一一年、私の提言 本格的な対外戦略の策定を」, 経済 Trend, pp.26-27, 2011年. 【一般向け】

## その他論文

田中明彦:「代々木ゼミナール 第1回 慶大入試プレ」, 代々木ゼミナール 第1回 慶大入試プレ, 模擬試験問題, 2010年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

田中明彦:「民主主義の行方 コメント」, 民主主義の行方 国立大学附置研究所・センター長会議, 2010.

## 新聞・報道

田中明彦:「経済教室 2011日本の針路 2 「欧米中心」時代の終焉へ」, 日本経済新聞, 2010.

田中明彦:「日中共同世論調査 対中国深まる溝」, 読売新聞, 2010.

Akihiko Tanaka: 「Kan' foreign policy plate full, waiting to be attacked 」, The Japan Times, 2011.

田中明彦:「ニュース争論 中東大変動の潮流」, 毎日新聞, 2011.

---

## 田中 淳・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 災害情報論

災害による被害を軽減するために求められる災害情報の要件を、住民や市町村等利用者側の意志決定過程に関する実証研究の知見に基づき、実証的・理論的に解明し、具体的な提言に結び付けている。災害期の警報や避難勧告等、復旧・復興期の生活再建情報、事前の防災意識向上や防災教育など、各段階での課題を対象とする。

#### 災害弱者対策

阪神・淡路大震災で高齢者や障害者に被害が大きかったことやハリケーン・カトリーナにおける人種や所得によって被害が異なったように、災害による影響は社会集団によって差違が生じる。この際は、地震や火山噴火、あるいは爆発と行った外力による被害の程度に留まらず、避難のしやすさや生活再建の円滑さなど長期的な側面を持つ。災害の過程で生じる社会格差の視座から、研究を進めている。

## 集合行動論

20世紀初頭に誕生した集合行動論は、パニックや都市暴動、社会運動など多様な創発的社会行動を理論的に分析してきた。ある意味、災害の社会学的研究もまたその流れをくんでいる。日常の制度や組織、役割など社会秩序が、災害により修正を余儀なくされるためである。災害研究の理論的バックグラウンドとして、集合行動論ならびにその批判的研究として登場した集合行為論の研究を行っている。

## 研究業績(2010年度)

### 分担著書

田中 淳:「災害社会学、『社会学事典』, 日本社会学会社会学事典刊行委員会編 編, 丸善出版, 2010年.

### 雑誌論文

田中 淳:「ハザードマップと住民意識」, 基礎工, Vol.38, No.8, pp.18-21, 2010年.【査読有】

田中 淳、市澤成介、宮川勇二、吉井博明、地引泰人、宇田川真之、関谷直也、中村 功、松尾一郎:「2009年8月9日豪雨災害(兵庫県佐用水害)における住民の対応に関する調査研究」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究調査研究編, Vol.27, pp.49-100, 2010年.

### 国際会議等

Dicky Pelupessy, JIBIKI Yasuhito, SEKIYA Naoya, TANAKA Atsushi: "Disaster Warning and Evacuation Behavior: the Case of Mt. Kelud in 2007", International Workshop on Multi-disciplinary Hazard Reduction from Earthquakes and Volcanoes in Indonesia, November 24 2010, JICA Hyogo, Kobe, Japan, 2010.

### 講演・口頭発表

田中 淳・宮瀬将之・菊井稔宏・中村 功・関谷直也・中森弘道・地引泰人:「山口県防府市土砂災害の先駆現象の認知と避難」, 日本自然災害学会, 2010.

地引泰人・関谷直也、田中淳:「007年のインドネシアのクルー(Kelud)火山災害における被災住民と災害対応組織の分析」, 日本自然災害学会, 2010.

田中 淳:「災害情報で命を救う」, 第112回(平成22年春季)東京大学公開講座「防ぐ」, 2010.【一般向け】

田中 淳:「東京大学の取組みと学生確保への影響など大学特有の課題について」, 日本私立大学連盟日本私立大学連盟東部地区金曜会, 2010.【招待講演】【一般向け】

田中 淳:「大学における災害対策について」, 第3回関東甲信越地区大学安全衛生研究会, 2010.【招待講演】【一般向け】

田中 淳:「大規模水害の影響と対応策」, 日本経済団体連合会防災に関する委員会, 2010.【招待講演】【一般向け】

## 新聞・報道

一般:「JNN 報道特別番組」, TBS テレビ, 2010.

一般:「被災地は “どうする被災者支援” “どうつかむ被災者のニーズ” “被災自治体支援は”」, NHK, ニュースウォッチ 9, 2010.

一般:「避難所での生活は? 今 求められること LIVE 宮城・南三陸町 “プライバシーどう守る?” “精神的なケアのポイントは?”」, NEWS ZERO, 日本テレビ, 2010.

一般:「備える 災害後のために① 教訓語り継ぎ全国に発信を」, 毎日新聞, 2010.

## 受賞

田中 淳: 平成 22 年防災功労者防災担当大臣表彰「防災功労者」, 2010 年.

---

## 田中 秀幸・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が全般的に弱いために、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

#### 情報セキュリティの経済的相互依存関係に関する分析

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなるインセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

#### 地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあつた主体との関係にも大きな変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNPOとの相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する地域情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。



## 研究業績(2010 年度)

### 雑誌論文

中野邦彦、田中秀幸:「自治体ウェブ・サイトに基づく地域情報化施策の定量的研究」, 社会・経済システム, No.31, pp.89-94, 2010 年. 【査読有】

Dinnie,Keith, Hideyuki Tanaka, and Edgar Centeno: "Branding the city of Sapporo: An innovation and network approach", Journal of Town and City Management, Vol.1, No.3, pp.254-264, 2010 年. 【査読有】

Tanaka,Hideyuki, Kunihiko Nakano: "Public Participation or Social Grooming: A Quantitative Content Analysis of a Local Social Network Site", International Journal of Cyber Society and Education, Vol.3, No.2, pp.133-154, 2010 年. 【査読有】

### 国際会議等

Tanaka, Hideyuki, Kazuhiro Mawatari, Tomoaki Ide, Rie Sakakibara, Shin'ya Nagano, and Satoru Sato: "Does Advertising Still Positively Influence Firm Value?", the 9th International Conference, JEPA, 2010.

Jenjarrussakul, Bongkot, Hideyuki Tanaka, and Kanta Matsuura : "Empirical study on Interdependency of Information Security between Industrial Sectors and Regions", the 2011 Symposium on Cryptography and Information Security (SCIS 2011), 2011.

Jenjarrussakul, Bongkot, Hideyuki Tanaka and Kanta Matsuura: "Empirical study on Interdependency of Information Security between Industrial Sectors and Regions", the 7th Forum on "Financial Information Systems and Cybersecurity: A Public Policy Perspective," , 2011. 【査読有】

### その他論文

Takagi, Soichiro, Hideyuki Tanaka, and Shigeto Sonoda: 「Foreign Direct Investment in Service Sector and National Culture」, 日本経済政策学会第 67 回全国大会, 2010 年.

堀江真弘、田中秀幸:「広告と企業価値に関する四半期データを用いた実証研究」, 進化経済学会第 15 回大会, 2011 年.

### 講演・口頭発表

Tanaka, Hideyuki: "Japanese New Economy in the Network Base Society", Tsinghua-Todai 2010, Media, Knowledge and Society in the 21st Century Digital Asia, 2010. 【招待講演】

田中秀幸:「メインフォーラム「毎日飲むお茶のような SNS になりたい」, 第 7 回地域 SNS 全国フォーラム in 掛川, 2010. 【招待講演】【一般向け】

田中秀幸:「これからの日本には夢がある」, 飛驒アカデミー主催 2011 春セミナー, 2011. 【招待講演】【一般向け】

### 新聞・報道

田中秀幸:「ネットで地域活性化」, 静岡新聞, 2010.

---

## 辻井 潤一・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

Grammar Formalisms, Multi-Lingual NLP

Information Extraction and Exploitation, Language Acquisition

Text Mining for Biology

### 研究業績(2010 年度)

#### 分担著書

Kim, Jin-Dong, Ohta, Tomoko and Tsujii, Jun'ichi: "Multilevel Annotation for Information Extraction." In Linguistic Modeling of Information and Markup Languages. Text, Speech and Language Technology40, Witt, Andreas and Metzger, Dieter (Eds.), Springer Netherlands, 2010.

Hara, Tadayoshi, Yusuke Miyao and Junichi Tsujii: "Evaluating the Impact of Re-training a Lexical Disambiguation Model on Domain Adaptation of an HPSG Parser." In Trends in Parsing Technology: Dependency Parsing, Domain Adaptation, and Deep Parsing. Text, Speech and Language Technology, In Harry Bunt, Paola Merlo, Joakim Nivre (Eds.), Springer, 2010.

#### 雑誌論文

Ananiadou, Sophia, Sullivan, Dan, Black, William, Levow, Gina-Anne, Gillespie, Joseph J., Mao, Chunhong, Pyysalo, Sampo, Kolluru, BalaKrishna, Tsujii, Junichi and Sobral, Bruno: "Named Entity Recognition for Bacterial Type IV Secretion Systems.", PLoS ONE, Vol.6, No.3, pp.e14780, 2010 年. 【査読有】

岡崎直観, 辻井潤一: 「集合間類似度に対する簡潔かつ高速な類似文字列検索アルゴリズム」, 自然言語処理, Vol.18, No.2, 2010 年. 【査読有】

Wang, Xinglong., Junichi Tsujii, Sophia Ananiadou: "Disambiguating the Species of Biomedical Named Entities Using Natural Language Parsers.", Bioinformatics, Vol.26, No.5, pp.661-667, 2010 年. 【査読有】

Yu, Kun, Yusuke Miyao, Takuya Matsuzaki, Xiangli Wang, Yaozhong Zhang, Kiyotaka Uchimoto, Junichi Tsujii: "Comparison of Chinese Treebanks for Corpus-oriented HPSG Grammar Development.", Journal of Natural Language Processing (Special Issue on Empirical Methods for Asian Language Processing), 2010 年. 【査読有】

Sætre, Rune, Kazuhiro Yoshida, Makoto Miwa, Takuya Matsuzaki, Yoshinobu Kano and Junichi Tsujii: "Extracting Protein-Interactions from Text with the Unified AkaneRE Event Extraction System.", Transactions on Computational Biology and Bioinformatics (TCBB), BioCreative II.5 Special Issue, Vol.7, pp.46, 2010 年. 【査読有】

Wang Yue, Jin-Dong Kim, Rune Sætre, Sampo Pyysalo, Tomoko Ohta and Junichi Tsujii: "Improving the Inter-corpora Compatibility for Protein Annotations.", *Journal of Bioinformatics and Computational Biology (JBCB)*, Vol.8, No.5, 2010 年. 【査読有】

Kocbek, Simon, Rune Sætre, Gregor Stiglic, Jin-Dong Kim, Igor Pernek, Yoshimasa Tsuruoka, Peter Kokol, Sophia Ananiadou and Junichi Tsujii: "AGRA: Analysis of Gene Ranking Algorithms.", *Oxford Bioinformatics*, 2010 年. 【査読有】

Ohta, Tomoko, Matsuzaki, Takuya, Okazaki, Naoaki, Miwa, Makoto, Saetre, Rune, Pyysalo, Sampo and Tsujii, Junichi: "Medie and Info-pubmed: 2010 update.", *BMC Bioinformatics*, Vol.11, No.suppl 5, pp.P7, 2010 年. 【査読有】

Björne, Jari, Ginter, Filip, Pyysalo, Sampo, Tsujii, Junichi: "Complex event extraction at PubMed scale.", *Bioinformatics*, Vol.26, No.12, pp.i382-i390, 2010 年. 【査読有】

Kemper, Brian, Takuya Matsuzaki, Yukiko Matsuoka, Yoshimasa Tsuruoka, Hiroaki Kitano, Sophia Ananiadou and Junichi Tsujii: "PathText: a text mining integrator for biological pathway visualizations.", *Bioinformatics*, Vol.26, No.12, pp.i374-i381, 2010 年. 【査読有】

Wu, Xianchao, Takuya Matsuzaki, Junichi Tsujii: "Improve Syntax-based Translation Using Deep Syntactic Structures.", *Machine Translation (Special Issue : Pushing the frontiers of SMT)*, Vol.24, No.2, pp.141-157, 2010 年. 【査読有】

Kano, Yoshinobu, Paul Dobson, Mio Nakanishi, Junichi Tsujii: "Text Mining Meets Workflow: Linking U-Compare with Taverna.", *Bioinformatics*, Vol.26, No.19, pp.2486-2487, 2010 年. 【査読有】

Ananiadou, Sophia, Pyysalo, Sampo, Tsujii, Junichi: "Event extraction for systems biology by text mining the literature.", *Trends in Biotechnology*, Vol.28, No.7, pp.381-390, 2010 年. 【査読有】

Okazaki, Naoaki, Sophia Ananiadou and Junichi Tsujii: "Building a High Quality Sense Inventory for Improved Abbreviation Disambiguation.", *Bioinformatics*, Vol.26, No.9, pp.1246-1253, 2010 年. 【査読有】

Riedel, Sebastian, Rune Sætre, Hong-Woo Chun, Toshihisa Takagi and Junichi Tsujii: "Bio-Molecular Event Extraction with Markov Logic.", *Computational Intelligence. Special Issue*, 2010 年. 【査読有】

Ohta, Tomoko, Pyysalo, Sampo, Kim, Jin-Dong and Tsujii, Junichi: "A re-evaluation of biomedical named entity-term relations.", *Journal of Bioinformatics and Computational Biology (JBCB)*, Vol.8, No.5, pp.917-928, 2010 年. 【査読有】

## 国際会議等

Miwa, Makoto, Sampo Pyysalo, Tadayoshi Hara and Junichi Tsujii: "Evaluating Dependency Representation for Event Extraction.", the 23rd International Conference on Computational Linguistics (COLING 2010), pp.779-787, 2010. 【査読有】

Miwa, Makoto, Yusuke Miyao, Rune Sætre and Junichi Tsujii: "Entity-Focused Sentence Simplification for Relation Extraction.", the 23rd International Conference on Computational Linguistics (COLING 2010), pp.788-796, 2010. 【査読有】

Yu, Kun, Yusuke Miyao, Xiangli Wang, Takuya Matsuzaki, Junichi Tsujii: "Semi-automatically Developing Chinese HPSG Grammar from the Penn Chinese Treebank for Deep Parsing.", the 23rd International Conference on Computational Linguistics (COLING 2010), 2010. 【査読有】

Yu, Kun, Xiangli Wang, Yusuke Miyao, Takuya Matsuzaki, Junichi Tsujii: "The Deep Re-Annotation in a Chinese Scientific Treebank.", the 4th Linguistic Annotation Workshop, 2010. 【査読有】

Andrade, D., Nasukawa, T. and Tsujii, J.: "Robust Measurement and Comparison of Context Similarity for Finding Translation Pairs.", the 23rd International Conference on Computational Linguistics (COLING 2010), pp.19-27, 2010. 【査読有】

Matsubara, Yusuke and Junichi Tsujii: "Large-vocabulary lexical choice with rich context features.", CICLing 2011, 2010. 【査読有】

Okazaki, Naoaki, Han-Cheol Cho, Rune Sætre, Sampo Pyysalo, Tomoko Ohta and Junichi Tsujii: "The gene normalization and intractive systems of the University of Tokyo in the BioCreative III challenge.", BioCreative III, pp.125-130, 2010. 【査読有】

Hatori, Jun, Akiko Murakami and Junichi Tsujii: "Multi-Topical Discussion Summarization using Structured Lexical Chains and Cue Words.", CICLing 2011, pp.313-327, 2010. 【査読有】

Yao-zhong Zhang, Takuya Matsuzaki, Junichi Tsujii: "Forest-guided Supertagger Training.", the 23rd International Conference on Computational Linguistics (COLING 2010), 2010. 【査読有】

Kano, Yoshinobu, Ruben Dorado, Luke McCrohon, Sophia Ananiadou and Junichi Tsujii: "U-Compare: An integrated language resource evaluation platform including a comprehensive UIMA resource library.", the 7th International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2010), pp.428-434, 2010. 【査読有】

Pyysalo, Sampo, Ohta, Tomoko and Tsujii, Junichi: "An Analysis of Gene/Protein Associations at PubMed Scale.", the 4th International Symposium for Semantic Mining in Biomedicine (SMBM 2010), pp.57-65, 2010. 【査読有】

Ohta, Tomoko, Pyysalo, Sampo, Miwa, Makoto and Tsujii, Junichi: "Event Extraction for DNA Methylation.", the 4th International Symposium for Semantic Mining in Biomedicine (SMBM 2010), pp.48-56, 2010. 【査読有】

Hanaoka, Hiroki, Hideki Mima and Junichi Tsujii: "A Japanese Particle Corpus Built by Example-Based Annotation.", the 7th Conference on International Language Resources and Evaluation (LREC), pp.1876-1880, 2010. 【査読有】

Okazaki, Naoaki and Junichi Tsujii: "Simple and Efficient Algorithm for Approximate Dictionary Matching.", the 23rd International Conference on Computational Linguistics (COLING 2010), pp.851-859, 2010. 【査読有】

Miwa, Makoto, Sampo Pyysalo, Tadayoshi Hara and Junichi Tsujii: "A Comparative Study of Syntactic Parsers for Event Extraction.", BioNLP 2010, pp.37-45, 2010. 【査読有】

Yao-zhong Zhang, Takuya Matsuzaki, Junichi Tsujii: "A Simple Approach for HPSG Supertagging Using Dependency Information.", the 11th Annual Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics (NAACL-HLT), 2010. 【査読有】

Wu, Xianchao, Takuya Matsuzaki, Junichi Tsujii: "Fine-Grained Tree-to-String Translation Rule Extraction.", the 48th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL 2010), pp.325-334, 2010. 【査読有】

Ohta, Tomoko, Pyysalo, Sampo, Miwa, Makoto, Kim, Jin-Dong and Tsujii, Junichi: "Event Extraction for Post-Translational Modifications.", BioNLP 2010, pp.19-27, 2010. 【査読有】

Björne, Jari , Ginter, Filip , Pyysalo, Sampo , Tsujii, Junichi: "Scaling up Biomedical Event Extraction to the Entire PubMed.", BioNLP 2010, pp.28-36, 2010. 【査読有】

Pyysalo, Sampo , Ohta, Tomoko , Cho, Han-Cheol , Sullivan, Dan , Mao, Chunhong , Sobral, Bruno , Tsujii, Junichi: "Towards Event Extraction from Full Texts on Infectious Diseases. ", BioNLP 2010, pp.132-140, 2010. 【査読有】

## 講演・口頭発表

辻井潤一: 「言語理解と知識 —情報空間の構造化に向けて—」, 2010 年度人工知能学会全国大会(第 24 回) , 2010. 【招待講演】

Jun'ichi Tsujii: "Text Bound Annotation and Evaluation -- The Perspectives of BioNLP Shared Tasks and GENIA", BioCreative III, 2010. 【招待講演】

Junichi Tsujii: "Semantics-based information access to large scale text bases", Distinguished Lecture Series, Academia Sinica, 2010. 【招待講演】

Junichi Tsujii: "Computational Linguistics and Natural Language Processing", 12th International Conference on Intelligent Text Processing and Computational Linguistics, 2011. 【招待講演】

辻井潤一: 「表現から意味へ: 言語処理技術と言語の科学」, 言語処理学会第 17 回年次大会(NLP2011), 2011. 【招待講演】

## 受賞

辻井潤一: Medal of Honor with Purple Ribbon 「紫綬褒章」, 2010 年.

岡崎直観: Best Paper Award for Young Researcher 「高速な類似文字列検索アルゴリズム」, 情報処理学会創立 50 周年記念全国大会, 2010 年.

Andrade D, Matsuzaki T, Tsujii J: 3rd Best Paper Award「Effective use of Dependency Structure for Bilingual Lexicon Creation.」, the 12th International Conference on Computational Linguistics and Intelligent Text Processing, 2011 年.

---

## 西垣 通・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 基礎情報学

生命情報から社会情報、機械情報にわたる情報学の基礎的な検討。マトゥラーナ／ヴァレラのオートポイエーシス論、ホフマイヤーの生命記号論、ルーマンの理論社会学、グレイザーズフェルドのラディカル構成主義などを批判的に摂取しつつ、情報メディア思想を理論的に検討する。これは、文理融合の学際的研究分野「ネオ・サイバネティクス」の一環をなす。

## インターネット社会論

基礎情報学の応用として、21世紀インターネット社会における諸問題(企業組織、オンライン共同体、情報倫理、サイバースペース心理など)を理論的かつ実践的に検討する。

## 研究業績(2010年度)

### 著書

西垣通:「スローネット」, 春秋社, 2010年.

### 分担著書

西垣通:「本は、これから」, 池澤夏樹 編, 岩波新書, 2010年.

### 雑誌論文

西垣通:「ネオ・サイバネティクスの源流」, 思想, No.1035, pp.40-55, 2010年. 【査読有】

西垣通:「ネオ・サイバネティクスからの自己像」, 現代思想, Vol.38, No.9, pp.161-171, 2010年. 【査読有】

西垣通:「グーグルは創造者か、破壊者か」, 世界, No.807, pp.261-269, 2010年. 【査読有】【一般向け】

西垣通:「オープン情報社会の裏表」, 現代思想, Vol.39, No.1, pp.40-51, 2011年. 【査読有】【一般向け】

### 国際会議等

Toru Nishigaki: "Is the Society of Cohabitation with Robots Possible?", Uehiro/Carnegie Oxford Conference on Information Ethics, 2010. 【査読有】

### その他論文

西垣通、河本英夫、馬場靖雄:「ネオ・サイバネティクスと21世紀の知」, 思想, 鼎談, 2010年. 【査読有】

西垣通:「ウェブの拡大が意味するものを探る」, 週刊金曜日, 830号, 2011年. 【一般向け】

西垣通:「スローネット」, 昭和経済, 2011年. 【一般向け】

### 講演・口頭発表

西垣通:「コンピュータの哲学」, 学術俯瞰講義, 2010. 【招待講演】

西垣通:「ネットとリアルのあいだ」, 宮城県高等学校情報科教育研究会総会, 2010. 【招待講演】

西垣通:「ネットとリアルのあいだ」, 埼玉県高等学校情報教育研究会総会, 2010. 【招待講演】

## 新聞・報道

西垣通、平野啓一郎:「iPadと電子書籍」, 読売新聞, 2010.

西垣通、夏野剛:「英語の社内公用語化」, 毎日新聞, 2010.

西垣通、関根千佳:「幸福なIT社会のために」, 東京新聞夕刊, 2010.

西垣通:「視点論点「スローネット」」, NHK教育テレビ, 2011.

西垣通:「「現代の知」築き方を問う」, 読売新聞, 2011.

---

## 橋元 良明・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している。

#### メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

#### 言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようにかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

### 研究業績(2010 年度)

#### 著書

橋元良明:「メディアと日本人—変わりゆく日常」, 岩波書店, 2010 年.

#### 分担著書

橋元良明:「メディア用語の基本事典(うち「世論調査の諸問題」)」, 渡辺武達、山口功二、野原仁 編, 世界思想社, 2011 年.

## 雑誌論文

楊霜、橋元良明:「中国におけるメディアの多元化と日本人イメージの変化」,『情報学研究 学環』, No.79, pp.47-65, 2010 年.【査読有】

橋元良明:「インターネット利用における信頼と不安—国際比較調査による展望」,『情報の科学と技術』, Vol.61, No.1, pp.8-15, 2011 年.【査読有】

橋元良明、中村功、関谷直也、小笠原盛浩、山本太郎、千葉直子、間形文彦、高橋克巳、植田広樹、平田真一:「インターネット利用の不安をめぐる 10 カ国比較調査」,『東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編』, No.27, pp.1-48, 2011 年.【査読有】

橋元良明、大野志郎、小室広佐子、小笠原盛浩、堀川裕介:「ネット依存の若者たち、21 人インタビュー調査」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編』, No.27, pp.50-101, 2011 年.【査読有】

## その他論文

橋元良明、中村功、関谷直也、小笠原盛浩、山本太郎、千葉直子、間形文彦、高橋克巳:「インターネット利用に際する不安の 10 カ国国際比較調査」, 報告書, NTT との産学連携共同研究成果, 2010 年.

## 講演・口頭発表

橋元良明:“Keynote Speech ”Information Behavior in Japan””, 国際マス・コミュニケーション学会 The 4th Global Communication Forum in Shanghai, 2010.【招待講演】

## 新聞・報道

橋元良明:「ネットの現実 直視の時 携帯電話でカンニング(コメント)」, 日本経済新聞, 2010.

橋元良明:「東日本大震災—デマに惑わされない(コメント)」, 毎日新聞, 2010.

橋元良明:「ネット進歩 変わる意識」, 朝日新聞, 2010.

橋元良明:「試される地デジ4 若者テレビ離れ加速も」, 北陸中日新聞, 2010.

橋元良明:「「ネオ・デジタルネイティブ」に対応を(インタビュー)」, フジサンケイ Business, 2010.

橋元良明:「日本人は不安傾向 東大、国際ネット利用調査」, 電経新聞, 2010.

橋元良明:「ネットを使うシニア 生活満足度高い」, NHK「おはよう日本」, 2010.

橋元良明:「日本人ネット利用に不安、割合高」, NHK 朝のニュース, 2010.

橋元良明:「日本人は心配性? インターネット利用者国際比較」, 科学新聞, 2010.

橋元良明:「デジタルライフでシニアはどう変わる」, HK ラジオ第一 「私も一言! タ方ニュース」ニュースこころ一番, 2010.



橋元良明:「日本人のネット不安感 安心、安全が乖離」, 通信興業新聞, 2010.

橋元良明:「シニアとIT(デジタルシニア研究の照会)」, 朝日新聞(夕刊), 2010.

橋元良明:「Data Focus「シニア世代のネット利用と消費行動」」, 日経産業新聞, 2010.

橋元良明:「ネットのチカラ—i 世代が切り拓く」, 日経産業新聞, 2010.

橋元良明:「パソコンしない 10 代、ネットは携帯で」, 朝日新聞, 2010.

橋元良明:「10 代はパソコンより携帯」, 朝日小学生新聞, 2010.

橋元良明:「退任の弁 YouTube に 15 分 秋葉広島市長、会見拒否(コメント)」, 朝日新聞, 2011.

橋元良明:「若者 @ デジタル 断れたくない症候群(コメント)」, 日本経済新聞, 2011.

橋元良明:「Internet Addiction」, NHK 第二放送、-英語ニュース, 2011.

橋元良明:「”ネット依存”女性が多い(インタビュー)」, NHK 朝のニュース「おはよう日本」, 2011.

橋元良明:「ケータイが手放せない! 女性がかはまるネット依存(インタビュー)」, NHK テレビ第一放送情報番組「あさイチ」, 2011.

---

## 林 香里・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ジャーナリズムの自由主義イデオロギーについて「ケアの倫理」からの批判的検討

ジャーナリズムは 17 世紀より自由主義イデオロギーとともに発展してきた。それはマスメディアというシステムとともに自由市場で拡大することによって、そのイデオロギーを一層先鋭化させてきた。しかし、今日の情報化とグローバル化状況において、自由主義思想も再検討を迫られており、ジャーナリズムにおいても自由主義的発想の対案を考えていかななくてはならない。こうした新しいジャーナリズムの倫理について、とくに自由主義の批判理論である「ケアの倫理」を応用して研究をしている。

#### 各国のジャーナリズム制度ならびに言説の国際的比較分析

欧米や東アジア諸国のジャーナリズム研究者と共同で、ジャーナリズムの制度および言説の比較研究を行っている。

- 1) 日本と韓国における公共放送の役割、イメージ、ニュース番組の比較
- 2) メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について: 8カ国国際比較研究(科学研究費補助金 B)

## メディア産業における非正規雇用、フリーランスの労働環境について

近年のネット産業の台頭、ならびに経済環境の悪化による広告収入の減少という二つの波の中で、マスメディア産業はさまざまな側面からコストカットを余儀なくされている。こうした経済環境および技術環境の変動のなかで、各企業は人件費の削減を進めている。激動するマスメディア産業を取り巻く環境においてもっとも弱い立場の非正規雇用者、派遣技能労働者、フリーランスの処遇について実態を調査するとともに、制度的整備の可能性を研究する。

### 研究業績(2010年度)

#### 著書

林香里: 「<オンナ・コドモ>のジャーナリズム ―ケアの倫理とともに」, 岩波書店, 2011年.

#### 分担著書

林香里: 「公共放送としてのNHKの位置価 ―「視聴者第一主義」の未来」, 北田暁大 編, 岩波書店, 2010年.

林香里: 「ジャーナリズムに見る文化作用」『多文化社会の<文化>を問う 共生／コミュニティ／メディア』, 岩淵功一 編, 青弓社, 2010年.

林香里: 「マスメディアをめぐる公共学」『アクセス 公共学』, 山脇直司・押村高編 編, 日本経済評論社, 2010年.

#### 雑誌論文

林香里: 「「学問の英語化」が生む帰結」, 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』79号, Vol.2010年11月, No.79, pp.i-iii, 2010年.

林香里: 「日本における「韓流ブーム」の現在―マスメディアにおける女性オーディエンス・イメージの問題」, Referate des 13. Deutschsprachigen Japanologentages., Band 1), Kultur- und Sprachwissenschaft., EB-Verlag., pp.S.153-176, 2010年. 【査読有】

#### 国際会議等

林香里: 「紙面拝見 社会と出会う広場に」, 神奈川新聞, 2010.

Kaori Hayashi: "Questioning "liberal" in a Global Context: After more than 50 years of practices of "American journalism" in Japan. .", the Conference "Internationalizing "International Communication". Department of Media and Communication, City University of Hong Kong. 3-5 December 2010, 2010.

#### その他論文

林香里: 「新たな役割再検討を」, 神奈川新聞, 2010年. 【一般向け】

林香里: 「紙面拝見 政府同様揺れる報道」, 神奈川新聞, 2010年. 【一般向け】

林香里: 「「論壇」での女性の今」, 毎日新聞, 論壇時評, 2010年.

林香里: 「紙面拝見 残念なお祭り目線」, 神奈川新聞, 2010年. 【一般向け】

林香里:「日中の不平等社会」, 毎日新聞 文化面, 2010 年. 【一般向け】

林香里:「紙面拝見 ルール不在の相撲界」, 神奈川新聞, 2010 年. 【一般向け】

林香里:「難しい組織の転換」, 毎日新聞 文化面, 2010 年. 【一般向け】

林香里:「紙面拝見 「専業主婦」への避難」, 神奈川新聞, 2010 年. 【一般向け】

林香里:「紙面拝見 高等教育の危機進行」, 神奈川新聞, 2010 年. 【一般向け】

林香里:「この一年 論壇」, 毎日新聞 文化欄, 2010 年. 【査読有】

林香里:「論壇を読む 目盛り示す努力 どこへ」, 毎日新聞 文化欄, 2010 年. 【一般向け】

林香里:「紙面拝見 「市民感覚」に要注意」, 神奈川新聞, 2011 年. 【一般向け】

林香里:「「論壇の変化」と相互作用」, 毎日新聞, 2011 年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

スクワッド(「エルゴラツ」出版社)代表取締役 山田泰、花形商品研究所(「シブヤ経済新聞」運営者) 代表取締役西樹、東京大学教授 林香里:「生活者に応え、フィットした情報発信の可能性と役割」, 日本新聞協会主催「第三回メディア戦略セミナー 『読者と近い』強みを生かす—編集、販売両面から」 2010 年 9 月 7 日 大手町ファーストスクエアカンフェレンス RoomA にて, 2010. 【一般向け】

林香里:「日本のテレビ国際報道について」, NHK エンタープライズ寄附講座 第3回公開講座 「グローバル化の中のメディアの役割」 2010 年 10 月 9 日 (土) 午後 1:00 早稲田大学小野記念講堂にて, 2010. 【招待講演】

Kaori Hayashi: “Comments to John Keane”, “The Cultural Sources of Deliberative Politics in East Asia”. Fudan Institute for Advanced Study in Social Sciences and the Shibusawa Ei’ichi Memorial Foundation as a commentator to “Media Decadance and Democracy” presented by John Keane. May 1-2, 2010. Fudan University, Shanghai. , 2010. 【招待講演】

Kaori Hayashi: “Challenges of Japanese Newspaper Companies, Changes in the Conception of Journalism”, “Journalism’s Next Top Model”, organized by the Department of Journalism and Mass Communication, University of Westminster in association with the British Journalism Review, 2010.

Alexandra Homma, Wataru Netsu, Eliza Seki and Kaori Hayashi: “Discussant for the Panel “Constructing Images of the ‘Other’: Media and Society in Japan” by Alexandra Homma, Wataru Netsu and Eliza Seki. ”, the ACS (Association for Cultural Studies) Crossroads 2010 in Hong Kong. 17 June 2010, Venue: Lingnan University., 2010.

Tetsuo Hatanaka and Kaori Hayashi: “A Future of the Local Press?: The Potential of Social Networking Websites run by Japanese Local Newspaper”, the ACS (Association for Cultural Studies), Crossroads 2010 in Hong Kong. 17 June 2101, Venue: Lingnan University. , 2010.

林香里、野中章弘:「ジャーナリズムの倫理と“フリーランス”の役割」, 日本マス・コミュニケーション学会 春季研究発表会 ワークショップ8(倫理・法制部会企画) 於関西大学 2010 年 7 月 4 日, 2010.

Kaori Hayashi: “Questioning “liberal” in a Global Context: After more than 50 years of practices of “American

journalism” in Japan.”, “Internationalizing “International Communication”. Department of Media and Communication, City University of Hong Kong. 3–5 December 2010., 2010. 【招待講演】

Wataru Netsu and Hayashi Kaori: “Not guilty? Examining Japanese media reporting on “illegal” immigrants”, Workshop “Migration & Multicultural Coexistence in East Asia” at the Institute of Comparative Culture, Sophia University, hosted by Peace and Democracy Institute, Korea University February 19, 2011., 2011.

## 新聞・報道

David McNeill (Independent), Tomoko Hosaka (AP) and Sayuri Daimon (Japan Times): “Debating English-language media’s role in Japan today. A round-table discussion for the Japan Times 40,000th Issue Special.”, Japan Times, 2010.

---

## 馬場 章・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

#### デジタルアーカイブズ科学

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

#### コンテンツ創造科学

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

### 研究業績(2010 年度)

---

## 開 一夫・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 発達認知神経科学: 乳幼児を対象とした脳機能計測

人間の認知活動の根源的部分を解明するため、近赤外分光法(NIRS)や高密度脳波計(HD-EEG)を用いて、

安全かつ低拘束で、乳幼児の脳活動を計測している。これらの脳活動計測によって得られたデータを、視線計測や行動実験を重ね合わせることで生後間もない乳児の脳機能がどのように発達していくのかを分析する。

さらに、ヒト乳児で得られた脳活動計測の結果を、チンパンジー等大型霊長類での脳活動計測結果と比較する研究にも着手している。

## 人工物・メディアの発達の認識過程に関する研究

TVやゲームが若年齢の子どもにどういった影響を与えるのか(与えないのか)を明確にするため、行動実験・質問紙調査・脳活動計測実験を行っている。

## アンドロイドロボットの認知科学

外見が人間と酷似したロボットを、人間がどのように認知するのかという疑問に答えるため、認知科学的手法を用いた実証的研究を行っている。なお、本研究は、大阪大学・ATRとの共同研究として実施している。

## 研究業績(2010 年度)

---

## 古村 孝志・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 地震とその揺れの可視化

大地震による強い揺れの発生と、平野での揺れの増幅を高密度地震観測データ解析と、地震波伝播のコンピュータシミュレーションをもとに調べている。地震波伝播の可視化技法の開発と、地球シミュレータおよび次世代スパコンを用いた大規模並列シミュレーションの開発も進めている。

## 研究業績(2010 年度)

### 分担著書

古村孝志・齊藤竜彦:「超ペタスケール・コンピューティング 地震—津波連成シミュレーション」, 日本計算工学会編編, 丸善出版, 2010 年.

### 雑誌論文

Imai, K., K. Satake and T. Furumura: "Amplification of Tsunami Heights by Delayed Rupture of Great Earthquakes along the Nankai Trough", *Earth Planets Space*, Vol.62, pp.427-432, 2009 年. 【査読有】

Kennett, B.L.N. and T. Furumura: "Tears or thinning? Subduction structures in the Pacific plate beneath the Japanese Island", *Physics of the Earth and Planetary Interiors*, pp.doi:10.1016/j.pepi.2010.03.001, 2010 年. 【査読有】

Sokolov, V., T. Furumura and F. Wenzel: "On the use of JMA intensity in earthquake early warning system", *Bulletin of Earthquake Engineering*, Vol.61, No.N12, pp.DOI: 10.1007/s10518-010-9178-6, 2010 年. 【査読有】

## 講演・口頭発表

古村孝志:「次世代スパコンが切り拓く可能性～地震と津波の高精度予測・災害軽減～」, 次世代スパコンについて知る集い, 2010. 【招待講演】

## 新聞・報道

古村孝志:「次の巨大地震をつかめ 人類の果てしなき闘い」, NHKスペシャル『MEGAQUAKE 巨大地震』, NHK, 2009.

古村孝志:「危機に生きる(7)3連動地震も現実味」, 徳島新聞, 2010.

古村孝志:「チリ巨大地震 17年ぶり大津波警報 猛スピード 水深4000メートルで時速720キロ」, 産経新聞, 2010.

古村孝志:「チリ中部沿岸地震 精度問われる「津波警報」 予測技術の向上必要」, 日刊工業新聞, 2010.

古村孝志:「KOBE 15秒の真実 そのとき地下で何が」, NHKスペシャル『MEGAQUAKE 巨大地震』, NHK, 2010.

古村孝志:「大都市に潜む活断層のリスク」, クローズアップ現代, NHK, 2010.

---

## 真鍋 祐子・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

現代韓国におけるナショナリズムとツーリズム

メディア研究の視座より韓国民主化運動を読み直す

朝鮮民族統一観の構築に関する宗教社会学的研究

### 研究業績(2010年度)

### 著書

真鍋祐子:「増補 光州事件で読む現代韓国」, 平凡社, 2010年.

### 雑誌論文

真鍋祐子:「「隠喩としての病い」の現在－有名人の「がん告白」に照らして－」, 東京大学大学院情報学環紀要, No.80, pp.1-26, 2011年.

真鍋祐子:「書評:金明美『サッカーからみる日韓のナショナリティとローカリティ』」, 文化人類学, Vol.75, No.4, pp.614-617, 2011年. 【査読有】

## その他論文

真鍋祐子:「コメント―「敵味方供養」をめぐる日韓文化比較の視点から」, 戦争と戦没者をめぐる死生学(ワークショップ報告論集), 36-42 頁。東京大学大学院人文社会系研究科・グローバルCOE「死生学の展開と組織化」, 2010 年。

## 講演・口頭発表

富山妙子・真鍋祐子(対談):「アジアを見つめて―富山妙子の画家人生」, 東京YWCA, 2010. 【一般向け】

## 新聞・報道

富山妙子・真鍋祐子(対談):「なぜ光州を語り、描き続けるのか―光州事件 30 周年の年に」, 平凡社『月刊百科』No. 578, 2010.

---

## 水越 伸・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのための思想的方法論として「批判的メディア実践」を構想、実践している。

#### メディア史

19 世紀後半から 20 世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

#### メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

### 研究業績(2010 年度)

#### 著書

水越伸:「21 世紀メディア論」, 放送大学教育振興会, 2011 年。

#### 分担著書

水越伸:「ラジオの過去と未来(『社会学事典』所収)」, 日本社会学会 社会学事典刊行委員会 編, 丸善株式会社, 2010 年。

水越伸:「メディアと社会(『現代用語の基礎知識 2011』所収)」, 自由国民社 編, 自由国民社, 2010 年。

## 雑誌論文

水越伸・金暲和:「ケータイのリテラシー・ケータイのエスノグラフィー:パフォーマンス型授業「モバイルの比較文化的メディア論」の事例研究」, 東京大学大学院情報学環紀要, No.78, pp.1-18, 2010 年.

水越伸・林田真心子:「送り手のメディア・リテラシ——民放連プロジェクト実践者へのインタビューから」, 東京大学大学院情報学環紀要, No.79, pp.65-87, 2010 年.

水越伸:“媒体群落生境:媒体生態系的设计論(メディア・ビオトープ:メディアの生態系のデザイン論)”, 新建築, 2010 年 6 号, 2010 年.【一般向け】

水越伸:「思考の環「社会連携ってなんだろう」」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, No.80, pp.i~iii, 2011 年.

## 作品

水越伸、鳥海希世子、メディア・エクスプリモ、富山チューリップテレビ:「とやまフォト川柳カルタ大会」, とやまフォト川柳プロジェクト, 2010.

水越伸:「文化放送ミニワークショップ」, 民放連メディアリテラシー・プロジェクト:文化放送ミーティング, 2010.

水越伸、メディア・エクスプリモ、メル・プラッツ:「メディフェス・ネビュラ 2010」, 第8回市民メディア全国交流集会 武蔵野・三鷹メディフェス 2010, 2010.

水越伸、アレックス・フルーリー、新井田統:「テレビのある部屋の日常」, テレビ朝日ワークショップ「テレビパズル」, 2011.

## 講演・口頭発表

Joo-Young Janice Jung, Shin Mizukoshi: “Communication Infrastructure Theory and Civic Media Game Approach: Linking Theory and Practice”, 60th Annual ICA Conference, 2010.

水越伸:「メディアのなかの「私」」, 品川区立立会小学校 6 年生・一日東大生, 2010.【招待講演】【一般向け】

水越伸(基調報告):「放送を市民的に「新生」させるために」, メディアと市民の新しい結びつき方をさぐる:民放連メディアリテラシー・フォーラム in Fukuoka, 2010.【一般向け】

中村敦雄・今井康雄・水越伸・場口まさき(コーディネーター):「「メディア」から国語教育の研究と実践を展望する」, 第 119 回全国大学国語教育学会, 2010.【招待講演】

水越伸・金ヨニ・新井田統:「ケータイってなんだろう:新しいメディアとの付き合い方を学ぶ」, 東京大学・文京区共同事業「文の京・大いなる学び」シリーズ第 6 回, 2010.【一般向け】

水越伸:「基本トポロジーと隠喩の体系 — メディア・リテラシーをめぐる二つの仮説」, リテラシー研究集会 2010 「リテラシーとメディア・リテラシー」, 2010.【招待講演】【一般向け】

水越伸(基調報告):「放送を市民的に『新生』させるために」, メディアと市民の新しい結びつき方をさぐる:民放連メディアリテラシー・フォーラム in Osaka, 2010.【一般向け】



水越伸・林田真心子:「ローカルなマスメディアのゆくえ:メディアと市民の新しい結びつき方をさぐる」,民放連「メディアリテラシー実践プロジェクト」富山チューリップテレビ・フォローアップ,2011.【一般向け】

清水修、鈴木芳雄、水越伸:「「知のメタモルフォーゼ」学術は編集されるべきなのか?」,東京大学 SYNAPSE Workshop Vol.2, 2011.【一般向け】

## 新聞・報道

水越伸(コメント):「21世紀のサムライ論・3 サッカーを掘る 日本が見える」,朝日新聞,2010.

水越伸(コメント):「21世紀のサムライ論・4 日本の「力」を問う」,朝日新聞,2010.

水越伸(テレビ出演):「はい!テレビ朝日です(「ろっぽんプロジェクト」最終報告 ~3年間の活動を振り返る~)」,テレビ朝日,2010.

水越伸、アレックス・フルーリー、新井田統:「プロジェクト・ウィズダム:ネットの進化が世界を動かす」,NHK,2011.

---

## 目黒 公郎・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2010年度)

### 雑誌論文

目黒公郎:「高度防災技術の効果的な活用のために」,地盤工学会誌,Vol.58, No.1, pp.54-55, 2010年.

目黒公郎:「間違いだらけの地震対策③「グラツときたら」どうするか?」,ぼうさい, No.No.57, p.21, 2010年.

目黒公郎:「特別寄稿 防災対策のあるべき姿「Ideal Disaster Countermeasures for Total Disaster Management」」,日本無線技報, No.58, pp.6-7, 2010年.

目黒公郎:「間違いだらけの地震対策④「健常者は潜在的災害弱者」誰もが簡単に災害弱者になる」,ぼうさい, No.59, p.21, 2010年.

目黒公郎:「地震に備えるために 一予測情報を効果的に防災に活用するために」,土木学会誌, pp.26-28, 2010年.

下野大樹, 大原美保, 目黒公郎:「首都圏の鉄道ネットワークにおける早期地震警報システムによる減災効果の検討」,地域安全学会論文集, 2010年.【査読有】

鈴木猛康, 秦康範, 目黒公郎, 沼田宗純, 野田五十樹, 下羅弘樹:「住民, 行政, 病院の情報システム連携による安否確認の試み」,安全問題研究論文集, Vol.5, pp.31-36, 2010年.

目黒公郎: 「「合わせ技一本」で進める耐震補強 –耐震補強を促進する環境整備のあり方–」, 第4回日本耐震グランプリ資料集, pp.79-87, 2010年.

沼田宗純, 秦康範, 大原美保, 目黒公郎: 「広域災害医療情報を共有するためのITトリアージシステム(TRACY)の開発」, 土木学会論文集 F5 分冊(土木技術者実践), 2011年.

## 国際会議等

Kimiro MEGURO and Naoki SORIMACHI: "Promotion systems for PP-band retrofitting of weak masonry houses in developing countries", Proc. of the 9th International Symposium on New Technologies for urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.39-48, 2010.

Muneyoshi NUMADA, Kenji OHTA, Akio KOBAYASHI, Takahiro KOMATSU, Kimiro MEGURO: "Development of a simple system for measuring vibration using smart phone application and its evaluation by shaking table", Proc. of the 9th International Symposium on New Technologies for urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.63-72, 2010.

Yu TAKANO and Kimiro MEGURO: "A study on the decrease in tourism to affected regions after natural disasters", Proc. of the 9th International Symposium on New Technologies for urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.179-188, 2010.

Rahman HIDAYAT, Kimiro MEGURO, Srikantha HERATH: "Analyzing coastal community resilience to earthquake-tsunamis with focus on arrangement of evacuation route and shelter building", Proc. of the 9th International Symposium on New Technologies for urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.199-209, 2010.

Navaratnarajah SATHIPARAN and Kimiro MEGURO: "Seismic behavior of 1/4 scale unreinforced masonry house models retrofitted by PP-band meshes", Proc. of the 9th International Symposium on New Technologies for urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.289-300, 2010.

Akiyuki KAWASAKI and Kimiro MEGURO: "Emerging web and geospatial technology revolutionizes disaster response with public involvement", Proc. of the 9th International Symposium on New Technologies for urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.327-338, 2010.

Kimiro MEGURO: "Preface, New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia", Proc. of the 9th International Symposium on New Technologies for urban Safety of Mega Cities in Asia, 2pages, 2010.

Kimiro MEGURO, Miho OHARA, and Muneyoshi NUMADA: "DEVELOPMENT OF IT SYSTEMS FOR EFFICIENT DISASTER/CRISIS MANAGEMENT –IT DISASTER MANUAL AND IT TRIAGE SYSTEM–", Proceedings of Global Forum of Crisis Management and Crisis Communication for Health Care, –Lesson From the Past Episodes of Patient Safety, Infectious Disease and Disaster Around the World–, 2pages, 2010.

## その他論文

目黒公郎: 「持続可能な都市システムの構築を目指して」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp. 277-283, 2010年.

高石孟, 沼田宗純, 高島正典, 目黒公郎: 「多目的海洋観測ブイを用いた津波警報システムのための音響測深の検証」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp.359-362, 2010年.

高石孟, 沼田宗純, 目黒公郎: 「平塚沖で観測された2010年チリ地震による津波について」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp.363-366, 2010年.

井原毅, 沼田宗純, 目黒公郎: 「列車衝撃時における乗客の挙動と危険度評価に関する研究」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp.367-370, 2010 年.

沼田宗純, 廣田るり子, 齋藤勝久, 目黒公郎: 「子供の防犯のための地域活動を支援する防犯特性分析システムの開発」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp.387-391, 2010 年.

齋藤勝久, 沼田宗純, 目黒公郎: 「安全・安心メールの自動分類と警察統計との比較による対策利用価値の考察」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp.393-397, 2010 年.

大原美保, 目黒公郎: 「地震時の病院内被害情報収集システムの開発」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp. 399-402, 2010 年.

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎: 「大規模災害に向けた新しい建物被害認定トレーニングシステムに関する基礎的検討」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp.403-407, 2010 年.

川崎昭如, 目黒公郎: 「2010 年ハイチ地震で見られたウェブマッピングによる災害対応支援の新動向」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp. 409-416, 2010 年.

高野佑, 目黒公郎: 「自然災害後の被災地周辺観光地への観光手控え行動に関する研究」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp. 421-423, 2010 年.

牧之段浩平, 大原美保, 目黒公郎, 須見徹太郎: 「大規模水害時の江東デルタ地帯における危険性分析と避難方法の検討」, 生産研究, Vol. 62, No. 4, pp.425-429, 2010 年.

下野大樹, 大原美保, 目黒公郎: 「首都圏の鉄道ネットワークを対象とした早期地震警報システムによる減災効果の検討」, 生産研究, Vol. 62, No. 6, pp.633-636, 2010 年.

目黒公郎: 「「耐震構造学研究グループ(ERS)」の紹介」, 生産研究, Vol. 62, No. 6, p. 631, 2010 年.

沼田宗純, 太田賢治, 小林明夫, 小松高廣, 目黒公郎: 「小型振動台による Smart Phone 内蔵加速度センサの評価試験」, 生産研究, Vol.62, No.6, pp.637-642, 2010 年.

沼田宗純, 秦康範, 大原美保, 目黒公郎: 「Felica を用いたトリアージシステムの開発と山梨大学医学部附属病院における検証」, 生産研究, Vol.62, No.6, pp.643-652, 2010 年.

## 講演・口頭発表

目黒公郎: “総合的な防災力を向上させる災害情報システムのあり方 Integrated Information System for Total Disaster Management”, 清華—東大ウィーク基調講演, 2010. 【招待講演】

目黒公郎: “Disaster Simulation: as A Risk Communication Tool”, 清華—東大ウィーク「公共安全・災害応急対策に関する国際フォーラム」, 2010. 【招待講演】

目黒公郎: 「確実にやってくる大地震に対して 防災対策のあるべき姿 —ハードとソフト、事前と事後、公と私—」, 市町村アカデミー招待講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「間違いだらけの地震防災、学ぶべき本当の教訓と今やらなくてはいけないこと」, 浜松市自主防災隊連合会防災委員研修会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎:「確実にやってくる地震に対して一間違いだらけの地震防災対策:学ぶべき本当の教訓と今すべきこと一」, TVS構造物診断研究会 第26回定期総会 特別講演, 2010. 【招待講演】

高野佑, 目黒公郎:「自然災害後の被災地周辺観光地への観光手控え行動に関する研究」, 平成 22 年度土木学会全国大会 第 65 回年次学術講演会, 2010.

齋藤勝久, 沼田宗純, 目黒公郎:「安全・安心メールの自動分類と警察統計との比較による対策利用価値の考察」, 平成 22 年度土木学会全国大会 第 65 回年次学術講演会, 2010.

目黒公郎:「防災論・最近発生した自然災害から学ぶ」, NTTラーニングス防災講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎:「確実にやってくる地震に対して一間違いだらけの地震防災対策:学ぶべき本当の教訓と今すべきこと一」, (社)東京都建築士事務所協会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

沼田宗純, 大原美保, 目黒公郎, 秦康範:「IT トリアージシステムを用いた山梨大学医学部付属病院におけるトリアージ訓練の報告」, 第 29 回日本自然災害学会学術講演会, 2010.

高野佑, 目黒公郎:「自然災害後の被災地周辺観光地への観光手控えを軽減するための方策について」, 第 29 回日本自然災害学会学術講演会, 2010.

牧之段浩平, 目黒公郎, 大原美保:「江東デルタ地帯における大規模水害発生時の適切な避難方法に関する基礎的検討」, 第 29 回 日本自然災害学会 学術講演会, 2010.

牧之段浩平, 目黒公郎, 大原美保, 須見徹太郎:「首都圏大規模水害による危険性の分析と避難方法の検討-江東デルタ地帯を対象として-」, 平成 22 年度土木学会全国大会 第 65 回年次学術講演会, 2010.

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎:「大規模地震災害時に向けた新しい建物被害認定トレーニングシステムに関する一考察」, 平成 22 年度土木学会全国大会, 第 65 回年次学術講演会, 2010.

下野大樹, 大原美保, 目黒公郎:「首都圏の鉄道ネットワークを対象とした早期地震警報システムによる減災効果の検討」, 平成 22 年度土木学会全国大会, 第 65 回年次学術講演会, 2010.

目黒公郎:「最近の地震被害から学ぶべき本当の教訓と耐震補強の進め」, 「木の家」耐震改修推進会議(仮称) 発会式 特別講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎:「間違いだらけの地震防災:学ぶべき本当の教訓と今やらなくてはいけないこと」, 日産自動車防災特別講演, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: "Implementation of earthquake safer non-engineered masonry houses through technological and social approaches", インドネシア・ガジャマダ大学地震防災特別講演, 2010. 【招待講演】

目黒公郎: "Implementation of earthquake safer non-engineered masonry houses through technological and social approaches", インドネシア・シアクアラ大学地震防災特別講演, 2010. 【招待講演】

Yu TAKANO and Kimiro MEGURO: "A Study on the Decrease in Tourism to Affected Regions after Natural Disasters", 9th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, 2010.

目黒公郎:「防災計画・マニュアルの考え方について」, 神戸・人と防災未来センター, 2010. 【招待講演】

目黒公郎: “Promotoon systems for PP-band retrofitting of weak masonry hpuses in developing countries”, USMCA2010 Special Presentation, 2010. 【招待講演】

目黒公郎: 「国内外の地震被害を軽減するために一研究者が実施してきた活動」, 防災研究会講演会(土岐先生), 2010. 【招待講演】

目黒公郎: 「DEVELOPMENT OF IT SYSTEMS FOR EFFICIENT DISASTER/CRISIS MANAGEMENT 情報技術を活用した効率的な災害/危機マネジメントシステムの開発」, Global Forum of Crisis Management and Crisis Communication for Health Care--- Lesson From the Past Episodes of Patient Safety, Infectious Disease and Disaster Around the World ---医療のための危機管理とクライシス・コミュニケーションに関する世界会議--- 医療安全・感染症・災害について世界の過去から学ぶ ---, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「都市防災と災害情報／報道」, NTT ラーニングス防災講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「(わが国の)地震防災上の最重要課題を解決するために ー耐震補強を推進する環境整備ー」, 東京電機大学「ライフラインを中心とした都市の防災」講演, 2010. 【招待講演】

目黒公郎: 「今後のわが国の BCM/BCP のあり方」, BCP 研究会 特別講演会, 2010. 【招待講演】

目黒公郎: “Development of Tsunami disaster mitigation system considering the characteristics of the Indian Ocean region”, Geospatial seminar 2010: Forefront and Challenges of Geospatial Technologies for Environmental and Disaster Management in Southeast Asia, 2010. 【招待講演】

目黒公郎: 「建物づくりに関わる人々の地震防災における役割と責任」, 新宿区建築士会 特別講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「防災マニュアルと災害情報システム」, 東京電機大学「ライフラインを中心とした都市の防災」講演, 2010. 【招待講演】

目黒公郎: 「確実にやってくる地震に対して:建設技術者の責任と今すべきこと」, 東京都耐震補強協議会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「最近の自然災害の特徴と危機管理」, 全日本建設技術協会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「都市防災と耐震補強」, 防災士機構特別講演会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: “Implementation of earthquake safer non-engineered masonry houses through technological and social approaches”, 奨励会外国人講演会, 2011. 【招待講演】

目黒公郎: 「都市防災と耐震補強」, 防災士機構特別講演会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「最近の自然災害から学ぶべき本当の教訓と効果的な防災対策」, 川崎市危機管理室 防災講演会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「近年の地震災害から学ぶべき本当の教訓 ー自分と自分の大切なものを地震で失わないためにー」, NPO 外断熱推進会議 防災講演会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「地震ハザードリスクをどう活用するか?」, 国土セイフティネット防災講演会(リアルタイム地震動協議会), 2011. 【招待講演】

目黒公郎: “Towards Implementation of Disaster Safer Built Environment ”, JICA 特別講演会, 2011. 【招待講演】

目黒公郎: 「確実にやってくる大地震に対して -学ぶべき本当の教訓と今やるべきこと-」, 横浜市特別講演会, 2011. 【一般向け】

目黒公郎: 「確実にやってくる大地震に対して -学ぶべき本当の教訓と今やるべきこと-」, 百年住宅 防災特別講演, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「都市防災と耐震補強」, 防災士機構特別講演会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒公郎: 「最近の自然災害から学ぶべき本当の教訓と効果的な防災対策」, 百年住宅 防災特別講演, 2011. 【招待講演】【一般向け】

## 新聞・報道

一般: 「人口減少で災害に強い国づくり」, 建設通信新聞 第二部, 2010.

東大—清華大学: 「東大—清華大学ウィーク 21 の交流イベントを開催」, 東京大学新聞, 2010.

一般: 「震災避難 会津の温泉へ」, 読売新聞, 2010.

一般: 「社会部オンデマンド 携帯の緊急地震速報 受信の有無は? 機種で対応差 普及向上が課題」, 産経新聞, 2010.

一般: 「見聞録 2010 揺れに備えて 7 「その時」のイメージ大切」, 読売新聞, 2010.

一般: 「東大がトリアージシステムを開発」, 静岡新聞, 2010.

一般: 「阪神大震災に学ぶ(下) 新しい住まい観づくりが大切」, 日刊木材新聞, 2011.

一般: 「阪神大震災に学ぶ(中) 「目黒の3点セット」を提案」, 日刊木材新聞, 2011.

一般: 「阪神大震災に学ぶ(上) 真の防災は建物の耐震性向上」, 日刊木材新聞, 2011.

一般: 「ニュージーランド地震について」, 朝日新聞, 2011.

一般: 「いざという時はこう生き延びろ!!」, 週刊 朝日, 2011.

一般: 「計画停電への対処」, TBS ひるおび, 2011.

---

## 山本 博文・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 吉見 俊哉・教授

研究テーマ(主たるもの)

### 20世紀日本とアメリカニズム

1920年代から敗戦を経て現在に至る日本の文化的アメリカニゼーションを焦点に、占領期における大衆意識の屈折、米軍基地の文化的影響、アメリカからの視線を媒介にした戦後のアイデンティティの再構築、消費社会的なリアリティを演じる自己の他者化といった歴史的展開を構造的に把握してきている。これまで国際関係や政治経済的な面からの日米関係の分析は多数なされてきたのに比べ、大衆文化やメディア文化、都市文化の面から戦後日本におけるアメリカニズムを歴史的に掘り下げていく研究をリードしてきた。とりわけ本研究は、日本と韓国、台湾、フィリピン、東南アジア諸国との連続性に視点を広げ、これらの東アジア諸国に点在したアメリカ軍基地と同地域に大衆文化の関係に関心を向けている。帝国主義期から冷戦期への流れのなかで、ポスト植民地主義や文化研究、新しい文化史の視座を十分に消化しながらこのテーマに本格的に取り組むものである。

### MALUI連携とデジタル知識基盤

デジタル技術は活字と視聴覚を架橋し、これまで多様な方式で蓄積されてきた文化的記憶を統合的に扱う。こうした技術的可能性にいち早く着目し、新たな記憶のプラットフォームを構築してきたのは、グーグルをはじめとするグローバル企業である。しかし、20世紀の大衆消費社会における文化資源の生産・流通・消費のサイクルを支えたマスメディア産業に代わり、やがて地球規模で広がる新たな知識循環型社会における文化資源の保存と活用、価値の創造のサイクルを支えていくのは、これまで公共的な文化施設として整備されてきた図書館、博物館・美術館、文書館・資料館、フィルムセンター、番組アーカイブなどの機関と大学、この新たな体制に適応した文化産業の横断的な連携、すなわちMALUI連携である。この場合、Mは Museum、Aは Archives、Lは Library、Uは University、Iは Industry を示す。これらの公共的な文化・知識機関の連携により、いかにした新たなデジタル知識基盤を構築していくことができるかについて探究を進めている。

### 20世紀東アジア文化史を書く

東アジアの若手研究者が共同で、20世紀全体を通じた東アジア文化史を書くことを目指している。これまで、Inter-Asia Cultural Studies や、Cultural Typhoon のプロジェクトで展開してきたネットワークと蓄積を基礎に、20世紀の東アジアが経験した様々な歴史をそれぞれの国民国家の枠を越えた仕方で記述したい。特に、第一次世界大戦と西洋の後退の東アジアにおける文化的インパクト、1920～30年代の東アジアの諸都市におけるモダン文化の浮上、日本の軍事侵略と終戦、植民地独立戦争、冷戦と朝鮮戦争、ベトナム戦争、様々な「戦後」と「成長」の時代の到来、トランスナショナルなメディア文化と、東アジアが経験した20世紀を共通の歴史として、最初から国民国家を越えた視座と枠組みのなかで集团的に記述していく。

## 研究業績(2010年度)

### 著書

吉見俊哉: “博覧会的政治学”, 群学出版有限公司, 2010年.

吉見俊哉: 「博覧会の政治学(文庫版)」, 講談社, 2010年.

吉見俊哉、テッサ・モーリス・スズキ: 「天皇とアメリカ」, 集英社, 2010年.

吉見俊哉、土屋礼子編著: 「大衆文化とメディア」, ミネルヴァ書房, 2010年.

長尾真、遠藤薫、吉見俊哉編著: 「書物と映像の未来: グーグル化する世界の知の課題とは」, 岩波書店, 2010年.

吉見俊哉他編著: 「観る人、作る人、掛ける人(日本映画は生きている③)」, 岩波書店, 2010年.

### 分担著書

吉見俊哉: 「日本の近現代史をどう見るか」, 岩波新書編集部 編, 岩波書店, 2010年.

### 雑誌論文

YOSHIMI Shunya: “The Experiences of Cultural Studies in Japan”, *Inter-Asia Cultural Studies*, Vol.11, No.2, pp.275-284, 2010年. 【査読有】

吉見俊哉: 「それでも、大学が必要だ」, *社会志林*, Vol.56, No.4, pp.271-279, 2010年.

吉見俊哉: 「爆発の時代に、大学の再定義は可能か」, *中央公論*, Vol.125, No.2, pp.66-77, 2010年. 【一般向け】

吉見俊哉他: 「世界のグーグル化とメディア文化財の公共的保全・活用」, *学術の動向*, Vol.15, No.7, pp.67-103, 2010年.

### 講演・口頭発表

吉見俊哉: 「日米安保50年を振り返る」, アメリカ学会 基調講演, 2010. 【招待講演】

吉見俊哉: 「モダンガールと植民地的近代をめぐって」, 一橋大学国際シンポジウム「モダンガールと植民地的近代」, 2010. 【招待講演】

YOSHIMI Shunya: “Mapping Urban Visualities in Postwar Japan: The Socio-Spatial Formation of Movie Theatres and Street-corner TV in Tokyo, 1945-1965”, *The Association of Japanese Literary Studies (AJLS)* 基調講演, 2010. 【招待講演】

YOSHIMI Shunya: “Cultural Typhoons: Information and Identities in a Google-ized World”, *University of Glasgow HATII International Workshop*, 2010. 【招待講演】

YOSHIMI Shunya: “The Conditions of Postmodernity in the Postwar East Asia”, 台湾政治大学文化研究学術論壇, 2010. 【招待講演】



---

## 暦本 純一・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

Human Computer Interaction

Ubiquitous Computing

Reality Sensing

### 研究業績(2010 年度)

#### 雑誌論文

暦本純一:「サイバネティックヒューマン-人間の拡張、人間の再デザイン」, Keio SFC Journal, Vol.10, No.1, 2010 年. 【査読有】

味八木 崇, 暦本 純一:「実世界インタフェースの新たな展開 : 3.集合知センシングによる実世界インタフェース」, 情報処理, Vol.51, No.7, pp.775-781, 2010 年. 【査読有】

#### 国際会議等

Ken Iwasaki, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "AffectPhone: A Handset Device to Present User's Emotional State with Warmth/Coolness", BIOSTEC, 2010. 【査読有】

Emi Tamaki, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "PossessedHand: A Hand Gesture Manipulation System using Electrical Stimuli", The 1st Augmented Human International Conference, 2010. 【査読有】

Yoshio Ishiguro, Adiyana Mujibiyana, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "Aided Eyes: Eye Activity Sensing for Daily Life", The 1st Augmented Human International Conference, 2010. 【査読有】

Kyoko Yonezawa, Masaru Naruoka, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Cat@Log: Cat Wearable Sensing for Supporting Human-Animal Interaction", Pervasive 2010 (video paper), 2010. 【査読有】

Yoshio Ishiguro, Adiyana Mujibiyana, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Aided Eyes: Eye Activity Sensing for Daily Life", Pervasive 2010 video paper, 2010. 【査読有】

Emi Tamaki, Takashi Miyaki, Jun Rekimoto: "BrainyHand: A Wearable Computing Device without HMD and Its Interaction Techniques", AVI2010, 2010. 【査読有】

Yoshiki Takeoka, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Z-touch: A Multi-Touch System That Detects Spatial Gesture Near the Tabletop", SIGGRAPH2010 Talk, 2010. 【査読有】

Adiyana Mujibiyana, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Anywhere Touchtyping: Text Input on Arbitrary Surface Using Depth Sensing", ACM UIST2010 poster, 2010. 【査読有】

Koh Sueda, Kasushi Kotani, and Jun Rekimoto: "Easy-Tagging Cam: Using Social Tagging to Augment Memory", ACM SIGGRAPH 2010 poster, 2010. 【査読有】

Yoshiki Takeoka, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "Z-touch: An Infrastructure for 3D gesture interactions in the proximity of tabletop surfaces", The ACM International Conference on Interactive Tabletops and Surfaces 2010, 2010. 【査読有】

## その他論文

竹岡義樹, 味八木崇, 暦本純一: 「Z-touch: 指先姿勢インタラクション可能なマルチタッチシステム」, 第18回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ(WISS2010), 2010年. 【査読有】

## 受賞

Yoshio Ishiguro, Adiyana Mujibiya, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: Pervasive2010 best video award「Aided Eyes: Eye Activity Sensing for Daily Life」, Pervasive2010, 2010年.

---

## 石川 徹・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 空間の認知・心理・行動

空間とは、その中で生活・行動する人間にとって、身近でありかつ欠くことのできない存在ですが、われわれはいったいどのように周りの空間をとらえているのでしょうか。私たちが周辺についての知識を獲得し、頭の中に記憶し、その知識を利用する一連のプロセスと、得られた知識(“頭の中の地図”)の構造について、とくに興味をもって研究をおこなっています。また、私たちはどのような景観・景色を好ましいと思うのかなどといった、空間における人間の心理的・感情的側面も、重要な研究課題のひとつです。

#### 空間情報の表現と利用

視覚化という方法は、空間的(および非空間的)現象を表現するのに適した方法ですが、その一方で、地図やグラフの理解はそう単純ではないこともわかっています。また、認知や学習のスタイル・好みにも個人差があり、たとえば、視覚的な方法を好む人と、言語的な方法を好む人がいます。このような利用者の属性や目的に応じて効果的に空間の情報を提示する方法はあるのでしょうか。とくに、ユビキタスネットワークを代表とする新しい情報技術とそれを利用する人間の認知・行動の問題(ユビキタス都市における空間行動)に関心をもっています。

#### ユビキタス空間情報社会基盤の構築

最近の情報通信技術の発達により、いつでも・どこでも・誰でもが必要な情報を状況に応じて取得できる環境、いわゆるユビキタスネットワークが発達を遂げていますが、それと同時に、近年、地理空間情報および場所情報システムが社会的注目を集めており、ユビキタスコンピューティングの技術を空間・都市にも展開していこうという動きが盛んになりつつあります。このような背景のもと、自律移動支援や公物管理業務の情報化など、空間分野でのユビキタスの応用に関心を持っています。

## 研究業績(2010 年度)

### 雑誌論文

Toru Ishikawa, Saya Nakata, Yasushi Asami: "Perception and conceptualization of house floor plans: An experimental analysis", *Environment and Behavior*, Vol.43, No.2, pp.233-251, 2010 年. 【査読有】

Toru Ishikawa, Anthony G. Barnston, Kim A. Kastens, Patrick Louchouart: "Understanding, evaluation, and use of climate forecast data by environmental policy students", *Qualitative inquiry in geoscience education research*, GSA Special Paper 474, pp.153-170, 2010 年. 【査読有】

### その他論文

石川徹: 「空間・情報・人間をつなぐ学問としての地理情報科学」, 日本地理学会発表要旨集, 78 号, p. 26, 2010 年.

温文, 石川徹, 佐藤隆夫: 「大規模空間の知識獲得におけるワーキングメモリの役割」, 人間・環境学会誌 (MERA), 第 26 号, p. 20, 2010 年.

### 講演・口頭発表

温文, 石川徹, 佐藤隆夫: 「大規模空間の知識獲得におけるワーキングメモリの役割」, 人間・環境学会 (MERA) 第 17 回大会, 2010.

温文, 石川徹, 佐藤隆夫: 「空間知識の学習におけるワーキングメモリの役割—符号化過程と方向感覚の違い—」, 電子情報通信学会マルチメディア・仮想環境基礎研究会, 2010.

石川徹: 「空間・情報・人間をつなぐ学問としての地理情報科学」, 日本地理学会 2010 年秋季学術大会, 2010.

若林芳樹, 石川徹: 「地理情報科学と空間的思考」, 第 19 回地理情報システム学会学術研究発表大会, 2010.

石川徹: 「高齢者と都市居住—空間の意識と行動の視点から—」, 都市住宅学会第 18 回学術講演会, 2010.

温文, 石川徹, 佐藤隆夫: 「自己座標・世界座標の空間知識とワーキングメモリ」, 東京大学インテリジェント・モデリング・ラボラトリー (IML) オープンハウス, 2010.

### 新聞・報道

Toru Ishikawa: 「Paper Maps vs. GPS Navigation」, カナダ放送協会 (CBC) ラジオ番組「Spark」(技術教養番組), 2010.

### 受賞

石川徹: 人間・環境学会 (MERA) 2009 年度学会賞, 人間・環境学会 (MERA), 2010 年.

温文, 石川徹, 佐藤隆夫: 人間・環境学会 (MERA) 第 17 回大会優秀発表賞, 人間・環境学会 (MERA), 2010 年.

---

## 伊東 乾・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 大原 美保・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 緊急地震速報の効果的な利用法に関する研究

緊急地震速報を効果的に活用するために、地域における海溝型地震・活断層型地震の発生リスクを考慮した速報効果の検証、技術的戦略の提案を行うとともに、実際の速報発表時の住民の対応行動の調査や対応行動力向上のための環境整備を行っている。

### 災害拠点病院の危機管理に関する研究

首都直下地震などの災害時の人的被害を軽減するためには、災害拠点病院・救急病院での事前の防災対策と災害対応力の向上が必須である。大原研では、他分野と連携した総合的な防災研究の一環として、災害拠点病院の危機管理に関する研究に力を入れており、災害時に院内の被害状況や傷病者の情報をいち早く共有するための情報システムの開発や職員のスキル向上のための環境整備を行っている。

研究業績(2010 年度)

### 雑誌論文

大原美保, 目黒公郎: 「地震時の病院内被害情報収集システムの開発」, 生産研究, Vol.62, No.4, pp.399-402, 2010 年. 【査読有】

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎: 「大規模災害に向けた新しい建物被害認定トレーニングシステムに関する基礎的検討」, 生産研究, Vol.62, No.4, pp.403-407, 2010 年.

牧之段浩平, 大原美保, 目黒公郎, 須見徹太郎: 「大規模水害時の江東デルタ地帯における危険性分析と避難方法の検討」, 生産研究, Vol.62, No.4, pp.425-429, 2010 年.

下野大樹, 大原美保, 目黒公郎: 「下野大樹, 大原美保, 目黒公郎」, 生産研究, Vol.62, No.6, pp.633-636, 2010 年.

沼田宗純, 秦康範, 大原美保, 目黒公郎: 「Felica を用いたトリアージシステムの開発と山梨大学医学部附属病院における検証」, 生産研究, Vol.62, No.6, pp.643-652, 2010 年.

大原美保:「地震時における病院のサービス継続に向けて」, 土木技術, 2010 年. 【一般向け】

大原美保, 田中聡, 重川希志依:「構造被害写真から学ぶ住まいの耐震教育ツールの開発と効果分析」, 土木学会地震工学論文集, pp.252-259, 2010 年. 【査読有】

沼田宗純, 秦康範, 大原美保, 目黒公郎:「広域災害医療情報を共有するための IT トリアージシステム(TRACY)の開発」, 土木学会論文集 F5 分冊(土木技術者実践), 2011 年. 【査読有】

下野大樹, 大原美保, 目黒公郎:「首都圏の鉄道ネットワークにおける早期地震警報システムによる減災効果の検討」, 地域安全学会論文集, 2011 年. 【査読有】

## 国際会議等

Kimiro MEGURO, Miho OHARA, and Muneyoshi NUMADA: "Development of IT System for efficient disaster/crisis management -IT disaster manual and IT triage system-", Global Forum of Crisis Management and Crisis Communication for Health Care, -Lesson From the Past Episodes of Patient Safety, Infectious Disease and Disaster Around the World-, Tokyo, Japan, 2010.

Hidetoshi YOSHINARI, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "A study on Expected Distribution of Lead Time by Earthquake Early Warning in Japan", The 8th International Conference on Urban Earthquake Engineering, Tokyo, Japan, 2010. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Development of IT Triage System (Tracy) to Share Regional Disaster Medical Information", The 8th International Conference on Urban Earthquake Engineering, Tokyo, Japan, 2010. 【査読有】

## 講演・口頭発表

沼田宗純, 大原美保, 目黒公郎, 秦康範:「IT トリアージシステムを用いた山梨大学医学部付属病院におけるトリアージ訓練の報告」, 第 29 回日本自然災害学会学術講演会, 2010.

牧之段浩平, 目黒公郎, 大原美保:「江東デルタ地帯における大規模水害発生時の適切な避難方法に関する基礎的検討」, 第 29 回 日本自然災害学会, 2010.

牧之段浩平, 目黒公郎, 大原美保, 須見徹太郎:「首都圏大規模水害による危険性の分析と避難方法の検討-江東デルタ地帯を対象として-」, 平成 22 年度土木学会第 65 回年次学術講演会, 2010.

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎:「大規模地震災害時に向けた新しい建物被害認定トレーニングシステムに関する一考察」, 平成 22 年度土木学会第 65 回年次学術講演会, 2010.

下野大樹, 大原美保, 目黒公郎:「首都圏の鉄道ネットワークを対象とした早期地震警報システムによる減災効果の検討」, 平成 22 年度土木学会第 65 回年次学術講演会, 2010.

---

## JASON G. KARLIN・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 上條 俊介・准教授

研究テーマ(主たるもの)

車載画像センサーの開発

交差点等の一般道において、歩行者や自転車を車の事故から守るための安全運転支援システムの開発が世界的に行われている。当研究室では、独自の画像処理技術を活かし、歩行者や自転車を車載カメラを用いて認識する技術を開発している。

路車協調型安全運転支援技術

路側センサーから交通状況を的確に把握し、危険状況をドライバーに知らせることで事故を回避するシステムの開発を行っている。本研究では、情報提供を受けたドライバーの受容性を考慮したセンサ開発を行うことが重要である。

時空間 Markov Random Field Model による時空間画像の領域分割

コンピュータ・ビジョンでは画像上で移動物体同士が重なった場合(オクルージョン)において、個々の物体を分離して追跡することが困難であった。そこで、本研究では、この問題を時空間画像の領域分割と等価であることを明確にし、時空間 Markov Random Field Model を定義した。

これにより、オクルージョンが生じている場合でも正確に移動物体を画像上で分離することが可能となった。さらに、本手法は、低画角画像のようにオクルージョンが激しい場合でも効果的であることが証明された。

研究業績(2010 年度)

雑誌論文

藤村嘉一, 大門樹, 上條俊介: 「臨界流における安全運転支援を目的とした画像センサ群の開発」, 電子情報通信学会論文誌 D, Vol.J93-D, No.6, pp.889-900, 2010 年. 【査読有】

Kenji Onodera, Shunsuke Kamijo : "Universal Optimizations of Scoring Functions for Virtual Screening ", Chem-Bio Informatics Journal, Vol.10, pp.85-99, 2010 年. 【査読有】

Shunsuke Kamijo, Kaichi Fujimura : "Incident Detection in Heavy Traffics in Tunnels by the Interlayer Feedback

Algorithm ”, International Journal of Intelligent Transportation Systems Research, Vol.ISSN 1348-8503, Vol.8, No.3, pp.121-130, 2010 年. 【査読有】

Takayasu Kawasaki, Kenji Onodera, Shunsuke Kamijo : “Selection of Peptide Inhibitors of Soluble A $\beta$  1-42 Oligomer Formation by Phage Display ”, Biosci, Biotechnol, Biochem, Vol.74(11), pp.2214-2219, 2010 年. 【査読有】

Kaichi Fujimura, Toshihiro Konoma, Shunsuke Kamijo: “Vehicle Infrastructure Integration System Using Vision Sensors to Prevent Accidents in Traffic Flow ”, Journal of IET Intelligent Transport Systems, Vol.5, No.1, pp.11-20, 2011 年. 【査読有】

## 国際会議等

Shunsuke Kamijo, Kaichi Fujimura, Yuuki Shibayama : “Pedestrian Detection Algorithm for On-board Cameras of Multi View Angles ”, 2010 IEEE Intelligent Vehicles Symposium(IV' 10), pp.973-980, 2010. 【査読有】

K.Fujimura, Y.Yoshimitsu, T.Naito, S.Kamijo: “Behavior Understanding at Railway Station by Postures and the Pseud-Trellis Analysis of Trajectories ”, 2010 13th International IEEE Annual Conference on Intelligent Transportation Systems, pp.1116-1122, 2010. 【査読有】

Yuuki Shibayama, Kaichi Fujimura, Shunsuke Kamijo: “Pedestrian Tracking and Detection with On-board Multi View Angle Cameras ”, 17th ITS World Congress 2010, pp.TP018-3, 2010. 【査読有】

Zhin Thi Thi, Kaichi Fujimura, Shunsuke Kamijo : “Human Behaviors Analysis at or Near Public Transportation Asset ”, 17th ITS World Congress 2010, pp.IS08-8, 2010. 【査読有】

Yuji Yoshimitsu, Takeshi Naito, Kaichi Fujimura, Shunsuke Kamijo : “Behavior understanding at railway station by association of locational semantics and Postures ”, 2010 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics(SMC2010), pp.3033-3038, 2010. 【査読有】

Shunsuke Kamijo, Kaichi Fujimura, Yuuki Shibayama: “Pedestrian Tracking by Onboard Multiview-Angle Cameras ”, Transportation Research Board 90th Annual Meeting(TRB), pp.No.11-3711, 2011. 【査読有】

Kaichi Fujimura, Shunsuke Kamijo: “Behavioral Understanding by Posture and Pseudo-Trellis Analysis of Trajectories for Safety of Railway Stations ”, Transportation Research Board 90th Annual Meeting(TRB), pp.No.11-3504, 2011. 【査読有】

## その他論文

Akihiko Fujii, Kenji Onodera, Shunsuke Kamijo : “Reduction of misacylation to the amber suppressor tRNA during site-specific incorporation of unnatural amino acids ”, 生産研究, Vol.62 No.3 通巻 674 号、pp23-31, 2010 年.

柴山悠毅, 藤村嘉一, 上條俊介 : 「画像認識による車両周辺監視技術の開発」, 第 16 回画像センシングシンポジウム, IS4-12-1-8、国内会議, 2010 年. 【査読有】

Takayasu KAWASAKI, Kenji ONODERA, Shunsuke KAMIJO : “Inhibition of Soluble-A $\beta$  1-42 Oligomer Formation by Novel Peptides 2010/5 ”, 生産研究, Vol.62 No.5 通巻 676 号、pp109-114, 2010 年.

藤村嘉一, 上條俊介: 「姿勢・位置情報に基づく駅構内における人物行動把握」, 第 9 回 ITS シンポジウム 2010, PRP-97-102、国内会議, 2010 年. 【査読有】

柴山悠毅, 藤村嘉一, 上條俊介: 「車載カメラを用いた車両周辺の歩行者軌跡の取得」, 第9回 ITS シンポジウム 2010, PRP-103-108、国内会議, 2010 年。【査読有】

柴山悠毅, 藤村嘉一, 上條俊介: 「車載カメラを用いた車両周辺の歩行者軌跡の取得」, 生産研究, Vol.63 No.2 通巻 679 号、pp113-118, 2011 年。

藤村嘉一, 上條俊介: 「姿勢・位置情報に基づく駅構内における人物行動把握」, 生産研究, Vol.63 No.2 通巻 679 号、pp107-112, 2011 年。

藤村嘉一, 上條俊介: 「駅構内における姿勢・位置情報を基にした行動把握フレームワーク」, 電子情報通信学会技術研究報告, 2011 年。

## 講演・口頭発表

上條俊介: 「実用化する安全運転支援技術—道路と車の連携」, 生研公開, 2010。【一般向け】

上條俊介: 「協調システムに期待するもの」, UTMS セミナー2010, 2010。【招待講演】

上條俊介: 「時空間 MRF モデルによるトラッキング—ITS への応用」, 第9回情報科学技術フォーラム(FIT2010), 2010。【招待講演】

上條俊介: 「インフラからの歩行者監視による事故防止の検討」, 2010 ソサイティ大会(IEICE 大会), 2010。

Shunsuke Kamijo: "A Prospect of ITS for Intersection Safety", ITST2010(the 10th Intelligent Transport Systems Telecommunications 2010), 2010。【招待講演】

上條俊介: 「画像処理を活用した ITS 研究」, ITS 講演会(独)国際協力機構主催, 2010。【招待講演】

河村 敦志(オムロン株式会社), 吉光 裕司(オムロン株式会社), 梶谷 浩一郎(オムロン株式会社), 内藤 丈嗣(オムロン株式会社), 藤村嘉一(東京大学生産技術研究所), 上條 俊介(東京大学生産技術研究所): 「高度画像監視センサネットワークシステム」, ViEW2010(Vision Engineering Workshop 2010), 2010。

## 特許

上條俊介: 「移動物体認識方法及び装置」, 特願 2010-181677, 2010 年 08 月。

上條俊介: 「挙動解析装置」, 特願 2010-193109, 2010 年 08 月。

上條俊介: 「物体検出装置」, 特願 2010-231565, 2010 年 10 月。

上條俊介: 「監視システム、および監視サーバ」, 特願 2010-253804, 2010 年 11 月。

上條俊介: 「無線通信端末、無線ネットワークシステム、無線通信経路選択プログラム、および無線通信経路選択方法」, 特願 2010-253805, 2010 年 11 月。

上條俊介: 「挙動解析装置」, 特願 2011-034096, 2011 年 02 月。

上條俊介: 「監視システム、監視カメラ端末、および動作モード制御プログラム」, 特願 2011-054943, 2011 年 03 月。



---

## 北田 暁大・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会的な手法で分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告の誕生』(2000年、岩波書店)、『<意味>への抗い』(2004年、せりか書房)などがある。

#### 若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、「保守化」傾向や「バックラッシュ」などの現象とあわせ、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告都市・東京』(2002年、廣済堂出版)、『嗟う日本の「ナショナリズム」』(2005年、NHK出版)などがある。

#### 理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為(者)責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したのものとして『責任と正義』(2003年、勁草書房)がある。

### 研究業績(2010年度)

#### 著書

田村哲樹・北田暁大他:「語る—熟議/対話の政治学」, 風行社, 2010年.

井上達夫・北田暁大他:「人権論の再構築」, 法律文化社, 2010年.

#### 講演・口頭発表

北田暁大:「可視化しえない排除? システム論の排除/包摂概念から」, 社会構築主義の再構築プロジェクト研究会, 2010. 【招待講演】

北田暁大: "An Assault on "Meaning": from Nakai Masakazu's Concept of "Mediation" to (Japanese) Postmodernisms", Re-Writing Modern and Contemporary Japanese Intellectual History, 2010. 【招待講演】

---

## 清水 晶子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## ROGER DALE SMITH・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 中尾 彰宏・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワーク基盤構築技術の研究

オーバーレイネットワークの研究分野では、現在そして新しい将来のインターネットを支える様々なネットワークサービスやネットワークの仕組みを、インターネット内に埋め込まれた実験基盤(オーバーレイネットワークテストベッド)を用いることで実証実験し、性能評価や問題発見などを行うことを目的とする。本研究テーマでは、このような実証実験を広域で可能にする実験基盤の構築やノードの高度化技術の研究を目的とする。

### ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワークを用いた経路制御技術の研究

オーバーレイルーティング(Overlay Routing)と呼ばれる、インターネットの可用性を向上したり様々なデータ通信の特性(QoS)を最適化する技術の研究を進めている。

### サステナブル・ネットワーク・サービス基盤技術の研究

インターネット上に実装されたネットワークサービスへの DoS アタックや DDoS アタックなどの脅威に対し、サーバの仮想化とプロセスのマイグレーションを利用してサステナブルなサービスを実現するための基盤技術を研究開発し可用性を向上する研究を進めている。

## 研究業績(2010年度)

### 分担著書

増原英彦 東京大学情報教育連絡会(中尾彰宏他):「情報科学入門—Ruby を使って学ぶ [単行本]」, 東京大学出版会 編, 東京大学出版会, 2010 年.

### 雑誌論文

宮村(中村) 浩子, 大坐島 智, 中尾 彰宏:「対話的操作を用いた重要ノード発見のためのネットワークの可視化(産業計測制御研究会 モーションコントロール、センサ応用、信号処理応用、生体信号処理など)」, 電気学会 産業計測制御研究会, Vol.2010, No.79, pp.27-32, 2010 年.

東 慎一郎, 阿多 信吾, 中尾 彰宏:「分散協調システムにおける性能均一化の向上手法」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.110, No.4, pp.21-26, 2010 年.

John Russell Lane, Akihiro Nakao: "On Best-Effort Packet Reordering for Mitigating the Effects of Out-of-Order Delivery on Unmodified TCP", IEICE TRANSACTIONS on Communications, Vol.E93-B, pp.1095-1103, 2010 年. 【査読有】

Ping Du, Akihiro Nakao: "OverCourt: DDoS mitigation through credit-based traffic segregation and path migration", Computer Communications, Volume 33, No.Issue 18, pp.2164-2175, 2010 年. 【査読有】

中内清秀、石津健太郎、村上誉、中尾彰宏、原田博司:「AMPHIBIA: 有無線ネットワーク統合コグニティブ仮想化プラットフォーム」, 電子情報通信学会技術研究報告 SR 研究会, Vol.110, No.252, pp.109-114, 2010 年.

Yuichiro HEI, Akihiro NAKAO, Tomohiko OGISHI, Toru HASEGAWA, Shu YAMAMOTO : "AS Alliance for Resilient Communication over the Internet", IEICE TRANSACTIONS on Communications, Vol.E93-B, No.No.10, pp.2706-2714, 2010 年. 【査読有】

Yunfeng Wang, Akihiro Nakao: "Poisonedwater: An improved approach for accurate reputation ranking in P2P networks", Future Generation Computer Systems, Volume 26, No.Issue 8, pp.1317-1326, 2010 年. 【査読有】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao and Jianhua Ma: "A Simple Public-Goods Game Based Incentive Mechanism for Resource Provision in P2P Networks", UBIQUITOUS INTELLIGENCE AND COMPUTING Lecture Notes in Computer Science, Volume 6406, pp.352-365, 2010 年. 【査読有】

Yunfeng Wang, Akihiro Nakao, Athanasios V. Vasilakos, Jianhua Ma: "P2P soft security: On evolutionary dynamics of P2P incentive mechanism", Computer Communications, Special Issue of Computer Communications on Information and Future Communication Security, Volume 34, No.Issue 3, pp.241-249, 2011 年. 【査読有】

### 国際会議等

HyunYong Lee, Akihiro Nakao, JongWon Kim: "Traffic control through bilateral cooperation between network operators and peers in P2P networks", 12th IEEE/IFIP Network Operations and Management Symposium (NOMS), 2010. 【査読有】

Ping Du, Akihiro Nakao: "DDoS Defense as a Network Service", 12th IEEE/IFIP Network Operations and Management Symposium (NOMS), 2010. 【査読有】

Masahiro Yoshida, Satoshi Ohzahata, Akihiro Nakao, Konosuke Kawashima: "Controlling File Distribution in the Share Network Through Content Poisoning", 24th IEEE International Conference on Advanced Information Networking and Applications (AINA), 2010. 【査読有】

Yuichiro Hei, Akihiro Nakao, Tomohiko Ogishi, Toru Hasegawa, Shu Yamamoto: "vDC: virtual data center powered with as alliance for enabling cost-effective business continuity and coverage", 7th USENIX Symposium on Networked Systems Design and Implementation (NSDI), Internet Network Management and Workshop on Research on Enterprise Networking (INM/WREN), 2010. 【査読有】

Ping Du, Akihiro Nakao: "DDoS Defense Deployment with Network Egress and Ingress Filtering", IEEE International Communications Conference (ICC), 2010. 【査読有】

Ping Du, Maoke Chen, Akihiro Nakao: "Port-space Isolation for Multiplexing a Single IP Address through Open vSwitch", 6th International Conference on Testbeds and Research Infrastructures for the Development of Networks and Communities (TridentCom 2010), 2010. 【査読有】

Pratama Putra, Akihiro Nakao: "Measuring P2P network topology through geo-location-aware distributed crawlers", 8th Asia-Pacific Symposium on Information and Telecommunication Technologies (APSITT), 2010. 【査読有】

Sugang Xu, Hiroaki Harai, Hideki Otsuki, Akihiro Nakao: "Incorporating optical private network in network virtualization for emerging network services", 9th International Conference on Optical Internet (COIN), 2010. 【査読有】

Ping Du, Akihiro Nakao: "Mantlet Trilogy: DDoS Defense Deployable with Innovative Anti-Spoofing, Attack Detection and Mitigation", Proceedings of 19th International Conference on Computer Communications and Networks (ICCCN), 2010. 【査読有】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao and Jianhua Ma: "A Simple Public-Goods Game Based Incentive Mechanism for Resource Provision in P2P Networks", Proceedings of the 7th International Conference on Ubiquitous Intelligence and Computing (UIC), 2010. 【査読有】

## その他論文

中尾彰宏: 「"進化するネットワーク仮想化技術 ネットインフラを用途別に""スライス"" 柔軟な機能拡張の実現に効果」, 日経コミュニケーション, 日経 BP 社, 2010 年. 【査読有】【一般向け】

中尾彰宏: 「仮想化ノード・プロジェクト 新世代のネットワークをめざす仮想化技術」, NICT NEWS 2010 年 7 月号, 情報通信研究機構, 2010 年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

東 慎一郎・阿多信吾(阪市大)・中尾彰宏(東大/NICT)・岡 育生(阪市大): 「分散協調システムにおける性能均一化の向上手法」, 電子情報通信学会, 2010.

Akihiro Nakao: "CoreLab and VNode", GENI Engineering Conference 8 (GEC8) San Diego, 2010. 【招待講演】【基調講演】

Akihiro Nakao: "Updates on CoreLab and Vnode Research", APAN30 学会(ベトナム), 2010. 【招待講演】

中尾 彰宏:「ネットワーク仮想化技術」, フォトニック ICT 研究会 秋季応用物理学学会学術講演会@長崎, 2010. 【招待講演】

中内清秀・石津健太郎・村上 誉(NICT)・中尾彰宏(東大/NICT)・原田博司(NICT):「AMPHIBIA: 有無線ネットワーク統合コグニティブ仮想化プラットフォーム ～ ネットワーク仮想化の視点から見た概要～」, 電子情報通信学会, 2010.

宮村(中村) 浩子(原子力研)・大坐畠 智(電通大)・中尾彰宏(東大)・川島幸之助(東京農工大):「大規模ネットワークデータの適応的可視化」, 電子情報通信学会, 2010.

石津健太郎・中内清秀・村上 誉(NICT)・中尾彰宏(東大/NICT)・原田博司(NICT):「AMPHIBIA: 有無線ネットワーク統合コグニティブ仮想化プラットフォーム ～ コグニティブ無線の視点から見た概要～」, 電子情報通信学会, 2010.

石津健太郎・中内清秀・村上 誉・中尾彰宏・原田博司:「AMPHIBIA: 有無線ネットワーク統合コグニティブ仮想化プラットフォーム ～コグニティブ無線の視点から見た概要～」, 電子情報通信学会, 2010.

吉田雅裕・中尾彰宏(東大):「複数 BitTorrent ネットワークにおける資源効率的な Swarm 情報計測手法」, 電子情報通信学会, 2010.

Ryoji Furuhashi・Akihiro Nakao(UT):“OpenTag: Tag-based network slicing for wide-area coordinated in-network packet processing”, 電子情報通信学会, 2010.

金田 泰(日立)・中尾彰宏(東大/NICT):「仮想化ノードを使用した非 IP プロトコル開発法と経験」, 電子情報通信学会, 2010.

## 受賞

中尾 彰宏: ネットワークシステム研究会研究賞「ネットワークシステム研究会研究賞」, 電子情報通信学会, 2010年.

---

## 中野 公彦・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 独立成分分析法(ICA)の車両振動解析への適用

独立成分分析(ICA)は混合された多チャンネルの計測情報から信号源を同定する方法です。主に生物物理学の領域で用いられていますが、故障検知、状態監視、振動源特定などの機械系分野でも有用な方法と考えられています。このICAを自動車や鉄道の状態監視に利用することを提案し、実験や数値計算を通じて、その有効性を検討しています。

#### 筋電位測定による自動車の乗り心地評価

自動車の乗り心地などの評価には、車体の加速度が用いられることもありますが、多くは、テストドライバーなどの官

能評価によって調べますが、主観が入ることは否定できません。そこで、乗り心地の新しい評価指標の可能性として、運転中における乗員の筋電位を検討しています。実車試験などを通じて、その有効性を検討しています。

## パーソナルモビリティビークル

近年になり、並行二輪車などの電子制御の存在を前提とした新しい小形の個人用の車両が登場してきました。これらをパーソナルモビリティビークルと呼んでおります。歩行者との親和性評価など、これらの車両を実際に都市に取り込むための研究を行っております。

## 研究業績(2010年度)

### 雑誌論文

中川智皓, 中野公彦, 古賀誉章, 須田義大, 川原崎由博, 小坂雄介: 「パーソナルスペースを用いたパーソナルモビリティ・ビークルと歩行者の親和性評価実験」, 日本機械学会論文集(C編), Vol.76, No.770, pp.2493-2499, 2010年. 【査読有】

中川智皓, 中野公彦, 須田義大, 川原崎由博, 小坂雄介: 「歩行空間におけるパーソナルモビリティ・ビークルの安全性と安心感」, 自動車技術会論文集, Vol.41, No.4, pp.941-946, 2010年. 【査読有】

須田義大, 安藤孝幸, 中野公彦, 高畑良一, 久保厚: 「車載用フライホイールを用いた鉄道車両の車体傾斜制御」, 日本機械学会論文集(C編), Vol.76, No.765, pp.1124-1129, 2010年. 【査読有】

Hiroki Nakamura, Shigeyuki Yamabe, Kimihiko Nakano: "Driver Risk Perception and Physiological State During Car-Following Experiments Using a Driving Simulator", International Journal of Intelligence Transportation Systems Research, pp.140-150, 2010年. 【査読有】

### 国際会議等

Keisuke Taneura, Kesayoshi Hadano, Pallave Koirala, Haruo Yoneyama, Kimihiko Nakano, Kunihiro Ikegami: "Dynamics of the Float-Counterweight Type Wave Power Generation System", Twentieth (2010) International Offshore and Polar Engineering Conference, 2010.

Shigeyuki Yamabe, Ryuzo Hayashi, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda: "Estimation of Road Information from Running Vehicle", FISITA 2010 World Automotive Congress, 2010.

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano: "A Novel Position Control Strategy Based on Electrical Energy Consumption Analysis", 10th International conference on Motion and Vibration Control, 2010.

Chihiro Nakagawa, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Yuki Hirayama: "Driving Control of a Two-wheeled Inverted Pendulum Vehicle with Human Pedaling", 10th International conference on Motion and Vibration Control, 2010.

Kimihiko Nakano, Keisuke Suzuki, Yoshio Suda: "Arrangement of actuators to save energy consumed in automotive active suspensions", 10th International conference on Motion and Vibration Control, 2010.

Shigeyuki Yamabe, Renchen Zheng, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda: "Muscle Fatigue Comparison of Eco-driving and Normal Driving", 10th International conference on Motion and Vibration Control, 2010.

Hiroki Nakamura, Kimihiko Nakano, Masanori Ohori: "Estimation Method of Vertical Track Irregularity Using Independent Component Analysis -Experimental review using an actual bogie-", 10th International conference on Motion and Vibration Control, 2010.

Yohishiro Suda, Hisanori Omote, Yasuo Kanayama, Akihiro Sekiguchi, Kimihiko Nakano, Daisuke Yamaguchi: "Energy Saving Urban Transportation System "Eco-Ride"", 0th International conference on Motion and Vibration Control, 2010.

Chihiro Nakagawa, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Yuki Hirayama: "Stability of the Two-wheeled Inverted Pendulum Vehicle Moved by Human Pedaling", 5th Asian Conference on Multibody Dynamics 2010, 2010.

Yuji Okamoto, Kimihiko Nakano, Masanori Ohori, Atsushi Tagaya, Yoshihiro Suda, Shigeyuki Hori: "Evaluation of Ride Comfort with Electromyogram", 10th International conference on Motion and Vibration Control, 2010.

Rencheng Zheng, Yoshio Inoue, Kimihiko Nakano: "Estimation of Dynamic Muscular Moment Arm Length of Lower Limb", 5th Asian Conference on Multibody Dynamics 2010, 2010.

Chihiro Nakagawa, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Yuki Hirayama: "Proposal of Personal Mobility Vehicle Based on Stabilization Control of Two-Wheel Steering and Two-Wheel Driving", Bicycle and Motorcycle Dynamics 2010 Symposium on the Dynamics and Control of Single Track Vehicles, 2010.

Rencheng Zheng, Shigeyuki Yamabe, Kimihiko Nakano, Hiroki Nakamura, Masahiko Aki, Yoshihiro Suda: "Bio-signal Indices to Evaluate Driver Stress of Automatic Platooning", 17th ITS World Congress, 2010.

Hiroki Nakamura, Kimihiko Nakano, Masanori Ohori: "Vibration Analysis of Railway Vehicles Using Independent Component Analysis", 12th MINI Conference on Vehicle System Dynamics, 2010.

Rui Ohashi, Kimihiko Nakano, Hiroki Nakamura, Yoji Okabe, Mamoru Shimazaki, Naoko Watanabe: "Signal Denoising Method with PARAFAC for Ultrasonic Measurement Using an FBG Sensor System Based on the AWG filter", Proc. of Asia-Pacific Workshop on Structural Health Monitoring, 2010.

## その他論文

須田義大, 中野公彦, 井上秀明, 清水忠, 渡辺顯, 福戸淳司, 日野泰道: 「自動車, 鉄道, 航空機, 船舶における安全技術」, 日本機械学会誌, 2010年. 【一般向け】

中野公彦: 「セルフパワーード(Self-powered)への挑戦」, 情報学研究, 2010年. 【一般向け】

岡本裕司, 中野公彦, 大堀真敬, 多加谷敦, 須田義大, 堀重之: 「筋電位測定による自動車の乗り心地評価」, 生産研究, 2010年.

## 講演・口頭発表

鄭仁成: 「生理指標を用いた隊列走行中のドライバの心理的負担の評価」, 自動車技術会学術講演会, 2010.

岡本裕司: 「自動車運転時の横加速度と胸鎖乳突筋の筋電位の関係」, 日本機械学会 2010年度年次大会, 2010.

山邊茂之: 「エコドライブ運転に伴うアクセル操作がもたらす下肢筋疲労分析」, 日本機械学会 2010年度年次大会, 2010.

鄭仁成:「隊列走行中のドライバのストレス評価」, 日本機械学会 2010 年度年次大会, 2010.

中川智皓:「パーソナルモビリティ・ビーグルの多角的評価の試み」, 日本機械学会 2010 年度年次大会, 2010.

中川智皓:「人力で走行する倒立振子型安定化車両の操舵性能」, 日本機械学会 Dynamic and Design Conference 2010, 2010.

中野公彦:「動特性を考慮した独立成分分析法を用いた車両振動の解析」, 日本機械学会 Dynamic and Design Conference 2010, 2010.

福田良司:「閉空間の音響モードによる影響を考慮した窓ガラスのアクティブ遮音」, 日本機械学会 Dynamic and Design Conference 2010, 2010.

小林こずえ:「電磁サスペンションによる大型車の操安性向上制御(第1報 車両一体感の指標の明確化)」, 自動車技術会 2010 年秋季大会, 2010.

中野公彦:「サスペンションによる大型車の操安性向上制御(第2報 アクティブ制御による車両一体感の向上)」, 自動車技術会 2010 年秋季大会, 2010.

中川智皓:「ペダル式倒立振子型車両の駆動制御実験」, 第 53 回自動制御連合講演会, 2010.

大橋壘:「パラレルファクタ解析法を用いたファイバブラッググレーティングセンサ計測信号のノイズ除去法」, 第 53 回自動制御連合講演会, 2010.

山邊茂之:「低燃費性能向上を目指した分割トレッドタイヤのキャンバ制御」, 第 19 回交通・物流部門大会, 2010.

岡本裕司:「自動車乗車時を模擬した振動に対する胸鎖乳突筋筋電位の応答」, 日本機械学会第 19 回交通・物流部門大会, 2010.

山邊茂之:「ドライビングシュミレータを用いたエコドライブ教示と燃費計がドライバに与える影響」, 日本機械学会第 19 回交通・物流部門大会, 2010.

平沢隆之:「パーソナルモビリティ・ビーグルの試作と環境・高齢社会への適応性に関する基礎的検討」, 第9回 ITS シンポジウム 2010, 2010.

鄭仁成:「模擬自動隊列走行中のドライバの臨場感の評価」, 第9回 ITS シンポジウム 2010, 2010.

山口大助:「省エネ型短距離都市交通システムの試作機開発とITS連携構想」, 第9回 ITS シンポジウム 2010, 2010.

中野公彦:「先進モビリティにおける分野融合研究の試み」, 第9回 ITS シンポジウム 2010, 2010.



---

## 丹羽 美之・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 現代メディア史

テレビ番組や映画などの視聴・分析を通して、メディアが現代の社会や政治、科学や技術、文化や生活のイメージをどのように作り出してきたのかを研究している。

#### 映像アーカイブ研究

「TV アーカイブ・プロジェクト」「記録映画アーカイブ・プロジェクト」などを通して、メディア文化財の収集・保存・活用をめぐる課題や可能性について研究している。

#### 制作者・ジャーナリスト教育

ドキュメンタリーの制作や批評、ワークショップやセミナーの企画・運営を中心に、次世代の映像文化や映像ジャーナリズムを担う作り手たちの教育と養成に取り組んでいる。

### 研究業績(2010 年度)

#### 分担著書

丹羽美之:「テレビの未来を拓く君たちへ」, NHK エンタープライズ・伊藤守 編, NHK 出版, 2010 年.

#### 雑誌論文

丹羽美之:「テレビ・ドキュメンタリー史研究の概要」, 放送研究と調査, Vol.60, No.6, pp.4-5, 2010 年.

NIWA Yoshiyuki: "Archives-based Studies on the History of Television Documentaries: An Overview", NHK Broadcasting Studies, No.9, 2010 年.

丹羽美之:「テレビ・アーカイブ研究の始動にあたって」, 放送メディア研究, No.8, pp.7-31, 2010 年.

#### その他論文

丹羽美之・阿武野勝彦・右田千代・谷原和憲:「作り手が語る ドキュメンタリーの魅力と可能性」, GALAC(2010 年 6 月号), 座談会, 2010 年.【一般向け】

丹羽美之・秋山浩之・内海愛子・濱崎好治・藤田真文:「テレビ・アーカイブの課題と可能性」, 放送メディア研究(第 8 号), 座談会, 2010 年.

#### 講演・口頭発表

丹羽美之:「始動するアーカイブ研究」, NHK 放送文化研究所 2010 年春の研究発表とシンポジウム(主催: NHK 放送

文化研究所), 2010.

丹羽美之:「地域と記憶—地域社会で共有される映像」,メル・プラッツ公開研究会(主催:メル・プラッツ),2010.

丹羽美之:「都市の映像社会学—映像フィールドワークと都市社会学」,日本都市社会学会第28回大会シンポジウム,2010.【招待講演】

丹羽美之:「テレビの転形期としての1970/80年代」,同時代史学会2010年度大会シンポジウム,2010.【招待講演】

丹羽美之:「風景の行方—記録映像の保存と公開」,鉄道芸術祭 vol.0(主催:大阪大学・NPO 法人ダンスボックス・京阪電気鉄道),2010.【招待講演】【一般向け】

---

## 原田 至郎・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 情報社会のガバナンスに関する研究

ICTに依存する情報社会のガバナンスについて、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

#### クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

#### アジアにおける政治システムや価値観・政治意識に関する研究

カンボジアを中心とする、文献調査やフィールドワーク、アジア・バロメーター・プロジェクトの調査結果などに基づいた分析

### 研究業績(2010年度)

---

## 堀 里子・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 医薬品・健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築

- \* 臨床事例を活用した医療従事者間情報交換・研修システムの構築と展開
- \* 健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築と展開

## 新規医薬品情報を創製するための研究

- \* ヒト胎盤組織を用いた薬物の胎児移行性及び胎児毒性の定量的評価
- \* 薬物輸送担体や代謝酵素の阻害を介した消化管における薬物間相互作用の検討

## 薬物動態・薬力学理論に基づくテーラーメイド・処方設計システムの開発

### 研究業績(2010年度)

#### 分担著書

堀 里子 他:「疾患と治療薬－医師・薬剤師のためのマニュアル(改訂第6版)」, 大内尉義、伊賀立二、小瀧一 編, 南江堂, 2010年.

#### 雑誌論文

朝比奈泰子, 堀里子, 澤田康文:「インターネットを用いた医療従事者からの健康食品関連情報の収集と共有」, 薬学雑誌, Vol.130, No.1, pp.131-139, 2010年.【査読有】

朝比奈泰子, 堀里子, 澤田康文:「カリウムの摂取制限を受けている患者でのグルコサミン硫酸塩使用の安全性」, 薬学雑誌, Vol.130, No.2, pp.271-275, 2010年.【査読有】

澤田康文, 堀里子:「薬と食の相互作用(121) III.薬と食事の相性 61.セフロキシム アキセチルと食事」, 医薬ジャーナル, Vol.46, No.2, pp.809-818, 2010年.

Tamaki H, Satoh H, Hori S, Ohtani H, Sawada Y: "Inhibitory effects of herbal extracts on breast cancer resistance protein (BCRP) and structure-inhibitory potency relationship of isoflavonoids", Drug Metabol Pharmacokinet, Vol.25, No.2, pp.170-179, 2010年.【査読有】

Ohtsuki S, Yamaguchi H, Kang YS, Hori S, Terasaki T: "Reduction of L-type amino acid transporter 1 mRNA expression in brain capillaries in a mouse model of Parkinson", Biol Pharm Bull, Vol.33, No.7, pp.1250-1252, 2010年.【査読有】

田中 秀和, 藤澤 哲也, 平山 匡彦, 若林 進, 宮崎 長一郎, 佐藤 宏樹, 三木 晶子, 堀 里子, 澤田 康文:「インターネットでの一般用医薬品購入に関する離島住民の意識調査」, 医療薬学, Vol.36, No.3, pp.150-156, 2010年.【査読有】

Suzuki R, Satoh H, Ohtani H, Hori S, Sawada Y: "Saturable binding of finasteride to steroid 5 $\alpha$ -reductase as determinant of the nonlinear pharmacokinetics", Drug Metabol Pharmacokinet, Vol.25, No.2, pp.208-213, 2010年.【査読有】

朝比奈 泰子, 堀 里子, 澤田 康文:「「健康食品」の意味と安全性についての患者、医師、薬剤師の認識」, 薬学雑誌, Vol.130, No.7, pp.961-969, 2010年.【査読有】

澤田 康文, 佐藤 宏樹, 堀 里子:「薬と食の相互作用 (122) III. 薬と食事の相性 62. アトモキセチン塩酸塩と食事」, 医薬ジャーナル, Vol.46, No.3, pp.1029-1031, 2010年.

澤田 康文, 浅島 朋子, 堀 里子:「薬と食の相互作用 (123) III. 薬と食事の相性 63. アルファカルシドール、カル

シトリオールと食事」, 医薬ジャーナル, Vol.46, No.4, pp.1238-1241, 2010 年.

澤田 康文, 佐藤 宏樹, 三木 晶子, 堀 里子:「薬と食の相互作用 (124) III. 薬と食事の相性 64. テガフル・ギメラシル・オテラシルカリウム配合剤と食事」, 医薬ジャーナル, Vol.46, No.5, pp.138-143, 2010 年.

澤田 康文, 浅島 朋子, 堀 里子:「薬と食の相互作用 (129) III. 薬と食事の相性 69. レボドパと食事 (2)」, 医薬ジャーナル, Vol.47, No.1, pp.139-147, 2010 年.

堀 里子, 澤田 康文:「「薬と健康食品」の安全確保のための場・ネットワークと人作り」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, Vol.78, pp.197-200, 2010 年.

堀 里子, 三木 晶子, 佐藤 宏樹, 澤田 康文:「育薬セミナー—臨床事例や最新の医薬品情報にもとづくオリジナル教材で学ぶ全国薬剤師研修プログラム」, Credentials, Vol.21, pp.42-43, 2010 年. 【査読有】【一般向け】

玉木 啓文, 堀 里子, 佐藤 宏樹, 三木 晶子, 大谷 嘉一:「類似薬名による医薬品取り違え事故防止の試み」, 日本病院薬剤師会雑誌, Vol.46, No.6, pp.765-769, 2010 年.

堀 里子, 澤田 康文:「テルビナフィンと CYP2D6 代謝薬剤との相互作用」, 薬局, Vol.61, No.8, pp.2797-2802, 2010 年.

玉木 啓文, 佐藤 宏樹, 堀 里子, 三木 晶子, 澤田 康文:「タバコと CYP1A2 代謝薬剤」, 薬局, Vol.61, No.8, pp.2831-2835, 2010 年.

Nakajima M, Genda T, Suehira M, Satoh H, Miki A, Hori S, Sawada Y: "Increased anticoagulant activity of warfarin used in combination with doxifluridine", Cancer Chemother. Pharmacol., Vol.66, No.5, pp.969-72, 2010 年. 【査読有】

---

## 前田 幸男・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 内閣支持率の研究

新聞社等が報道している世論調査の集計結果の検討を中心に、マクロ・レベルにおける内閣支持率の変動およびミクロ・レベルにおける個人の内閣支持について基礎的な研究を行っている。

#### 性役割分業と政治参加・政治的態度の研究

社会科学研究所が大阪商業大学と共同で行っている日本版総合社会調査 JGSS のデータを利用して、性・性役割分業と政治行動との関係を検討している。

#### データ・アーカイブの研究

社会科学研究所附属日本社会研究情報センターに設置されている SSJDA の運営上の基礎的研究になるが、諸外国のデータ・アーカイブについて歴史および現状について研究している。最近は米国センサス個票の保存および公開用ミクロ標本データの提供方法について調査を行っている。

## 研究業績(2010 年度)

---

### 柳原 大・准教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

歩行の適応制御における種々の小脳シナプス機能性分子の役割

障害物回避歩行動作における大脳—小脳機能連関ループの役割

運動の認知・予測における大脳—小脳機能連関の解明

## 研究業績(2010 年度)

---

### 山内 祐平・准教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

#### 情報通信技術を利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいるが、学習は空間／活動／共同体／人工物の微妙なバランスの中で発生する複雑な事象である。インターネットなどの情報通信技術を学びの場に導入する際に、様々な要因をどうデザインすれば適切な学習環境を構成できるかを、実践研究の中で明らかにする。

## 研究業績(2010 年度)

#### 著書

山内祐平:「デジタル教材の教育学」, 東京大学出版会, 2010 年.

山内祐平(林一雅 ほか執筆):「学びの空間が大学を変える : ラーニングスタジオ, ラーニングcommons, コミュニケーションスペースの展開」, ボイックス, 2010 年.

#### 国際会議等

Oshiro, A., Tsubakimoto, M., Kitamura, S., & Yamauchi, Y.: "Can a Collaborative Note-taking Method Facilitate External Connections between Lecture Material and Students' Prior Knowledge: An Experimental Study ", The 18th International Conference on Computers in Education(ICCE2010), pp.392-396, 2010. 【査読有】

## その他論文

山内祐平,森玲奈,内記麻子,北川美宏,木原俊行:「ワークショップに関する理解向上を目的とした教員養成授業パッケージの開発」, 日本教育工学会第26回大会講演論文集, 2010年.

山内祐平:「デジタル教材の見果てぬ夢」, UP, 39巻, 8号, pp24-29, 2010年. 【一般向け】

---

## 山口 いつ子・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究

これまで進めてきた表現の自由、メディア法、サイバー法及び知的財産法をめぐる憲法学的考察を基盤として、今後のネット上のコミュニケーション特性を方向付けるであろう「ユビキタス化」による社会変容という文脈の下で、情報の自由、規制及び保護をめぐる法のエンフォースメントに際して諸利益間の調整のあり方が問われている幾つかの問題領域に着目し、主に日米欧の議論を取り上げて比較制度分析の観点から検討を加える作業を通じて、こうした利益調整において考慮されるべき、情報や情報通信技術をめぐる法の基底にある価値原理や、対立する諸利益の間のバランスを図るための論理技術を探求していく。

より具体的には、現在、情報の自由、規制及び保護に関する以下の三つの作業を柱として、本研究を進めている。

第一に、情報の自由の理論的基礎として、表現の自由を憲法で保障することのそもそもの意義や根拠を問いかける原理論に着目し、この自由が複数の価値の組み合わせによって支えられているという価値構造や、自由の限界を根拠付ける論理について、考察を行っている。

第二に、こうした従来の法における表現活動ないし情報流通の「自由」と「規制」のバランスが、今日、新たな情報通信技術の発達の下で問い直されている状況を、マス・メディアの報道・取材の自由、通信と放送の融合化、プライバシー・個人情報保護、著作権などの個別の争点を取り上げながら、検討している。

第三に、財産としての情報の保護のあり方をめぐって、とりわけ、「知的財産権」と「自由な情報流通」とが衝突する場面に着目し、そこでの両者の調整—つまりは、情報の「保護」と「自由」との調整—における均衡にかかわる課題に取り組んでいる。

### 研究業績(2010年度)

#### 著書

山口いつ子:「情報法の構造—情報の自由・規制・保護」, 東京大学出版会, 2010年.

#### 国際会議等

Itsuko Yamaguchi: "Japanese "Information Law" Meets American Cyberlaw: In Search of Basic Principles to Deal with Crosscutting Legal Issues in the Ubiquitous Network Society", 国際憲法学会・第8回世界大会 (The VIIIth World Congress of the International Association of Constitutional Law (IACL)), 2010. 【査読有】

## 講演・口頭発表

山口いつ子:「集中排除規制の緩和と情報の多様性—アメリカにおける放送所有規制をめぐる議論」, 日本マス・コミュニケーション学会 2010 年度秋季研究発表会, 2010.

Itsuko Yamaguchi: "Japanese "Information Law" Meets American Cyberlaw: In Search of Basic Principles to Deal with Crosscutting Legal Issues in the Ubiquitous Network Society", 国際憲法学会・第8回世界大会 (The VIIIth World Congress of the International Association of Constitutional Law (IACL)), 2010.

## 受賞

山口いつ子: 第26回電気通信普及財団賞(テレコム社会科学賞)「情報法の構造—情報の自由・規制・保護」, 財団法人電気通信普及財団, 2010 年.

---

## 山本 隆一・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 医療情報の安全性確保とプライバシー保護に関する研究

医療情報の可用性、完全性、機密性の適切な確保と、情報主権者の権利としてのプライバシーと教育・研修・研究・公益目的の利用を調和させるための技術的課題および制度や運用を中心とする人的要素の課題についての研究。

#### 広域分散診療情報データベースへの知識発見手法の応用

電子カルテが普及した際に構成されると予想される広域分散診療情報データベースをモデル化し、随時蓄積される診療情報に対して動的な知識発見手法の適応についての研究

#### 医療における公開鍵基盤の応用に関する研究

公開鍵基盤を医療ドメインに応用するにあつての、資格属性の取り扱いなどの問題の解決と国際的な調和に関する研究

### 研究業績(2010 年度)

#### 雑誌論文

山本 隆一:「EHR が変える保健医療—諸外国の取り組みと我が国への示唆—」, 海外社会保障研究, No.172, pp.31-41, 2010 年. 【査読有】

山本 隆一:「IT 化による地域医療連携実現への道程における解決すべき課題」, 新医療, Vol.38, No.2, pp.28-30, 2011 年.

山本 隆一:「ナショナルレセプトデータベースへの期待」, 月刊基金, pp.2-4, 2011 年. 【一般向け】

## 国際会議等

Katsuya Tanaka, Hidenao Atarashi, Izumi Yamaguchi, Hiroki Watanabe, Ryuichi Yamamoto, Kazuhiko Ohe: "Study on a Safety Management Method and Location Detection using Centralized Controlled Wireless LAN System", MEDINFO 2010, pp.1401, 2010. 【査読有】

## 講演・口頭発表

山本 隆一: 「地域医療とIT」, 新宿区医師会講演会, 2010. 【招待講演】

山本 隆一: 「医療健康情報のパラダイムシフト」, 東大産学連携・第19回科学技術交流フォーラム, 2010.

山本 隆一: 「健康情報活用基盤の動向」, 金沢大学・第一回健康情報研究会キックオフ講演会, 2010. 【招待講演】

山本 隆一: 「医療分野におけるICT活用・情報化の動向」, ASPIC Autumn Meeting 2010, 2010. 【招待講演】

山本 隆一: 「ナショナルレセプトデータベース利活用の現状」, 第30回日本医療情報学連合大会・共同企画, 2010.

山本 隆一: 「今、なぜEHRなのか」, 第30回日本医療情報学連合大会・産学連携共同企画, 2010.

Ryuichi Yamamoto: "e-Health in Japan -EHR strategy and Security guidelines in Japan-", e-Health ワークショップ(ドイツ・オスナブリュック大学), 2010. 【招待講演】

山本 隆一: 「市民が自らの健康情報を活用する時代に向けて～役立てよう、あなたの健康情報～」, 3省連携 健康情報活用基盤実証事業シンポジウム, 2011. 【招待講演】【一般向け】

---

## 石井 健太郎・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### インタラクティブシステム

ロボットやCGエージェントといった自律システム・人間同士のコミュニケーションを支援するシステムについて研究している。これまでに、自律ロボットや自律エージェントの話しかけ手法やふるまいの生成手法を提案している。また、アバターを利用した遠隔コミュニケーションシステムを提案している。

#### ユーザインタフェース

ユーザの指示や好みをコンピュータシステムに伝える技術・コンピュータシステムが持つ情報をユーザにとって自然な形態で提示する技術について研究している。これまでに、レーザーポインタ・タッチ操作でロボットを操作するインタフェースを提案している。また、任意の壁・床・天井から音が聞こえる特殊なスピーカを用いて音で位置を提示するシステムを提案している。



## センサネットワーク

人間の動作を認識して集約・解析するための技術について研究している。これまでに、異なるセンサ環境においても自律ロボットが同様に動作するためのセンサネットワークフレームワークを提案している。また、認識した動作から人間の状況を推定して、ロボット・エージェント・コンピュータサービスが状況に適した動作を行うシステムを提案している。

## 研究業績(2010 年度)

### 国際会議等

Kenta Ishii, Yoshiki Takeoka, Masahiko Inami, and Takeo Igarashi: "Drag-and-Drop Interface for Registration-Free Object Delivery", The 19th IEEE International Symposium on Robot and Human Interactive Communication, pp.228-233, 2010. 【査読有】

Pranav Mistry, Kentaro Ishii, Masahiko Inami, and Takeo Igarashi: "BlinkBot - Look at, Blink and Move", The 22nd Annual ACM Symposium on User Interface Software and Technology, Demonstrations, pp.397-398, 2010. 【査読有】

### その他論文

渡邊徹志, 施可為, 石井健太郎, 湧田雄基, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「拡張現実型情報端末 uScope の提案」, 第 2 回トロン/ユビキタス技術研究会, 2010 年.

越塚登, 石井健太郎: 「環境負荷低減を目指すスマートレジデンスプロジェクトの取組み」, 第 4 回トロン/ユビキタス技術研究会, 2011 年.

Shengdong Zhao, 中村晃一, 石井健太郎, 五十嵐健夫: 「Magic Cards: 紙カードを利用したロボットとのインタラクション」, インタラクション 2011 論文集, pp.131-138, 2011 年. 【査読有】

湧田雄基, 浅野智之, 別所正博, 石井健太郎, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「歩行経路および空間情報を活用した歩行者位置認識手法」, 電子情報通信学会 2011 年総合大会講演論文集 基礎・境界, p.271, 2011 年.

浅野智之, 湧田雄基, 石井健太郎, 別所正博, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「携帯型端末のセンサ情報を用いたロバストな歩行者高度推定手法」, 電子情報通信学会 2011 年総合大会講演論文集 情報・システム(1), p.89, 2011 年.

---

## 小笠原 盛浩・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2010 年度)

---

## 加藤 綾子・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 情報メディア技術の変化と産業構造の変容

情報メディア技術の変化と産業の変容について、特に、音楽や映像を扱う産業を対象に研究を行っている。実証方法には、参与観察や聴き取りという質的調査と、定量的な裏付けの双方を用いる。一例を示すと、近年のレコード産業では、メディア環境の変化による複製ビジネスの限界と、その対処策としての360度ディールの提唱が見られる。それと同時に他方で、コンテンツの制作や取引においてはパーソナル化が技術的に実現され得るようになった。さらに、ネットワーク化は地理的制約を超えた多様な結びつきを容易にした。このような環境において、制作者や消費者は従来の大手メディア企業を必ずしも介さず、ニッチかつグローバルに接続し市場を形成することができるようになってきている。こうした新たなサイクルが生み出される可能性は、ソーシャル・イノベーションのひとつとしても捉えられるだろう。産業そのものの大幅な転換および諸課題が逸早く顕在化した音楽分野を分析対象とすることで、他の分野でも生じるであろう変化を読み解くことができるのではないかと考えている。

### 研究業績(2010年度)

#### 講演・口頭発表

加藤綾子:「音楽産業における原盤制作主体の量的変化に関する分析」, 日本社会情報学会(JSIS & JASI)合同研究発表大会(第25回)(於 長崎県立大学シーボルト校), 2010.

加藤綾子:「世界と日本の音楽市場の動向」, 「邦楽の海外展開の動向:北米・フランスでのポップカルチャー人気」『<洋楽>の日本市場への導入から<邦楽>の海外展開まで』, 日本ポピュラー音楽学会関東地区例会(於 東京藝術大学), 2010.【一般向け】

加藤綾子:「世界と日本の音楽市場の動向ー求められる人材像と教育へのパースペクティブー」『教員から見た音楽業界の今』, 大学生音楽産業フォーラム(於 京都 kara-S), 2010.【一般向け】

加藤綾子:「国内音楽産業における制作技術環境の変化と原盤制作主体の変容」, 日本ポピュラー音楽学会第22回大会(於 東京藝術大学), 2010.

---

## 金 成攻・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 戦後東アジアにおけるマスメディアの形成と文化交流の歴史

「戦後東アジアにおけるマスメディアの形成と文化交流の歴史」を禁止、タブー、海賊版などのキーワードを中心に解析する研究を進めている。とくに「戦後韓国における日本大衆文化禁止」といった現象に注目し、文化政策、ジャーナリズム、テレビ放送、海賊版の流通・消費、著作権問題などを研究対象としている。公式的な文化交流とは一線を引

いているこれらのキーワードに注目することで、メディア文化研究における新しい視座と思考の可能性を探ることをめざしている。

## 研究業績(2010 年度)

### 講演・口頭発表

金成攻:「禁止とモダニティ―戦後韓国における「日本大衆文化」の問題」, メディア学フロンティア・芽の会 第5回公開研究会, 2010.

金成攻:「外国商品とアイデンティティ政治 ―60年代韓国における「日本商品ボイコット」を事例として」, NATIO 第11回研究会, 2010.

### 新聞・報道

金成攻:「高度成長へのノスタルジー」, Pressian, 2010.

金成攻:「沖縄米軍基地問題と鳩山内閣」, Pressian, 2010.

金成攻:「ワールドカップと日本のメディア」, Pressian, 2010.

金成攻:「日韓併合 100 年」, Pressian, 2010.

金成攻:「AKB48 と日本社会」, Pressian, 2010.

金成攻:「羽田空港へのまなざし」, Pressian, 2010.

金成攻:「朝鮮半島と高校無償化」, Pressian, 2010.

金成攻:「2010 年の日韓におけるおしんの神話」, Pressian, 2010.

金成攻:「タイガーマスク現象と日本社会」, Pressian, 2011.

金成攻:「韓国のジャーナリズムと日本社会」, Pressian, 2011.

---

## 佐藤 朝美・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 知性を育む保育環境デザインに関する研究

東京大学情報学環とミサワホームとのプロジェクトにおいて、より良い保育環境デザインについて共同研究(研究代表者:東京大学大学院情報学環 山内 祐平 准教授)を行っております。3年間かけて、保育における学びを指向した空間を提案すべく個々研究を行う予定です。社会性を育む遊具を提案・開発・評価を行います。

## 家族内コミュニケーションを支援するデジタルストーリーテリングシステムの開発研究

家族内コミュニケーションを支援するオンライン環境として、デジタルストーリーテリングシステムの開発研究を行っております。科学研究費補助金(基盤 C)の交付により、3年間かけて成果を出していく予定です。

## Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムの開発研究

幼児の物語行為における親の役割に着目し、Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムを構築し、実践を継続しております。”親子 de 物語”は、親子で物語を作成し、その過程を Web カメラで録画、ビデオを親が自身で振り返ると同時に他の親子とビデオを共有していく、自己調整学習の仕組みを備えた Web アプリケーションです。

## 研究業績(2010 年度)

### 国際会議等

Tomomi SATO: "Development of the System which Supports Parental Styles in Eliciting Narratives from their Children. ", Paper presented at ED-MEDIA 2010., Vol.Proceedings of ED-MEDIA 2010, pp.pp. 3490-3499, 2010. 【査読有】

### 講演・口頭発表

佐藤 朝美, 椿本 弥生, 朝倉 民枝: 「家族内コミュニケーションを支援するデジタルストーリーテリングシステムの開発研究」, 日本教育工学会第 26 回大会 ポスター発表, 2010.

---

## 竹内 文乃・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 疫学研究(大気汚染)

微笑粒子状物質(PM)による大気汚染が心筋梗塞や脳梗塞といった動脈硬化性疾患に影響するかどうか、大規模な疫学研究データを解析することで検討している(統計解析を担当)

#### 疫学研究(循環器疾患)

日本の成人を対象に、健康診断ベースに動脈硬化性疾患発症リスクの探索および定量をする疫学研究に対して、統計解析手法の適用を試みる

#### 疫学研究(小児の環境と健康)

妊婦および小児の環境ホルモンや化学物質への曝露が妊娠や性比の決定、精神・身体発達などどのように影響するか、全国 6 万人の妊婦を登録して追跡することで検討を行う(統計解析を担当)

## 研究業績(2010 年度)

### 雑誌論文

Takeuchi A, Matsuyama Y, Ohashi Y, Ueshima H: "Monte Carlo Sensitivity Analysis for Adjusting Multiple-bias in the longitudinal cardiovascular study.", Monte Carlo Sensitivity Analysis for Adjusting Multiple-bias in the longitudinal cardiovascular study., Vol.31, No.2, pp.63-76, 2010 年. 【査読有】

### 講演・口頭発表

Takeuchi A, Matsuyama Y, Nitta H, Ono M.: "Adjustment of regional differences using generalized additive mixed model to estimate the health effect of PM2.5.", American Statistical Association Joint Statistical Meetings, 2010.

Takeuchi A.: "Adjustment of regional differences in the effect of PM2.5 on daily mortality in JAPAN, using the generalized additive mixed effects model.", Joint Conference of International Society of Exposure Science & International Society for Environmental Epidemiology, 2010.

---

## 南後 由和・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 戦後日本における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究

都市・空間論、メディア論、芸術・技術社会学が交差する観点から、戦後日本における建築家の有名性が、建築家、国家、クライアント、ユーザーによって歴史的にいかにかに表象され、建築物として空間化してきたのかを分析している。なかでも建築家の職能運動の変遷、建築ジャーナリズムの系譜、一般紙誌における建築家の表象、クライアントの属性と地理的分布に関する研究を重点的に行っている。

#### アンリ・ルフェーヴル、シチュアシオニストの都市・建築論に関する理論的・実践的研究

理論的研究として、1950～70年代におけるアンリ・ルフェーヴルの空間論とコンスタントの都市・建築プロジェクト「ニューバビロン」が建築界に与えた影響を分析している。実践的研究として、社会学と建築学を越境して、現代の建築家との協働のリサーチ・プロジェクトを精力的に展開している。その他、今日的な都市の事例分析として、グラフィティ／落書きのフィールドワークを行っている。

## 研究業績(2010 年度)

### 著書

南後由和・加島卓編:『文化人とは何か?』, 東京書籍, 2010 年.

南後由和・大島滋監修:『デザイナーズ集合住宅の過去・現在・未来展』, ミサワホーム株式会社営業事業本部 A プロジェクト室, 2010 年.

## 分担著書

南後由和:「デザイナーズ・マンションの因数分解」『フラット・カルチャー』pp264-271, 遠藤知巳 編, せりか書房, 2010 年.

NANGO, Yoshikazu: “Atelier Bow-Wow’s Approach to Urban and Architectural Research”, Atelier Bow-Wow: Behaviorology, pp321-341, Atelier Bow-Wow ed., Rizzoli, 2010 年.

南後由和:「建築物とインスタレーションの離接運動」『建築はどこにあるの?——7つのインスタレーション』pp104-108, 東京国立近代美術館 編, 東京国立近代美術館, 2010 年.

大山エンリコイサム・南後由和:「大山エンリコイサム×南後由和 メール対談」『アーキテクチャとクラウド——情報による空間の変容』pp80-100, 原広司ほか 編, millegraph, 2010 年.

南後由和・小川希:「蠢きとしてのムーブメント——TERATOTERA と文化発信地・東京の可能性をめぐって」『アートプロジェクトの 0123』pp12-32, 小川希 編, 東京文化発信プロジェクト, 2010 年.

## 雑誌論文

南後由和:「コンスタントのニューバビロン×建築界(3)」, SITE ZERO/ZERO SITE, No.3, pp.308-323, 2010 年.

北田暁大・南後由和・速水健朗・東浩紀:「ショッピングモールから考える——公共、都市、グローバリズム」, 思想地図  $\beta$ , Vol.1, pp.54-77, 2010 年.

## その他論文

南後由和:「特集 東京 2010」, 新建築, 2010 年 4 月号、p66, 2010 年.

大島滋・南後由和・篠原聡子・馬場正尊・大西麻貴・鈴木志麻・成瀬友梨・猪熊純・大島芳彦:「デザイナーズ集合住宅の過去・現在・未来展シンポジウム「集まって住むことの広がり」」, 10+1 web site, 2010 年.

南後由和:「社会に問いかける「住む」と「デザイン」の関係」, CONFORT, 2010 年 6 月号、p125, 2010 年.

南後由和:「「集合知型リサーチ」という試み」, ART and ARCHITECTURE REVIEW Website, 2010 年 6 月号, 2010 年.

南後由和:「コンスタント・ニューヴェンホイスとニューバビロン」, LLOVE オフィシャルカタログ, 2010 年. 【一般向け】

五十嵐太郎・南後由和・長谷川豪・吉村靖孝:「WEB 的で、都市的な設計のあり方」, ART and ARCHITECTURE REVIEW Website, 2011 年 1 月号, 2010 年.

南後由和:「REVIEW——石上純也 建築のあたらしい大きさ」, REAR, no.25、p101, 2010 年.

## 講演・口頭発表

南後由和:「建築と社会学の際」, UTalk, 2010. 【一般向け】

南後由和:「RIDE AND THINK——インタビュー動画出演」, PACIFIC PEDAL LIFE DESIGN 展, 2010. 【一般向け】

南後由和・江渡浩一郎・平山真・中西泰人・木原民雄:「破滅するアーキテクチャ」, アーバンコンピューティングシンポジウム, 2010.

南後由和・西田亮介・寺井元一:「都心↔地方」, MAGNETICS, 2010. 【一般向け】

門脇耕三・長坂常・南後由和:「60年代オランダと現代日本、「誤読」「書き換え」「遊び」の手法——コンスタント・ニーヴェンホイスとその周辺の流れから」, BOEK DECK LECTURE 02, 2010. 【一般向け】

五十嵐太郎・南後由和・長谷川豪・吉村靖孝・藤村龍至:「トーキイベント」, After Action Report of CITY2.0, 2010.

南後由和:「グラフィティ文化のフィールドワーク——メディアと都市の交わる場所」, 都市と建築を考える(東京外国語大学), 2010.

石上純也・南後由和:「公開対談」, 「石上純也——建築のあたらしい大きさ」展(豊田市美術館), 2010. 【招待講演】  
【一般向け】

李明喜・南後由和:「都市とメディアの間——読み取りと書き換えのフィールド」, メディアがつくる違和感(明治大学), 2011.

## 新聞・報道

南後由和:「五十嵐太郎『建築はいかに社会と回路をつなぐのか』書評」, 『図書新聞』2971号、5面, 2010.

南後由和:「2011年のキーパーソン(建築)」, 『BRUTUS』No.700, 2011.

---

## 西 兼志・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2010年度)

### 著書

Kenji Nishi: 「Usages du visage : une approche médiologique de l'interfacialité」, Editions Universitaires Européennes, 2011年.

### 分担著書

D・ブーニュー:「コミュニケーション学講義:メディアロジーから情報社会へ」, 水島久光監訳/西兼志訳 編, 書籍工房早山, 2010年.

B・スティグレル:「技術と時間2:方向喪失(ディスオリエンテーション)」, 石田英敬監修/西兼志訳 編, 法政大学出版社, 2010年.

## 雑誌論文

石田英敬、西兼志、中路武士、谷島貫太:「批評プラットフォーム(クリティカル・プラトール)」, 情報学研究, No.79, pp.3-48, 2010年.

---

## 松前 恵環・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 情報と法を巡る現代的課題

デジタル化・ネットワーク化の進展による「情報」のあり方の変容がもたらす、「法」を巡る現代的な課題について、研究を行っている。具体的には、本来的に「情報」と密接な関わりを有するメディア法制、情報公開法制、プライバシー・個人情報保護法制、知的財産権法制等に加え、情報通信技術の発展に伴って新しく生じた、ISPの法的責任、コンピュータ犯罪、迷惑メール、違法・有害コンテンツの流通等の課題に対応するための法制を対象として、検討を進めている。

#### プライバシー・個人情報保護に関する法原理と制度

「プライバシー」や「プライバシー権」といった概念の意義やその価値、プライバシーの保護と個人情報の保護との関係あるいは個人情報保護制度の意義、個人情報保護制度の現状と課題等、プライバシー・個人情報保護に関する法原理の考察と制度の検討を行っている。この際、我が国のプライバシー・個人情報保護法制にとりわけ大きな影響を与えている米国、欧州の議論や制度に着目して、比較法的研究を行っている。

#### 先端技術とプライバシー・個人情報保護

インターネットに続くユビキタス、そして、クラウドといった先端技術の進展に伴い、プライバシー・個人情報を巡る状況はどのように変容し、それによってプライバシーにはどのような脅威がもたらされているのか、そして、それに対してプライバシー・個人情報保護制度はどのようにあるべきなのか——情報通信技術の進展と情報のあり方の変容という視点から、プライバシー・個人情報保護についての研究を行い、新たな枠組みについて考察している。

#### 研究業績(2010年度)

##### 分担著書

松前恵環:「位置情報技術とプライバシーを巡る法的課題—GPS技術の利用に関する米国の議論を中心に—(『プライバシー・個人情報保護の新課題』)」, 堀部政男 編, 商事法務, 2010年.

##### 雑誌論文

松前恵環:「GPS技術とプライバシーを巡る法的課題(研究会報告)」, 情報通信学会誌, Vol.27, No.4, pp.95-98頁, 2010年.



---

## 米倉 将吾・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 情動ロボティクス

ロボットが人間のように感情・情動を持つようになるためには、何が必要なのか。  
また、そもそもロボットが感情や情動を持っているとはどういう事なのか。  
現象論、進化論、脳科学を出発点として、エモーショナルなロボットの構成を試みている。

#### 思いやり共感システム

誰かの悲しみを敏感に感じ取りそっと寄り添ったり、  
自然や芸術の美しさを感じたり、その感動を誰かと共有したり、  
このような夢のようなシステムをつくり出すために必要な  
脳型情報処理システムを構築する事を試みている。

#### 身体性知能

非限定的状況においても適応創発的に対応する事の出来るシステムを構築するために、  
アフォーダンス・ゲシュタルト・価値システム・身体性を軸として知能の創発、  
行動の創発のための構成論に取り組んでいる。

### 研究業績(2010 年度)

---

## 石川 雄章・特任教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 新技術の社会への実装(イノベーション・モデル)

ITをはじめとする新しい技術を社会に実装する際には、多くの場合、技術というよりはむしろ、多様なステークホルダーとの調整や既存の社会システムの見直し等が課題となる。こうした解題に対応しつつイノベーションを実現するためには、ステークホルダーの把握、共通目標の設定、コアメンバーの任命とチームの結成、権利と責任の適正な分担、検討プロセス及び場の設計、といった幅広い領域にわたる戦略的な取り組みが必要となる。  
21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」では、ユビキタス技術の現場への適用をテーマに、政府、自治体などの取り組みを通じて、実証的にこのテーマにアプローチしている。

#### ITガバナンス(公的セクターにおける枠組みとCIOの役割)

ITガバナンスとは「企業が競争優位構築を目的に、IT戦略の策定・実行をコントロールし、あるべき方向へ導く組織

能力」(「企業のITガバナンス向上に向けて」(通商産業省 1999)とされているが、公的セクターにおいてもIT戦略の策定・実行をコントロールすることは重要な課題である。特に、公的セクターは民間セクターとは異なる評価基準、行動制約があり、また社会的な制度設計という特別な機能を有する。こうしたことを前提に、COBITなどの標準的なITガバナンスのフレームワークを参考に、自らの県でのCIOの経験などを踏まえて、公的なセクターにおけるITガバナンスの枠組みとCIOの役割について研究している。

## 社会的合意形成

新しい技術・制度の社会への導入など、社会的に大きな影響をあたえる行為を行う際には、事前に関係者の合意を得たうえで進めることが望ましく、こうした活動を怠った場合には、最悪の場合、社会的な反発を招く恐れもある。その一方で、こうした活動を行う組織は社会的に確立しておらず、また方法論も制度として十分ではない。このため、社会的合意形成を支援するNPO法人PI-Forum(ピー・アイ・フォーラム)の活動を通じて、実証的に社会的合意形成の意義、方法、知恵、事例などを研究している。

## 研究業績(2010年度)

### 講演・口頭発表

石川雄章:「情報技術によるインフラ高度化」, 都市地下空間活用研究会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「情報技術によるインフラ高度化～ICTによってインフラはどう変わるか～」, 東京都土木技術講習会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「ICTを活用した地域活性化～観光をテーマに～」, 長崎五島 EVITS, 2010. 【招待講演】【一般向け】

石川雄章: “Advanced Infrastructure with ICT”, IoT2010, 2010.

石川雄章:「ユビキタス+クラウド⇒インフラ・イノベーション」, TRON SHOW, 2010. 【一般向け】

石川雄章:「インフラ・イノベーション」, 情報未来研究会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「情報通信技術を活用した新たな社会基盤の維持管理」, 観光ナガサキを支える”道守”養成ユニット成果報告会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

### 特許

石川雄章:「光設備遠隔監視制御システム、光設備遠隔監視制御装置、クロージャ装置、光設備遠隔監視制御方法及びプログラム」, 特願, 2010年04月.

---

## 水島 久光・客員教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2010年度)

---

## 宮川 勇二・特任教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 飯野 浩一・客員准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 小林 真輔・特任准教授

研究テーマ(主たるもの)

センサーネットワーク

小型で無線通信可能なセンサーネットワークの研究。ハードウェアからソフトウェアまでのトータルアーキテクチャの研究を行っている。

組み込みシステム

組み込みシステムのハードウェア並びにソフトウェアの研究

研究業績(2010 年度)

国際会議等

Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "T-Kernel/SS A Secure Filesystem with Access Control Protection Using Tamper-Resistant Chip", 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010) Workshops, pp.134 - 139, 2010. 【査読有】

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure", 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010), pp.303 - 310, 2010. 【査読有】

Keiichi Nakamura, Shinsuke Kobayashi, Hisanori Matsumoto, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "TOA-Based Lateral Distance Measurement System Using UWB Impulse Radio", IEEE 6th International Conference on Wireless and Mobile Computing, Networking and Communications (WiMob 2010), pp.300-307, 2010. 【査読有】

Mohamed Kharrat, Yuki Wakuda, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Adaptive Radial Artery Pulse Rate Measurement using Piezo Film Sensor Based on Ensemble Empirical Mode Decomposition", the 10th IEEE International Conference on Information Technology and Applications in Biomedicine (ITAB 2010), 2010. 【査読有】

Keiichi Nakamura, Hisanori Matsumoto, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Approaching Vehicle Alert System for Pedestrians using UWB Impulse Radio", the 21st Annual Symposium on Micro-Nano Mechatronics and Human Sciences (MHS 2010), pp.471-476, 2010.

Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, So Ito, Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Tomonori Usaka, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "eTNet: A Smart Card Network Architecture for Flexible Electronic Commerce Services", the 4th IFIP International Conference on New Technologies, Mobility and Security (NTMS 2011), 2011. 【査読有】

## 講演・口頭発表

Shinsuke Kobayashi: "Ubiquitous Sensor Network Platform for Gathering Real-World Entities", Incheon RFID/USN International Conference, 2010. 【招待講演】

## 受賞

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: Best Paper Award of 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010) 「ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure」, IEEE Computer Society, 2010 年.

---

## RAKESH BATBYAL・特任准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 市川 暢之・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

点検・維持管理等現場業務の効率化

社会基盤の老朽化に伴う点検・維持管理業務量の増大に対応するため、現場業務で発生する情報の流れに着目した点検作業等の効率化と質の向上を実現する手法・機器等について研究する

## 研究業績(2010 年度)

### 国際会議等

N.Ichikawa: "Environment and Governance for Various Special Network toward Innovation", International Multi-Conference on Society, Cybernetics and Informatics, 2010. 【査読有】

### 講演・口頭発表

市川暢之: 「インフラ管理に関する課題および対応案」, 土木学会年次講演会, 2010.

### 特許

市川暢之: 「光設備遠隔監視制御システム、光設備遠隔関し制御装置、クロージャ装置、光設備遠隔監視制御方法及びプログラム」, 特願, 2010 年 04 月.

---

## 大石 岳史・特任講師

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 大規模文化遺産のデジタルコンテンツ化

大規模な文化遺産を 3 次元的に記録し、コンテンツ化する研究を行っている。主に幾何形状のモデル化に従事しており、レーザレンジセンサを用いて計測された複数の距離画像を位置合わせ、統合する手法の開発を行っている。現在はカンボジア・アンコール遺跡群のバイヨン寺院を対象としてプロジェクトを進めている。

## 研究業績(2010 年度)

### 著書

池内克史, 大石岳史 (編著): 「3次元デジタルアーカイブ」, 東京大学出版会, 2010 年.

### 雑誌論文

岡本泰英, 大石岳史, 池内克史: 「大規模文化財 3 次元モデルと付加情報の閲覧および関連付けシステム」, 映像情報メディア学会誌, Vol.64, No.11, 2010 年. 【査読有】

Y. Okamoto, T. Oishi and K. Ikeuchi: "Image-Based Network Rendering of Large Meshes for Cloud Computing", International Journal of Computer Vision, 2010 年. 【査読有】

## 国際会議等

Lu Boun Vinh, Tetsuya Kakuta, Rei Kawakami, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: "Foreground and Shadow Occlusion Handling for Outdoor Augmented Reality", IEEE International Symposium on Mixed and Augmented Reality 2010, 2010. 【査読有】

## その他論文

岡本泰英、大石岳史、池内克史:「クラウドコンピューティング技術に基づく大規模モデルのネットワーク描画システム」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), 2010年.

工藤雷太、川上玲、大石岳史、池内克史:「屋外複合現実感のための単画像からの光源環境推定」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), 2010年.

大塚祐貴、阪野貴彦、大石岳史、池内克史:「3次元計測データを利用したMRにおける実物体と仮想物体のシームレスな合成」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010), 2010年.

角田哲也、大石岳史、池内克史:「大学発のベンチャービジネス: 株式会社アスカラボ -複合現実感技術を用いた文化財復元展示への取組み-」, 映像情報メディア学会誌, 2010年.

小野晋太郎、川上玲、大石岳史、池内克史:「文化財の3次元モデリングとその利活用 ~ソマ・ポンペイ遺跡での活動を通して~」, 映像情報メディア学会誌, 2010年.

影沢政隆、大石岳史、小野晋太郎、池内克史:「歴史的建造物の3Dモデル化(栄螺堂を事例の中心として)」, 生産研究, 2011年.

## 講演・口頭発表

T. Oishi, Y. Okamoto and K. Ikeuchi: "e-Heritage and Cloud computing", MSRA Keio-GCOE Workshop, Microsoft Research Asia, 2010. 【招待講演】

T. Oishi, Y. Okamoto, K. Ikeuchi: "e-Heritage and Cloud Computing: The Digital Bayon Project", Microsoft Research Asia eHeritage Workshop 2010, 2010. 【招待講演】

---

## 中村 仁・特任講師

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 「キャリア」と呼ばれる国家公務員のキャリアパスに関する研究

国家公務員の中でもいわゆる「キャリア」に焦点を当て、これまで部内均衡を保ってきたと言われていたモデルが省庁再編後どのように変容しているかを研究

## 国内ファッション産業に対する産業政策に関する研究

繊維産業の中でも「川下」と呼ばれるアパレル産業に焦点を当て、産業振興に行政がどのような関与を行っているか、また効果的な支援はどのような政策であるかを研究

## コンテンツ産業政策の政策形成過程

国内のコンテンツ産業に対する産業政策の政策形成過程を研究

## 研究業績(2010 年度)

### その他論文

田中里尚・中村仁・梅原宏治・齋木吉隆・古賀令子:「日本ファッションにおけるポップカルチャー的背景に関する研究-戦後日本のポップカルチャー資料収集を中心に-」, 服飾文化共同研究報告 2009, pp.80-85, 2010 年.

中村 仁:「ファッションビジネスの特徴とその可能性」, 社会・経済システム学会第 29 回大会 報告要旨集, pp.81-84, 2010 年.【査読有】

小山友介・七邊信重・中村仁:「日本 PC ゲーム産業の分業・協業体制について」, 社会・経済システム学会第 29 回大会 報告要旨集, pp.89-92, 2010 年.【査読有】

Jin NAKAMURA: "Japanese Pop Culture and Fashion", Fashion in Fiction's 2nd International Conference(DVD), 2010 年.【査読有】

Jin NAKAMURA: "Overseas deployment of fashion culture from Japan: Policy process of pop culture fashion valuing", Asian cultural Studies Association CONFERENCE PROGRAMME 2010, pp.13-14, 2010 年.【査読有】

### 講演・口頭発表

佐藤美加・川島蓉子・中村仁:「産学で新たな価値を創り出す」, 第 17 回繊維ファッション産学交流会議繊維(ファッション産学協議会), 2010.【招待講演】【一般向け】

三浦彰・永森達昌・中村仁・塚田幸一・金永善・生駒芳子:「ファッションを学ぶ・教えるー21 世紀の服づくりを考えるー」, 日本のファッション力研究講座-徹底検証 日本のファッション力を考える(学校法人杉野学園), 2010.【招待講演】

Jin NAKAMURA: "Policy process of pop culture fashion valuing", The Mid-Atlantic Popular / American Culture Association 21st Annual Conference, 2010.

### 新聞・報道

寄稿者:不明、対象者:中村仁:「ファッションを学ぶ・教えるー21 世紀の服づくりを考えるー」, ファッション力 SEPTEMBER 2010, 2010.

---

## 北村 智・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2010 年度)

### 分担著書

北村智:「デジタル教材を評価する」『デジタル教材の教育学』, 山内祐平 編, 東京大学出版会, 2010 年.

### 雑誌論文

北村 智:「インターネット利用と政治的有効性感覚, 政治的関心の関係性に関する検討」, 社会情報学研究, Vol.14, No.2, pp.83-97, 2010 年. 【査読有】

北村 智, 岡本絵莉:「工学系大学院の研究室教育における学生の満足度および成長の自己評価と研究業績の関係」, 日本教育工学会論文誌, Vol.34, No.2, pp.95-103, 2010 年. 【査読有】

### 国際会議等

Oshiro, A., Tsubakimoto, M., Kitamura, S., & Yamauchi, Y.: "Can a collaborative note-taking method facilitate external connections between lecture material and students", International Conference on Computers in Education 2010, 2010. 【査読有】

### 講演・口頭発表

北村 智, 山田政寛, 御園真史, 木谷紀子, 山内祐平:「ユーザベース協調フィルタリングを用いたオンライン英語学習環境の構築」, 日本教育工学会第 26 回全国大会, 2010.

北村 智, 岡本絵莉:「工学系大学院の研究室教育における学生の満足度および成長の自己評価と研究業績の関係」, 日本教育工学会研究会 JSET10-3, 2010.

北村 智:「インターネット利用行動に関する生態学的決定論の計量分析的検討:階層線形モデルを用いた全国調査データの分析」, 2010 年日本社会情報学会(JSIS&JASI)合同大会, 2010.

山田政寛, 北村 智, 御園真史, 山内祐平:「コミュニケーションを通じた英語学習における学習者の学業的自己概念と自己効力感の変容」, 日本教育工学会第 26 回全国大会, 2010.

御園真史, 北村 智, 山田政寛, 山内祐平:「大学生の数学問題に対する興味についての分析」, 日本教育工学会第 26 回全国大会, 2010.

伏木田稚子, 北村 智, 山内祐平:「文系学部のゼミナールにおける学習者特性・環境・学習成果の関係についての研究」, 日本教育工学会第 26 回全国大会, 2010.



大城明緒, 椿本弥生, 北村 智, 山内祐平: 「講義における外的関連づけを支援する協同ノートテイキング方法に関する検討」, 日本教育工学会第 26 回全国大会, 2010.

---

## 木下 裕美子・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2010 年度)

#### 著書

Kinoshita, Yumiko: "Service Entities in Open-Closed Innovation", Nova Science Publisher, 2010 年.

#### 分担著書

Kinoshita, Yumiko: "Service Entities in Open-Closed Innovation: The Growth of Service Economy for Smaller Firms Driven by Information Technology (IT) and Knowledge-Intensive Services (KIS), In: Developing Economies: Innovation, Investment and Sustainability, Ch 1", Carcillo, Joanne M. ed., Nova Science Publisher, 2010 年.

#### 雑誌論文

Sudoh, Osamu; Kinoshita, Yumiko: "Transformative and Innovative E-Gov for the Next Generation: Linkages of Back Offices for One-Stop Portal", E-Government, E-Services, and Global Processes, IFIP Advances in Information and Communication Technology, Springer, Vol.334/2010, pp.111-124, 2010 年. 【査読有】

#### 国際会議等

Sudoh, Osamu; Kinoshita, Yumiko: "Transformative and Innovative E-Gov for the Next Generation: Linkages of Back Offices for One-Stop Portal", World Computer Congress 2010, IFIP, Vol.EGES/GISP 2010, pp.111-124, 2010. 【査読有】

#### その他論文

Kinoshita, Yumiko: "System competency of SMEs in Japan from the viewpoint of Information Technology (IT) and Knowledge-Intensive Services (KIS)", Proceedings of the 25th Annual Conference of Japan Association for Social Informatics, 417-420, 第 25 回全国大会予稿集, 2010 年.

須藤 修, 後藤 玲子, 木下 裕美子: 「e-Science の確立に向けて: 地球環境問題への新たなデータセントリックアプローチ」, 日本社会情報学会全国大会発表集, 255-258, 第 25 回全国大会予稿集, 2010 年.

#### 受賞

木下裕美子: 研究発表賞—2009 年度(第24回全国大会)の発表に対して 「Review on the Qualitative Measurement Methodology of Innovation in Service Using Panel Data」, 日本社会情報学会(JASI), 2010 年.

---

## 地引 泰人・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

### 雑誌論文

田中淳、市澤成介、宮川勇二、吉井博明、地引泰人、宇田川真之、関谷直也、中村功、松尾一郎:「2009 年 8 月 9 日豪雨災害(兵庫県佐用水害)における住民の対応に関する調査研究」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究調査研究編, 2010 年.

### 講演・口頭発表

Dicky Pelupessy, JIBIKI Yasuhito, SEKIYA Naoya, TANAKA Atsushi: “Disaster Warning and Evacuation Behavior: the Case of Mt. Kelud in 2007”, International Workshop on Multi-disciplinary Hazard Reduction from Earthquakes and Volcanoes in Indonesia, 2010.

地引泰人、関谷直也、田中淳:「2007 年のインドネシアのクルー(Kelud)火山災害における被災住民と災害対応組織の分析」, 日本自然災害学会学術講演会, 2010.

地引泰人:「人道支援の報道記事の内容分析ーパダン沖地震を事例にー」, 日本災害情報学会第 11 回研究発表大会, 2010.

---

## 樫本 弥生・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## De Silva Gamhewage Chaminda・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 研谷 紀夫・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### Digital Archive Digital Heritage における情報統制手法の確立

文化資源をデジタル化して公開する Digital Archive や Digital Heritage における、メタデータやオントロジなどの情報統制手法の確立を行う。

### 近代メディア表象論

近代におけるメディア表象を、近年では特に明治以降の国葬を対象としたメディア表象について研究する。

### 研究業績(2010 年度)

#### 雑誌論文

研谷紀夫:「ポータブル端末の興隆とデジタル化された文化資源～「資料基盤」「社会基盤」「システム基盤」の三基盤の観点から～」, 丸善ライブラリーニュース, No.11, pp.6-7, 2010 年.

研谷紀夫 川島隆徳:「人名典拠情報の API による共有化と画像資料における人名情報システム」, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, Vol.2010, pp.91-96, 2010 年.

川島隆徳 研谷紀夫:「著者名典拠情報を拡充するための共同編集プラットフォーム」, 情報知識学会誌, Vol.20, No.2, pp.183-188, 2010 年.

研谷紀夫(訳 朱連花):“電子化時代図書館の文書資料管理(Document management in the digital library age)”, 図書館理論と実践, No.3 月号, pp.82-85, 2011 年.【査読有】

### 国際会議等

Norio TOGIYA: “A Navigation System for Digital Cultural Heritage Using Topic Maps”, ,DEIT(International Conference on Data Engineering and Internet Technology ), 2011.【査読有】

### その他論文

研谷紀夫:「Digital Cultural Heritage における分類と新しい情報知識体系の可能性」, 現代の図書館, 2010 年.

研谷紀夫:「博覧都市東京 ランドマークアンソロジーとしての絵葉書」, 日本絵葉書会会報,35 号, 2010 年.

研谷紀夫:「博覧都市東京 実況メディアとしての絵葉書～伊藤博文の国葬をめぐって～」, 日本絵葉書会会報, 34 号, 2010 年.

## 講演・口頭発表

研谷紀夫: 「EAC-CPFとMADSに適應する人名典拠情報構築の試み—戦前期の皇族・華族に関する人名情報を中心として—」, 日本アーカイブズ学会 2010 年度年次大会, 2010.

研谷紀夫: 「伊藤博文肖像写真の持つ「個性」と人物イメージの形成」, 映像学会第 36 回全国大会, 2010.

研谷紀夫 北岡タマ子 高橋英一 三橋徹: 「デジタルカルチュラルヘリテージ構築のためのガイドライン」の概要とその課題」, 画像電子学会年次大会企画セッション「文化資源情報のアーカイブと高度検索」, 2010.

研谷紀夫: 「丸木利陽と丸木会に関する基礎的研究」, 写真芸術学会年次大会, 2010.

研谷紀夫: 「デジタルアーカイブと博物館情報」, 南山大学 人類学博物館 情報部会シンポジウム「博物館資料の文化資源化」, 2010.

研谷紀夫: 「2次創造のためのデジタルアーカイブと大学」, 映文連 第4回 次世代映像文化研究会セミナー「デジタルアーカイブとそのポイント」, 2010.

研谷紀夫: 「写真アーカイブより華族社会における人脈ネットワークを分析する試みとそのドキュメンテーション」, アート・ドキュメンテーション学会秋季研究会, 2010.

研谷紀夫: 「デジタルカルチュラルヘリテージ構築のためのガイドライン」, 日本教育情報学会、日本博物館協会 博物館デジタル・アーカイブの未来, 2010.

研谷紀夫 北岡タマ子: 「資料情報の標準化の考え方について」, アート・ドキュメンテーション学会 デジタルアーカイブサロン, 2010.

## 受賞

研谷紀夫: 第4回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞受賞「『デジタルアーカイブにおける「資料基盤」統合化モデルの研究』に対して」, アート・ドキュメンテーション学会, 2010 年.

添野勉, 研谷紀夫: 情報文化学会賞受賞, 「21 世紀 COE: 次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」及び「情報学環社会情報研究資料センター: 高度アーカイブ化事業」におけるユビキタス・テクノロジーを活用した次世代アーカイブの構築に対して」, 情報文化学会, 2010 年.

---

## 藤原 正仁・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

デジタルコンテンツ分野における人材育成に関する研究

インターンシップとキャリアディベロップメントに関する研究

就労形態の多様化に関する研究

## 研究業績(2010年度)

### 分担著書

藤原正仁:「ゲーム開発者のキャリア形成『デジタルゲームの教科書:知っておくべきゲーム業界最新トレンド』」, デジタルゲームの教科書制作委員会 編, ソフトバンククリエイティブ, 2010年.

### 雑誌論文

藤原正仁:「コンテンツ産業におけるインターンシップによる学習プロセスの探索的研究」, キャリアデザイン研究, Vol.6, pp.113-124, 2010年. 【査読有】

### その他論文

馬場章・藤原正仁:「違法複製ゲームソフトのダウンロードに関する使用実態調査報告書」, 違法複製ゲームソフトのダウンロードに関する使用実態調査報告書, 社団法人コンピュータエンターテインメント協会, 2010年. 【一般向け】

### 講演・口頭発表

藤原正仁:「ゲーム開発者の働き方とキャリア」, CEDEC2010「ゲームのお仕事」業界研究フェア, 2010. 【招待講演】  
【一般向け】

藤原正仁:「ゲーム開発者のキャリアパス」, イーキャリア USTREAM 配信「キャリアストリーム」, 2010. 【招待講演】  
【一般向け】

### 新聞・報道

藤原正仁:「働く意欲から労働時間までゲーム開発者の実態を検証する」, 週刊ファミ通, 2010.

馬場章・藤原正仁:「違法複製ゲームソフトの使用実態調査報告書」, 日本経済新聞, 2010.

藤原正仁:「開発者は経済的な見返り以上に自分の能力・個性を生かす場を選ぶ傾向」, ダイヤモンド・オンライン「コンテンツ業界キャッチアップ」, 2010.

藤原正仁:「【CEDEC 2010】調査データで浮き彫りにするゲーム開発者の年収、キャリア、学歴」, INSIDE, 2010.

藤原正仁:「ゲーム業界と個人は、共創的価値を創造する関係:開発者を使い捨てにしない雇用制度を創る時期にきている」, ダイヤモンド・オンライン「コンテンツ業界キャッチアップ」, 2010.

---

## 別所 正博・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ユビキタス歩行者ナビゲーションの研究

ユビキタスコンピューティング技術を応用した、都市環境での歩行者移動支援に関して研究を行っている。  
具体的には、

- \* 誘導コンテキストに応じた最適な情報 PUSH を実現するためのソフトウェア機構
  - \* 障害者の移動支援を念頭とした、利用者の身体特性と環境のアクセシビリティを考慮したナビゲーション手法
  - \* 都市環境でのランドマークベースの自然な道案内生成手法
- といったテーマに取り組んでいる。

### 研究業績(2010 年度)

#### 国際会議等

M. Fahim Ferdous Khan, Ken Sakamura, Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, and Noboru Koshizuka: "Developing Secure and Efficient Electronic Commerce Applications with eTRON Architecture", The 3rd International Symposium on Electronic Commerce and Security, pp.247-252, 2010. 【査読有】

Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "T-Kernel/SS: A Secure Filesystem with Access Control Protection Using Tamper-Resistant Chip", The 5th IEEE International Workshop on Security, Trust, and Privacy for Software Applications, pp.134-139, 2010. 【査読有】

Lee Fueng Yap, Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "SUCAS: An Architecture for Secure User Centric Attestation in Location-Based Service", The 2nd IEEE International Conference on Information Privacy, Security, Risk and Trust, pp.760-767, 2010. 【査読有】

Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, So Ito, Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Tomonori Usaka, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "eTNet: A Smart Card Network Architecture for Flexible Electronic Commerce Services", The 4th IFIP International Conference on New Technologies, Mobility and Security, 2011. 【査読有】

Lee Fueng Yap, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura: "Secure Consumer-Oriented Integrated Services Using Activity-Based Attestation for Converging Online and In-Store Shopping Experience", International Conference on Information and Computer Applications, 2011. 【査読有】

---

## 堀 聖司・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 作品制作を中心とした錯視的映像表現に関する研究

コンピュータ・グラフィクスを使用し制作した複数の異なった視点移動の映像を、ひとつの画面内に部分的に合成することによって生じる視覚の競合を利用した錯視的映像作品の制作。切り抜き合成用に使用する動画素材にも視点移動する三次元形状のシルエットを用いることでさらに視覚の競合が助長される。

### 研究業績(2010 年度)

---

## 前田 拓人・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 東海・東南海・南海地震の連動性評価研究

将来連動して発生する可能性があることが指摘されている東海・東南海・南海地震について、被害予測精度を向上させるため、詳細な地下構造を用いた大規模計算機による強震動・津波連成シミュレーションを行う。

#### 地震波動伝播・散乱問題

地震波は伝播する過程で固体地球内部の短波長不均質構造によって散乱され、大きく乱されていく。また、海陸境界においては音波と地震波の間の相互変換が起こり、地震による海中音響波は発生することがある。本研究では弾性波動論・基盤地震観測網による高密度データ解析・大規模数値計算それぞれのアプローチから、不均質構造内部での地震波の伝播過程をモデル化する。

### 研究業績(2010 年度)

#### 雑誌論文

Kazushige Obara, Sachiko Tanaka, Takuto Maeda, and Takanori Matsuzawa: "Depth-dependent activity of non-volcanic tremor in southwest Japan", *Geophysical Research Letters*, Vol.37, No.L13306, pp. doi:10.1029/2010GL043679, 2010 年. 【査読有】

Hiroyuki Kumagai, Masaru Nakano, Takuto Maeda, Hugo Yepes, Pablo Palacios, Mario Ruiz, Santiago Arrals, Mayra Vaca, Indira Molina, and Tadashi Yamashina: "Broadband seismic monitoring of active volcanoes using deterministic and stochastic approaches", *Journal of Geophysical Research*, Vol.115, No.B08303, pp. doi:10.1029/2009JO006889, 2010 年. 【査読有】

Tomotake Ueno, Takuto Maeda, Kazushige Obara, Youichi Asano, and Tetsuya Takeda: "Migration of low-frequency tremors revealed from multiple-array analyses in western Shikoku, Japan", *Journal of Geophysical Research*, Vol.115, No.B00A26, pp.doi:10.1029/2008JB006051, 2010 年. 【査読有】

Hitoshi Hirose, Youichi Asano, Kazushige Obara, Takeshi Kimura, Takanori Matsuzawa, Sachiko Tanaka, and Takuto Maeda: "Slow earthquakes linked along dip in the Nankai subduction zone", *Science*, Vol.330, No.6010, pp.1502, doi:10.1126/science.1197102, 2010 年. 【査読有】

Takashi Furumura, Kentaro Imai, and Takuto Maeda: "A revised tsunami source model for the 1707 Hoei earthquake and simulation of tsunami inundation of Ryujin Lake", *Journal of Geophysical Research*, Vol.116, No.B02308, pp.doi:10.1029/2010JB007918, 2010 年. 【査読有】

Aitaro Kato, Shinichi Sakai, Takashi Iidaka, Takaya Iwasaki, Eiji Kurashimo, Toshihiro Igarashi, Naoshi Hirata, Toshihiko Kanazawa, Kei Katsumata, Hiroaki Takahashi, Ryo Honda, , Takahiro Maeda, Masayoshi Ichiyangagi, Teruhiko Yamaguchi, Masahiro Kosuga, Tomomi Okada, Junichi Nakajima, Shuichiro Hori, Takashi Nakayama, Akira Hasegawa, Toshio Kono, Syuichi Suzuki, Noriko Tsumura, Yoshihiro Hiramatsu, Katsunori Sugaya, Aiko Hayashi, Tetsuya Hirose, Akihiro Sawada, Keisuke Tanaka, Yoshiko Yamanaka, Haruhisa Nakamichi, Takashi Okuda, Yoshihisa Iio, Kin: "Anomalous depth dependency of the stress field in the 2007 Noto Hanto, Japan, earthquake: Potential involvement of a deep fluid reservoir", *Geophysical Research Letters*, Vol.38, No.L06306, pp.doi:10.1029/2010GL046413, 2010 年. 【査読有】

Takuto Maeda, Kazushige Obara, and Yohei Yukutake: "Seismic Velocity Decrease and Recovery Related to Earthquake Swarms in a Geothermal Area", *Earth, Planets and Space*, Vol.62, No.9, pp.685-691, doi:10.5047/eps.2010.08.006, 2010 年. 【査読有】

## 講演・口頭発表

前田拓人・古村孝志:「地震波・海中音波・津波の動的連成シミュレーションの試み」, 日本地球惑星科学連合 2010 年大会, 2010.

前田拓人・古村孝志・齋藤竜彦・小原一成:「稠密高感度地震観測網の広帯域利用で見る不均質構造を伝播する地震波動場の時空間モニタリング」, 日本地球惑星科学連合 2010 年大会, 2010.

竹本帝人・古村孝志・前田拓人・野口科子:「コーダ規格化法による全国のサイト増幅特性の推定(3) 地表と地中地震計を用いたサイト増幅率の評価」, 日本地球惑星科学連合 2010 年大会, 2010.

今井健太郎・西山昭仁・前田拓人・石辺岳男・佐竹健治・古村孝志:「史料に基づく 1707 年宝永地震の発震時刻の推定精度」, 日本地球惑星科学連合 2010 年大会, 2010.

野口科子・前田拓人・古村孝志:「海溝に沿って伝播する地震波に見られる顕著な位相の特徴とその解釈」, 日本地球惑星科学連合 2010 年大会, 2010.

前田拓人・古村孝志:「地震波・海中音波・津波の動的連成シミュレーション法の構築」, 東京大学地震研究所研究集会 リソスフェアの短波長不均質性のイメージングとモニタリングに関する研究の高度化—地震発生帯の構造の時空間変化の解明に向けて—, 2010.

竹本帝人・古村孝志・前田拓人:「東北日本の不均質構造によるコーダ波エネルギーの空間分布の推定」, 東京大学地震研究所研究集会 リソスフェアの短波長不均質性のイメージングとモニタリングに関する研究の高度化—地震発生帯の構造の時空間変化の解明に向けて—, 2010.



Takuto Maeda and Takashi Furumura: "A unified dynamic numerical simulation of seismic, ocean acoustics, and tsunami waves", 7th ACES international workshop, 2010.

Teito Takemoto, Takashi Furumura, Takuto Maeda, and Shinako Noguchi: "Site amplification from coda waves in Japan", 7th ACES international workshop, 2010.

Shinako Noguchi, Takuto Maeda, and Takashi Furumura: "FDM simulatino of trench trapped Rayleigh Waves", 7th ACES international workshop, 2010.

Takashi Furumura, Kentaro Imai, and Takuto Maeda: "Tsunami simulation for the 1707 Hiei earthquake: A revised source model and tsunami inundation to onshore lakes", 7th ACES international workshop, 2010.

前田拓人・古村孝志:「地震に伴う津波高と海中音波:動的連成シミュレーションによる検討」, 日本地震学会 2010 年秋季大会, 2010.

今井健太郎・西山昭仁・前田拓人・石辺岳男・佐竹健治・古村孝志:「宝永地震の際の東海震源域の破壊遅れ—駿河湾・遠州灘沿岸の津波痕跡高からの推定—」, 日本地震学会 2010 年秋季大会, 2010.

竹本帝人・古村孝志・前田拓人・野口科子:「東北日本の不均質構造によるコーダ波エネルギーの空間分布の推定」, 日本地震学会 2010 年秋季大会, 2010.

岩井一央・古村孝志・前田拓人・武村俊介:「4次元地震波動場のポリウム可視化」, 日本地震学会 2010 年秋季大会, 2010.

古村孝志・前田拓人・今井健太郎:「1605年慶長地震による大津波発生メカニズム」, 日本地震学会 2010 年秋季大会, 2010.

Takuto Maeda and Takashi Furumura: "An integrated simulation of seismic and tsunami waves", AGU Fall Meeting, 2010.

Shinako Noguchi, Takuto Maeda, and Takashi Furumura: "Computer simulation of trench trapped Rayleigh waves", AGU Fall Meeting, 2010.

Kentaro Imai, Akira Nishiyama, Takuto Maeda, Takeo Ishibe, Kenji Satake, and Takashi Furumura, : "Delayed Segment Rupture during Great Earthquake along the Nankai Trough – Estimation from Historical Documents and Tsunami Trace Heights of the 1707 Hiei Earthquake –", AGU Fall Meeting, 2010.

Takashi Furumura, Kentaro Imai, and Takuto Maeda: "Tsunami simulation for the great 1707 Hiei, Japan, earthquake", AGU Fall Meeting, 2010.

前田拓人・古村孝志:「地震波・海中音波・津波の動的連成シミュレーションの試み」, 日本地球惑星科学連合 2010 年大会, 2010.

前田拓人・古村孝志・齋藤竜彦・小原一成:「稠密高感度地震観測網の広帯域利用で見る不均質構造を伝播する地震波動場の時空間モニタリング」, 日本地球惑星科学連合 2010 年大会, 2010.

竹本帝人・古村孝志・前田拓人・野口科子:「コーダ規格化法による全国のサイト増幅特性の推定(3) 地表と地中地震計を用いたサイト増幅率の評価」, 日本地球惑星科学連合 2010 年大会, 2010.

今井健太郎・西山昭仁・前田拓人・石辺岳男・佐竹健治・古村孝志:「史料に基づく1707年宝永地震の発震時刻の推定精度」, 日本地球惑星科学連合 2010年大会, 2010.

野口科子・前田拓人・古村孝志:「海溝に沿って伝播する地震波に見られる顕著な位相の特徴とその解釈」, 日本地球惑星科学連合 2010年大会, 2010.

---

## 水島 希・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### Brain-Machine Interface 研究開発における倫理的諸問題への対処システム構築

文部科学省脳科学研究戦略推進プログラムにおいて佐倉統分担研究者の担当する「Brain-Machine Interface の脳神経倫理的および法的枠組みに関する研究」のうち、BMI 研究開発プロジェクト内部において、どのような倫理問題対処システムを構築すべきかを検討し、試行する。特に現在は、研究倫理コンサルテーション(ベンチサイド倫理コンサルテーション)窓口を設置し、研究のあらゆる段階で生じる倫理課題への迅速な対処を試行している。

#### フェミニズム科学批評による脳神経科学分析

先端科学技術領域である脳神経科学において、フェミニズム科学批評の立場から諸課題を抽出する。

### 研究業績(2010年度)

#### 雑誌論文

Osamu Sakura and Nozomi Mizushima: "Towards the Governance of Neuroscience: Neuroethics in Japan with Special Reference to BMI (Brain Machine Interface).", *East Asian Science, Technology and Society*, Vol.4, No.1, pp.137-144, 2010年. 【査読有】

#### その他論文

水島希:「社会の中の科学技術——脳科学と日本社会からみる現状と展望」, 『まなぶ』, 労働大学出版センター、Vol.633, pp.13-16, 労働大学出版センター, 2010年. 【一般向け】

#### 講演・口頭発表

Nozomi Mizushima, Taichi Isobe, and Osamu Sakura: "Ethics Consultation in the Midstream: Implications for Scientific Governance from within.", Annual Meeting of the The Society for Social Studies of Science (4S), Aug 26, 2010, University of Tokyo (Komaba campus), Tokyo., 2010.

Taichi Isobe, Nozomi Mizushima and Osamu Sakura: "How is Public Perception Different from Expert Perception about BMI (Brain-Machine Interface)?: Toward Constructing the Relationship between BMI and Society.", Annual Meeting of the The Society for Social Studies of Science (4S), Aug 26, 2010, University of Tokyo (Komaba campus), Tokyo., 2010.

Nozomi Mizushima, Taichi Isobe, and Osamu Sakura: "Neuroethics at the R&D Stages: Implications from Benchside Ethics Consultation in BMI Studies.", Annual Meeting of the American Society for Bioethics and Humanities (ASBH), Oct 23, 2010, San Diego, CA, USA., 2010.

---

## 味八木 崇・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

ヒューマンコンピュータインタラクション

実世界センシング

ユビキタスコンピューティング

### 研究業績(2010 年度)

#### 国際会議等

Yoshio Ishiguro, Adiyana Mujibiyana, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "Aided Eyes: Eye Activity Sensing for Daily Life", Pervasive 2010 video paper, 2010. 【査読有】

Ken Iwasaki, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "AffectPhone: A Handset Device to Present User's Emotional State with Warmth/Coolness", BIOSTEC 2010, Workshop on B-Interface, 2010. 【査読有】

Emi Tamaki, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "PossessedHand: A Hand Gesture Manipulation System using Electrical Stimuli", The 1st Augmented Human International Conference (AH2010), 2010. 【査読有】

Yoshio Ishiguro, Adiyana Mujibiyana, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "Aided Eyes: Eye Activity Sensing for Daily Life", The 1st Augmented Human International Conference (AH2010), 2010. 【査読有】

Kyoko Yonezawa, Masaru Naruoka, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Cat@Log: Cat Wearable Sensing for Supporting Human-Animal Interaction", Pervasive 2010 video paper, 2010. 【査読有】

Emi Tamaki, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "BrainyHand: A Wearable Computing Device without HMD and Its Interaction Techniques", AVI2010 demonstration, 2010. 【査読有】

Yoshiki Takeoka, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Z-touch: A Multi-touch System that Detects Spatial Gesture Near the Tabletop", SIGGRAPH 2010 Talks, 2010. 【査読有】

Adiyana Mujibiyana, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Anywhere touchtyping: text input on arbitrary surface using depth sensing", Adjunct proceedings of the 23rd annual ACM symposium on User interface software and technology - UIST, 2010. 【査読有】

Yoshiki Takeoka, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Z-touch: An Infrastructure for 3D gesture interactions in the

proximity of tabletop surfaces”, ACM International Conference on Interactive Tabletops and Surfaces (ITS2010), 2010. 【査読有】

## その他論文

味八木 崇, 暦本 純一: 「実世界インタフェースの新たな展開 : 3.集合知センシングによる実世界インタフェース」, 情報処理, Vol.51 No.7, 解説論文, 2010 年.

## 講演・口頭発表

川内 見作, 味八木 崇, 暦本 純一: 「Directional Beaconing による WiFi 室内位置推定」, 情報処理学会第51回プログラミングシンポジウム, 2010.

岩崎 健一郎, 味八木 崇, 暦本 純一: 「AffectPhone: 生体情報を利用した電話機型プレゼンス提示装置」, 情報処理学会インタラクション 2010, 2010.

玉城 絵美, 味八木 崇, 暦本 純一: 「PossessedHand: 電気刺激を用いた人体手形状の直接制御システム」, 情報処理学会インタラクション 2010, 2010.

---

## 湧田 雄基・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### Human Context Recognition using Ubiquitous Sensors

主に歩行者をターゲットとして, 使用者に取り付けたセンサや都市空間に配置されたセンサ(ユビキタスセンサ)からの情報を利用し, 利用者の位置, 状態または行為を推定することを研究目標とする. こうした利用者の情報を活用し, よりリッチなサービスの提供を実現する.

#### ロボットによるイベント認識のための概念構造の自立的構造化

本研究では, ロボットによる自由度が高くかつロバストな実環境における現象理解と解釈(イベント認識)を実現するためのロボット自身が保有する概念構造を自立的に獲得し構造化するためのアーキテクチャの構築を行う. なお, 本研究は, 文部科学省科学研究費補助金による援助を受けて実施する.

#### ネットワークロボットを用いた睡眠を中心とする生活パターン管理・調整支援

本研究では, 人の日常生活を観測可能な画像センサを搭載したロボットおよびウェアラブル型の生体センサをワイヤレスネットワークでリンクすることにより, 人の生活パターンを管理・調整することが可能なシステムを構築した. 提案システムでは, 脈波が取得可能な生体センサおよび画像認識による人状態推定手法を組み合わせることにより, 日常生活の中の人の行動を推定することが可能である. また, 生体リズムの動的変動特性に注目し, 人の活性度および活動パターンを調整する手法について提案した. なお, 本研究は, 文部科学省科学研究費補助金の援助により実施した.

### 研究業績(2010 年度)

---

## 今井 健太郎・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 大田 朋子・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 岡崎 直観・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

日中中日機械翻訳に関する研究

日中中日機械翻訳の実用に向けた対訳辞書を構築するための研究

自然言語処理

計算機による自然言語理解に向けた研究

研究業績(2010 年度)

雑誌論文

Naoaki Okazaki, Sophia Ananiadou, Jun: "Building a High Quality Sense Inventory for Improved Abbreviation Disambiguation", *Bioinformatics*, Vol.26, No.9, pp.1246-1253, 2010 年. 【査読有】

松林優一郎, 岡崎直観, 辻井潤一: 「自動意味役割付与における意味役割の汎化」, *自然言語処理*, Vol.17, No.4, pp.59-89, 2010 年. 【査読有】

田中翔平, 岡崎直観, 石塚 満: 「Wikipedia を教師データに用いた要約文書収集クエリパターンの学習」, *人工知能学会論文誌*, Vol.26, No.2, pp.366-375, 2011 年. 【査読有】

---

## 国際会議等

Shouhei Tanaka, Naoaki Okazaki, Mitsuru Ishizuka: "Learning Web Query Patterns for Imitating Wikipedia Articles", Proceedings of the 23rd International Conference on Computational Linguistics (COLING 2010): Posters, pp.1229-1237, 2010. 【査読有】

Naoaki Okazaki, Jun: "Simple and Efficient Algorithm for Approximate Dictionary Matching", Proceedings of the 23rd International Conference on Computational Linguistics (COLING 2010), pp.851-859, 2010. 【査読有】

## 講演・口頭発表

宇佐美佑, Han-Cheol Cho, 岡崎直観, 辻井潤一: 「自動構築した大規模訓練データを用いた固有名抽出」, 言語処理学会第 17 回年次大会(NLP2011), 2010.

坪井祐太, 海野裕也, 鹿島久嗣, 岡崎直観: 「Newton-CG 法による条件付き確率場のバッチ学習」, 言語処理学会第 17 回年次大会(NLP2011), 2011.

Han-Cheol Cho, Okazaki Naoaki, Jun: 「Token Boundaries or Named Entity Boundaries」, 言語処理学会第 17 回年次大会(NLP2011), 2011.

## 受賞

松林優一郎, 岡崎直観, 辻井潤一: 言語処理学会論文賞「自動意味役割付与における意味役割の汎化」, 言語処理学会, 2010 年.

---

## 狩野 芳伸・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 金 美恵・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 呉 先超・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 柴田 剛志・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## 趙 志鎬・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

### 雑誌論文

Sung-Yeol Kim, Ji-Ho Cho, Andreas Koschan, and Mongi Abidi: "3D Video Generation and Service based on a TOF Depth Sensor in MPEG-4 Multimedia Framework", IEEE Trans. on Consumer Electronics, Vol.56, No.3, pp.1730-1738, 2010 年. 【査読有】

### 国際会議等

Ji-Ho Cho, Jae Doug Yoo and Kwan H. Lee: "Enhanced Depth Keying for 3D Composition", In Proc. of International Conference on 3D Systems and Applications (3DSA) 2010, pp.278-281, 2010. 【査読有】

Jae Doug Yoo, Ji-Ho Cho and Kwan H. Lee: "Real time Light Source Estimation for 3D Broadcasting", In Proc. of International Conference on 3D Systems and Applications (3DSA) 2010, pp.282-285, 2010. 【査読有】

Sung-Yeol Kim, Ji-Ho Cho, Andreas Koschan, and Mongi Abidi: "Spatial and Temporal Enhancement of Depth Images Captured by a Time-of-flight Depth Sensor", In Proc. of International Conference on Pattern Recognition (ICPR) 2010, pp.2358-2461, 2010. 【査読有】

Ji-Ho Cho, Sung-Yeol Kim, and Kwan H. Lee: "MPEG-4 Based 3D Video Contents Creation Method using Time-of-Flight Sensor for 3DTV", In Proc. of 52nd International Symposium ELMAR-2010, pp.459-462, 2010. 【査読有】

Ji-Ho Cho, Min Ki Park, Kuk-Jin Yoon, and Kwan Heng Lee: "Automatic Video Matting with Temporal Coherence Using Time-of-Flight Sensor", In Proc. of Workshop on Picture Coding and Image Processing 2010, pp.81, 2010. 【査読有】

---

## 二宮 利江・特任研究員

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 自律分散ネットワーク型組織のマネジメントにおける環境とガバナンス

多様な分野の技術者、専門家が関係する大規模なプロジェクトの運営を目的とし、中央集権型ではなくネットワーク型の組織を作り、分散している関係者が自律的に活動しながら、全体として一つの目的を達成するためのマネジメントに必要な環境およびガバナンスについて、ネットワーク分析の手法を取り入れながら考察する。

#### 行動観察手法を用いた社会インフラ施設の維持管理業務の効率化

社会インフラ施設の維持管理業務の実態を行動観察手法を用いて分析し、ユーザインタフェース、感性、安全、ロバストネス、メンテナンス、人間工学の観点から業務をサポートするシステムの要件を抽出する。その要件を基に、人間中心の業務支援システムを設計、開発し、業務の効率化を図る。

### 研究業績(2010年度)

#### 分担著書

T. Ninomiya, F. Anma, T. Okamoto: "The Organizational Knowledge Circulated Management System on e-Learning Practices in Universities", Nikos Karacapilidis ed., Hershey, 2010年.

#### 国際会議等

Y. Ishikawa, N. Ichikawa, T. Ninomiya: "Environment and Governance for Various Special Network toward", 4th International Multi-Conference on Society, Cybernetics and, pp.132-142, 2010. 【査読有】

---

## 野口 科子・特任研究員

### 研究テーマ(主たるもの)



## 地震時の表層地盤の非線形応答についての解析およびシミュレーション

強い地震動に見舞われると、軟弱な表層地盤は非線形応答を起こす。通常の地震応答計算では媒質の線形応答を前提とするため、非線形応答時の地震動の評価は困難であり、また地盤データの不足などから、現状では強震時の非線形応答の評価は不十分である。そこでまず、近年多数の記録が蓄積されつつある大加速度の強震記録を用いて地盤の非線形応答特性を把握する。また、非線形応答を考慮した地震波動伝播数値シミュレーション手法を開発し、大規模数値計算によって非線形地震動の波形合成を行う。

### 研究業績(2010 年度)

---

## 原 忠義・特任研究員

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 自然言語の構文解析技術向上へ向けて

近年、Web 技術等の普及に伴い、大量の電子文書データを解析し情報を抽出する需要が高まっている。このような需要を満たす様々な応用技術においては、与えられた文の文法および意味構造を本質的にコンピュータに理解させる構文解析技術は、その不可欠な基礎として高い性能を達成することが求められる。我々は、構文解析技術の向上を目指し、特に、解析対象分野に依存せず安定した構文解析性能を達成することが可能な、より汎用性の高い技術を開発することに注力する。

### 研究業績(2010 年度)

#### 雑誌論文

原 忠義, 宮尾 祐介, 辻井潤一: "Evaluating the Impact of Re-training a Lexical Disambiguation Model on Domain Adaptation of an HPSG Parser", Trends in Parsing Technology: Dependency Parsing, Domain Adaptation, and Deep Parsing, pp.253-272, 2010 年. 【査読有】

---

## 韓 昇龍・特任研究員

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2010 年度)

---

## **PYYSALO SAMPO MIKAEL・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## **三輪 誠・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## **森下 壮一郎・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---

## **YU KUN・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

### **雑誌論文**

Kun Yu, Yusuke Miyao, Takuya Matsuzaki, Xiangli Wang, Yaozhong Zhang, Kiyotaka Uchimoto, Junichi Tsujii:  
"Comparison of Chinese Treebanks for Corpus-oriented HPSG Grammar Development", Journal of Natural  
Language Processing (Special Issue on Empirical Methods for Asian Language Processing), 2010 年. 【査読有】

## 国際会議等

Kun Yu, Yusuke Miyao, Xiangli Wang, Takuya Matsuzaki, Junichi Tsujii: “-automatically Developing Chinese HPSG Grammar from the Penn Chinese Treebank for Deep Parsing”, COLING 2010, 2010. 【査読有】

Kun Yu, Xiangli Wang, Yusuke Miyao, Takuya Matsuzaki, Junichi Tsujii: “The Deep Re-Annotation in a Chinese Scientific Treebank”, The 4th Linguistic Annotation Workshop, 2010. 【査読有】

---

## RUNE SAETRE・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2010 年度)

---



## IV. 外部資金獲得状況

平成 23（2011）年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人が関係する外部資金の状況を、情報学環研究協力系のデータをもとに、収録しています。

1. 科学研究費補助金交付一覧
2. 寄付講座
3. 受託研究受入一覧
4. 奨学寄附金受入
5. 共同研究受入一覧
6. その他外部資金

## 1. 科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研究課題	研究代表者	直接経費	間接経費	計
特別推進研究	高度言語理解のための意味・知識処理の基盤技術に関する研究	辻井 潤一	73,100,000	21,930,000	95,030,000
特定領域研究	知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究	須藤 修	12,300,000	0	12,300,000
特定領域研究	電子化診療情報の患者への提供のあり方に関する調査研究	山本 隆一	3,600,000	0	3,600,000
新学術領域研究	台頭する中産階級とその政治的・社会的インパクト：中印露比較研究	園田 茂人	1,500,000	450,000	1,950,000
若手研究 (A)	ウェブサービスによる典拠情報の提供とその活用に関する研究	研谷 紀夫	5,500,000	1,650,000	7,150,000
若手研究 (B)	高度眼球センシングによるライフログの拡張	味八木 崇	1,300,000	390,000	1,690,000
若手研究 (B)	サブカルチャー資本と若者の社交性についての計量社会学的研究	北田 暁大	1,800,000	540,000	2,340,000
若手研究 (B)	現代都市再開発における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究	南後 由和	900,000	270,000	1,170,000
若手研究 (B)	ロボットによるイベント認識のための概念構造の自立的構造化	湧田 雄基	1,700,000	510,000	2,210,000
若手研究 (B)	高等教育における可視化マップを介したインタラクティブなレポート採点支援環境の構築	椿本 弥生	1,900,000	570,000	2,470,000
若手研究 (B)	独立成分分析を用いた振動源特定とシステム同定	中野 公彦	1,000,000	300,000	1,300,000
基盤研究 (A)	ライフログ情報処理基盤の構築：取得、処理、共有へ向けて	相澤 清晴	9,800,000	2,940,000	12,740,000
基盤研究 (A)	デジタル茶室の花鳥風月のな時空間創出技術	河口 洋一郎	7,500,000	2,250,000	9,750,000
基盤研究 (A)	美術創作プロセスの解明に基づく創造性教育支援	岡田 猛	5,600,000	1,680,000	7,280,000
基盤研究 (A)	歴史情報学に基づく明治期社会モデルの研究—写真資料を用いた華族社会構造の解析—	馬場 章	11,800,000	3,540,000	15,340,000
基盤研究 (A)	東アジアにおける地域協力枠組み発展の政治過程	田中 明彦	6,900,000	2,070,000	8,970,000
基盤研究 (B)	混雑状況下における人物追跡にもとづく行動解析	佐藤 洋一	2,700,000	810,000	3,510,000
基盤研究 (B)	テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究と批評プラットフォームの制作	石田 英敬	2,600,000	780,000	3,380,000
基盤研究 (B)	大規模分散環境を用いたP2Pネットワーク流通ファイル制御システムの研究	中尾 彰宏	4,100,000	1,230,000	5,330,000
基盤研究 (B)	自己調整学習を支援する協調フィルタリングを用いた英語学習環境の構築と評価	山内 祐平	3,900,000	1,170,000	5,070,000
基盤研究 (B)	脳神経科学と社会の相互作用——事例研究と枠組み構築——	佐倉 統	2,700,000	810,000	3,510,000
基盤研究 (B)	メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について：8カ国国際比較研究	林 香里	4,500,000	1,350,000	5,850,000
基盤研究 (B)	「中国」と向き合って：日韓対中進出企業の現地化プロセスに関する比較社会学的研究	園田 茂人	5,600,000	1,680,000	7,280,000

基盤研究 (B)	立体顔情報表示による遠隔実在感の創出	暦本 純一	6,600,000	1,980,000	8,580,000
基盤研究 (B)	記録映画アーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容	丹羽 美之	4,000,000	1,200,000	5,200,000
基盤研究 (C)	情報セキュリティの相互依存性に関する経済分析	田中 秀幸	1,100,000	330,000	1,430,000
基盤研究 (C)	地殻・マントル不均質性の定量化と、広帯域強震動シミュレーションモデルの構築	古村 孝志	1,000,000	300,000	1,300,000
基盤研究 (C)	自然言語処理特化型の視覚的・対話的な半自動エラー解析のできる統合機械学習システム	狩野 芳伸	1,300,000	390,000	1,690,000
基盤研究 (C)	噴火災害に備えた避難システムの実効性向上に関する研究	田中 淳	1,000,000	300,000	1,300,000
基盤研究 (C)	ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究	山口 いつ子	700,000	210,000	910,000
基盤研究 (C)	家族内コミュニケーションを支援するデジタルストーリーテリングシステムの開発研究	佐藤 朝美	1,600,000	480,000	2,080,000
萌芽研究	運動試技の観察・予測時における大脳・小脳機能連関と言葉によるコーチングの神経基盤	柳原 大	1,500,000	0	1,500,000
萌芽研究	拡張した人工生命系を研究するための革新的な実験システムの開発と実験	池上 高志	2,500,000	0	2,500,000
特別研究員奨励費	文化資源における三次元デジタルデータの利活用	鎌倉 真音	500,000	0	500,000
特別研究員奨励費	地殻・マントル内短波長不均質構造と高周波地震動の伝播特性に関する研究	武村 俊介	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	新書のメディア史—書物の形態をめぐる「知」の構築と変容—	堀口 剛	400,000	0	400,000
特別研究員奨励費	モバイル空間での利用に適した実世界指向インタフェースに関する研究	石黒 祥生	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	「Middle Class」のイメージと現実—日中の事例を通してみた政治・文化	周 倩	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	3次元の手指形状推定システムを用いた自然操作インタフェース	玉城 絵美	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	著作者人格権の本質論	酒井 麻千子	400,000	0	400,000
特別研究員奨励費	多民族社会における世論と外国籍市民に関する政治社会学的研究—住民投票を中心に—	鄭 佳月	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	キリシタン禁制の日本の特質—中国、朝鮮との比較を踏まえて—	清水 有子	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	物体表面の3次元形状と反射特性の解析および推定に関する研究	肥後 智昭	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	日米同盟の制度化:その歴史的展開と因果メカニズム	吉田 真吾	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	俳句の情報学的分析—オートポイエーシス概念にもとづいて	大井 奈美	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	オンラインゲーム体験を用いた小学校における情報モラル教育の実践	鎌倉 哲史	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	教師なし学習と一階述語論理を用いた、自然言語の構文・意味解析システムの構築	羽鳥 潤	700,000	0	700,000

## 6.その他外部資金

プログラム名	課題名	金額（円）
研究者海外派遣基金助成金 (組織的な若手研究者等海外派遣プログラム)	「アジア・グローバリゼーション・スタディズ」若手研究者育成プログラム	11,660,000
合計	1件	11,660,000



東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

---

平成24年1月 発行

編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京都文京区本郷7丁目3番1号

郵便番号 113-0033

電話：03-5841-5905 Fax:03-5841-5916

Email: [tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp](mailto:tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp)

印刷・製本

株式会社 創志企画

東京都新宿区榎町73番

郵便番号 162-0806

電話:03-3267-5503 Fax:03-3235-3263

Email: [soshi@kind.ocn.ne.jp](mailto:soshi@kind.ocn.ne.jp)

---